写真が語る
近代アメリカの民衆の装い

Japanese Version

Guidebook of
Joan Severa: Dressed for the Photographer,
Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900

濱田雅子著

写真が語る近代アメリカの民衆の装い
Guidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900
濱田雅子

写真が語る
近代アメリカの民衆の装い

Japanese Version

Guidebook of
Joan Severa, *Dressed for*
the Photographer
Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900

濱田雅子著

本書をJoan Severa女史に捧ぐ

序　文

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*, The Kent State University , Press, 1995.

この大部な著作は、ジョーン・セヴラ女史が 30 年と言う歳月をかけて取り組まれた大作である。濱田のこの著作は、読者の皆様がジョーン・セヴラ女史の約 600 ページの大著をご活用いただくためのいわばガイドブックとしてまとめたものである。ジョーン・セヴラ女史の写真分析に基づいて、筆者の独自の立場から、写真が語る近代アメリカの民衆の装いを分かり易く解説させていただいた。筆者はアメリカの庶民服を 38 年間に渡って研究してきた。本書は筆者の新しい研究書の普及版であり、翻案権を遵守して書かれた著作である。

1988 年５月のある日、ジョーン・セヴラ女史から一通のお手紙が届いたのである。透かし模様の入った A4 サイズの便箋 ２ページに、びっしりと英文が打ち込まれている。私はこのお手紙を、33 年を経た今も宝物のごとくに大切に保管している。

ジョーン・セヴラ女史のお手紙では、アメリカの庶民服研究の必要性と意義について、次のように書かれている。

> 我々が携わっている研究は、魅力的な研究です。そして、貴女のようにアメリカから遠く離れた国から、大局的に把えて研究するには、大変な困難が立ちはだかっているに違

いありません。私は、30 年間、博物館の学芸員を務めてきましたが、この濃縮された研究を通じて、庶民服（common clothing）について、未だに多くのことを学んでいます。アメリカの民衆 （ordinary Americans）の衣服について書かれている書物は一冊もありません。アメリカ合衆国における生活史運動（Living History Movement）の成長は、ガイドたちが農民や主婦等などとして、装おうと努めている多くのサイト（観光地）が存在していることを意味しています。そして、彼らはそれを適切な方法で行うための資料をほんのわずかしか手にしていないのです。私は本書で、そのギャップを埋めたいと思っています。本書は貴女のような服飾研究者にも役立つでありましょうし、また、写真の保管をしている人たち（アーキヴィスト）にとって、コレクションの時代考証に役立つことでしょう。

このお手紙には、さらに次のような重要な事柄がしたためられている。要約・紹介させていただく。

それは、1976 年から歴史衣裳の再現のためのパターン製作に携わられているという情報である。なぜ、1976 年なのか。この年はアメリカ合衆国の独立 200 年であり、アメリカ合衆国の東部の観光地では、この年を記念して、ガイド(Interpreter と呼ばれるアメリカ史や昔の英語を学習した専門の観光ガイド) が、歴史衣裳を着て、観光客のガイドに当たるプロジェクトに着手された。（私もヴァージニア州のウィリアムズバーグで、歴史

衣裳を再現しているデザインセンターを訪れた経験がある）。だが、19 世紀半ばの西部開拓時代に入植が進められた中西部では、1776 年は歴史的な意味がないために、ウィスコンシン州歴史協会はそのコレクションを基に、1830 年から 1900 年の歴史衣裳再現のためのパターン製作に着手することになったのである。エドワード・メーダー氏の追悼文によると、ジョーン・セヴラ女史はウィスコンシン州の各地の歴史的な観光地のガイドの方たちと手を携えて、この仕事に携わっておられたとのことである。

以上に紹介したジョーン・セヴラ女史のお手紙から、セヴラ女史の著作のまえがきには書かれていないこの大著が成るに至った背景が浮き彫りになってくる。

19 世紀アメリカの庶民服に関する研究書がセヴラ女史の本書以外には、存在していない現状において、服飾研究者やアーキヴィストや学生の皆様が、ジョーン・セヴラ女史の約 600 ページの大著をご理解いただくのに役立てば、この上ない喜びである。

第 I 部の解説では、最初に、ジョーン・セヴラ女史が収集した 277 枚の写真の種類の推移に関して、筆者がまとめた一覧表を掲載した。引き続き、1840 年から 1900 年の歴史的背景を 10 年間隔で概説したうえで、写真技術の発展の様相を概観し、ジョーン・セヴラ女史の写真分析を筆者が解析して得られた知見を各章毎に述べた。全体構成は目次に見るとおりである。

この解説をお読みいただくことによって、セヴラ女史の辞書のような著作の全体像を比

較的、短時間でご理解いただけるように努めた。さらに本文の第Ⅱ部から第Ⅶ部における考察から、1840 年から 1900 年に渡る時期の女性服、男性服、および子ども服の変遷過程が写真分析を通じて、リアルにご理解いただけるものと確信する。分析の視点はフレンチ・モードとアメリカン・モードの比較に置かれる。写真との比較対照の資料には *Godey's Lady's Book* のアーカイヴ（Accessible Archives）を活用させていただいた。

濱田は、「アメリカの庶民服」研究者として、このたび、新しい研究書の普及版の出版を実現できるのは、ひとえにセヴラ女史のこの素晴らしい著作が生み出されていたお陰と感謝の気持ちで一杯である。セヴラ女史は、全米の美術館や博物館ほかの諸機関を訪ねて、19 世紀に撮られた写真を収集されたとのこと。これらの写真の著作権は消滅しているとはいえ、貴重な写真の数々を濱田の研究書に掲載させていただけることに、深謝して余りある。濱田のこのガイドブックが、何よりもウィスコンシン州の各地の歴史的な観光地を訪れる方々のために、お役に立てば幸いである。また、19 世紀アメリカの庶民服に関する研究書がセヴラ女史の本書以外には、存在していない現状において、社会史家やアーキヴィストやファッション、衣装、物質文化に興味のある人や学生の皆様が、ジョーン・セヴラ女史の約 600 ページの大著をご理解いただくのに役立てば、この上ない喜びである。

ジョーン・セヴラ女史の写真解説は、実に詳細に渡っており、19 世紀の衣服の実物に精通している彼女ならではのすぐれた解説である。

ジョーン・セヴラ女史の著作に掲載された写真には、写真ナンバーが記されていない。そこで、筆者はナンバーをうち、掲載ページを明記したことをお断りしておく。また、各章毎に、ジョーン・セヴラ女史の著作から、平均 25 枚の写真と写真解説（全文、あるいは一部）を掲載させていただいた。セヴラ女史の著作からの引用箇所は、必ずカギ括弧で括るか、２字下げして、掲載ページを明記した。また、要約・紹介箇所には、該当ページを明記した。濱田の見解は、筆者の見解として、明記させていただいた。ジョーン・セヴラ女史は、それぞれの写真に見られる服装について、詳細にわたる静的な分析を行っている。それに対して、筆者は、彼女の著作に掲載された写真に写った被写体がまとった衣服のシルエット、および部位別特徴の 10 年間における動的な分析を行い、筆者の見解を述べた。このような方法に、筆者のオリジナリティを発揮させていただいた。写真解説に当たっては、セヴラ女史の解説に基づいて、①写真の種類、撮影年代、所蔵先、アクセス・ナンバー、②被写体の出自、および背景情報、③写真の場面、④被写体の服装の特徴、⑤服飾研究、歴史研究にまつわる、特に重要で、価値高い情報(全文)、必要に応じた情報（抜粋）、⑥筆者の見解について、順不同で、翻案権を遵守して著者の意図を損なうことのないように、また、写真の資料価値を読者の皆様に、十分、お伝えできるように、努めさせていただいた。ただし、本書に背景情報の記載がない場合、背景情報を調べるすべがなく、本書に掲載することはできなかったことをお断りしておく。また、著者のジョーン・セヴラ女史の生前に、ご本人よりメールで引用の許可をいただいていることをお断りしておく。

さらなる詳細にご関心・ご興味のおありの読者の方々には、原書をお読みいただきたい。序文を締めくくるに当たり、筆者のこれまでのアメリカ服飾社会史の研究史を振り返っておこう。

（1）『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996 年）は、著者の修士論文が基礎となっている。17 世紀にアメリカ大陸に移住したイギリスをはじめとする植民者たちが、アメリカ大陸に移入したヨーロッパの衣服が、植民地において、どのように変化・発展していったのか、という問題を歴史的背景に照らして考察している。アメリカ東海岸の博物館や美術館での調査に際しては、元メトロポリタン博物館コスチューム研究所主任学芸員、元 Kent State University 美術館ディレクターの Jean Dreusedow さんはじめ、多くの学芸員の皆様に大変、お世話になり、厚く御礼申し上げる。

（2）『アメリカ史にみる職業着―植民地時代～独立革命期』（せせらぎ出版、1998 年）は、 P・F・コープランドの著作"Working Dress Colonial and Revolutionary American, Greenwood Press, 1977."の著者による翻訳書である。植民地時代から独立革命期の 100 年間（1710～1810 年）にわたるアメリカ史にみる職業着が、200 点を超える挿し絵と 30 点余りの写真を駆使して歴史的背景とともにビジュアル化されている。

（3）『黒人奴隷の着装の研究――アメリカ独立革命期ヴァージニアにおける奴隷の被服の社会的研究』（東京堂出版、2002 年）は、著者の博士論文が基礎となっている。18 世紀、アメリカ独立革命期のヴァージニアのプランテーションで働く“黒人奴隷”は、どの

ようなものを着ていたのか。奴隷の「着るもの」はどのようにして供給されていたのか。実物の現存が皆無の研究条件のなかで、筆者は、当時の「逃亡奴隷広告」に記された黒人奴隷の逃亡時の被服描写やプランターの手紙・帳簿などの諸史料、あるいは出土資料、復元した被服素材などを悉く現地調査した。博士論文執筆に当たって、米国ヴァージニア州の John D. Rockefeller Jr. Library, Colonial Williamsburg Foundation へ、Visiting Scholar として招聘された。その節は、アメリカ服飾学会の Claudia Kidwell さん、Linda Baumgarten さん、Colleen Calllahan さんに大変お世話になり、厚く御礼申し上げる。

（4）さらに『世界の民族衣装の事典』（東京堂出版、2006 年）の第８章と第９章で、ネイティヴ・アメリカンの民族衣装を考察している。調査に際して、アリゾナ大学の Ann Lane Headland 博士に、大変お世話になり、厚く御礼申し上げる。

（5）『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）は、これらの著作と翻訳書をアレンジして、一般読者向きにまとめた専門書である。アメリカ先住民の衣文化とアメリカ大陸発見後の入植時代からアメリカン・ファッションはヨーロッパの影響を受けながらどのように変容していったのか。社会や文化を背景にその歴史をたどる。

（6）『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史　近現代篇―（インプレス R&D、 2019）は、『アメリカ服飾社会史』に続く著作である。本書は POD 出版物である。DTP/版下製作、表紙デザインは、全て著者が手掛けた作品である。本書は二部構成であり、第一部では、19 世紀から 20 世紀中葉アメリカのドレス・リフォーム運

動の実態とその衰退をテーマとしている。第二部では、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をテーマとしている。

（7）『アメリカ服飾社会史の未来像―衣服産業史の視点から―』（Next Publishing インプレス R&D　POD 出版サービス　2020 年 4 月 10 日）の主題は「アメリカにおける環境と衣服に関する諸問題」である。電子書籍〔アマゾン　kindle 版　発売中〕。

（8）『20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実―アメリカ服飾社会史　続編』ペーパーバック（Next Publishing インプレス R&D，POD 出版サービス　2021 年 4 月 7 日）〔電子書籍　アマゾン　kindle 版　発売中〕のテーマは、端的に言えば、20 世紀アメリカの女性ファッション・デザイナーの認知度である。

次に「第 I 部解説」では、歴史的背景や写真技術の発展を概観した上で、各章でセヴラ女史の写真を分析した結果を述べる。

目　次

第Ⅰ部　解　説

Ⅰ　はじめに

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900,* The Kent State University Press （October 27, 1995）

本書はジョーン・セヴラ女史が 30 年と言う歳月をかけて取り組まれた大作で、アメリカの服飾研究者から高く評価されている。彼女はウィスコンシン歴史協会（*The State Historical Society of Wisconsin*）の学芸員を 30 年にわたって歴任する傍ら、アメリカ服飾学会の理事や多くの博物館のコンサルタントとして活躍してこられた。

本書のサブ・タイトルに"Ordinary Americans & Fashion" とあるが、本書は庶民、すなわち、ミドルクラスや下層のアメリカ人たちが、ダゲレオタイプの写真技術が導入された 1840 年から 1900 年の 60 年間に、記念写真や日常の写真にどのような装いでおさめられたのか、彼らのバックグランドや服装のディテールの分析も含めて、マテリアル・カルチャー（物質文化）の視点から書かれた大作である。上流階級を対象とした服飾研究書は、欧米において多数見られるが、「19 世紀のアメリカの庶民」の衣服研究を行った研究書は、セヴラ女史の本書以外には一冊もない。掲載された写真は何と 277 枚。服飾の専門家の視点で写真に写った服装が的確に分析されている。

19 世紀アメリカ合衆国の 1840 年から 1900 年の 60 年間を考察対象とした本書は、6 章から構成され、各章の前半では、時代背景と女性服、男性服、および子ども服のファッション傾向と各アイテムの特徴がまとめられている。後半では、10 年間隔で、ジョー

ン・セヴラ女史が全米から収集された写真が掲載され、服飾の専門家の視点から、目を見張るような克明な解説が付けられている。

以下は、ジョーン・セヴラ女史が収集した写真の種類の推移を、筆者が一覧表にまとめたものである。

写真の種類	1840年代	1850年代	1860年代	1870年代	1880年代	1890年代	総計
ダゲレオタイプ	37	45	5	0	0	0	87
アンブロタイプ	0	4	4	0	0	0	8
ティンタイプ	0	5	6	2	3	0	16
カルト・ド・ヴィジット	0	2	11	9	0	0	22
ガラス・プレート・ネガティヴ	0	0	4	9	4	16	33
キャビネット・フォトグラフ	0	0	1	0	1	0	2
スタジオ・ポートレート	0	0	0	11	6	0	17
ステレオスコープ・ヴュー	0	0	1	0	1	0	2
記載なし	0	2	22	5	25	36	90
総計	37	58	54	36	40	52	277

表１　ジョーン・セヴラ女史が収集した写真の種類の推移（制作　濱田雅子）

ジョーン・セヴラ女史は、本書の序文において、写真技術について、次のように述べている（Joan Severa，1995，p.xvii　注〔洋書（1）〕）。

> 「本書は写真史の研究として、ないし写真史にアプローチする何かとして、意図されたものではない。私は写真技術に精通してはいないので、写真媒体のタイプ〔ダゲレオタイプ、カルト・ド・ヴィジットなど〕がわかっている場合にそれを記した以外、技術的情報は何も書かなかった。本研究にとって、写真の技法が意味を持つのは、ただ「どんな層の人びとがそれを利用できたか」という点においてだけである。その情報は被写体の経済的・社会的地位に関わっており、従って考察対象の人物が着ている服にも関係するからである。」

筆者が推察するに、ジョーン・セヴラ女史は敢えて服飾研究の専門家の立場に徹して、写真技術に言及することを意図的に、つまり、謙虚に避けておられるように思われる。だが、筆者の立場としては、19 世紀アメリカの写真に写る人々の装いは、写真産業史と服飾社会史の両側面からアプローチすることにより、読者の皆様の理解をより深めていただくことが可能となると確信する。

そこで、本解説では歴史的背景、および写真技術の発展の様相を概観した上で、ジョーン・セヴラ女史の写真分析を筆者が解析して得られた知見を各章毎に述べる。なお、写真は第Ⅱ部から第Ⅶ部を、これらのパーツに掲載されていない写真は、原著を参照されたい。

II　1840 年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

1824 年フランスでは、シャルル十世が専制政治の復活に力を注ぎ、まず、貴族や僧侶の特権と利益を擁護する政策をとり、旧貴族は、高い地位へと上がっていった。そして、衣裳形式が、フランス革命期のシュミーズ型ローブが再び目立って貴族風になったのもこの頃で、肩をいからせ、腰を張らせ、胴を細めるなどした。これは、後の幻想的ないわゆるロマンティック様式への発展の道を開く大切な役割を果たした（丹野郁，1985 年，pp. 366-368，注〔和書（1）〕）。

1830 年、ルイ・フィリップ王政（1830-1848 年）が確立（ブルジョア王政の成立）し、貴族政治のもとで打ちひしがれていたフランスの資本主義体制は、目覚ましい発展を遂げた。資本主義はヨーロッパ諸国、アメリカでも進展しつつあったが、30 年代から 40 年代にかけて著しく発展して、ブルジョアジーは日増しに権力を要求するようになった。生活は貴族の華やかな装いをそのまま見るようであった。

1847 年末から 48 年にかけて、ブルジョア王政の偏った政策に対して、不満を抱くものが多くなり、革命へと進展した。ブルジョアジー自身も自分たちが勝ち得た新しい時代を拒否しながら、ロマン主義的思潮（文学・芸術・服飾が粗野な実際性に反して、益々幻想的に、詩的に傾く）の高まりを見せた。

ルイ 18 世一家のパリへの帰還は、フランス革命以前のブルボン王朝時代の貴族的要素を、まず、衣裳の上にもたらした。1818-1848 年の王政復古時代を通じて、細胴とスカートの拡がり、袖の膨らみが助長され、ルネッサンス期の貴族調衣服を真似た形の衣裳が流

行した。肩幅は全体のバランスを保ちながら、次第に広くなり、袖の上方が技巧的に膨らみ始める。

女性衣裳は、幻想をそそるように曲線と柔らかい膨らみをもって装われた。織物工業の技術的進歩や生産工場は、そのための優秀な材料を提供して、ロマンティック様式の形成に役立った。

男性の服装は、上衣とチョッキ、ズボンの組み合わせに変わりはないが、上衣は変化に富み、旧来のフラック形式のものとコート形式のもの、およびルダンゴートに由来するものなどがあった（丹野郁，1985年，pp. 370-372，注〔和書（1）〕）。

1840年代のアメリカでは、ヨーロッパの王政復古調の衣裳が、自国の状況に見合うように工夫されて導入されていた。

社会・経済的な背景に目を向けると、1840年代は領土拡張時代（有賀貞，大下尚一編，1990年，p. 62，注〔和書（2）〕　有賀貞，大下尚一，志惇邨晃佑，平野孝編，1994年 pp. 351-362，注〔和書（3）〕）であった。アメリカ合衆国政府は、北米大陸に領土を持つ諸国と、固有の領土権を持つ先住アメリカ人諸国家から、購入や合併や征服や強制移住など多様な方法で土地を獲得して、これを領土に加えて「公有地」とし、一定の手続きを持って個人・法人に払い下げ、入植者を誘引した。そして、入植者人口の増加に応じてその領土を準州に、さらに州に昇格させ、他の州と対等の条件で連邦に加入させるという段階的な連邦加入方式による領土の目覚しい膨張をはかった。このような方法による領土拡張は、19世紀前半のアメリカ合衆国の特色の一つとしてあげられる。

さらに他の国からも土地を購入した。

・　1803年12月フランスからルイジアナを買収。
・　1819年2月スペインからフロリダを買収。
・　1845年3月テキサス併合。
・　1846年6月イギリスとの条約によりオレゴン地方を分割。
・　1846年5月メキシコ戦争が勃発し、1848年2月に終結したことで、カリフォルニア、ニューメキシコ地方をメキシコ地方から割譲。

さらに、1853年にはガズデン購入地を合わせ、今日のアメリカ合衆国本土を確立した。

アメリカの産業革命（有賀貞，大下尚一，志惇邨晃佑，平野孝編，1994年，pp. 260-261，注〔和書（3）〕）は1830年代にはいると鉄工業が発達し、道路、運河、鉄道の建設・整備も産業発展には不可欠なものであった。さらにその中で木綿工業が急速に進展した。米国木綿工業（有賀貞，大下尚一，志惇邨晃佑，平野孝編，1994年，pp. 335-337，注〔和書（3）〕）は1820〜40年代には大規模な工場が増えるとともに、中小規模の工場もニューイングランド南部を中心に多数設立された。これらの木綿工業を指導部門として

アメリカ産業革命は急速に進展し、1850 年代後半までには家内工業が駆逐され、工場制木綿工業が支配的になった。

綿花生産の発展においては、アメリカ独立革命によってイギリス重商主義体制との結びつきを失った南部の奴隷制プランテーションは、一時低迷に陥った。だが、やがてイギリス綿業資本と結びついて、綿花産業に活路を見出した。特に綿から種子を分離する難作業を簡易化したイーライ・ホイットニーの綿繰機の発明は、短繊維の綿花の栽培に拍車をかけた。この品種は南部のどこでも栽培可能であったため、綿花生産の飛躍的発展に貢献した。

1840 年代はまた既製服（Joan Severa, p. 5, 注〔洋書（1）〕、鍜島康子, 1988 年, pp. 9–11, 注〔和書（5）〕）が発達してきた時期でもある。19 世紀初頭のアメリカにおける衣服産業は、注文仕立てによる手工業と工場製造であった。注文仕立屋に衣服を頼むことができるのは富裕な階級の紳士であった。その他の労働者には古着屋が衣服を提供していた。南北戦争以前までは、古着の商売が既製服よりも重要なものであった。また、既製服は女性服よりも男性服が先に発展していった。

2. 写真技術の普及

さて、次にダゲレオタイプの写真技術の普及の様相と服飾史研究において、写真技術が果たす役割に言及する。

ダゲレオタイプ（Daguerreotype）（L. J. M. ダゲール著, 中崎昌雄解説・訳, 1998 年, 注〔和書（6）〕）とは、ルイ・ダゲール（Louis Jacque Mande Daguerre, 1787–1851）により発明され、1839 年 8 月 19 日にフランス学士院で発表された世界最初の実用的写真技法であり、湿板写真が確立するまでの間、最も普及した写真技法である。銀板上に直接左右反転した白黒画像を得るダイレクトプロセスである。

銀板の表面にヨウ素蒸気を当ててヨウ化銀を生成させたものを感光材料とする。暗箱に入れて撮影後、水銀蒸気で現像すると、光の当たった部分に水銀が凝結して画像ができ、チオ硫酸ナトリウム（ハイポ）で不感光のヨウ化銀を除いて定着する。見る角度により、ネガ、ポジ反転するという特徴を持つ。銀メッキをした銅板などを感光材料として使うため、日本語では銀板写真と呼ばれる。

この技術のアメリカへの導入と普及について、ジョーン・セヴラ女史は第 1 章において、こう述べている。「1839 年の晩秋に公認の代理店がブリティシュ・クイーン号（British Queen）に乗ってニューヨークに到着し、ルイ・ダゲール（Louis Daguerre、1787–1851）によって開発されたユニークな工程に対する権利とそのための設備を売却した。ダゲールの

仕事はこの国の中ではすでにとてもよく知られていた。そこにはたくさんの応募者がいた。何と一週間の内にあらゆる市や町の多くの新進の写真家たちが店を出しはじめた」（Joan Severa, p. 1）という。

また、銀板写真の普及は、西漸運動に伴い、急速に進んだ。

「実際、西漸運動によって肖像写真を撮ってもらう人は何千人も増えた。というのも、西へ向かう人びとは自分の写真を後に残し、家族や友人が写った貴重な写真をたずさえて行ったからである。アメリカでは1850年代までに、毎年およそ300万枚のダゲレオタイプが作られ、それとともに価格は下がっていった。」（Robert Taft, 1938, p. 76, 注〔洋書（3）〕）という。後述するように、ダゲレオタイプの他に、アンブロタイプ、ティンタイプ、カルト・ド・ヴィジット、ガラス・プレート・ネガティヴ、キャビネット・フォトグラフ、スタジオ・ポートレート、およびステレオスコープ・ヴューの写真技術が1850年代以降に普及する。ジョーン・セヴラ女史は現存するこれらの写真を全米から収集し、こう述べている。「これらの古くなった写真はほんのわずかしか残っていない。とはいえ、これらの残存している映像は広範な社会的な基礎を包括しており、当時のマテリアルカルチャーの写真が非常に確かなまとまった情報を残してくれている」（Joan Severa, p. 1）

ファッション雑誌 *Godey's Lady's Book*,（洋雑誌〔注記（2）〕）の発行以降、銀板写真の普及に伴い、ファッションのイメージ表現は変化した。両者の表象的な機能の違いは、果たして、歴史に何をもたらしたのか？

結論的に言うならば、ジョーン・セヴラ女史は彼女の著作において、全米から収集した写真イメージに解釈を与えることによって、1840-1900年の時期のミドルクラスと下層階級のアメリカ人の装いの歴史を具現化したのである。その意味において、筆者はアメリカ服飾史研究において、ジョーン・セヴラ女史が果たした役割を高く評価したい。

3. 知見

本章に掲載されたジョーン・セヴラ女史の写真分析を筆者が解析した結果から、以下の知見が得られた。

① 世界最初の実用的写真技法であるダゲレオタイプ（Daguerreotype）は、1839年晩秋にニューヨークに導入された。

② 服飾の研究方法はファッション雑誌、ファッション・プレート、写真、文献（先行研究、日記、手紙など）を資料にするとか、衣服やテキスタイルの実物調査をするな

ど、多様な方法があるが、写真を読み解く研究は、服飾研究の重要な領域であり、写真産業史の領域とタイアップして行われなければならない。

③ *Godey's Lady's Book* に掲載されたファッション・プレートは流行に関する情報であった。それに対して、ダゲレオタイプの写真は1840年代アメリカ人の衣生活の実態をとらえた歴史的資料である。両者の果たす役割も歴史的意義も異なっている。アメリカ服飾史研究において、ジョーン・セヴラ女史の写真に見る服飾研究の価値は高く評価されることは衆目の一致するところであろう。

④ ダゲレオタイプの写真の普及は、西漸運動に伴い、急速に進んだ。

⑤ ダゲレオタイプの写真に写っている被写体は主に裕福な人々である（写真 1, Joan Severa, pp. 28-29）。

⑥ 彼らの服装はヨーロッパの王政復古調の流行を追っている。

⑦ だが、ヨーロッピアン・ファッションに装いきれないアメリカの環境は特に素材不足において、歴然としている。

⑧ 仕立て屋が仕立てた衣服（写真 33, Joan Severa, pp. 74-75, 本書, p.73）と家庭裁縫の衣服（写真 36, Joan Severa, pp. 58-59, 本書, p.61）の違いが写真と解説からはっきりと読み取れる。

⑨ わずか1枚だが、工場の女工の労働着（写真 27, Joan Severa, p. 65, 本書, p.67）が写真と解説から読み取れる。

⑩ アフリカン・アメリカン（写真 24, Joan Severa, pp. 60-61, 本書, p.66）と先住アメリカ人（写真 34, Joan Severa, pp. 76-77, 本書, p.76）の肖像写真から彼らの服装が読み取れる。

⑪ 写真の解説に被写体のバックグラウンドに関する情報が記載された写真は、37 枚中わずか9枚（24%）である。ちなみに、本書全体としては、平均20パーセントの写真に被写体のバックグラウンドに関する情報が記載されている。バックグラウンド解明の困難さが伺える。

Ⅲ　1850年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

ヨーロッパでは1848〜1849年の革命と反革命の時期から、1860年代半ばにかけて、クリノリン衣裳が流行していた。この時代の衣裳の特徴は、大きく膨らませたスカートであり、スカートを広げる道具であるクリノリンにちなんで、この時代の衣裳をクリノリン衣裳と呼んだ。

19 世紀アメリカが抱えた最大の課題は黒人奴隷制の廃絶だった。そのためには想像を絶する100万人を超える死傷者を出した南北戦争が闘われなければならなかった。

この戦時期、19世紀の流行であったクリノリン衣裳、つまり、コルセットで極端に詰めた細いウエストと床ギリギリまでの長く広がったスカートに対する反抗の一つとして、ブルーマー運動（ 濱田雅子, 2009年, pp. 110-118, 注〔和書（4）〕）があった。この頃、ブルーマー婦人が考案したわけではないが、彼女はトルコ風のズボンを組み合わせた婦人服が、当時、流行のドレスよりも実用的であることを示唆する記事を発表した。この記事をニューヨークの新聞が取り上げ、センセーションを巻き起こした。「ズボンをはいた女性」のニュースは、すぐに大西洋を渡った。パンチ誌とロンドンの軽演劇場はこの服装を笑い、今や女性は確立した男性の役割を乗っ取ろうとしているとした。この新しいファッションに対する反対は、そう長く続くことはなかった。女性らしさという考えかたが復活したと同時に、服装のスタイルに合わせて体型を整える下着が再び戻ってきたのである。

19 世紀後半における資本主義制度の著しい発展の背後には、機械と技術の目覚ましい創造と発達、および自然科学の進歩とその産業への転化があったことは見逃せない。特に、ミシンは経済史上では、衣服製造がマニュファクチャーから工場制へと移行し、剰余価値のある大量的生産を生む決定的で革命的な機械とされる（ミシンの発明・発達と日本のミシンについては、田中千代，1991 年，pp. 1006-1007，注〔和書（7）〕）。今日、家庭で用いられているミシンの基礎となった機械は、ハウによって発明されたものである。しかし、それも発明当初は婦人や児童の労働を主とする縫製工の賃金の極端な低さのため、アメリカでもイギリスでも実際化するまでにいたらなかった。その後、まもなくこれに改良が加えられた。その改良者の一人がアメリカのアイザック・メリット・シンガーである。彼は 1851 年に一段と改良された足踏みのミシンを発表し、次いで著名な、裁縫機械生産会社を設立するなどして注目をあびた。

2. 写真技術の発達

さて、次に 1850 年代の服飾に関わる時代背景として、アンブロタイプとティンタイプの写真技術の発達に言及しておかねばなるまい（ 安友志乃，2009 年，pp. 36-39，注〔和書（8）〕）。

ダゲレオタイプの写真技術は、庶民が気軽に写真撮影を出来るようなものではなく、非常に高価なものであった。銀板の準備は複雑で面倒なものであるため、より簡便で、安価で使いやすい感光材の開発が行われた。その結果、1851 年に、イギリス人のフレデリック・スコット・アーチャーによって、銀板の代わりにガラス板を使う「コロジオン湿板写真」が開発された。

だが、湿板写真の撮影では、撮影の直前に、暗室等の暗い所で感光コロジオンを塗布し、薬剤が湿っている内に露光する必要があった。乾燥すると感光性が損なわれるので、取り扱いが難しいものであった。

湿板写真は基本的にガラスネガから紙焼きのポジ画像を得る方法であるが、湿板写真が考案されてすぐに、湿板写真から派生した「アンブロタイプ写真」や「ティンタイプ（フェロタイプ）写真」と呼ばれる写真も考案された。1854 年に、アメリカのジェームズ・アンブロ・カッティンッグは、コロジオン・ポジティブの特許をアンブロタイプという名称で取得した。

フランス人のマルタンは、1853 年にティンタイプと呼ばれるネガの反転現象を利用した写真法を考案した。ガラス板に感光コロジオンを塗る代わりに、薄い鉄板を黒く塗りその上に湿板用の感光材を塗布して撮影した。下地の黒色の関係で、反転してポジ画像が見えるというものである。

湿板写真を利用したティンタイプ、アンブロタイプ写真は、高価なダゲレオタイプ（銀板写真）に代わり直接ポジ画像を見ることができる写真として 1850 年代以降広く普及した。

3. 知見

筆者は本章に掲載されたジョーン・セヴラ女史の写真分析の解析結果から、以下の知見を得た。

① ダゲレオタイプに続いて、アンブロタイプとティンタイプの写真技術の発明により、1850 年代には写真撮影はより大衆化した。

② だが、衣服を通じてエリート社会に仲間入りしたい中流階級の人々は、できるだけ装って写真におさまろうとした。また、安価なティンタイプが発明されても、高価なダゲレオタイプの写真におさまることを誇りとした（58 枚中 44 枚）。

③ 衣服に着目して写真を読み解くにあたり、このような人々の意識と人々が置かれていたバックグラウンドをも読み解いていかなければならない。

④ ダゲレオタイプの屋外で撮影された写真（写真 43, 47, 57, Joan Severa, pp. 120-121, p. 127, p. 140）も見られるのは、注目に値する。

⑤ ダゲレオタイプのような装った写真ではなく、庶民が撮った庶民の写真を読み解いていく作業は、中流階級や下層階級の人々の衣生活を考察する上で、大変有用であると確信する。アンブロタイプの事例―写真 42, Joan Severa, pp. 118-119, 本書, p.120, ティンタイプの事例―写真 59, Joan Severa, p. 142, 本書, p.147.

⑥ 衣服に着目すると、男性の既製服（写真 46, 47, 83, Joan Severa, pp. 126-127, p. 171）の発達、使用人のお下がり着用（写真 45, Joan Severa, pp. 124-125, 本書, p. 101）の様相が写真から読み取れる。

IV　1860 年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

歴史的背景は南北戦争（1861-65 年）と戦後の再建期（1865-1877）である。1860 年共和党のリンカーンが大統領選に当選した。しかし、南部はこれを認めようとせず、翌 1861 年にジェファソン＝デヴィスを大統領とするアメリカ合衆国を結成し、連邦を脱退した。そして、ここに空前の大内乱「南北戦争」が始まったのである。戦いは、初め南部軍は優勢であった。しかし、1863 年 1 月、リンカーンは南部反乱地域の奴隷解放宣言（Emancipation Proclamation）によって内外世論の支持を集め、同年ゲティスバーグの戦いに勝利を得てから後は、北軍有利の情勢となった。1865 年ついに南部の首都リッチモンドが陥落して南軍は降伏し、南北戦争は終結した。

1865 年には合衆国憲法修正第 15 条で、奴隷制の廃止が規定された。戦後の南部の再建はアメリカ合衆国に課せられた大きな課題であった。中でも解放奴隷の土地や仕事や衣食住の保障は、重大な課題であった。

本章では、裕福な人々の装った写真のみならず、庶民が撮った庶民の写真が紹介・分析されている。

2. 写真技術の発達

前述のように、カルト・ド・ヴィジット、グラス・プレイト・ネガティヴ、キャビネット・フォトグラフ、スタジオ・ポートレート、およびステレオスコープ・ヴューの写

真技術が1850年代以降に普及する。以下、これらの写真技術について解説する。

安友志乃著『写真のはじまり物語』に拠ると、カルト・ド・ヴィジットは名刺の代用で、フランス人発明家のアンドレ・アドルフ・ウジェーヌ・ディデリ（*André-Adolf-Eugène Disdéri*（1819–1889）が、1859年に発明した。最盛期は1863–1876年、衰退期は1877–1880年である。素材はアルビュメン・プリントである。安友志乃によると「当時、名刺は現代のように初対面で交換するものではなく、面会したい相手先に使用人がまずビジティングカードを届けに行き、後日、面会できるのであれば相手先からコーリング・カードが封筒に入れて送られて来る」（安友志乃，2009年，注〔和書（8）〕）という手順があったという。

前川修はダゲレオタイプとカルト・ド・ヴィジットの違いを次のように述べている。「CDVは、すでに1839年に公表済みの写真製法であったダゲレオタイプとは、いくつかの点で大きな差異を帯びている。第一にそれは、アルビュメン・プリントという紙写真のプロセスに依拠していた。・・・第二に、CDVは、紙ネガから複数のプリントを生産することができた。一点ものであり、高価であるがゆえに受容者の限定されるダゲレオタイプに比して、この製法は写真史のなかでようやく写真の本来の可能性である複製性を体現した。・・・第三に強調しておきたいのは、CDVが他の写真メディウムをコピーする媒体となったことである。たとえば当時のティンタイプは、CDVサイズに縮小され、CDVと同様に紙製のフレームに収められて販売されたし、同様に、ダゲレオタイプやアンブロタイプなど既存の写真がCDVにコピーされて販売されることも頻繁にあった」（前川修，2013年3月，pp. 5–6，注〔和雑誌（9）〕）。

次に、ガラス・プレート・ネガティヴ（リーズ・V・ジャンキンズ，1998年，pp. 32–33，注〔翻訳書（9）〕）は、アンブロタイプのすぐあとに登場したガラス乾板のことである。昔使用していた、35枚撮りのフィルムの前身は一点ずつのガラス板であった。アンブロタイプは薬品をガラスに塗布し、それが乾かないうちに撮影したため、湿板と呼ばれたが、ガラス乾板は、薬品がその名の通り、乾いた状態でガラス板についている。ネガポジ法である。この利点は、まず、どこでも写せたと同時に、現像処理をその場で施す必要がなくなったことにある。また、複数枚数を制作することも可能とした。ガラスネガティブになってあらゆる意味で写真のフィールドが拡大したことになる。

キャビネット・フォトグラフ（安友志乃，2009年，p. 91，注〔和書（8）〕）はキャビネットに飾られたことに由来する名前をもつ。このカードは、全くの第三者の目にプライベートなポートレイトがさらされるようになった時代の始まりでもある。カルト・ド・ヴィジット（通称CDV）と同じくアルビュメン・プリントが台紙に貼り付けられている。

ステレオスコープ・ヴュー（ 安友志乃, 2009 年, p.102，注〔和書（8）〕）はステレオスコープを使って覗く 3-D 写真である。同じ写真を左右に一枚のボードに貼り付け、ステレオスコープを用いて、両眼で覗くと、3-D に見えるのである。

さて、庶民とはどのような人々であろうか。本書には家庭裁縫に携わっていた人々、学校の教師、リフォーム・ドレスの運動に携わっていた人々、移民、西部入植者、農業労働者、解放奴隷、自由黒人、ネイティヴ・アメリカンなどミドルクラスや下層階級の様々なカテゴリーに属する庶民の写真が掲載されている。そこで、54 枚の写真の中から、これらの民衆が写った写真を取り上げて、バックグラウンドと衣服の特徴をまとめてみた。

3. 知見

その結果、次のような知見が得られた。

① 1860 年代の写真の大半は、ガラス・プレート・ネガティヴ、キャビネット・カード、ステレオ・カードの技術が開発されたため、1840 年代、1850 年代のスタジオでダゲレオタイプの写真に収められた写真とはかなり趣が異なっている。

② 庶民が撮った庶民の写真の中に、我々はジョーン・セヴラ女史の解説から明らかな衣服の特徴や彼らのバックグラウンドを読み取ることができる。すなわち、1860 年代のミドルクラス、あるいは下層階級のアメリカ人の中には、ヨーロッピアン・フレンチ・ファッションに追随しようとした上流階級や中流以上の人々とは異なり、経済的理由から、多かれ少なかれ流行遅れの粗末な衣服を着用していた人々がいたことを具体的に読み取れる。

③ 家庭裁縫で家族の衣服を作っていた女性のけなげな生き様が娘の代に受け継がれている様相が手に取るように紹介されている。

④ 健康や運動機能性を考慮して、ドレスにズボンにブーツというリフォーム・ドレスを着用して、ドレス・リフォーム運動に携わっていた人々がいた事実（写真 114，139，Joan Severa，pp. 238–239，本書，p. 186）、James C. Jackson 氏の健康保養センターの Our Home on the Hill で、締め付け衣装が原因で健康を害した人々が、リフォーム・ドレスを着用して、療養生活を送っていた事実（写真 123, 124，Joan Severa，p. 240，p. 251，本書，p. 187）が、貴重な数枚の写真とその解説から裏付けられている。

⑤ ドレス・リフォーム・ムーブメントについては、濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史近現代篇―』（株式会社インプレス，P&D，POD 出版サービス、2018 年 1 月）で考察している。

V　1870 年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

南北戦争、産業の発展、鉄道やミシンの発達、ファッション誌の発行、1877 年の大統領選における共和党のヘイズの当選、南部再建運動の挫折という背景のもとに、1870 年代のアメリカのファッション業界は、変化と発展を遂げる。普仏戦争（1870–71 年）も、諸外国へのファッションの伝達を一時中断させた大事件であった。とはいえ、フランスのファッションがアメリカに及ぼした影響には、多大なものがあった。

いわゆる「金ぴか時代」に突入したアメリカでは、流行に敏感な当時のアメリカ女性にとっても、流行の最先端をゆくフランスのスタイルを取り入れるのが、大変容易になった。当時アメリカでは、*Godey's Lady's Book*、*Peterson's Magazine*、*The Delineator*、*The Lady's Home Journal*、*Harper's BAZAAR* などのファッション定期刊行誌が発行されており、これらの雑誌にはドレスの作り方が掲載されていた。中でも、*Godey's Lady's Book* には、フランスの上流階級の人々のスタイルが見られる。しかしフランスのファッションを全て取り入れることができたのは一部の裕福な家庭の女性であった。あまり裕福でない家庭の女性はミシンをフル活用して流行を取り入れ、また、それを楽しんだ。

2. 知見

筆者は、本章に掲載されたジョーン・セヴラ女史の写真分析の解析結果から、以下の知見を得た。

① 表 1 に見るように、写真技術の発達により、1870 年代には写真撮影は、ますます大衆化してゆき、屋外で撮られた多くの写真に庶民の服装が写し出されている。

② ジョーン・セヴラ女史の著書には、1870 年代に入ると、最初の 2、3 年は不景気で新しい服を購入するだけの余裕はなかったのだが 、徐々にではあるが、社会が全ての人に対して、衣服の流行を追わせていた（Joan Severa, p. 293）と、社会と流行の結びつきを示す見解が述べられている。つまり、輸送の発達のおかげで、何処に住んでいてもパターンや布地が入手可能となり、地方だから流行遅れになっても仕方がないという考えは通用しなくなったようである。このようなジョーン・セヴラ女史の見解は、今日の服飾研究者の検討課題といえよう。

③ 労働者階級の服装は、新聞配達の少女（写真 183，Joan Severa，p. 369，本書，p. 238）と織物工場の少女（写真 184，Joan Severa，p. 370，本書，p. 239）の写真しか掲載されていないため、実態はつかみ難い。

④ 北欧からの移民が写った集合写真（写真 160，161，161，163，164，Joan Severa, pp. 338–339，pp. 340–341，pp. 342–343，pp. 344–345，pp. 346–347 本書，p. 268）から、彼らは衣服を通じて、何とかしてアメリカ社会に同化、あるいは融合しようとしていたことを、明らかに読み取れる。

VI　1880年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

ヨーロッパでは、1880年代は、クリノリン衣裳の後を受けて、バッスル衣裳が女性の衣服の中心であった。アメリカの女性もパリのモードに遅れをとらないよう、腰当てを用いてスカートを膨らませていた。華やかなバッスル衣裳で始まる1880年代は、アメリカにとって激動の時代でもある。鉄道建設とインディアンの駆逐によって1890年までには、将来合衆国に含まれることになる大陸のほとんど全域に農場、牧場、鉱山、そして大小の都市が見出されるようになった。鉄道は主要都市をつなぎ国内市場体制を完成させ、これ以降ある地域の商品や原材料は合衆国のどの地域においても入手可能となった。1900年代の初頭までに、農村の入植者と近代社会をより密接につなぐ二つの変化が現れた。第一の変化は、1870年代ないし1880年代に始まったモンゴメリー・ウォード社およびシアーズ・ローバック社などのメールオーダー（通信販売）会社が拡張され、工業社会の生産物がほとんどすべての人々に利用されうるようになったことである。第二の変化は、政府が農村無料配達制度を大幅に拡大したことであった。農民たちはもはや情報不足に悩まされることはなくなり、ほとんど毎日彼らの家に手紙、新聞、広告そしてカタログが届けられるようになった。

ジョーン・セヴラ女史はこのような背景のもとに発達した庶民のファッションを、写真を通して解説・分析している。

2. 知見

筆者はジョーン・セヴラ女史の写真分析を解析した結果から、以下の知見を得た。

① 写真撮影の大衆化に伴い、衣服の大衆化、つまり現代衣装への接近の実態が写真から読み取れる。

② 1880 年代は、女性のファッションにおいて、とても重要な意味を持っている。パターンシステムの発達から家庭裁縫である程度の流行を取り入れることが可能となった。さらに衣服の大量生産が可能となり、デパートやメールオーダーシステムの発達により、高価でない衣服が既製服で入手可能になった。またライフスタイルの変化から徐々にシンプルな衣服へと移行していく様子がうかがえる。しかし、写真に見るように、その変化はゆっくりとしたものであり、アメリカ女性にとってヨーロッパのハイファッションは憧れであったことは事実である。つまり、すぐに拘束性の高いハイファッションがなくなったというわけではなく、この時代には、これらの衣服を写真の中に共に見ることが出来るのである。

③ 女性の社会進出はファッションに影響を及ぼしたが、女性の労働着の特徴として、上流階級の女性のハイファッションと、直接現代の衣服に通じる活動的な衣服の並存が挙げられる。それまでの流行は、上流階級の女性だけの好みにより確立されてきたが、この時期にファッションの民主化が始まったと言える。1880 年代の女性ファッションの特徴は、バッスル衣裳（写真 193, 208, Joan Severa, pp. 402-403, 本書, p. 271）の登場であると同時に、1890 年代に広まった現代衣装へ近づく衣服（写真 224, Joan Severa, p. 451, 本書, p. 278）を写真の中に垣間見ることができることは大変興味深い。

VII　1890 年代

1. 歴史的背景と服飾の特徴

1890 年代のアメリカでは、男性服のみならず、女性服もコートやケープの外套類やシャツブラウスやスカートなどのアイテムの大量生産が可能となり、デパートが増加し、小売カタログ市場が発展した。1896 年には郵便無料配達制度（Rural Free Delivery）が実験としてスタートした。また、郵便小包制度が発展し、モンゴメリー・アンド・ウォード社（1870 年）やシアーズ・アンド・ローバック社（1893 年）は、カタログ・ショッピングに成功し、地方無料配達制度は、カタログ・ショッピングとタイアップして、1896 年以降に効力を発揮した。19 世紀末のアメリカでは、特に地方において、このようにしてメール・オーダーでショッピングすることが可能となった。

2. 知見

筆者は、本章に掲載されたジョーン・セヴラ女史の写真分析の解析結果から、以下の知見を得た。

① 1890 年代は、1880 年代に流行したバッスル衣裳から現代衣装に近いものへと変わっていき、衣服の歴史を語る上で重要な過渡期である。この時代に既製服に対する需要が一般化し始め、女性の衣服に大きな変化をもたらし、衣服の価値観も変わった。装飾の凝った衣服からよりシンプルな形へ移行していくのである。ライフスタイルの変化が確実におこり、1 人がたくさんの衣服とその種類を持つことが経済面からも可能

になった。ファッションの発信源としてパリはいまだ強い影響を与えるものではあったが、腰を細く締める傾向は、アメリカではこの時代においてはあまり見られなかった。

② しかしながら、家庭は依然として生産の場であり、消費の場へと移行してしまったわけではない。大量生産により、安価な既製服が市場に出回っていたが、多くの主婦はパターンとミシンを駆使して、家庭裁縫によって、より最新の衣服を手に入れ、節約して暮らした。

③ 女性が社会に出て、仕事に従事したり、スポーツを楽しんだり、自転車に乗ったりするようになると、簡素で、機能的な衣服に対する大きな要求が出てきたのである。そこで、登場したのが、新しいアイテムのシャツブラウスである。このブラウスはあまりフィットしなくてもよかったため、家庭で容易に作ることができ、既製服を買う必要はなかったようである。

④ セパレートのスカートも家庭で容易に縫うことができ、綿の家庭着や化粧着やマザーハバードも家庭で、一日で、作ることができたようである。こうして、19 世紀末のアメリカの主婦は、一方で節約して、他方で、既製服を買い求める、という合理的な暮らしをしていた。

⑤ 女性用のオーダー・メイドのスーツは紳士服の仕立て師によって作られた。

⑥ 労働に携わる女性は、看護婦（写真 247、Joan Severa, p. 503, 本書, p. 303）、工場の女性労働者（写真 235, 242, Joan Severa, p. 488, p. 496, 本書, p. 310）、黒人の看護婦（写真 262, Joan Severa, pp. 522-523, 本書, p. 311）に見られる。また、自転車に乗ろうとする女性（写真 248, Joan Severa, pp. 504-505, 本書, p. 312）が見られる。これらの写真についてのジョーン・セヴラ女史の解説は、衣服と労働、衣服とスポーツという視点から、実に明快で、含蓄がある。

⑦ 本章では、大量生産・大量消費社会に向かう、1890 年代の過渡期の様相が、中流階級から下層階級の人々が写った 52 枚の写真に実にリアルに、興味深く映し出されている。やがて訪れる 20 世紀を予測しながら、一枚一枚の貴重な写真から、アメリカ服飾社会史を読み解いて行くのは、限りなく奥深く、楽しいものである。

VIII　今後の研究課題

最後に、以上の知見を踏まえて、このような写真資料からアメリカの服飾・風俗の何が見えてくるのか、何が研究として不足しているのか、あるいは可能性を秘めているのか、そのためにどのような研究が課題なのかについて整理し、研究の将来の方向性のようなものを示唆できればと思う。

（1）1840 年代から 1890 年代の上流階級のみならず、ミドルクラスと下層階級の衣服も含めたアメリカの服飾史研究は稀少である。ジョーン・セヴラ女史の著書は、特にミドルクラスと下層階級の衣服研究に貴重な資料を提供する価値高い研究書である。特に、ネイティヴ・アメリカン、アフリカン・アメリカン、北欧からの移民、庶民の日常着や労働着といったアメリカの風俗が見えてくるのは、貴重な成果である。

（2）だが、部族ごとの先住アメリカ人の服飾文化、また、例えば、ユダヤ人の衣服など、民族ごとの移民の衣服の写真資料を用いたさらに掘り下げた研究が望まれる。

（3）我が国では、写真技術に関する書物（注〔和書（11）〕）は刊行されているが、アメリカの写真に見る服飾を扱った書物は刊行されていない。

（4）20 世紀のアメリカの写真に見る衣装研究は今後の課題である。第二次世界大戦を境として、ヨーロッパ志向から脱却して、アメリカ人のためのアメリカン・ファッションが誕生してくる。現在、アメリカの服飾研究者によって、この時代に活躍した女性服飾デザイナーたちのキャリヤーと活躍ぶりが発掘されつつある。この分野は研究不足である。写真、ファッション雑誌、および実物資料を用いて、今後、十分な研究が進められなければならない。

（5）20 世紀アメリカのファッション・デザイナーについては、濱田雅子著『20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実―アメリカ服飾社会史　続編―』（株式会社インプレス　P&D, POD 出版サービス、2021 年 4 月 7 日）で考察している。

【注】参考文献

和書・和雑誌・注記

(1)　和書：丹野郁著『服飾の世界史』（白水社、1985 年）。

(2)　和書：有賀貞、大下尚一編『概説アメリカ史【新版】―ニューワールドの夢と現実―』（有斐閣、1990 年）。

(3)　和書：有賀貞、大下尚一、志惇郵晃佑、平野孝編『世界歴史大系　アメリカ史　1』（山川出版社、1994 年）。

(4)　和書：濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）。

(5)　和書：鍜島康子著『既製服の時代―アメリカ衣服産業の発展―』（家政教育社、1988 年。

(6)　注記：L. J. M. ダゲール著、中崎昌雄解説・訳『【完訳】ダゲレオタイプ教本　銀板写真の歴史と操作法　DAGUERREOTYPE』（朝日ソノラマ、1998 年）。本書の表紙のカバーの推薦文には、次のように書かれている。「ダゲレオタイプ操作法を詳述した小冊子『ダゲレオタイプ教本』は、1839 年 8 月 20 日パリで発売されたが、その日に売り切れてしまい、次の年末までに 10 数か国語訳が出版されるほどの、世界的大ベストセラーとなった。本書は永く待望されていた、この写真における金字塔「ダゲレオタイプ教本」の初めての完訳である。ダゲレオタイプの発明前史と、この画期的な発明が完成されるまでの秘話などを含む、懇切な「解説」が添えられた本書は、すべての写真愛好家にとっての必読の書と言っても過言ではない。」

(7)　和書：ミシンの発明・発達と日本のミシンについては、田中千代『新・田中千代服飾事典』（同文書院 1991 年）pp. 1006-1007.

(8)　和書：安友志乃著『写真のはじまり物語』（雷鳥社、2009 年）pp. 36-39.

(9)　和雑誌：前川修「カルト・ド・ヴィジット：ヴァナキュラー写真の可能性 1」美学芸術学論集, 9:4-21, 2013 年 3 月、pp. 5-6.

(10)　翻訳書：リーズ・V・ジャンキンズ著、中岡哲郎。高松亨、中岡俊介訳『フィルムとカメラの世界史―技術革新と企業―』平凡社、1998 年、 pp. 32-33 参照.

(11)・翻訳書：アラン・トラクテンバーグ著、生井英与、石井康史訳『アメリカ　写真を読む―歴史としてのイメージ―』白水社、1995 年.

・L・J・M・ダゲール著、中崎昌雄解説・訳『【完訳】ダレオタイプ教本―銀板写真の歴史と操作法―DAGUERREOTYPE』朝日ソノラマ、1998 年.

・リーズ・V・ジャンキンズ著『前掲書』

・安友志乃著『前掲書』

・C・E・K・ミース著、是松忍訳『ミース博士が語った写真技術史の研究開発物語』講談社ビジネスパートナーズ、2013 年.

洋書・注記

(1)　洋書 : Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion ,1840-1900*, Kent State University press, Ohio, Kent, 1995.

(2)　注記 : 1830 年 6 月にはじめて、手彩色による水彩のファッション・プレートがアメリカで印刷され、それが掲載された雑誌が *Godey' s Lady' s Book* であった。発行の背景と雑誌の特色については、第Ⅱ部第 1 章第 4 節を参照のこと。

(3)　洋書 : Robert Taft, *Photography and the American Scene*, New York: McMillan Co.,1938.

第Ⅱ部　1840 年代

はじめに

本書は 1840 年代から 1900 年の 60 年間にわたる近代アメリカの女性服、男性服、子ども服の三分野の庶民服を、翻案権を遵守して、ジョーン・セヴラ女史の著作の紹介・考察という手法で書いたものである。

分析の視点はフレンチ・モードとアメリカン・モードの比較に置かれる。写真との比較対照の資料には *Godey's Lady's Book* のアーカイヴ（Accessible Archives）を活用させていただいた。

「Accessible Archives は、*Godey's Lady's Book* の完全な情報を提供し、最初に表示されたカラープレートを含む唯一のコレクションです。特に重要なのは、フィラデルフィア図書館、フィラデルフィア図書館協会、ウィンターザー図書館、チェスター郡歴史協会であり、これらがなければこのプロジェクトは不可能でした。ロジャーW. モス博士は、このプロジェクトの道しるべとして、図書館の最も重要なゴーディの家族セットの使用を親切に許可しました。プレートの多くはこのコレクションからコピーされました。Accessible Archives、Inc.発行の *Godey's Lady's Book* は 9 つのセクションからなる完全なコレクションであり、Accessible Archives はカラープレートを提供する唯一の出版社です。」(Accessible Archives)。

ジョーン・セヴラ女史は、1840 年代にファッション情報を広める役割を果たした雑誌

について、次のように述べている。

「1840 年代に女性のファッション情報を広める役割を果たしたのは、主にこうした雑誌であった。何種類かの雑誌があり、たいていは中流層の女性を対象にしていた。さまざまな個人が残した記録からは、それらの雑誌が実際にアメリカ全土のあらゆる社会階層の人たちによって読まれ、学習されていたことがわかる。最も広く読まれていた『ゴーディーズ・レディズ・ブック』は 1839 年の発行部数が 1 万部にのぼり、1849 年には 4 万部になった（Entrekin 99）。他にアメリカの数種類の雑誌と、イギリスやフランスの雑誌が、ある程度出回っていた。」（Joan Severa, p. 3）。

Godey's Lady's Book の出版の背景については、第Ⅱ部第 1 章第 4 節で、出版事情と特色について、詳しく述べる。

第 1 章　歴史的背景

1. 領土拡張

1840 年代のアメリカでは、ヨーロッパの衣装が、自国の状況に見合うように工夫されて導入されていた。社会・経済的な背景に目を向けると、1840 年代は領土拡張時代であった。この問題については、解説の 1840 年代において詳述した。

2. プリントされた木綿の大量生産と衣服価格の関係

産業革命と木綿工業の発展については、解説の 1840 年代において簡潔に述べた。1830 年代から 1840 年代にアメリカ合衆国においてプリントされた綿は、巨大な生産高になり、それは当然低価格となった。そのため、低収入の家族が新しい衣料品を購入することができるようになった。“工場製造綿”は 1840 年代を通じて、少なくとも 1 ヤード 9 ペンスで販売された。ほとんどすべての人が 1 年に 1 回のペースで新しい綿のドレスを持つことができるようになった。富裕な家庭によって衣類に費やされた金額は、当然貧しい人々よりも多かった。最も財産に比例して多くなったわけではないが。

3. 既製服産業の発達

解説の 1840 年代において述べたように、1840 年代はまた既製服が発達してきた時期でもある。繰り返しになるが、19 世紀初頭のアメリカにおける衣服産業は、注文仕立てによ

る手工業と工場製造であった。注文仕立屋に衣服を頼むことができるのは富裕な階級の紳士であった。その他の労働者には古着屋が衣服を提供していた。南北戦争以前までは、古着の商売が既製服よりも重要なものであった。また、既製服は女性服よりも男性服が先に発展していった。

既製服業者は 19 世紀半ばまでに、最低の労働者たちとは違った顧客を見出した。例えば公立学校の先生、会計士、交通や商業に従事する人々があげられる。彼らの収入は決して多くはないが、良い生活様式とその職業から良い衣服を必要とする人々であり、仕立屋はこのような人々に既製服を提供し始めた。しかし既製服が大衆に広まるまでは衣服は社会的階級の表示物であるとの考え方から、既製服は下等なものであるという考えが消えず、差別の表示物であった。しかしながら、1820 年代、30 年代において既製服を買う人が増え、1840 年代までには、衣服産業設立の第一歩がつくられたといわれている。

男性や少年の最近のスタイルはすでに、大量生産を通じて素早く安価に入手することが可能になった。いくつかの大きなフランスやイギリス製品の輸入業者は、主に男性や少年の衣服を生産していた 1830 年代後半までに、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアで早くから卸の衣服製造工場を発達させ、女性の衣類の生産は、主に外套に制限されていた。様々なあらゆる年齢の靴やブーツは 1840 年代までにこの国で大量生産された。

最初工場の衣服は手縫いであったが、40 年代の終わり近くには、新しい縫製用のミシンを多くの工場が導入した。それによって衣服の生産を増大させた。

4. ファッション雑誌“*Godey's　Lady's　Book*”の出版事情と特色

1840 年代に、アメリカの女性たちがファッション情報を入手していた雑誌は、何と言っても「ゴーディズ・レディズ・ブック（*Godey's Lady's Book*）」である。この雑誌の始まりは、1830 年にルイス・ゴーディ（Godey, Louis Antoine, 1804−1878） がフィラデルフィアで「レディズ・ブック（*Lady's Book*）」（平芳裕子，2008 年 9 月，pp. 55−72，注〔和雑誌（1）〕）という雑誌を確立したことにある。ゴーディはボストンの「レディズ・マガジン（*Ladies Magazine*）」（注〔洋雑誌・注記（4）〕）という当時、セアラ・ヘイル（Sarah Joseph Hale, 1788−1879）が編集していた雑誌を読み、この雑誌には編集者の声や、記事の取材に関するマナーが掲載され、また、ファッション・プレートが掲載されていることから、ヘイルを認めた。そして、1837 年に、「レディズ・マガジン」の権利を購入したのである。彼女はすぐにフィラデルフィアに行くのではなく、彼女の息子たちが卒業するまでボストンに残り、遠くボストンからゴーディのために編集者の義務を果たした。ついに、ゴーディはヘイルを説得してフィラデルフィアに引越しをさせて、フィラデルフィアの会

社に編集費用を賄わせるように説得した。彼は「レディズ・ブック」と「レディズ・マガジン」を合併して、それを「ゴーディズ・レディズ・ブック」と呼んだ。そのことをきっかけに「ゴーディズ・レディズ・ブック」の編集者はヘイル となり、ヘイルは名声を確立することとなる。

ヘイルは、ファッションの販売促進や、女性が専門職や他の仕事に就くことを主張し、また、女性のための教育施設や教育課程の発展をしきりに促すなど、女性のための公共的な空間を他と分離することを主張した 。

「ゴーディズ・レディズ・ブック」（注〔洋雑誌・注記（5）〕）は、それ以前に刊行されていた雑誌よりも、アメリカ人の生活において、真の影響力を持っていた。そのため、雑誌の時代は「ゴーディズ・レディズ・ブック」とともに始まったといえる。フランスから輸入したファッションを採り入れたイラストおよびファッション・プレートが掲載され、このような手法は基本的フォーマットとして確立された。読者は裁縫のパターンを使用して、雑誌に掲載されている服を自由に再現できた。そして、この雑誌はファッション・プレートを掲載している女性雑誌全体を実験的な段階から、産業確立の段階へと変えることになり、ファッションや趣向についての国民の基準を設定したのである。

ファッション・プレートの特色としては、まずひとつめに、①「ゴーディズ・レディズ・ブックは、パリの雑誌がもとになっているイギリスのファッション雑誌からファッション・プレートを使用していた。そのため、時代遅れで、パリの流行に遅れていた。とはいえ②その芸術性から、ファッションの振興をもたらした。次に、③ファッション・プレートの複写のために、様々な方法が試されたが、手彩色による彩色はずっと続けられた。そして、④莫大な費用がかけられ、その額は1月に8,000ドルにも及んだ。「ゴーディズ・レディズ・ブック」が当時3ドルで売られていたことを考えると、その莫大さが理解できる。

次に、「ゴーディズ・レディズ・ブック」の流通（Lewis, Mary Jane, 1996, pp. 167–171, 注〔洋学位論文（6）〕）についてであるが、当時のアメリカにおける雑誌購買者の平均人数は、およそ7,000人であった。それに対して「ゴーディズ・レディズ・ブック」の購買者数は①1849年に40,000人、②1860年に150,000人、③1869年に500,000人に及んだとヘイルは主張している。この事実からも、「ゴーディズ・レディズ・ブック」のアメリカにおける重要度がうかがえる。

5. アメリカ女性のファッション観

「ゴーディズ・レディズ・ブック」 の人気の編集長であるヘイルは、慎ましやかな女性について次のように書いた。「衣服に注意を払うべきだ、そして生活のデリカシーやコンディションに一致する限り衣服の流行に従うべきだ」（「ゴーディズ・レディズ・ブック」1844年12月号）（Joan Severa，p. 4）。「ゴーディズ・レディズ・ブック」が主として準宗教的、道徳的な散文収集であり、女性のための教育的材料であることから女性達や夫・父親でさえ、ヘイルのアドバイスを信用していた。

女性はきちんと衣服を着、また、品位を外的尺度とし、公の尊敬を得るための必要な手段として流行から離れない衣服を着なければならなかった。

しかしながら個人の記録を検討してみると、わずかではあるが、女性達はあらゆる所で、婦人雑誌の中で紹介されているようなファッションに追随していることは明白である。結果として、最も明らかになったことは、そのようなファッション導入の受容で了解されたアメリカの水準だった。それはこのように誇張されたファッション・プレートから推定されたた最新の裁断やシルエットは、体が許す限り忠実に全ての人々によって追随された。しかし、挿し絵に描かれた念入りの表面装飾やアクセサリーはさらに控えめに採用された。その結果はとてもはっきり目に見えるものだったので、さらにこのような哲学（ファッションを導入するということ）は容易に社会層に広がっていった。もし私たちが非常に裕福な人やひどく貧しい人たちを除いたのなら、上層の人や下層の人たちも同じように、1年あるいはそれ以内にフランスのファッション導入について知り、観察し、少なくともそれを控えめに受け入れたといえる。

第1章【参考文献、および注記】

和書・和雑誌・注記

(1) 和雑誌：平芳裕子著「フィラデルフィア・ファッション—『レディズ・ブック』における良き女の表象—」（服飾美学　第47号、2008年9月）pp. 55-72.

洋書・洋雑誌・注記

(1) Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900,* The Kent State University Press （October 27, 1995）

(2) Accessible Archives

(3) 洋雑誌・注記：「レディズ・マガジン」は、1828年にアメリカのボストンで出版されはじめ、知的な読者を増やした。本誌が対象としたテーマは、ファッション、教育、社会的改革、アメリカ文

学などの女性の関心事であり、9年間刊行され続けた。そして、女性は男性と知的に平等であるという啓蒙思想や女性教育の重要性を主張した。「レディズ・マガジン」の狙いは、女性たちに彼女たちの本分や特権を熟知させることであった。

(4)　洋雑誌・注記：1830年6月にはじめて、手彩色による水彩のファッション・プレートがアメリカで印刷され、それが掲載された雑誌が「ゴーディズ・レディズ・ブック」であった。初期のファッション・プレートは3ヶ月毎に掲載されたが、やがて毎号に掲載される余裕がでてきた。

初期のファッション・プレートは、最も重要なフランスの雑誌の一つと考えられていて、19 世紀において最も優れたファッション・プレートを含んでいた「ル・プティ・クリエ・デ・ダム（*Le Petit Currier des Dames*）」などのフランス雑誌から複写するのが一般的であった。しかし「ゴーディズ・レディズ・ブック」は、イギリスで 1823 年から刊行され始めた「タウンゼント・セレクション・オブ・パリジアン・コスチューム（*Townsend's Selection of Parisian Costumes*）のファッションからプレートを使用していた。

Townsend's Selection of Parisian Costumes は、ファッション・プレートの最も豊富な出所の一つであり、フランスから輸入したプレートと共に、イギリスの叙述から成っていた。そしてこの雑誌がフランスから輸入したプレートのほとんどは、1797 年～1839 年のパリにおいて出版され、「コスチューム・パリジエンヌ（*Costumes Parisiennes*）」として知られたとてもかわいらしいプレートの「ル・ジュルナール・デ・ダム・エ・デ・モード（*Le Journal des Dames et des Modes*）」の中に見られたものである。

1850 年までにはフランスの、特に「モニテール・ドゥ・ラ・モード（*Le Moniteur de la Mode*）」から多くの実際の金属性プレートが輸入された。しかし、プレート上のファッションは時代遅れであり、当時流行していたパリのファッションを表すことはなかった。これは、当時ヨーロッパのファッションがアメリカで流行していたのだが、ヨーロッパで流行したファッションが、アメリカに輸入されるときには、ヨーロッパではそのファッションが時代遅れになっていたためである。

(5)　洋雑誌・注記：雑誌のタイトルはその歴史の中で、いくつかの変化を経験した。これらのタイトルは下記のとおりである。

The Lady's Book（1830 年～1836 年）
Godey's Lady's Book（1836 年～1840 年）
Godey's Lady's Book and Ladies American Magazine（1840 年～1843 年）
Godey's Magazine and Lady's Book（1844 年～1848 年）
Godey's Lady's Book（1848 年～1854 年）
Godey's Lady's Book and Magazine（1855 年～1883 年）
Godey's Lady's Book（1883 年～1892 年）
Godey's Magazine（1892 年～1898 年）

そして、1898年にその雑誌はフランク・マンスィ（Frank Munsey）のピューリタン（Puritan）に吸収合併され、すぐにアーゴスィ（Argosy）と合併した。

(6)　洋学位論文：Lewis, Mary Jane, "*Godey's Lady's Book": Contribution to the Promotion and Development of the American Fashion Magazine in Nineteenth Century America,* 1996, UMI Dissertation Services.

第 2 章　庶民女性の服装

1. ドレス

Plate 1　***Godey's Lady's Book***
October 1835

本章では、J・セヴラ女史が収集した 1840 年代のダゲレオタイプの写真にみるアメリカのミドルクラスと下層階級の女性服をドレス（袖、胴部、ネックライン、衿）、頭飾りと帽子、アクセサリー、下着、ラップ（ショール、肩掛け、外套など）及び履物の順に考察する。

フランスの衣装様式が王政復古調からロマンティック衣装様式への移行期にあった頃、アメリカでは、時間差はあったものの、類似の傾向が見られ、1840 年代を通して、ドレスのシルエットは極端に身体全体を締めつけ、自然な動きを抑制する傾向になっていった。

上等のドレスであろうと、労働着であろうと、1840 年代初頭に *Godey's Lady's Book* に掲載されたファッションのイラストレーションは、バストの形に変化を加えたような厳格な胴部の形状を示し、また膨らんだペチコートを下にはいた床丈のスカートを示し始め、1 つ の基本的なシルエット形成の傾向があった。

首と肩からなだらかにおちて、厳格に締められた丸みのある三角形の胴部、平らで上向きに広がっているバスト、裾を引きずったたっぷりとしたベル型のスカート、さらにウエストの長さや袖のスタイルには目に見える変化があった（Joan Severa, p. 7 の要約）。

(1)　袖

ヨーロッパの服飾史上には様々な袖のデザインが見られる。筒袖、詰め物された取り外しができる袖、スラッシュの入った袖、羊の脚の形をした袖、上腕部が大きく膨らみ、下腕部が細くなった袖、ほっそりした袖、バイアス裁ちのほっそりした袖、ギャザーやプリーツの入った袖など。人々は袖のデザインに様々な趣向を凝らして、おしゃれを楽しみ、また、権力を表示してきた。Plate 1 は *Godey's Lady's Book* の 1835 年 10 月号に掲載されたファッション・プレートで、右の女性の袖は、丸く膨らんでいる（Accessible Archives）。

人気のある袖の形状には、40 年代に入ってもまだ十分なふくらみが見られるものもあった。とはいえ、ギャザーや襞は、さまざまな方法で上腕をぴったりさせるようになり、このようなスタイルは 1843 年を通してアメリカのファッション雑誌に掲載されたファッション・プレートに現れた。総じて、細いバイアス裁ちの袖というデザイン傾向が、1841 年以降には優勢になる。

少し細いビショップ袖が、40 年代を通じて着用されていた。この袖は肩にはギャザーが入っておらず、カフス付きで、手首に向かってギャザーがよせられていた。

「ファッション・プレートではこの袖の型の大半は、透けた夏用のものであり、写真ではプリントされた綿かシャリ織の日常着によくみられた。」（Joan Severa, p. 7）。40 年代を通して、写真に表れている大半の一般的な袖の型は、細いバイアス裁ちの袖であり、袖のキャップはついているものもあれば、ついていないものもあった。

「袖にはかなり沢山の変化に富むものがある。ぴったりした袖はとても広範囲に渡ってみられるが、一般的には極端な質素な袖には、取り外しのできる何種類かの飾りが施されている」（The Ladies Cabinet 1844 年 12 月号, Joan Severa, p. 8）という記述も見られる。さらに当時の胴部や袖に完全にフィットさせるために、女性達はよい裁縫師にならなければならず、さもなければ女裁縫師を雇わなければならなかった。

以上の傾向を具体的に例証するために、セヴラ女史が収集したアメリカの残存する 1840 年代のダゲレオタイプの写真 37 枚中、袖が撮影されている 33 枚の中から特徴がうかがえる写真資料５枚を取り上げる。

写真 1　ダゲレオタイプ
1839 - 40 年
提供：***Matt Isenburg*,**
Joan Severa（以下、省略），p. 28

写真 4　ダゲレオタイプ
1842-43 年
提供: ***Matt Isenburg*, p. 34**

写真 1（Joan Severa, p. 28）は無名のダゲレオタイピストが、1839–1840 年に実験的に撮影した最初の写真である。所蔵先は *Matt Isenburg* である。被写体の背景情報は記載されていない。この写真の被写体の衣裳は、目を見張るほど美しい。袖の下端部には、明らかに王政復古調の袖の膨らみが見られる。ジョーン・セヴラ女史も「1830 年代末のシルエットであり、タイトな上腕部はとても短く作られ、それより下の袖は、まだ 1830 年代の特徴である大きな膨らみを保っている。」と解説している（Joan Severa, p. 29）。ペルリーヌについては、後述する。Plate 2 は *Godey' s Lady' s Book* の 1840 年 4 月号に掲載されたファッション・プレートで、3 人の女性の衣裳の袖は、上腕部にはレースがあしらわれたり、折りたたんでボタンで留めて、すぼめられたりして、下腕部はふっくらしている。写真 1 と類似している（Accessible Archives）。

写真 4　（Joan Severa,　p. 34）は 1842 年から 1843 年に撮られたダゲレオタイプの写真で、*Matt Isenburg* の所蔵品である。ジョーン・セヴラ女史の写真解説によると、右の写真

Plate 2 ***Godey's Lady's Book*** **April 1840**

は写真屋を営んでいたナンシー・サウスワース・ホーズ（1820–95）で、左は夫のジョンソン・ホーズが、結婚前にナンシーが16歳の時に描いた絵であるという。

黒いドレスで、やや見にくいが、絵の中のナンシーのドレスには、大きなジゴ袖（gigot）が写っている。写真に写っているナンシーのドレスの袖から、1840年代に入ってもジゴ袖の膨らみがまだ残っていることがわかる。ジョーン・セヴラ女史は、被写体の服装について、次のように語っている。

> 絵の中のナンシーは、1836 年の最先端のファッションである上等なシルクのドレスを着用している。ドレスは極端にあきが広いドロップショルダーで、大きなジゴ袖（gigot）がついている。この形は、過剰なくらい大きな袖の膨らみが最高潮を迎えた時期、つまりジゴ袖の流行が終わる直前のスタイルである（Joan Severa, p. 35 より引用）。

筆者としても絵のなかのジゴ袖に特に注目したい。

次に細い袖のドレスを着た女性が写っている３枚の写真を紹介しよう。いかにも流行を追った、おしゃれな写真で、現代の衣服にも取り入れたくなるデザインの袖である。写真16（Joan Severa, p.50）は1846年頃に撮られたダゲレオタイプの写真であり、*Neville Public Museum（5111）*の所蔵品である。ジョーン・セヴラ女史によるとウィスコンシンのグリーンベイで見つかったこの写真には、誰だかは不明だが若い母親とふたりの娘が写っている、

写真16　ダゲレオタイプ
1846年頃
提供：*Neville Public Museum (5111)*, p. 50

写真18　ダゲレオタイプ
1846年頃
提供：*The Valentine Museum*, p. 53

という。そして、彼女たちの服装から彼女達がそれなりに金持ちの家庭の人間であることがわかる、とのことである。袖はバイアスに裁断され、長袖は細く、手首部分でわずかにギャザーが寄せられている。身頃から袖にかけての縞のアレンジの仕方が、とても素敵だ。セヴラ女史は、被写体の服装を次のように解説している。

> 年かさの娘はたぶん14歳で、大人の女性のスタイルで裁断された横縞のシルクのドレスを着ている。……バイアスに裁断された長い袖は細いが、手首部分でわずかにギャザーを寄せられるくらいのゆとりはある。ぴったりして短いスリーブキャップはブレードで縁取りされ、肩とアームホールの縫い目にはパイピングが見える（Joan Severa, p. 51より引用）。

写真18（Joan Severa, p. 53）は1846年のダゲレオタイプの写真で、*The Valentine Museum*の所蔵品である。

写真 28　ダゲレオタイプ
1849 - 50 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin* (*WHi* ［*6X3*］ *32369*)**，
p. 66

ヴァージニア州の有名な歴史家チャールズ・キャンベル (Charles Campbell, 1807–1876) の妻（Mrs. Charles Campbell）で、少なくともそれなりにお金持ちの階層に属する女性である、とのことである。写真 18 のデザインも細い袖だが、写真 16 とは趣が異なっていて、やや地味である。セヴラ女史は、この袖を次のように解説している。

> バイアス布で作られた細い袖は、手首の部分が共布で作った二連パフのバンドで仕立てられており、キャップ型のオーバースリーブ (oversleeve) も上腕部の飾りも見られない（Joan Severa, p. 53 より引用）。

これらの写真 16、18 から、細いバイアス袖も 40 年代に現れていることが見て取れる。袖のキャップの有無について見ると、写真 16 にはキャップは付いており、写真 18 (Joan Severa, p. 53) にはカフスはあるが、キャップは付いていないことがわかる。

Godey's Lady's Book でも 1835 年のファッション・プレートでは、袖にまだ膨らみがあることが確認されるが、Plate 3 の右から 3 人目の女性の衣裳の袖に見るように、1842 年にはすでに細くなっていることがわかる（Accessible Archives）。また袖のキャップも見えることから、当時アメリカ・ファッションの袖の基本的な形は、ヨーロッパから入ってきたのではないかと考えられる。さらに「袖には変化に富むものがある」（Joan Severa,p. 8）という記述がある。

写真 28 (Joan Severa, p. 66) は、1849–50 年のダゲレオタイプの写真で *The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *32369*）の所蔵品である。ジョーン・セヴラ女史に拠ると、この若い母親ベッツィ・H・スミス（Betsey H. Smith）は、ウィスコシン州マディソンに駐留していた陸軍士官の妻で、娘のローラ（Laura）と息子のジョージ（George）を伴って、写真に写っている、とのことである（Joan Severa, p.66）。

Plate３　*Godey's Lady's Book*　March 1842

この写真をみると「細い袖の上の方は２列のバイアス裁ちのバンドで飾られ」（Joan Severa, p. 66）、たたまれたキャップがあしらわれた、かなりおしゃれな袖を着用しているのが見られる。

以上の考察からわかるように、1840年代のアメリカにおいても、袖は上腕部が大きく膨らみ、下腕部で細くなっているフランスの王政復古調のデザインを控えめにしたものから、徐々に変化を遂げ、全体にほっそりした形状になっていった。だが、アメリカの当時の人々は、流行を追いつつも、アレンジして着用している場合もあったことが明らかとなった。つまり、アメリカのミドルクラスのファッションにおいても、フランスの貴族同様に、控えめとはいえ、袖のデザインにはかなりのこだわりが見られ、袖はかなり重視されていたことが窺い知れる。

(2)　胴部

1840年代初期から、50年代の日常着の胴部の形状の変化について、セヴラ女史は、服飾の専門家の立場から、以下のような見解を述べている。筆者は19世紀のドレスについて、これほど詳細にわたる説明には遭遇したことがない。要約・紹介させていただく（Joan Severa, p. 8）。

1840年代、女性の衣裳の開きの特徴として、ほとんどすべてのワンピースは後ろ締め形式であったことがあげられる。普通後ろ締めには、後ろ重なりの開きの奥にホックとアイ

が一緒に取り付けられており、背中が開かないようにするためにホックとアイのそれぞれのセットが互いに向き合わされていた。また、パイピングが胴部の縫い目や袖付け線に頻繁に使用された。

胴部はとても長くぴったりしており、1840 年代を通して前の部分が尖っていた。1840 年末には前部はやや短くなり、サイドは長く、前部の下がった部分は丸みを帯びてくる。前下端部が丸みを帯びて、扇状の胸のついた大変高いウエストは、1840 年代末から 50 年代の日常着の写真に見られ、主に年配の女性に見られる。

流行している胴部の普通の形状は、コルセットから創出されている。胸部から腹部にかけて平らで、胸のカーブが一切見られない。ヒップを覆っている固いバスク入りのコルセットによって、胸は上に向かって広がり、平らになり、脇下止まりになっている。フィット具合は滑らかで、自由にしわがよるものと考えられているが、実際にすばらしいドレスメーカーだけが、要求されているフィット具合を達成することができた。アームホールは高く、ぴったりと裁断され、その結果、肩に極端な傾斜を与え、この肩の傾斜は 40 年代の終わりに修正された。腋下の袖付け線は、腕をまっすぐに下ろせないくらい高い位置に描かれていたようである。袖付け線の縫い目は肩先のあたりでやや外側に出ていたのであった。前後の身頃をつなげる肩縫い目は、常に 2 インチ程度後ろよりであった。ほとんど 40 年代末まで、しばしば肩の縫い目に向かってギャザーが入れられたり、プリーツが入れられたりしたため、前身頃に膨らみが見られた。この膨らみは様々なデザインがこらされ、ウエストの前中心の部分に集中していた。

人気のある胴の前部のスタイルは、扇形の襞がほどこされ、すべてのラインが低いウエストと尖った下端部に集中している。前部の膨らみを出すために、普通のギャザーから一種のカートリッジプリーツ、時には段階的なナイフプリーツに至るまでの、さまざまな手法が用いられた。当時のウエストとろっ骨の部分は、端にブレードかパイピングのどちらかがあしらわれ、パネルによって輪郭がとられていた。ウエストの尖った前下端部は、もち上げられて逆V字形をなし、胸と胴部の間には膨らみが生じた。

典型的な胴着には詰め物が詰められた。通常はラムズウールが両胸にのせられ、上半身は柔らかな三角形に形づくられ、肩幅はある程度広めてもちあげられた。シルク製の冬のドレスの胴着は、うすいラムズウールを用いてたっぷりと詰め物されていた。胸の上には、暖かくするために、もっと厚い詰め物がなされた。

以上、ジョーン・セヴラ女史の文意を損ねないように、筆者の文章で要約・紹介させていただいた。

次にアメリカの写真 37 枚中、胴の部分が撮影されているのは 33 枚で、その中から特徴の出ている写真資料を 3 枚確認する。袖の項目で取り上げた写真 18（Joan Severa, p. 53、

写真 25　ダゲレオタイプ
1848 - 50 年
提供：***The National Museum of American History*（*N86-14224-dag*）**, p. 62

本書，p. 51）には、胴にプリーツが見られ、スカートのつなぎ目にはカートリッジプリーツがあることもわかる。流行していた胴部の形はコルセットが着用され、写真 28（Joan Severa，P. 66、本書，p. 52）の少女にもその姿が見られる。

最後に 1840 年代後半および 50 年代初期のコルセットを着用し、ダーツの入った典型的なドレスが 1848 - 50 年に撮られたダゲレオタイプの写真 25（Joan Severa，p. 62）に写っている。*The National Museum of American History*（*N86-14224-dag*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影年代と被写体の服装を、次のように解説している。

> この肖像写真には文字による説明がなく、指輪も写ってはいないが、おそらく婚約か結婚を記念して撮られたものだろう。……年代推定の根拠はドレスの身頃の形で、1840 年代末か 1850 年代初めの典型的なスタイル、つまり簡素で、ダーツがあり、硬い張り骨入りで、前のウエストラインの下がり方がゆるく、前下端が丸いデザインになっている（Joan Severa，p. 62 より引用）。

一目瞭然であるが、ドレスは見事にフィットしている。

1840 年代の様子を見ると、Plate 2 の女性の衣裳に見るように、1840 年にはダーツの入った胴があることがわかる（Accessible Archives）。これらの胴のスタイルは、ファッション・プレートが出版された 時期とほぼ同じ年に、アメリカで撮られた写真に現れている。

当時のアメリカのファッションは、ヨーロッパから輸入されていたが、これらのことからファッションの情報はかなり速く伝わっていたように思われる。

写真７　　ダゲレオタイプ
1843-45 年
提供：***Historic Northampton*（*59.408*）**, p. 38

写真 10　　ダゲレオタイプ
1844 - 46 年
提供：***Matt Isenburg***, p. 43

(3)　ネックライン

1840 年代を通して、ネックラインには２つの一般的なタイプがあった。１つは 1830 年代から残っているファッションで、肩幅の広さくらいある水平のネックラインである。もう１つは透き通った白のシュミゼット（ドレスの下に着用されていた衣服）であり、深い V ネックラインであった。浅い V ネックラインには、シュミゼットあるいは単純な白フリルの縁取りのどちらかで一杯に飾られていた。ハート型のネックラインは、1840 年代の初期は人気があった。このタイプのネックラインには、小さな衿が付いていたこともあった（Joan Severa, p. 12 からの要約）。

次にネックラインが写っているアメリカの写真資料は、37 枚中 33 枚ある。その中から３枚を取り上げる。

Plate 4　*Godey's Lady's Book*　 May　1843

写真 4（Joan Severa, p. 34、本書, p. 49）を正面から見て、左側の肖像の、シュミーズの上から着用された広い衿は 1830 年代のスタイルである。右側は 1840 年代 のスタイルで、「ネックラインが広くて浅く、そこに透け感のあるレースで縁取りした網目織物のフォール［ひだ飾りの垂れ］がぐるりと付けられていることで、胸の印象が和らげられている。」とセヴラ女史は述べている。

1843−45 年に撮られたダゲレオタイプの写真 7（Joan Severa, p. 38）は、*Historic Northampton (59,408)* の所蔵品である。少女のドレスは、丸いネックラインに、フリルで縁取りされている。

Plate 4 の右側の二人の女性は、深いネックラインのドレスを、Plate 5 のネックラインは、肩まで広がっているものが多いことがわかる。

1844 - 46 年に撮られたダゲレオタイプの写真 10（Joan Severa, p. 43）は、*Matt Isenburg* の所蔵品である。

V ネックラインで、フリルで縁取られている。当時、フリルの縁取りが多かったようである。セヴラ女史は、被写体の服装を次のように解説している。

ナンシー・サウスワース（ホーズ）（Nancy Southworth （Hawes））はこの写真の撮影時にはおそらく 22 歳ぐらいだろう。なだらかに下がる肩のライン、優美な首もと、細いウエスト、コルセットで締め上げた胴の人形のようにスレンダーで硬質な印象、そして下半身を隠すたっぷり膨らんだスカートというこのスタイルほど女性的なものは、19 世紀には他にない（Joan Severa, p. 43 より引用）。

はっとするほど洗練された装いである。

(4) 衿・ペルリーヌと袖の飾り

白い衿は日常着でよく見られる。40 年代の衿の様態は変化し、V ネックの衿は次第に細くなっていき、後に衿は比較的小さくなった。10 年間を通して、平らな衿は小さくぴったりした丸い形から、開衿の形となった。写真に見られるようなよく知られた白い衿や袖口は、 単なる流行のけばけばしい装飾ではなく、むしろそれらの知名度のために不可欠な、流行の変動の主題であった。それらの機能は、少なくとも体の汚れから服を守ることであり、交換できた。洗濯のできる衿は日々交換できることを意味していた。首のリンネルはいつも使用されていたが、暖かく快適な時期は、バイアス袖の白いカフスは外されることもあった。

ベル型の短い袖は 1843 年頃人気があった。それ以降、ほぼ 10 年間、長い下袖あるいはアンガージャントは、ドレスの袖の内側にフレアーを固定して着用された。最も早い時期のものは、かなり狭くぴったりとした袖口のギャザーであった。遅い時期のものは膨らんだ形をし、レースがついていたこともあった。40 年代末から 50 年代は、白モスリンのビショップ袖やフレアーキャップ袖を着用したのが見られた。人気のペルリーヌの衿をまとうことは、1840 年代の始めにはあらゆる女性に見られた。ペルリーヌは綿、絹、レース、ネットあるいは綿ローンのいずれかであった。それは質素あるいはチェーンステッチの刺繍、テープ、モスリンのアップリケ、もしくは白糸の刺繍があしらわれ、イギリス刺繍によっても装飾されていた。またパイピング、バイアスカット、フリルかレースで縁取られていた。ペルリーヌは前を時々長くつまみ、前を結び、重ね、ピンで留めるかベルトでくるんで着用した。リボンは別に首まわりに取り扱われているのがしばしば写真で見られ、流行するリボンの種類は変化した。リボンは格子縞、チェックかシルクのプリントで作られた。あらゆる種類のドレスの上に着用され、単色、縞模様、格子縞が、綿、絹、羊毛に織り込まれた。それと調和しているウエストリボンもしばしば着用されていた。

Plate 5　*Godey's Lady's Book*　　December　1843

写真 20　　*ダゲレオタイプ*
1847 - 49 年
提供：*Historic Northampton*, p.59

写真 30　　*ダゲレオタイプ*　1849 - 51 年
提供：*The National Museum of American History*（*86.115.99*）, p.55

以上、ジョーン・セヴラ女史による衿、ペルリーヌ、および袖の飾りに関する記述の要点をまとめさせていただいた（Joan Severa, pp. 12−13）。

次に衿・ペルリーヌと袖の装飾などが写されているアメリカの写真は、37 枚中 33 枚である。その中から特徴のある写真を 5 枚取り上げる。

袖の項目で紹介済の写真 1（本書, p. 49）では 1830 年代後半から、1840 年代初期の服装で、10 年後のペルリーヌという衿を想起させる衿がついており、前の位置でとめられているようにもみえる。「透ける薄さのローン（lawn）の縁にすばらしい白糸刺繍がほどこされた衿は、肩にかかるほど幅が広く、首の端で折り返されて広い V 字形をなしている。このスタイルは、1830 年代のペルリーヌ衿（pelerine collar）を想起させる（ペルリーヌよりは小ぶりだが）。」とセヴラ女史は述べている（Joan Severa, p. 29）。

写真 36　　ダゲレオタイプ
1849 - 52 年
提供：***Joseph Covais*** , p. 80

写真 8（Joan Severa, p. 40、本書, p. 64）は後ろの左側の女性と、前の右から 2 番目の女性がペルリーヌを着用している。どちらも深く肩の上に適切にフィットさせ、閉じ、刺繍も見られる。喉元にブローチをつけ、ペルリーヌを閉じて着用する習慣は、立っている女性に見られ、40 年代の中頃になると最後のウエストまで閉じることが典型的なマナーとなり、それは座っている女性に見ることができる。

1847–49 年に撮られたダゲレオタイプの写真 20（Joan Severa, p. 60）は、***Historic Northampton***（*59.207*）の所蔵品である。セヴラ女史は、この写真の服装を次のように解説している。

彼女の衣服のなかで一番目立つペルリーヌは 1840 年代半ばのスタイルで、短い ショルダーライン、付け衿、波形の縁、前部の細長い尖り具合が特徴である。これはペルリーヌの一部である。また、お洒落なリボンがブローチで留められ、蝶結びのリボンはペルリーヌの終わりをウエストポイントにするためピンで留めている。袖はわずかにゆるい型で、カフスは狭いレースを 3 列ならべてつけている（Joan Severa, p57 より引用）。

ペルリーヌ一枚で、こんなにもお洒落な装いになるとは、感動的である。

1849–51 年に撮られたダゲレオタイプの写真 30（Joan Severa, p. 55）は、*The National Museum of American History*（*86.115.99*）の所蔵品である。

被写体の背景情報は記載されていない。髪型と衿と袖口、アンダースリーブに特徴の見られる装いである。髪型はパフが耳の高さで水平に大きく広がっている。セヴラ女史によると 1840 年代末のスタイルである、という。衿と袖の特徴について、次のように解説している。

幅が広くピンと張ったプリント柄のリボンは、バンドのように立てるという珍しい形で首に巻かれ、上の縁には白いフリルが見えている。そしてこのリボンにプリーツをとって喉もとで交差させ、ピンで留めてある。ゆるやかなフレアーの袖とカフス付きのアンダースリーブ、わずかに上がったショルダーラインも、同時期のスタイルである（Joan Severa, p55 より引用）。

全身にパリッとした雰囲気が漂っている。

1849−52 年に撮られたダゲレオタイプの写真 36（Joan Severa, p. 80）は *Joseph Covais* の所蔵品である。セヴラ女史によるとイリノイ州の中西部で発見された無名のそれほど金持ちでない親子の写真であるとのことである。にもかかわらず、何ともおしゃれなジェニー・リンド衿（Jenny Lind collar）を付けている。「この衿は、レースの値段が高いので、たとえ家で作ったとしてもかなりお金のかかるアクセサリーであった。」とセヴラ女史は述べている。 袖はビショップ・スリーブであり、この衣服に合っていない。経済的な余裕がない生活のなかで、なんとか流行についてゆこうと努力している姿が涙ぐましい。

Plate 6 の左から二番目の女性のドレスは「美しいレースのペルリーヌの先端はとがり、広いレースでトリミングされ、袖の上に落ちるように配置されています。」と解説されている（Accessible Archive）。

2. 頭飾りと帽子

以下において、ジョーン・セヴラ女史の記述の要点をまとめさせていただく（Joan Severa , pp. 10−11）。

髪は全く経費をかけずに結えるため、全階層で受け入れられたファッションであった。ファッション・プレートに掲載されていた豊富なヘアー・スタイルは、1840 年代の貧乏な少女達に、高価なものは別としてお金持ちの美人と同じようなすばらしいヘアー・スタイルにすることを可能にさせた。大きな装飾的な髪飾りは、40 年代の中では貴重なアクセサリーであった。様々な材料で作られ、髪をてっぺんにまとめた。時には、長い尖った宝石が、髪にとめられた。それらは１カ所か２カ所尖っていて、しばしば亀や骨で作られ、先には石のセットがあしらわれていた。

帽子はやや透き通った白い綿の日常用縁無し帽から、おめかしした服装用のものまで広く用いられていた。多くの帽子が後まで残っているにも関わらず、写真による肖像画がほとんどそれらを写していないため、一般的に使われているということを立証するのは困難

Plate 6　***Godey's Lady's Book***　**July　1844**

である。日常用縁無し帽を身につけるエチケットは、どの女性雑誌にも見あたらないが、個人の報告やいくつかの記事から推定することができる。それらの外観の重要性に関連した記述が、Lowell 工場の少女により言及されており、縁無し帽の手入れの仕方や「糊付けされた帽子」という言葉の記述が見られる。少なくとも 1840 年代の初期に帽子は若者と年寄りの両方によって身につけられ、1840 年代後半は年寄りの女性に身につけられていた。

ボンネットは女性にふさわしいかぶり物であった。それゆえにすべての階級の女性によってかぶられていた。女性が安いコストで基礎を買い、自分自身を飾ることができたにも関わらず、個人の記録によるとボンネットの値段は 3 ドルから 8 ドルに及んでいる。ほとんどのボンネットは低く、てっぺんの線は水平になっていた。顔を覆い、深いつばがついており、それは顎のラインより下でネックカーテンあるいは後ろに集まったバボレ（bavolet）〔飾りリボン〕があった。1840 年代の初期は帽子のつばは、かなり深く、顔に接近していた。50 年代に向かうにつれて、頭の後ろが下がっていくと同時に、もっと丸く、どちらかというと浅い形になり、外側に広がっていた。ボンネットは飾りが変化しながらも、長い期間に渡って着用された。麦わら帽子用の麦わらのひもは、ニューイングランドで初期の工場生産がおこなわれていた。素材には麦わら、シルク、フェルト、ビーバーの毛皮が用いられていた。飾りはてっぺんとつばの上にのせられた幅の広いリボンからなっていた。1 つの帽子に色違いの縞模様あるいは格子縞のリボンや花があしらわれていた。1840 年代の後半には縁は外に広くなり、レースやリボンのバラ飾りや花や草が縁の内側のまわりにあしらわれ、顔を縁取っていた。シルクのフリルのネットは、縁まわりのへりの真下につけられ、顔を縁取り、装飾として用いられていた。これらのつばの下に装飾

写真８　　ダゲレオタイプ
1843 - 45 年
提供：*Joseph Covais*， p. 40

写真 21　　ダゲレオタイプ
1847 - 50 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi［X3］ 35725）， p. 56

をあしらう方法は、40 年代の間さまざまに変化した。

フードは冬、頭をカバーする防風として着用され、厚い詰め物をされ、材料の羊毛とシルクの混紡あるいは羊毛製であった。ドレッシーなベルベットフードは、若い女性に人気をよんだ。ボンネット・スタイルは金持ちのスタイルを熱心に観察して模倣された。金持ちでない大半の女性達は、少なくとも数年間通してボンネットを保管していた。スーツの季節にあわせた新しい好みにより、飾りだけを変化させて、数年間、ボンネットをかぶり続けていた。形状が変化した時、働いている少女達はお金を払ってでもスタイルを保とうとした。しかしボンネットのコストは週の賃金よりも高かった。一般的にボンネットと対比して、帽子は少年や少女達に用いられた。広い縁のある麦わら帽子は、田舎や海辺の女性達のために許されたが、中年の女性 40 才以上だけであった。このルールにさまざまな種類の例外があり、その最たるものとしてマスキュライン型の種類のシルクトップハットと正式な乗馬服で用いられていた山高帽があった。

次に髪の結い方、帽子及びボンネットについてアメリカの写真資料 8 枚とファッション・プレートを比較考察する。アメリカの写真では、髪が結われているのは 37 枚中 28 枚である。その中から特徴のある写真資料を５枚とりあげる。

1843–45 年に撮られたダゲレオタイプの写真８（Joan Severa, p. 40）は、*Joseph Covais* の所蔵品である。

セヴラ女史に拠ると、この写真に写っているドレスの身頃から判断して、彼女たちは保守的な考え方で、髪型は 1840 年代初めのスタイルであるという。「髪型は、1840 年代始めの頃のスタイルで、全員真ん中から分けて後ろに引きつめ、耳を見せたり、編んだり巻いたりして耳にかぶせたりしている。」「1 枚の写真の中に、こんなに多くの情報を与えてくれる形で女性たちが集まっている例に出会うことは稀である」とのことである（Joan Severa, p. 40）。髪型や服装に興味のある読者の方は、オリジナルの著作を参照されたい。

写真 20 （Joan Severa, p. 55、本書, p. 60）の巻き毛のスタイルは、鼈甲の透かし細工の櫛を前から見えるように後ろにさしており、当時の髪型の中でもおしゃれな方だと思われる。工場の少女達も上流社会風のこのような髪型にしていたようである。

1847–50年に撮られたダゲレオタイプの写真21（Joan Severa, p. 56）は、*The State Historical Society of Wisconsin （WHi ［X3］35725）*の所蔵品である。

まず、被写体の背景情報と撮影時期について、セヴラ女史は次のように述べている。

> ウィリアム・クーパー・ノイズの妻（Mrs. William Cooper Noyes）であるエリザベス（旧姓ワディ、Elizabeth Waddy）は、ウィスコンシン州マディソンでこの肖像写真を撮ってもらった。彼女が 40 歳くらいの時であった。ノイズ家は比較的裕福な名家であり、ノイズ夫人がこの非常に特徴的なドレスを着ていたのは、このスタイルが人気絶頂だった時期――つまり 1847 年頃――であると考えて間違いない。……
> ヘアー・スタイルは流行のループに結われ、髪は耳を部分的に覆い、頭の後ろの低めの位置に集められている。耳にはとても小さな金のイヤリングが下がっている（Joan Severa, p. 56 より引用）。

写真３　ダゲレオタイプ
1841‐1846 年
提供：***The International Museum of Photograpy, George Eastman House***, p. 32

写真 24　ダゲレオタイプを撮った写真
1848‐50 年
提供：***Georgia Historical Society　(5-56-254A)***, p. 60

1848−50 年に撮られたダゲレオタイプの写真 24（Joan Severa, p. 60）は、*Georgia Historical Society　(5-56-254A)* の所蔵品である。

セヴラ女史に拠ると、この写真の時代考証はアフリカン・アメリカンの歴史上、非常に貴重である。少々、長くなるが、他の服飾史の文献には、決して見られない解説であるので、全文紹介させていただく。

> この珍しい写真は、貴重な 1840 年代のダゲレオタイプを 1870 年代に撮ったもので、ジョージア州サバンナのふたりの奴隷女性が写っている。年長の女性はジュディ・テルフェア・ジャクソン（Judy Telfair Jackson）で、テルフェア家で料理をしていた。若い女性はジュディの孫娘のラビニア（Lavinia）で、南北戦争後、テルフェア家に住み込んでメアリー・テルフェア（Mary Telfair）のメイドをしていた。ふたりの女性は、服こそシンプルだが、とてもきちんと身だしなみを整えている（当時の家内奴隷や使

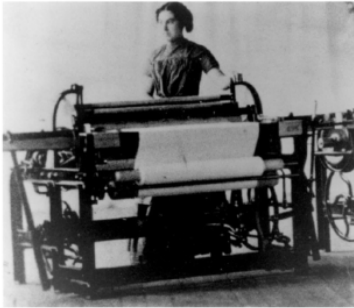



写真 27　　ダゲレオタイプ
1849 - 50 年
提供：***The Museum of American Textile History* (P 14069)**，p. 65

用人は一般的にそうであった）。右側の年配奴隷の女性は、ターバンによって頭をくるんでいる。左側の若い女性の髪は下に引かれ、顔にぴったりとつけ、後ろで冠のように上げ、ファッショナブルなパフを耳の上につけている。当時流行のヘアー・スタイルに近い（Joan Severa, p. 60 より引用）。

写真 20（Joan Severa, p. 59、本書, p. 60）の女性や写真 25（Joan Severa, p. 62、本書, p. 55）の少女は、カメの櫛で髪の毛を固定している。

ダゲレオタイプの写真 27（1849-50 年）（Joan Severa, p. 65）は、*The Museum of American Textile History*（*P 1406*）の所蔵品である。

これは、力織機の前にいる女子工員の写真の珍しい事例である。特にヘアー・スタイルと服装に着目したい。撮影年代の記録になる。セヴラ女史は、服装や髪型から、1840 年代の終わりごろと推定し、次のように述べている。

> 髪は、翼のように広い幅で滑らかな膨らみを作って斜め下におろした後に、先を持ち上げて後頭部で結われている。ヘアー・スタイルの細部ははっきりと分からないが、こめかみの近くがソフトで幅広く、耳のそばに短いサイドカールが下がっているように見える。これは 1840 年代後半の典型的なヘアー・スタイルである（Joan Severa, p. 65 より引用）。

Plate 6 の左から二番目を除く 3 人の女性のヘアーにみるように、当時のフランスの髪型は巻き毛に結っている。おそらくアメリカの写真に見られる横髪を巻き毛にしているスタイルは、元はヨーロッパから入ってきたのではないかと思われる。アメリカの髪型では

写真 15　ダゲレオタイプ
1846 年
提供：***Historic Northampton*（59.53a），p. 49**

所々にアクセサリーをつけている姿もあれば、アクセサリー類はつけずに髪型だけ真似ている写真もある。ここでもアメリカ中流階級の女性達の質素な生活が窺われる。最後にボンネットが写っているアメリカの写真は 37 枚中２枚ある。

1841-46 年に撮られたダゲレオタイプの写真 3（Joan Severa, p. 32, 本書, p. 66）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影年代、一人一人のかぶりものについて、次のように解説している。

この写真の撮影年代（1841 - 1846 年）は、写真の下に引用した 1840 年の記事に書かれた、初期の“鍔が顔に近い”ボンネット・スタイルの描写の時期と一致している。……中央の女性がデイキャップ（day cap）をかぶっている。縁は後ろに折り返され、年をとった女性の慣習的なひもをつけて着用している。この帽子は 40 年代の良い帽子の基本であり、当時の共通のマナーとしてかぶられた。深いフリルの縁は途中で折り返され、明るい色のリボンのひもをほどき、リボンの蝶結びで側面を飾っている。深いつばとつばの間の顔がやわらかく見えるようにフリルを見せてかぶっている。この時代のフリルはよくボンネットに固定されていた。また、フリルを使用していないボンネッもこの写真から見られる。ボンネットは両サイドが長く、装飾はできるだけシンできるだけシンプルなものか、全く対照的なものが見られた。ある帽子は花やレースがあしらわれ、また他の帽子には共布の飾りがあしらわれていたものもあった（Joan Severa, p. 32 より引用）。

1846 年に撮られたダゲレオタイプの写真 15（Joan Severa, p. 49）は、*Historic Northampton (59.53a)* の所蔵品である。

写真 31　　ダゲレオタイプ
1849 - 50 年
提供：***California State Library (neg. 21.197)***, p. 70

写真 32　　ダゲレオタイプ
1849 年頃
提供：*The International Museum of Photography, George Eastman House (69. 202. 214)*, p. 72

この写真に見られるジョーン・セヴラ女史のボンネットの解説は、とても詳しい。服飾史上、非常に貴重な解説である。以下に一部を引用させていただく。

　この美しいポートレートは、ノーサンプトンで婦人帽製造業を営んでいた R・ディッキンソン夫人（Mrs. R. B. Dickinson）のものである。
　『ノーサンプトン・クーリエ』紙（*Northampton Courier*）に載せた 1858 年の広告の中で、ディッキンソン夫人は『ボンネットが欲しいすべての女性は、ぜひ私のボンネットルームにいらっしゃい』と述べている。ボンネットルームは、ノーサンプトンのメイン通りとキング通りの交差点の角にある建物の２階にあった。……ボンネットは、1840 年代初めには鍔が顔の横に接近した形だった。1846 年頃になると鍔の開きがいくぶん広がってこの写真のような形になり、鍔の内側に左右非対称の飾りを付

けられる空間が生まれた。真のボンネットはかなり顔から離れており、シルクの花や草の繊細な装飾を付けるだけのゆとりがある（Joan Severa, p. 49 より引用）。

さらに、詳しくは、オリジナルの著作を参照されたい。

ボンネットも Plate1-6 のようにかなり *Godey's Lady's Book* のファッション・プレートに現れている。どのボンネットにも花、布、レースなどで装飾があしらわれている。当時ボンネットはフランスの女性達にとってかなり大切なファッションであったことがこれらのファッション・プレートから覗える。またアメリカの女性達もフランスの流行を追って、長くボンネットを使用し、アレンジしている様子がアメリカの写真から読みとれる。しかし両者を比較すると、アメリカの方が質素であると結論づけられるであろう。

3. アクセサリー

(1) 女性用長手袋とミトン

以下、ジョーン・セヴラ女史の記述の要点をまとめさせていただく（Joan Severa, p. 11）。

ニット製のシルクか、すかし細工の女性用長手袋、あるいは指先のない手袋は、大部分は詳細に残されていた。写真を見ると若い少女、何人かの身なりのよい若い婦人、そして長手袋を着用していた多くの年老いた女性が写っている。彼女達はいつでもディナーやパーティードレスと一緒に長手袋を使用し、毎日着用されていたわけではないが、長手袋は比較的手に入りやすかった。

パターンと指示はいくつかの定期刊行物に掲載されていた。それらはシルクのニットやネットで、最も一般的な黒を使用して、時折、家で作られていた。1840 年代の外出用の手袋は、キッドの革で作られ、手首の長さで、ぴったり着用されていた。写真で見るとそれらは光沢のある滑らかさを出し、手を小さく上品に見せていた。

次に写真資料を見てみる。アメリカで手袋が写っているのは、37 枚中 5 枚ある。その中から３枚取り上げる。

写真３（Joan Severa, p. 32、本書, p. 66）を正面からみ、向かって右側の女性と真ん中の女性が、黒い手袋をはめているのがわかる。この手袋は透き通っていないため、革製のようにもみえる。

ダゲレオタイプの写真 31（1849-50 年）（Joan Severa, p. 66、本書, p. 69）は、*California State Library（neg. 21.197）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影者と写真に見る手袋の特徴について、次のように述べている。

> カリフォルニア歴史協会によれば、この写真はカリフォルニア州サクラメントの『黎明期の写真家』J・E・D・ボールドウィン（J. E. D. Baldwin）が撮影した最初のダゲレオタイプであるとされている。レ　ー　ス　の　ミ　ッ　ト（mitt/mitten）はなかなか興味深い。左側のメアリーのミットは、個々の指を出す穴がなく、単に黒いネットの筒が指の付け根関節で終わっているだけである。一方、叔母のミットはもっと手の込んだ構造で、指ごとに穴が分かれている（Joan Severa, p. 66 より引用）。

1849 年頃に撮られたダゲレオタイプの写真 32 （Joan Severa, p. 72）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House* の所蔵品である。

被写体の背景情報は記載されていない。セヴラ女史は、次のように解説している。

> 三つ編みでパフを作り、長い巻き毛を垂らしたこのうら若き女性は、ペキン（pekin）縞のシルク生地で作った上等なドレス姿でポーズをとっている。……ウエストの前下端があまり低くない位置にあることが、年代推定の主な手掛かりである。目の粗いシルクのニットのミットは、おそらく既製品であろう。編目から、伸縮性があるのではないかと考えられる（Joan Severa, p. 72 より引用）。

アメリカのファッションは、全体的に暗い色のドレスが多いため、服と手袋をあわせて暗い色にしたのものと思われる。しかし素材的に黒色しか無理だったか、また汚れが目立ちにくいなど実用性も兼ねているのではないかとも考えられる。

当時のフランスの手袋を、*Godey's Lady's Book* のファッション・プレートから見てみる。Plate1-6 から 1830 年代から 1840 年代を通して、手袋がはめられていたことがわかる。しかしアメリカのように黒の手袋はファッション・プレートには 1 枚もなく、すべて白い手袋をはめている。

(2)　その他のアクセサリー

以下、ジョーン・セヴラ女史の記述の要点をまとめさせていただく（Joan Severa, p. 13）。

金の時計と鉛筆、長いコードかウオッチチェーンの付いた時計は、40 年代の若い女性の重要なシンボルであった。女性はファッション雑誌に従ってそのようなアクセサリーを持

ち、同様に働いている少女も上品な娘のイミテーションを着用した。あいにく時計は写真には見られず、黒のコードか金のチェーンだけが見えていた。時計と合うように付けられたブレスレットは、大胆かつ丈夫で幅が広かった。珊瑚のレリーフの髪飾りはかなり流行した物で、模倣の珊瑚か本物の珊瑚いずれかで作られた。

イヤリングは 1840 年代初期の写真には、全く見られなかった。この時代、耳はしばしば完全に髪で覆われていたからである。イヤリングは 40 年代後期に出現した。当時のイヤリングは適度の大きさで、単に、鎖、針金、金の玉を耳からかけたにすぎなかった。指輪はとても人気があり、金や石で作られていたものは、むしろ小さくデリケートで、それらは親指を除いた全ての指にはめられ、時には全ての指にはめられた。

次にアクセサリー類が写っているアメリカの写真資料は、37 枚中 30 枚ある。その中から特徴のある写真を取り上げる。

写真 16 （Joan Severa, p. 50、本書, p. 51）は全体的にシンプルな装いだが、真ん中の女性は人差し指に指輪をつけている。写真 18 （Joan Severa, p. 53、本書, p. 51）も大きな金の指輪を人差し指につけており、石のついた大きな輪からなるブレスレットもつけている。またドレスのネックラインの内側にある金のチェーンには、2つものがついているようにみえる。一つは金の鉛筆で、もう一つは時計であるといわれている。写真 28 （Joan Severa, p. 66、本書, p. 52）では右の少女が、おそらく当時人気のあった珊瑚のブローチをしており、人差し指にも指輪をしている。全ての指ではなく、人差し指にだけ指輪をつけるというファッションもあったことが、これらのことからわかる。写真 31 （Joan Severa, p. 70、本書, p. 69）では両側の女性の、ウエスト部分に金の時計のチェーンが見えている。この写真から金のチェーンは、目を引く存在のように思われる。写真 32 （Joan Severa, p. 72、本書, p. 69）は手首に、珊瑚の玉をひもに通したブレスレットを着用している。黒いベルベットリボンを卵型のブローチで留めている。*Godey's Lady's Book* に掲載された, Plate2-4 にはブローチが、Plate 4, 5 には薔薇のアクセサリーがとめつけられている。この当時のファッション・プレートでは、ネックレスとイヤリングは描かれていない。ドレスや髪飾りなどが豪華なため、アクセサリーはあまり使用する必要がなかったのではないかと思われる。

4. 下着

以下、セヴラ女史のコルセットに関する記述を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 15-16）。

写真33　　ダゲレオタイプ
1849年頃
提供：***Atlanta History Center*（*4017*）**，p. 74

写真35　　ダゲレオタイプ
1849 - 51年
提供：***The International Museum of*，*Photography, George Eastman House*（*68.134.1*）**，p. 78

当時のコルセットは、腹部やお尻の後ろまで覆っていた。その上、巨大な木、金属、鯨のひげのバスクはもちろんのこと鯨のひげで装飾されており、コルセットの最上部から最下部まで前部は鯨のひげが通っている。

乳房の締め付けは、徹底的であった。時には医者がこの慣習に反して、コルセットは乳房に有害であり、女性はウエストに負担がかかるぐらいきつく縛ることは間違っていると主張した。この時代の身体の専門家達もまた、子どもにまできついコルセットを付けると、97種類もの病気が生じていると主張した。コルセットは、また女性の子宮に悲惨な結果を引き起こすと一般に言われた。一方で、コルセットはいつも店で入手でき、特別なスタイルが英国やフランスから輸入された。家でのコルセットの作り方は、1840年代の多くの女性誌に掲載されていた。

コルセットは頻繁に洗われてはいなかったが、中には洗うことができるものもあった。コルセットは比較的高い既製品であり、手作りのコルセットは時間がかかりすぎ、手の混んだ仕事であった。コルセットのボディーや様態は洗うごとに劣化したため、コルセットをできる限りきれいに保つようにした。

コルセットの下に長い綿のシュミーズを着ることは一般的であった。写真 18（本書, p. 51）でも透き通った白糸刺繍がほどこされたシュミーズが見える。1840 年代女性のドレスの下に、ひざ丈の綿かリネンのたっぷりとしたシュミーズを着用し、シュミーズの短い袖の縁に狭い白い装飾があしらわれていた。短い袖のシュミーズは汗や汚れに対してドレスを守り、シュミーズは洗うのが簡単だったため清潔に保つことができた。

ストッキングは膝の高さより上まであり、手か機械によって白い綿で編まれた。すべてガーターと一緒に留められ、ゴムのひもで作られていたものもあった。ゴムひもはこの時代使用されたが、品質はよくなかった。

その結果としての姿態が、写真で容易に見ることができる（写真 1, 4, 7, 32, 33, 35）（Joan Severa, pp. 28, 34, 38, 72, 74, 78）（Joan Severa, p. 13）。

1849 年頃に撮られたダゲレオタイプの写真 33（Joan Severa, p. 74、本書, p. 73）は、*Atlanta History Center (4017)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の服装について、次のように述べている。

> この印象的な写真は、ジョージア州アトランタの若い女性コーネリア・バナー・エバーハート（Cornelia Banner Everhart）のダゲレオタイプに手で彩色したものである。写真に見るように、とても上品で気品のあるコーネリアは、胴部にしわひとつない、ダーツの入った身頃のドレスを着用している。……ダーツが入れられてよくフィットした身頃は、コルセットの上にしわひとつなくまとわれている。ぴったりしたフィットは胸から肩を経て袖まで続いており、明らかにこのドレスが経験豊かな裁縫師の手になることを物語っている（Joan Severa, p. 74 より引用）。

セヴラ女史が言うように、美しいフィットは経験豊かな裁縫師の手になるものであることは明白である。

1849–51 年に撮られたダゲレオタイプの写真 35（Joan Severa, p. 78、本書, p. 73）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House (68.134.1)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、てらいのない親密なポーズとどこか挑戦的な雰囲気は、このふたりが友人以上の関係であり、しかもおそらく撮影者である写真家の友人であることを、次のように示している。

撮影時期は衣服のディテールから容易に推定される。女性のドレスのぴったりした身頃には、非常に長くて下へ行くほど間隔が狭まっていくダーツがとられ、その下に胸郭を締めつけるがっちりとした構造のコルセットのラインがとてもはっきりと見えている（p. 78）。

1840年代末のコルセットの特徴が、とてもリアルに表現されている。

5. ラップ

以下、セヴラ女史の記述を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 14-15）。

ショールは、同時代の人々が一目見て、財産や階級の区別をするものであった。女性労働者でさえ、ショールの購入のために貯金をしていたということが書かれていた証拠がある。しかし、貧しい女性達は、立派で豪華な模様がほどこされた中品質のショールの1枚さえ買う余裕は、ほとんど無かった。財産を持っている者だけが、より高く、刺繍の施されたインドのカシミア・ショールを買うことができた。

一般的にこの時代までに着用されていたカシミア・ショールは、必ずしもインド産の綾織、または有名なインド山羊の毛で編まれた物ではなかった。それらは、ヨーロッパの国々、イギリス、とくにスコットランド（ペイズリーという言葉の発祥の地）、フランス産の織り機で織られた物が多く見られた。非常に柔らかく、気持ちが良いので、高く評価されていた。

1840年代の大半のこのようなショールのタイプは四角い物が多かった。単に対角線に折り畳まれたり、肩に下げたりして身につけられていた。

絹の錦織のショールは、当時二番目に望ましいスタイルであった。中国のオリジナルを基礎にして、これらは光沢のある糸で刺繍された分厚い絹のちりめんで作られ、ほとんど白黒であった。セージグリーンやパステルカラーは、コレクションから見つけられ、いくつかは刺繍の中に別色があったのだが、それらはほとんど黒か白のいずれかであった。三角に折り畳まれたショールは、たまには丸い物もあったのだが、通常四角く、色が濃いシルク製で房飾りがついていた。

上品になろうと女性はショールを優美に飾り、身につける勉強をし、練習をした。当時の人々は、所有しているショールや服装をどのように身に付けるかによって外見上の違いが見られた。簡素なものから刺繍装飾が施された絹やウールといった広範囲のショールを入手することができた。それはペイズリー模様の織物あるいは捺染の編み地であった。すべての女性が少なくとも一枚はショールを持っていて、彼女たちは余裕があるからできる

写真５　ダゲレオタイプ
1843年頃
提供：***Historic Northampton*　(*59.277*)**，**p.36**

写真34　　ダゲレオタイプ
1849 - 50年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*　(*Whi*［*X3*］*41291*)**，p. 76

最大のことであった。しかしながら、肖像画に見られるショールは必ずしも実際の着装法を代表するものではない。なぜなら、それらのショールは肖像画に見られる肖像画家の効果をアレンジしているかもしれないからである。

ショールの他に広く被われる物が着用された。ケープ、シルクかレースで作られた長い胴着の形にフィットした軽量のペルリーヌ（ヒップの下に大きなフレアーのついたウエストフィット型）、シルクかレースのマンティラ（スペインやラテンアメリカの女性が頭から肩に掛ける黒または白のレースのスカーフ）、シルクの一種で詰め物をした女性用ガウン、そして長いマント（袖なしの外套）のすべては、1840年代のファッション・プレートと文献で特徴づけられた。ラップは長く、マントを製造する人から既製品として入手可能であり、シルクかウールの裏地に特に長い房飾りやレースが飾られていた。

以上のことはジョーン・セヴラ女史の見解を要約したものだが、次に当時のアメリカの写真と *Godey's Lady's Book* に掲載されたPlateを比較して考察していく。

アメリカの写真で見られるラップは、37枚中9枚で11人の人がそれぞれ、ショール（写真5, 7, 9, 11）（Joan Severa, p. 36, 38, 42, 44）、ケープ（写真3, 14, 15, 34）（Joan

Severa, p. 32, 38, 42, 44）、ブランケット（写真34）（Joan Severa, p. 76）を着けている、柄・色・素材等の説明がはっきり分かるものはそのうち7枚であるが、代表的な写真5を紹介させていただく。その他に、ブランケットを羽織ったネイティヴ・アメリカンの写真を紹介させていただく。

ダゲレオタイプの写真5（1843年頃）（Joan Severa, p. 36）は、*Historic Northampton (59. 277)* の所蔵品である。

まず、背景情報が次のように述べられている。

> ファッショナブルなドレスを着たこの若い女性は、マサチューセッツ州ノーサンプトンのクララ（クラリッサ）・ステビンズ・レイスロップ（Clara（"Clariss"）Stebbins Lathrop）である。1823年6月19日生まれの彼女は、この写真の撮影時には20歳くらいだった。……被写体が羽織っているショールは中等レベルの価格、品質のものである。ただし、このショールは当時の若い女性に人気のスタイルで、模様が縞状なことから彼女たちはこれをゼブラ（the zebra）と呼んでいた。（このタイプは、1879年頃には一般に「ボストン・ショール（Boston shawl）」と言われていた。）（Joan Severa, p. 36より引用）。

確かに、ショール一枚で、すばらしくお洒落なファッションに見える。

次に、ブランケットを羽織ったネイティヴ・アメリカンの写真を紹介させていただく。。
1849‐50年に撮影されたダゲレオタイプの写真34（Joan Severa, p. 76）は、*The State Historical Society of Wisconsin (Whi［X3］41291)* の所蔵品である。
まず、背景情報と撮影年代が、次のように述べられている。

> レイチェル・ロウ・グリニョン（Rachel Lawe Grignon, 1808‐76）の一風変わった肖像写真。レイチェルはウィスコンシン州グリーン・ベイの判事ジョン・ロウ（John Lawe）と妻である先住民チペワ（オジブワ）族のテレーズの間に生まれた娘で、この写真は1859年にレイチェル自身によってウィスコンシン州歴史協会に寄贈された。……この珍しい写真では、チペワ族の血を半分引く女性が、流行のラインを持つ普通の（おそらく）シルクのドレスの上に、先住アメリカ人のブランケットや装身具を着けている（Joan Severa, p. 76より引用）。

この写真には、レイチェルの服装やアクセサリーについて、非常に詳しい解説がつけられている。興味のある読者の方には、セヴラ女史の原本をお読みいただきたい。

比較・考察の結果、アメリカ女性の写真で見られるショールの素材は、ウールといった中品質だが、その分「柄」に力を入れて、おしゃれを楽しんでいたものと思われる。貧富の差がありながらも、どうしても手に入れたいという気持ちが、すべての女性に少なくとも 1 枚のショールを所有させたものと考えられる。

またファッション・プレートや従来の西洋服飾史の研究成果から、ショールは「柄」というよりも、「素材」のカシミアに対する愛着が根強かったということが分かった。西洋では 1834 年以前はカシミア・ショールの図柄はインドの図柄に盲従していた。1841 年にペルシア・スタイルになり、アジア風となった。後にまたインド・ショールのイミテーションが戻ってきた。1840 年以降、インドに発想を得たショールからは、少しずつ内側横ボーダー（飾り縁）が無くなっていく。パルムの上方にアーチが描かれることもあった。また、パルムとそれに付随する枝蔓模様がボーダーの境界を越えて、無地部分まで被うこともあった。さらに大きくなったパルムに押されて中央部分に移動した内側ボーダーは、ショールを身にまとうエレガントな女性の肩に線を引いたかのように見えたため女性の不満を買い、1850 年初めに消えていった。1848 年以降は、フランス製のカシミア・ショールの植物柄・回転柄が普及した。このように、カシミア・ショールの柄は西洋ではパルム（ペイズリー柄）がよく見られたようだが、当時のアメリカ（中流階級の人々の中）では「柄」だけでも真似たように思われる。「柄」でおしゃれを引き立てていた事がますます考えられる。しかしジョーン・セヴラ女史によると、カシミアといった高品質のショールは財産を持っている者だけが買うことができたという。アメリカの余裕のある上流階級の人々だけがヨーロッパ・ファッションのカシミア・ショールを楽しんでいたものと考えられる。

6. 履物

写真やファッション・プレートではっきり見えている物がないので、ジョーン・セヴラ女史の見解を中心に述べていく。女性の靴は今日のバレーシューズに似ている。外出時にはゲートル（足首の長さのブーツ）やスリッパのような靴を履いており、つま先は四角く、つま先・ヒールの部分には高級な布やなめし革が使われていた。女性の外出用の靴は、丈夫な物というよりは、おしゃれを楽しむために軽く、壊れやすい物が多かったようである。

また、田舎でよく提案された実用的な（泥・雪・汚れ）靴は、靴底に木・麻あるいはなめし革の紐を使った木靴で、丈夫なものだった　(Joan Severa, p.18）。

第 3 章　庶民男性の服装

男性服に関してはジョーン・セヴラ女史の見解の要約、写真資料（37 枚中２枚）、筆者の見解を論述する。

１．外衣

1840 年代初期の男性の姿は、スリムで多くはひげが生えていなかった。ウエストは細く、コルセットやパッドのため時々不自然な膨らみが胸にあり、美しい手や足をしていた。1840 年代終わりが近づくにつれて、男性のイメージされる姿はさらに体格の変化に応じて大きくなり、ひげやもみあげを生やすようになった。40 年代終わり頃から男性は、本来の姿より実際は良く見せる傾向があり、スタイルを保つために仕立屋あるいは出来合いの売り物に依存していった。またカタログを見て買い、至る所で既製品を入手できるようになった。1840 年代の既製品は、ワゴンか船で品物を運び、植民地の店で売られた。特に長いコート、下腕部にしっかりとフィットした幅の狭い袖が、40 年代に注目された。

サックは軽く、裏地はないものが主流で、素材はリネンや綿やウールで作られていた。柄は格子縞かチェックであった。サックはたいてい一番上のボタンだけを止めて着用され、ベストや時計のチェーンを見せるために、下のボタンを開けておしゃれに着用された。腰部のくびれたフロックコートやモーニングコートは、重要な時に年老いた名士によって着用された。しかし、サックはインフォーマルの時に着用され、レジャーウエアとしても融通の利く上着であった（Joan Severa, pp. 19-20）。

実際に着用されていた上着をアメリカの写真 22 を見ながら考察していく。

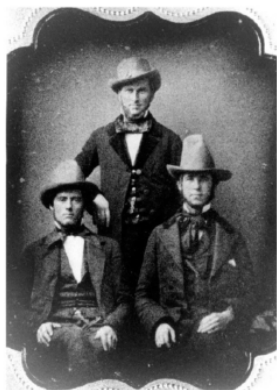



写真22　　ダゲレオタイプ
1847 - 50年
提供：***Historic Northampton*** **（*59.653*）, p. 57**

1847−50年に撮られたダゲレオタイプの写真22（Joan Severa, p. 57）は、*Historic Northampton*（*59.653*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の服装について、次のように述べている。

> この写真に写った身なりのよいノーサンプトンの3人の紳士（氏名は不詳）は、みな同じように、1840年代の窮屈なフィットのコートを着用している。彼らの服で最も目立つ特徴は、高いアームホールと細い筒状の袖によるぴったりしたフィットで、それが細身の黒っぽいシルエットを生み出している（Joan Severa, p. 57より引用）。

上着には左のサックコート、中央のフロックコート、及びモーニングコート（写真25）（Joan Severa, p. 62,　本書, p. 55）があり、細身の身体にフィットし、高いアームホール、細い管状の袖、そして大きいボタンが特徴的である。衿は、ベルベット素材のものが多く、折り返されている。サックコートとフロックコートは黒いものが多かった。サックはセヴラ女史の見解では日常着として着用されていたが、実際は外出着として着用していたようである。

ベストにはいくつかのタイプがあり、すべてぴったりとフィットしており、腰ぐらいまでの長さがあり、衿はショールカラーである。ベルベットや表編みのウール、シルク地を裁断して作られた。同じ生地のコート、ズボン、ベストが着用されたスタイルは、公に知れ渡った。

実際に着用されていたベストをアメリカの写真（2, 22, 25）（Joan Severa, p. 30, 57, 62）を見ながら考察していく。

ダゲレオタイプの写真2（1840−42年）（Joan Severa , p. 30）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*68.134.5*）の所蔵品である。

写真２　　ダゲレオタイプ
1840 - 42 年
提供 ***: The International Museum of Photography, George Eastman House（68.134.5）***, p. 30

ベストはドレッシーで、身体にぴったりしており（写真 2）、ショールカラーが付いており（写真 2, 22）、素材やボタンは最高級のものを使用していた。素材はシルクが多く（写真 2, 22）、ボタンに金箔や真珠が使われていた（写真 22）。色は黒っぽいものが多かったが、中にはカラフルなものもあった。上着の素材はウールが多かったので、ウールのベスト（写真 22 の右の男性）はシルクに比べてよく似合っていることがわかる。白のコットンシャツは、幅の狭い袖や胸にリネン製の襞がついている。この時代のドレスシャツの衿は小さく、堅く糊づけされており、よくネックバンドでとめられていた。仕事用のシャツは、一般的にズボンの中に入れて着用された。小売商人によって売られたが、実際は家でよく作られた。シャツは肩の縫い目なしに作られ、前身頃、肩・カフスに十分なギャザーが入り、袖幅は狭かった。

実際に着用されていたシャツをアメリカの写真を見ながら考察していく。袖は細く、身頃もぴったりしているが、前身頃には少し膨らみがみられる（写真 2）。衿はバンド状で（写真 2）、真っ直ぐか折り返している。衿にはしっかり糊付けがされている。また全体に糊付けされ、タックが入っているものもある（写真 22）。

スモックは、リネン、コットン、ウールのいずれかで作られており、時々肩の開きにボタンが付いていることもあった。尊敬すべきヨーロッパのスモックを真似ているので、それらは膝までである。移住民がイギリス諸島、スカンディナビア、ヨーロッパからこの伝統的な衣服の使用法を持ちこみ、仕事用の適当な衣類としてスモックを着用し続けた。スモックは仕事中に身体を保護するために供給され、さらに実用的に小さく作られた。写真で見られるスモックは 3 枚中 1 枚で、ウールでチェックの柄であった（写真 2）。

1840 年代の最も人気のあるネクタイは写真から推測すると、控えめな幅と、小さく水平に結ばれている蝶結びである（写真 22）。しかし、厚みのあるシルクで作られたストック型は襞やタックが時々見られ、シルクが使用された（写真 22）。ストックは時々首回りに

ホックが付けられていた針金の構造で、時々前もって形作られた（写真 25, 本書, p. 55）。このタイプの正確な当時の記述は、1842 年南西のウィスコンシンの地域で採掘争いの記事の新聞に見られた。このタイプの衿が人間の生活を守った事が示されている（Joan Severa, p. 21）。最も多くの写真では、黒い色のネクタイが圧倒的に多く（写真 22）、時々ストライプのストックが見られた。

1840 年代のズボンにはチャックがついていた。ズボンの布は主にウールが見られ、黒が 40 年代を通し圧倒的に多く、遅くにツィードがあらわれた。ズボンに折り目がないのは写真ではっきりわかる。結婚式、葬式、そして特別な正式の写真には、男性は黒いシャツ、多くの場合ベストと調和している比翼式のサックスーツをズボンと共に着用していた。労働者がずっと着用しているズボン、前たれ蓋ズボンは 1840 年代に大量生産で入手可能であった。前たれ蓋ズボンは一般的に活動的な労働者にとって適当に洗える材料（丈夫なコットン）、リネンあるいはウールやウールを混ぜたもの）で作られ、上流階級でない人々によって着用された。前たれ蓋ズボンのウエストサイズは手で紐を引っ張るか、後ろの締め金で調節できるようになっている。これらのズボンの大部分は黄褐色や茶色などの中間色で作られ時々青のストライプである。

実際に着用されていたズボンをアメリカの写真を見ながら考察していく。ズボンについて説明がなされていたものは 5 枚中 2 枚である。ウール製で、足にフィットしており（写真 22）、幅の広いベルトやズボン吊り（サスペンダー）（写真 2）を使用していた。

男性のファッションの特徴として気づいたことは、身体にフィットしたものを好んで着用していたということだ。そして素材はウールが多く使用されていたが、おしゃれを楽しむためにベスト（素材やボタン）に力を注いでいたことが分かった。また衿はしっかり糊付けされ、そこからは清潔感が漂い、少しの気配りでいかに自分を良く見せようかと努力していたことがうかがえる。

2. 被り物

男性の被り物は、茶、黒、クリーム地の柔らかいフェルト製で様々な形をしており、（先に房の付いた）毛糸の円錐形の帽子やウール製の前襞が付いているものがみられた。正装スタイルには、堅い黒のフェルト地にトップハット（ぴかぴかの黒のシルクハットは、事実上、1830 年代中にビーバーフエルトに取って代わられた）で円い形をしたものを被っていた。そして、1840 年代初期の写真の 1 枚には、外出用ビーバー地のトップハットをかぶっている男性が写っている（写真 2）。ハットは正装された時には習慣的にかぶっていた。

しかし、実際に写真の中では着用されていないものが多い。帽子は手で持たれ、あるいは写真家の命令で脇に放っているようである。

3. 髪と顎髭

写真で見られるヘアー・スタイルは、ウェーブがかかっており（写真35）（Joan Severa, p. 78, 本書, p. 73）、耳の回りはすっきりと切り、サイドは櫛でとかし、平らにしている（写真22）。長い場合は束ねていたようである。櫛でしっかりとかすことによって、帽子を取っても恥ずかしくないようにしていることが分かる。

4. 履物

履物については写真でははっきり見られるものがなかったので、ジョーン・セヴラ女史の見解を中心に述べる。1840年を通して男性の履物には、足の裏がついている物や低いヒールで四角いつま先のブーツがある。ブーツは黒が多く、他の色が履かれた事は男性の記事には掲載されていなかった。日常用の靴は、つま皮にスリットが入り、ひもでしっかり固定されている（Joan Severa, p. 23）。

第4章　子ども服

1840年代の子ども服は、大人を手本にしており、子ども達にとって動きやすいようにデザインされていた。男女共、5歳までは男女の違いは無く、日常着はシンプルでフロックかスモックにズロースを着用していた。5歳以下だと思われる写真は37枚中3枚である。その内1枚は説明がなかったので、写真2、36について考察する。丈は短くツーピースのシンプルなドレスには、首や袖口に紐が付いている（写真2、本書，p. 82）。ス トライプのワンピースで下にはズロースを着用している（写真36）(Joan Severa，p. 86 本書，p. 61)。袖は両方とも短い。男児は5歳になると後ろにボタンの付いたワンピースの衣服を着用し始めた（Joan Severa，p. 23）。男児の衣服は男性のスタイルより女性のスタイルを採用していた。13歳には　男性の衣服の小型版を着用し始める。首の蝶結びは、むしろフォーマル時の服装を主張している。37枚中2枚のみ少年の写真がある（写真28〔本書，p. 52〕、29）（Joan Severa，pp. 66–67）。

ダゲレオタイプの写真29（1849–51 年）（Joan Severa，p. 67）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House (68.95.4)* の所蔵品である。

セヴラ女史の見解の通り少年は、身体にぴったりしたラウンドアバウト（roundabout）ジャケットを着用しており、ボタンをしっかり留めていた。糊付けされたシャツと折り返された衿、また金箔のボタンは男性のベストに付いていたので、男性のファッションを大いに参考にしていたと思われる。セヴラ女史は、被写体の服装について、次のように述べている。

写真 29　　ダゲレオタイプ
1849 - 51 年
提供：*The International Museum of , Photograph George Eastman House (68. 95. 4)* , p. 67

ズボンは白く、リネンか綿で作られており、前チャックで前たれ蓋だった。またシルクのネクタイは少年特有であったラウンドアバウト（roundabout）ジャケットを着用しており、ボタンをしっかり留めていた。糊付けされたシャツと折り返された衿、また金箔のボタンは男性のベストに付いていたので、男性のファッションを大いに参考にしていたと思われる。ズボンは白く、リネンか綿で作られており、前チャックで前たれ蓋だった。またシルクのネクタイは少年特有であった（Joan Severa, p. 67）。

女児の服装は５歳を過ぎるとだんだん丈が長くなっていく（ふくらはぎの中間）。

写真でははっきりとは分からないが、13、14 歳ぐらいまでズロースを着用していた。ファッション・プレート（1841 年７月）の女の子は２人共、胴を細めたドレスを着用している。右から３番目の少女の服装には、当時流行していた婦人のボディースタイルが見られる。（短い丈や少女用スリーブキャップを除いて）右から４番目の少女の服装は、身ごろは身体にフィットしており、ふっくらした袖、首や肩のレース装飾、スカートはペチコートによって少し膨らんでいる。冒頭に述べた大人が着用していたスタイルを模倣していたことが分かる。子どもらしさを出すために胸部は緩くフィットし、舟形のネックラインである。

写真で見られるシルクの房飾り・カフス飾り・上品なフレアー袖が Plate 7 のドレスのフリルと似ており、全てを真似ることは難しかったにも関わらず、ヨーロッパの子どもの衣裳を少しでも真似たことには、アメリカ人のファッションを取り入れる意欲が伝わってくる。少女のシュミーズの下は、長いパンタレッツかズボンであった。ほぼ 14 歳で長いスカートを着用し、学校に行くときや働きに行くときいつも着用した。

子どもとして彼女はすでにペチコートを十分に重ねて着用することを必要としていた。ペチコートの数は、毎日のために少なくとも２枚、十分なドレスになると６枚以上必要

Plate 7　*Godey's Lady's Book*　July　1841

とされた。ペチコートには“クリノリン”というニックネームが与えられ、いくつかのドレッシーなペチコートはすべて馬の毛で作られた。

履物は写真やファッション・プレートでは分かりにくいので、ジョーン・セヴラ女史の見解を中心に述べる。1840年代の子どもの靴は、普段は厚い底に丈夫な牛の革を使用し、平らであった。そして少年少女とも年長の人々に近似した薄いキッド革製の上品で軽い靴を履いていた。少女はドレス時には大人の女性と同じようなものを履いていた。少年はブーツスタイルで革製の靴を履いていた。

子どもの被り物は、わら製でリボンが装飾された縁有り帽であった。それは時々上品な日常着とともに少女によってかぶられた。12歳の少年少女の上品な縁有り帽は、大人の被り物より小さい物となった。少年用は頭頂部に小さな飾りが付いており、少女用は軽く、ボンネットの形をしていた。写真では被りものは見られないが、ファッション・プレートではボンネットや縁有り帽を被っている。

子どもは10代前後になると、全てを模倣していたわけではないが、大人が着用している物の小型版や一部を模倣したものを身につけていたことが判明した。

第 5 章　まとめ

まず、1840 年代の衣服の選択肢とその特徴についてであるが、以上の考察から、次のようにまとめることができる。

衣服の選択肢は、女性服、男性服、および、子ども服は、ともに限られており、それらのスタイルは、かなり簡素で、1840 年代を通じて、固定的なままで、比較的変化が少なく、大胆な革命は起こらなかった。

次に、女性服と男性服の流行源であるが、女性服は *Godey's Lady's Book* のファッション・プレートに見るように、フランスが発信源であった。フランスのみならず、イギリスからの輸入品や雑誌によって広められた。

次に、アメリカ人の服装習慣について、セヴラ女史は、次のように述べている。長い引用になるが、セヴラ女史の非常に重要な見解であるので、敢えて、引用させていただく（Joan Severa, p. 25）。以下は、セヴラ女史の衣服哲学の根底をなす思想である。

「明らかに、アメリカ人の服装の習慣は、フランスとイギリスのファッション情報を基準としていた国々の服飾習慣とよく似ていた。ただしそれは、中流層と上流層には――大西洋をはさんだヨーロッパとアメリカのどちらでも――あてはまったが、下流層では話が違っていた。なぜなら、イギリスやヨーロッパ大陸諸国には、昔から続く階級制度が存在したからである。アメリカは、上へ昇っていける希望がある点がヨーロッパと違っていた。下流の人びとが中流層になることは禁じられていなかったし、中流層は制限なしに上へ昇ることができたのである。必要なのはお金だけであり、1840 年代には金銭的な成功のチャンスがいくらでもあった。あらゆる報告から明らかなように、人の見た目は――従って服装は――ビジネスの成功度を示すものではなかったかもしれないが、社会的到達度の重要

な要素であった。それが誘因となって、人びとは、ファッショナブルに見えるかどうかに多大な関心を払ったのである。このプロセスの必然的な帰結が、イギリスからの訪問者の多くが驚きとともに記した“アメリカ独自の現象”、すなわち、貧しい者も含めて街をゆく人のほとんどがいい服を着てきちんと身なりを整えているという現象であった。」(Joan Severa, p. 25）。

以上のセヴラ女史の見解を踏まえて、1840 年代アメリカの階級別の服装のあり方に関するセヴラ女史の見解を紹介させていただく。。

「1840 年代に階層間の差が目に見える形であらわれていたのは、主に上流階級の『正装』能力の高さ（および正装する機会の多さ）においてであった。彼らは、中流以下との違いを見せつけるような高価な衣服やアクセサリーの数々を持っていた。ただ、そうした上流層の服は本書には載せていない。」中流階級の衣服については、上に引用させていただいた中流階級の上昇志向に関するセヴラ女史の見解のとおりである。セヴラ女史は、その上で、次のように断言されている。

「本書が扱うのは、中程度の人びとが昼に着用していた服――1840 年代のダゲレオタイプに最もはっきりと写し出されているレベル、見ただけでそれが 1840 年代のアメリカだとわかる特徴的なスタイルのドレスを代表するレベルの服――である。」

最後に、下層階級の衣服については、セヴラ女史は、以下のように述べている。

「比較的貧しい女性や若い娘も流行の形のドレスを身につけることができたのは、アメリカの工場で何百万ヤードという単位で生産された安いキャラコ（つまり「ファクトリー・コットン」）を使って、自分で縫ったからである。また、品質も値段もさまざまな流行の既製服が、男性や男の子に、さほどお金をかけなくても得られる多くの選択肢を提供した。」（Joan Severa, p. 5）。

以下に、筆者の見解を述べる。

従来の服飾研究者の研究においては、上流階級の衣裳にのみ、目が向けられてきた。19 世紀アメリカの中産・下層階級の服装に関する研究書は、セヴラ女史の本書が出版されるまでは、皆無であった。本章では、セヴラ女史によって収集された 1840 年代の 37 枚（26 枚を本書に掲載）の写真を通じて、これらの人々の服装の実態が明らかになった。下層階級の人々は、どのレベルの人々までが、良く装えていたのだろうか？というなかなか難しい課題があることを指摘しておかなければならない。

アメリカ服飾史研究において、セヴラ女史が果たした役割に対して、敬意を表したい。

さて、その後のアメリカ服飾史の進展は、いかがなものであろうか。1850 年代へと筆を進めていこう。

第Ⅲ部 1850 年代

第 1 章　歴史的背景

1. クリミア戦争

1854 年〜56 年のクリミア戦争は、トルコ・フランス・ロシア間の聖地（イエルサレム）管理権問題にその端を発する。ロシア、トルコ両国が開戦。349 日間にわたる攻囲戦でセバストポリが陥落しロシアは敗北した。

クリミア戦争が 1856 年にアメリカ合衆国への商品の流出をひどく妨げる原因になるとは思いもよらなかったが、実際にはその翌年には“57 年の恐慌”で注目を受けた。当時の戦争はヨーロッパとの貿易に大きな影響を及ぼし、アメリカでは商品が不足し、失業者が続出し、多くの企業が倒産した。しかし、婦人用の記事から判断すると、貿易の崩壊は単に毛皮製品の不足から立証されたにすぎないと人々は信じることができた。つまり、パリとロンドンからの情報の流出は見かけ上閉ざされておらず、またファッション記事は、他の記事の不足に少しも注意を払おうとはしなかった。

クリミア戦争は、この時期の歴史にいくつかの影響を与えた。国際政治の面でロシアの南下政策を一頓挫させたということも、むろんそのひとつである。だが、イギリスの 50 年〜60 年代への影響についていうならば、この戦争を勝利に導いたパーマストンが全国民の英雄的存在になったこと、もう 1 つは、この戦争によって軍事機構の欠陥が『タイムズ

誌で暴露され、軍制改革と官僚制改革の気運が作り出されたことである。（村岡健次・木畑洋一編，1991 年, p.158，注〔和書（1）〕）。

2. 南北戦争

19 世紀アメリカが抱えた最大の課題は黒人奴隷制の廃絶だった。そのためには想像を絶する 100 万人を超える死傷者を出した南北戦争が闘われなければならなかった。1789 年に成立した合衆国憲法は黒人奴隷制を容認していたため南部ではその後経済のすみずみまで奴隷制が浸透することになった（野村達朗編著，1998 年，p. 85，注〔和書（2）〕）。

経済的後進国であった当時のアメリカが、世界史上において有した唯一の戦略的物質が南部の綿花であった。綿花は国内的にも国民経済の原動力となった。綿花輸出によって得た収入は、まず綿花輸出産業を潤し、ついで南部の膨大な食糧需要を一手にまかなう西部を潤し、更には南部向け食糧市場の好況は、西部移住を刺激する大きな要因の一つとなった。また北東部においては、南部の工業製品への需要と、南部への食糧供給によって潤う西部の工業製品への需要との双方の需要に応えて、木材・製靴・皮製品・被服・鉄工業・アルコール産業などの多種多様な工業がおこってきた。南部奴隷制プランテーションは、北部の工業発展に対する阻止的要素ではなく、逆に北部の資本主義的発展を補完し、加速する役割を果たしていったのである（有賀貞・大下尚一編， 1979 年， p. 85， 注〔和書（3）〕）。一般に考えられているのとは逆に経済の領域においては、南北の経済体制は、むしろ複雑に利害のからみあった相互補完的関係にあったのである。しかし、そんな中、アメリカ政治の中でもはや南部と北部だけでは解決できない新しい状況が生まれつつあったことに目を向けなければならない。それは、フロンティアとしての「西部」の、一つの確固たる政治実態への変貌であった。

ナポレオン戦争以来、徐々に変化しつつあった西部は、北部における産業の発展に対応して急速に変貌していった。北部における急激な工業的発展は、膨大な労働人口の増加をもたらし、それにともなって西部の小麦や肉といった食糧への爆発的な需要を生み出していった。

これらの北部向け食糧生産の利益とその将来性は、多くの人口を西部へ引き付けた。このような北部の膨大な食糧需要とそれに刺激されての大量の西部移住は、西部社会を辺境の地から商業的農業地域へ変貌させていった。北部と西部の価値の共有、もしくは経済関係の深化は、南部にとって深刻な問題となっていた。本来、南部は奴隷制プランテーションというその経済構造上の必然性から、絶えず新鮮な処女地を求めて西漸運動を繰り返していた。タバコ栽培の衰退により、南部の奴隷制プランテーションの中心は、40 年代はア

ラバマ、ミシシッピ、50 年代はテキサスへと移動していた。それゆえ、南部にとっては、経済的、社会的、心理的においても、西方への通路は大きく開け放たれていなくてはならず、しかも、政治的には、未確定的要素の塊のような西部の不安定な動向は、従来の国家レベルでの政治的バランス、もしくは権力構造を根底から破壊する危険を秘めていた。それゆえ南部にとって西部問題は、一歩も後退が許されない死活問題であった（有賀貞・大下尚一編，1979 年，p. 90，注〔和書（3）〕）。

3. アメリカ産業革命とミシンの発達

19 世紀後半における資本主義制度の著しい発展の背後には、機械と技術の目覚ましい創造と発達、および自然科学の進歩とその産業への転化があったことは見逃せない。服飾に関することだけでも、多くの機械化が数えられた。機械に関しては、すでに細糸による繊細な布が織られるまでになっていたが、さらに一段と改善が行われたことはいうまでもない。織物工業、レース工業、裁縫などの諸部門もまた、機械化された。編物機械は、かなり複雑なものが早くも 16 世紀に用いられていたが、それは手動であった。19 世紀後半にいたって、これが蒸気機関で操作できるという新型の編機が種々現れた（丹野郁著，1985 年，p. 391，注〔和書（4）〕）。

特に、ミシンは経済史上では、衣服製造がマニュファクチャーから工場制へと移行し、剰余価値のある大量生産を生む決定的で革命的な機械とされる（鍛島康子著，1988 年，p. 45，注〔和書（5）〕）。

ミシンは、衣服の構成技術に驚異的な飛躍をもたらしたことはいうまでもなく、多年行われた手労働を、すなわち劣悪な労働条件のもとでの資本主義的家内労働を駆逐した、という点で重要な意義があった。裁縫ミシンの発明は、1829 年からみられたが一般化されなかった（丹野郁著，1985 年，p. 391，注〔和書（4）〕）。ミシンが多くの人々の工夫を経て、アメリカの衣服産業に登場したのは、1850 年代である。ニューヨークのウォルター・ハントは 1830 年代に手縫いの針と異なって、先端にメドのある針を使い、上糸と下糸の 2 本の糸を用いるミシンを発明した。彼は、この本縫いミシンと今日呼ばれるミシンの最初の発明者である。彼がミシンで特許を取ったのはかなり遅く、1854 年であった。エリアス・ハウは一般にその特許を取った年とともにミシンの発明者と言われるが、アメリカでミシンの特許を取った最初の人ではなく、5 番目であった。彼はハントの発明を知らずに、錠縫いの原理を持つ手回し式本縫いミシンを組み立て、翌 1846 年に特許が交付された（鍛島康子著，1988 年，p. 48，注〔和書（5）〕）。

今日、家庭で用いられているミシンの基礎となった機械は、ハウによって発明されたものである。しかし、それも発明当初は婦人や児童の労働を主とする縫製工の賃金の極端な低さのため、アメリカでもイギリスでも実際化するまでにいたらなかった。その後、まもなくこれに改良が加えられた。その改良者の一人がアメリカのアイザック・メリット・シンガーである。彼は1851年に一段と改良された足踏みのミシンを発表し、次いで著名な、裁縫機械生産会社を設立するなどして注目をあびた。1854-56年ごろの衣裳を見ると、ミシンによる鎖縫いが認められ、それより数年遅れて、今日と同じ縫い方のものが、少しずつ現れるのである（丹野郁著，1985年，pp. 391-392，注〔和書（4）〕）。

ミシンの発達に伴って、手仕事による衣服の製作も工場製造へと移った。機械の導入と製造方法の改良などにより、大量の衣服を短時間で製作できるなどの効率化を計り、量産をも可能にした。このように、ミシンの発明は服飾産業の発展に大きな影響を与えたといえる。特に、アメリカにおいて、ニューヨークやボストン、フィラデルフィアなどの東部の経済的発展は、アメリカの西部に大きな反響を及ぼし、そして、機械の発明と利用によって製造工業は全米的に発展した。いわゆる産業革命は社会生活上に大きな変革をもたらしたのである（鍛島康子著，1988年，p. 45，注〔和書（4）〕）。

4. ヨーロッパがアメリカ服飾に与えた影響

1848年以来の革命と反革命の時期は、西欧の多くの国に、資本主義の確立と発展をもたらした時期であった。特に50年代において、資本主義は目覚しい発展を示し、フランスの産業革命は主としてこの時期に行われた。綿織物、毛織物、絹織物の生産も量、質と共に向上して、多種多様なみごとな織物を供給した。前世紀に産業革命があったイギリスでは、1845～70年の間に、綿花は世界綿製品の約半分を生産するほどになり、イギリスの綿製品が大陸へ進出し、柔らかい綿布が愛好され、新しいモードとして衣装の民主化を早めたことも注目される。

染料の分野でも多くの発明があった。化学染料の豊富な出現によって、それまでの色糸を織り込んで作った柄物の布地は、プリントによる多彩な、しかも安価な模様ものにおきかえられていき、色調豊かな服装の大衆化を押し進めた。50年代のスタイルとして、広がったスカート、たくさんの表面装飾、女性用の垂れ下がった袖や特別に大きな大胆な形をした袖、男性用のたくさんの型が見られる。

この戦時期、解説の1850年代で述べたように、19世紀の流行であったドレス、つまり、コルセットで極端に詰めた細いウエストと床ギリギリまでの長く広がったスカートに対する反抗の一つとして、ブルーマー運動があった。

服装の民主化は、輸送や通信の発達によっても拍車がかけられた。この時期を通じて、道路の改良、鉄道網の設置、近代的自動車の出現、その他数多くの発明や技術的発達によって、文物の交流は速やかとなった。さらに、著作物による意見や思想交流の迅速化、定期刊行物の増大などは、近代化を充実させると共に、現代生活の基礎を確立していった。記録の中に「1854年にカナダとアメリカを訪れたイギリス人女性Lucy Isabella Birdは、解説書つきの着飾られた女性のイラストを作成・発行すると、孤立していた田舎の女性たちにとって、それ自体がオシャレの手本であった。」と書かれている（Joan Severa, pp. 94-96）。

第1章　【注・参考文献】

和書

(1) 村岡健次・木畑洋一編 『世界歴史大系　イギリス史３　近現代』 山川出版社、1991年発行，p. 158

(2) 野村達朗編著 『アメリカ合衆国の歴史』 ミネルヴァ書房　1998年発行，p. 85　注〔和書(2)〕）

(3) 有賀貞・大下尚一編 『新版　概説アメリカ史』 （株）有斐閣　1979年発行，p. 85　注〔和書(3)〕）

(4) 丹野郁著『服飾の世界史』 白水社　1985年発行，p. 391 注〔和書（4）〕）

(5) 鍛島康子著『既製服の時代－アメリカ衣服産業の発展－』 家政出版社　1988年発行，p. 45　注〔和書（5）〕）

洋書

(1) Joan Severa, *Dressed for the Photographer Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*, The Kent State University , Press, 1995

第 2 章　庶民女性の服装

1. ドレス

1840 年代後半の前身頃が長くて、胸部をおしつぶすコルセットは、1850 年代には、妊婦や授乳中の女性や少し太り気味の女性に、実際問題として、どのように受け止められていたのであろうか。「このスタイルは、中年になった女性たちが流行の丈長で窮屈なコルセット（corset）を使うのをやめ、快適さを選んだことをあらわしていると推察される。」（Joan Severa, p. 8）とセヴラ女史は述べている。

以下のセヴラ女史の見解は、注目に値する見逃せない見解である。要約・紹介させていただく。

ほとんどの服は 1840 年代終わりの２、３年に着られていたものと同じスタイルだが、ウエストラインが長くなく、当時の浅く丸みをおびたウエストフロントに伴って脇の下の縫い目部分が長く、胸部はとても柔らかく膨らみを持った扇形に作られていた。妊婦や授乳中の女性は間違いなくコルセットを着けられないし、年配の女性もいたことだし、若い女性のなかにも普段は丈が短めで楽なコルセットを着用していた人がいたようである。丈の長いバスク（busk）入りのコルセットはこの時代よりも前から君臨していたので、早ければ 1840 年代半ば頃から少なくとも 1853 年までに撮られた年配の女性の写真にこうしたドレスが見られることは、なんら驚くにあたらない。1840 年代後半の、前身頃が長くて胸部を平らに押しつぶすコルセットは、1853 年までファッショナブルなドレスの下に着用され続けた（Joan Severa, p. 94）。

Plate８　*Godey's Lady's Book*　June　1850

Plate 9 ***Godey's Lady's Book*** **May 1850**

Plate 10　***Godey's Lady's Book***　**July　1858**

以上に紹介させていただいた TPO に応じたコルセットの変化には注目したい。

次に 1850 年代の衿の特徴について、セヴラ女史の記述を要約・紹介させていただく。1850 年代の衿は、白糸刺繍、レースで、時にはクローセやタッチングで仕上げられた。最も典型的な型は、ネックラインよりももっと広がっている。それらはウール製の衣裳と合わせて着られ、衿が大きいため、クロークやマンティラをその上に合わすのは無理だった。質素な麻の衿やアンダースリーブは街で着用され、また旅行や礼服にも着用された。大きな浅い衿は流行の型ではなかった。40 年代後半に紹介されたレースの縁取りやフリルのついた立ち衿のジェニー・リンド・スタイルはまだ人気があった（Joan Severa, p. 94）。

次に、50 年代のスタイルのシルエットの特徴を考察するに当たって、フランスとアメリカの特徴に目を向けよう。スカートはできるだけ膨らみを持たせるようにしっかりとフープで支えられている。フランスでは Plate 10 に見られるように、スカートに段襞飾りが多く登場するが、アメリカではあまり見られない。フランスの Plate 8 のウェストラインは尖っている。だが、フランスでも Plate 9 に見られるように、ウエストラインは丸みがあり、かなり自然のウエストラインに近く、脇の下に長い縫い目があった。

写真38　ダゲレオタイプ
1850年10月18日
提供：***Historic Northampton* *(1980.19.5)***, p. 113

(1) 袖

常に細く、タイトではないが、時にはバイアスに、時にはまっすぐに裁断され、袖口にギャザーが寄せられた初期の日常着の袖は、1850年代半ばまでに、ビショップ・スリーブの付いた、質素な日常着に変わってゆく。1857年に、ビショップ・スリーブの広がりは、最大となる。*Godey's Lady's Book*は、Plate 10（1858年7月）に、新型のビショップ・スリーブを提案する。肩章付きで、袖口に向かって広がり、フリルがあしらわれている。レースのアンダー・スリーブがのぞいている。1850年代の写真54枚中、袖が撮影されている23枚の中から、特徴がうかがえる写真資料14枚を取り上げてみる。1840年代の袖と比較・考察する。14枚とは、なぜ、そのように沢山の写真をと読者の方は思われることでしょう。その答えは、袖以外の項目でもこれらの写真を紹介・分析させていただくためである。

ダゲレオタイプの写真38（Joan Severa, p. 113）は、マサチューセッツ州ノーサンプトンのフランシス・アン・“ファニー”・トレフサン（Frances Ann “Fannie” Trefethan）の写真（撮影1850年10月18日）である。所蔵先は、*Historic Northampton（1980. 19. 5)* である。1850年代初期のバイアスカットの袖の着用を示す事例である。

セヴラ女史に拠ると中流家庭に生まれたファニーは、1849年７月９日にジョン・ウォトン・フレンチ（John Wotton French）と結婚し、裁縫の技術を習得していた（Joan Severa, p. 113）という。この写真にみる着装から実用的な袖の普及が読み取れる。「袖はまだ明らかにバイアスカットで、手首の部分は共布で襞取りした柔らかいバンド状の袖口で閉じられている。こうした袖は1850年代初めのファッション・プレートにも依然として見られ、その後も何年もの間、仕事着や外出着の袖のスタイルとして使われ続けた。」（Joan Severa, p. 113）とセヴラ女史も述べている。

写真45　ダゲレオタイプ
1850 - 53年
提供：***The International Museum of Photography , George Eastman House*** ***（69.201.20）***，p. 124

ダゲレオタイプの写真45（1850-53）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House（69.201.20）*の所蔵品である。

セヴラ女史の推定によると、この写真は、「無名の黒人女性のポートレートで、撮影場所はおそらくニューイングランドのどこか」であるという。「この女性は南部の家内奴隷かもしれないが、むしろ北部の黒人女性、すなわち自由の身である可能性の方が高い。ただし、以前、召使として働いていただろう」とのことである。アフリカン・アメリカンの元使用人の写真を掲載していることに注目したい。お下がりの衣服を仕立て直したもののようだとセヴラ女史は推察している。この写真に見られるように、この黒人女性は、ウールと思われる上質の素材の暖かそうなドレスを着用している。コルセットを装着し、襟元といい、袖口といい、洒落たリネンの小物を付けている。だが、洋服を作る筆者の目からみると、大きめのドレスを何とか苦心して、仕立て直した形跡が如実に読み取れる。袖のデザインに目を向けると「フレアーになったエポーレット（epaulette）と、丈が短めで先が広がった釣鐘状の袖は、1840年代終わりの典型的なスタイルである。」とセヴラ女史は述べている（Joan Severa, p.125）。さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

ダゲレオタイプの写真58（1852）は *The State Historical Society of Wisconsin （WHi［X 3］24617）*の所蔵品である。

写真 58　ダゲレオタイプの　1852 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
(WHi ［X 3］ 24617) , p. 141

被写体の「ロゼラ・M・スミス・ドネル・ボーマン（Rosellah M. Smith Donnell Bowman）は、この写真の裏に、1852年、自分の18歳の誕生日に撮ったことを記している。」（Joan Severa, p. 141）という。セヴラ女史は、この写真における袖の形状、素材、長いミットの着用について、次のように解説している。セヴラ女史の服に対する造形の深さが窺い知れる。

袖は肘と手首の中間までの長さで、普通この丈の袖には白いアンダースリーブを着用するものだが、ここでは袖口まで届く長さの、装飾付き網目シルクのミットをはめている。アンダースリーブを付けないのは夏のファッションだということが1840年代末の資料に記されており、そのスタイルはその後も何年か残ったことだろう。そこから、ドレスの素材はウールのシャリ織だろうと推測できる。ウールのシャリ織は涼しいので、暑い時期によく選ばれた。長いミットは、アンダースリーブをつけない時に前腕部を飾るものだった。」（Joan Severa, p. 141より引用）。

アンダースリーブの着用時期、着用者のお洒落心がよく伝わってくる。

ダゲレオタイプの写真60（1850–52）は、*The Charleston Museum*　*(MK 16)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、庶民の若い女性（学生らしい）の手作りと思われる日常着について解説している。

写真 60　ダゲレオタイプ
1852 - 55 年
提供：***The Charleston Museum*** ***（MK 16）***, p. 143

この無名の女性の写真には流行を反映した要素がほとんどないが、ビショップ・スリーブ（bishop sleeve）の上腕部の膨らみ具合と、高い位置でほとんど水平に髪をループさせたスタイルから、1850年代前半という年代を推定することができる。……ドレスの前身頃の膨らみはあまり整然としておらず、これが日常着で、おそらくはホームメイドであることを示している。」（Joan Severa, p. 143より引用）

現在でも着れる普通の袖が付いた普通のドレスである。セヴラ女史の年代推定の要因がよく読み取れる。

ダゲレオタイプの写真64（1854–56）の所蔵先は*Historic Northampton（59.256）*である。

セヴラ女史によると、被写体のマサチューセッツ州ノーサンプトンのクララ・ステビンズ・レイスロップ（Clara Stebbins Lathrop）のこの写真は、1853年に登場した曲面タイプの短いコルセットの形状によって撮影年代を推定することができる、また、この被写体はなかなかおしゃれであることがリアルに読み取れる、特に格子の柄合わせ、袖のフラウンスが見事である、との解説をしている。

ドレスはシルクで、夏のスタイルである。フレアーで飾られた短い袖が付いたドレッシーなファッションで、特別な機会に着るために作られた服である。袖は細いバンド状のバイアス布から成っており、パイピングをした肩の縫い目では、袖と身頃の格子が注意深く柄合わせされている。袖口側にはリボンのフラウンスが付けられて、好ましい長さになっている。白い花綱の縁飾りが付いた暗色のリボンは、袖口とバスクの裾では少しギャザーが寄せられており、身頃正面では平らな蝶結びにされている」（Joan Severa, p. 148より引用）。

写真 64　ダゲレオタイプ
1854 - 56 年
提供：***Historic Northampton*（*59.256*）**,

写真 65　ダゲレオタイプ
1854 - 56 年
提供：***The Bancroft Library*（*1905.16242*）**,
p. 150

なるほどと思える、分かり易い説明である。

ダゲレオタイプの写真65（1854–56）の所蔵先は*The Bancroft Library*　*（1905.16242）*である。

セヴラ女史は、この写真は、エドガー・ウェイクマン船長とその妻（Captain and Mrs. Edgar Wakeman）の婚礼写真であろうと推定している。「若いウェイクマン夫人は、暗い色のウールのドレスを着ている。彼女が選んだ袖の形は1850年代半ば頃に見られた風変わりなスタイルのひとつで、身頃はとても短いバスクである。」（Joan Severa, p. 150）とセヴラ女史は解説している。

ダゲレオタイプの写真66（1855–57）（本書, p. 105）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X3*］*35653*）の所蔵品である。

髪型から年代が推定されている。「この写真の撮影年代を知るための一番の鍵は、女性の髪型である。ヘアネットが必需品とされ、横の髪は以前の滑らかな『ウィング』［耳の

写真 66　ダゲレオタイプ
1855 - 57 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin (WHi ［X3］ 35653)***, p. 151

写真 73　ダゲレオタイプ
1856 - 58 年
提供：***The International Museum of Photography, George Eastman House (68:94:3),*** p.159

横で水平に広がる髪］から脱却した、1850年代後半の髪型になっている。」（Joan Severa, p. 151）とのことである。

セヴラ女史の解説によると「短く尖ったエポーレット型スリーブキャップのついた長いベルスリーブ（bell sleeve）は、腕の付け根がぴったりフィットしており、縁はタック（tuck）あるいはくるみ紐の列で装飾されている。袖の下には、キャンブリック製でフリル付きの先が開いたアンダースリーブが着用されている。」（Joan Severa, p. 151）という。セヴラ女史は、実に細かく描写している。

ダゲレオタイプの写真73（1856–58）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House（68:94:3）*の所蔵品である。

この写真は、セヴラ女史によって、次のように解説されている。

写真 74　ダゲレオタイプ
1856 - 58 年
提供：*The Kings County Museum,* p. 161

この姉妹の姉の方はおそらく13歳くらいだろうか。ふたりは並んで写真に写り、２種類の若々しいドレスのスタイルを見せてくれている。妹はピナフォー型でキャップスリーブの付いた服を着ており、身頃は広いネックラインと自然なウエストラインにギャザーをよせただけのシンプルなつくりである。この服は暗色のキャラコにもっと濃い色の小さな水玉模様をプリントした布で作られている。袖の縁はブレードで飾られている。短いパフ型のアンダースリーブは、片方の袖口の内側から蝶結びにした紐の輪が垂れていることから、袖口に通した紐で締めているように見える（ Joan Severa, p. 159より引用）。

モノクロ写真だが、テキスタイルの色や柄に詳しい解説が付けられている。

ダゲレオタイプの写真 74（1856–58）は、*The Kings County Museum* の所蔵品であり、特に被写体の背景情報が、以下のように詳しく書かれていて、物語のような面白さがある。

このカップルはアーロン・タイナー（Aaron Tyner）とドーシャ・ケーブ・タイナー（Docia Cabe Tyner）である。1828 年２月１日に生まれたドーシャ・ケーブは、1854 年にタイナーの一家とともにアーカンソー州からカリフォルニアへ移ってきた。彼女は孤児で、アーカンソーでタイナー家の近所に住んでおり、一家の娘たち、つまりアーロンの姉妹の友達だった。アーロンは 1849 年に金鉱地帯へ向かったものの壊血病になって一度戻り、その後家族を連れて再び西部へ旅立ったのだった。1906 年に書かれた一連の記事で、アーロンは『ドーシャ・ケーブと私は 1855 年に結婚し、平穏と愛と幸福のうちに 45 年半の歳月をともに過ごした』と語っている（Joan Severa, p. 161より引用）。

写真 76　ダゲレオタイプ
1856 - 58 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*p.163**
(WHi ［X3］ 35715) , p. 163

この見栄えがするふたりの写真はカリフォルニア州フレズノで撮影されたもので、袖丈がいくらか短めで袖先が広がってフレアーになっているのに、白いアンダースリーブを着用していないのは、驚くほど珍しい。

ダゲレオタイプの写真76（1856−58は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］*35715*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、写真に見られる被写体と袖について、次のように詳しく解説している。

この素晴らしいダゲレオタイプは、ニューヨーク市のJ・ガーニー（J. Gurney）によって撮影された。写っているのは、チャールズ・ミントン・ベーカー（Charles Minton Baker）の娘のメアリー・ルイーズ・ベーカー・リジャーウッド・ブラウン（Mary Louise Baker Lidgerwood Brown）で、喪服姿である。黒いクレープ織（縮緬）のアンダー・スリーブ と衿をつけたこの黒 いシルクの服は、服喪 の１年目にふさわしい服装を示す素晴らしい 見本である（１年が過ぎた後の“服喪の第２段階”には、衿などに白を使うことが許された）（Joan Severa, p. 163より引用）。

喪服に関する詳しい記述は貴重である。

ダゲレオタイプの写真77（1856−59）は、*The Worcester Historical Society*（*1932.188.12*）の所蔵品である。

ボストンのティモシー・ビゲロー氏の妻（Mrs. Timothy Biggelow）が、娘（赤ん坊）の死後に撮影してもらった記録写真である。これ以外の種類の写真では、プライベートな場

写真 77　ダゲレオタイプ
1856 - 59 年
提供：***The Worcester Historical Society (1932.188.12)***, p. 162

写真 85　ダゲレオタイプ
1858 年頃
提供：***The International Museum of Photography George Eastman House (74.193.194)***, p. 173

所でしか着ないラッパーを身にまとった女性が写っているのを見ることはできないであろう。……柔らかく丸みをおびた肩、低い袖ぐり位置、先が広がった袖は、流行に従っている。ラッパーの極端に大きなビショップ・スリーブは、上部はプレーンなカットだが、下方にいくとものすごくたっぷりしたフレアーになり、その先はギャザーをよせて袖口の細いカフスに収束している（Joan Severa, p. 164 より引用）。

流行のビショップ・スリーブの形状について、詳しく解説されている。

ダゲレオタイプの写真 85（1858 年頃）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*　*(74. 193. 194)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の撮影時の年齢と写真に見られる袖について、次のように詳しく解説している。

この自然体の写真は、ナンシー・サウスワース・ホーズ（Nancy Southworth Hawes）の娘、アリス・ホーズ（Alice Hawes）が８歳の時のものである。袖は曲げた肘にち

写真 89　1859 年頃
提供：***The Circus World Museum*** **（R3 -5）,**
p. 178.

ょうど届く丈で、細く、袖口は広がっていない。アームホールは以前のスタイルよりいくらか高い位置に配されている。袖付け部分にバイアスカットの布がバンド状に使われ、その下にスリ ーブキャップの襞が付けられ、襞の端は1850年代に人気があった細いシルクのフリンジで飾られている。……この写真館のチームの願いは、単に顧客に写真を提供することではなく、素晴らしい写真を作り上げることだったようである。彼らが撮った写真で今に残るものの多くは、友人たちや家族の写真である。それらの写真は、彼ら自身の喜びと満足のために、無料で撮影された（Joan Severa, p. 173より引用）。

この解説もナンシー・サウスワース・ホーズの写真に対する情熱が感じられ、興味深い。

写真89（Ca. 1859）は、*The Circus World Museum* （*R3 -5*）の所蔵品である。

被写体の背景情報であるが、「サーカス経営でその名を知られるウィスコンシン州バラブーのリングリング兄弟（Ringling Brothers）の両親であるオーガストとサロメ・リングリング（August and Salome Ringling）は、当時住んでいたミズーリでこの写真を撮ってもらった。」という。

セヴラ女史は、このドレスについて、次のようななかなか手厳しいコメントを行っている。さすが、衣服の実物に通じているセヴラ女史ならではの観察眼である。

このシルクのドレスの袖は、元の袖を作り直したか、あるいは1850年代末のスタイルの袖を後から新しい生地で作って付け替えたかのいずれかであり、流行遅れのきついコルセットに合わせてダーツが入った前身頃のスタイルとはちぐはぐになっている（Joan Severa, p. 178より引用）。

写真 90　カルト・ド・ヴィジット
1859 年頃
提供：***The State Historical Society of Wisconsin（Whi［X3］ 40766）***, p. 179.

カルト・ド・ヴィジットの写真90（ca. 1859）はThe State Historical Museum Wisconsin（ WHi［ X3］ 40766）の所蔵品である。

カルト・ド・ヴィジットについては、本書の解説（p.27）で詳述したが、セヴラ女史はこのドレスについても、次のような仕立ての専門家の立場からのなるほどと頷ける観察を行っている。

> カルト・ド・ヴィジットであるというだけでも年代を推定できるが、袖の形からもドレスの作られた時期を容易に知ることができる。1859年までには、釣鐘のような袖の広がりが非常に大きくなるとともに袖丈はやや短くなり、上腕部はぴったりフィットする形になっていた。
>
> この写真のドレスの場合、袖を新しく作って古いドレスに取り付けてある。袖が不格好なのは、半分は上腕が太いせい、半分は下手な裁断のせいである。この頃は上部が締まった釣鐘状の袖が流行しはじめていたので、そうした袖のイラストあるいは実物を真似して作ったのだろうが、袖ぐりの形が正しくない（Joan Severa, p.179より引用）。

写真89、90の解説から明らかなように、セヴラ女史は衣服を制作する立場から、ドレスの古さや、袖の形や袖ぐりの形状、着用者の体形、衣服デザインの流行という観点から、写真の衣服を実に良く観察している。

（2）胴着とコルセット

① 胴着

本章の冒頭でも述べたように、1840 年代末には、胴着の仕立て方には、変化が見られる。この変化は女性の身体に与える影響という観点から見て、アメリカにおける女性服の歴史上、注目すべきである。そこで、以下において、この問題に関するセヴラ女史の見解

を要約・紹介させていただく。

胴部はとても長くぴったりしており、1840年代を通して前の部分が尖っていた。1840年末には前部はやや短くなり、サイドは長く、前部の下がった部分は丸みを帯びてくる。前下端部が丸みを帯びて、扇状の胸のついた大変高いウエストは、1840年代末から50年代の日常着の写真に見られ、主に年配の女性に見られる。

これらの衣裳のウエストは適度に長く、一般的に前開きの胴着であり、ウエストバンドがついていることもついていないこともあった。多くの場合、胴着は質素であり、両サイドに2本の長いダーツが入っていた。しかし、仕事用の衣服は、ダーツなしで作られることが多く、代わりに体の丸みは、ウエストの前部と後部の中心に、ギャザーを寄せることで調節され、時にはまっすぐなヨークにもギャザーが入れられた。そのような家着用には、プリント柄よりもチェック柄や格子縞で織られたギンガム織がより一般的に用いられていた。あらゆる階級の女性たちは、日常着としてこのタイプの衣裳を着用していた（Joan Severa, p. 94）。

②　コルセット

1850年代初期のコルセットの変化について、セヴラ女史は次のように述べている。コルセットの変化に関する貴重な見解である。

「コルセットは、50年代初期に胸を小さく見せる長い板状の形から胴部を締め付けず下部を広げて、締め付けから開放しより短く派手になった。この場合、ドレスのウエストラインは自然なウエスト位置まで上がり、スカートのふくらみはウエストラインのあたりから直接出されているため、より長いコルセットは誰からも要求されなかった」（Joan Severa, p. 98）。

*Godey's Lady's Book*にも1850年代半ばにおけるコルセットの変化について、次のように述べられている。

「コルセットはより短く、ヒップを圧迫しない長さにカットされる」（*Godey's* 1855年1月）。

デュムラン夫人考案のコルセットが、フランスで1844年に発表された。このコルセットは、衛生や動作の自由を配慮するものであった。1850年代には堅い鯨鬚は減少し、これに代って、コーディングやキルティングなどで堅さを保たせる手法が考案される。コルセットの長さは短化し、主として、細胴の部分を細める短いものが流行し、アメリカにも導入される。

写真 39　ダゲレオタイプ
1850 年春
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
(WHi ［X3］ 43176）, p. 114

写真 44　ダゲレオタイプ
1850 - 53 年
提供：***Matt Isenburg*** , p. 122

以下において、コルセットが写った写真を14枚、紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真39（1850年春）は、*The State Historical Society of Wisconsin (WHi［X3］43176）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の女性について、こう書いている。エリザベス・エヴェレット・バトラー（Elizabeth Everett Butler, 1818-1877）と、1849年10月１日生まれの息子ジョン・H・バトラー（John H. Butler）が、うららかな春の日にポーズをとっている。場所はおそらくニューヨーク州ホワイトストーンだと思われる。彼女の夫にして赤ん坊の父親であるジョン・J・バトラー（John J. Butler）が、1842年から1854年までその地でバプテスト派の神学者兼教師をしていたからである。（Joan Severa, p. 114より引用）

セヴラ女史に拠る以下の解説から、TPOに応じたコルセットの着用法がわかる。授乳をしている女性、妊娠中の女性のコルセットの種類や着用法がわかる貴重な写真である。

エリザベスが着ているのは、ウエストラインが短く、幅の広いギャザーで柔らかい膨らみをもたせた扇形の身頃が肩の上へ向かって広がる形のドレスで、1850年代初めの多くのポートレートに女性の日常着として写っている。特に、当時のコルセット（corset）はまだ非常に硬くて長くてきつく締め上げるタイプだったので、そうしたコルセットを着用できない女性たちがこの種のドレスを着た。短いコルセットの上に着るこのスタイルのドレスは、妊娠中の女性や授乳中の母親に間違いなく楽な着心地と快適さをもたらした（Joan Severa, p. 114より引用）。

ダゲレオタイプの写真44（1850–53）は、*Matt Isenburg*の所蔵品である。

セヴラ女史は黒人ダゲレオタイピストのギャラリーについて、貴重な情報を紹介している。長くなるが適宜、必要箇所を引用させていただく。

ジェームズ・プレスリー・ボール（James Presley Ball, 1825–1904）は有名な黒人ダゲレオタイピストで、この魅力的な若い女性とその子どもたちの写真はシンシナティにあった彼のスタジオで撮影された。シンシナティでボールが最初に開いた小さなスタジオは、得意客があまりつかず、1845年につぶれた。しかし、多くの苦難を乗り越えて、彼はついに1849年に新たなスタジオを開いて成功を収めた。……町の一等地の三階建てビルにあったそのギャラリーには、４つの写真撮影室と広い控え室があり、どこも豪華に飾り立てられていた。ボールはシンシナティで最も尊敬される実業家のひとりになり、彼の顧客には、P・T・バーナム（P. T. Barnum,1810–1891）［アメリカ合衆国の興行師］やジェニー・リンド（Jenny Lind, 1820–1887）［スウェーデンのオペラ歌手］など、他所からこの町を訪れた多くの有名人も名を連ねた。……この写真の若い母親は、控えめではあるが非常にきちんとした身だしなみで、黒のアルパカのドレスを着ている。黒いアルパカの生地は一般的な昼用のドレスに頻繁に使われ、婦人服店や縫製店の女性店員や、家庭教師や看護婦やお手伝いとして働く女性に『ふさわしい』生地と考えられていた（Joan Severa, pp. 122–123より引用）。

ダゲレオタイプのスタジオの発展の様子が伺える。
また、黒のアルパカの生地の用途がよく読み取れる記述である。

次にコルセットの仕様に言及している。

写真52　ティンタイプ
1851年
提供：*The State Historical Society of Wisconsin* *(WHi [X3] 39777)*, p. 132

写真の服は、1840年代に流行した丈の長いバスク（busk）入りコルセットに基づくスタイルで作られているので、1850年代初めのものである。短めで曲線の美しさを生かすコルセットが使われ始め、その結果としてドレスの身頃の裁断も変化したのは、1853年になってからである。写真の服の身頃前面に見える膨らみは、プレスしていない長いプリーツによって生み出されている（Joan Severa, pp. 122-123）。

短めで曲線の美しさを生かすコルセットの仕様に注目したい。

ダゲレオタイプの写真45（1850-53）（本書，p. 101）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House* *(69.201.20)* の所蔵品である。

袖の項目で言及したこの無名の黒人女性は南部の家内奴隷、あるいは北部の黒人女性、すなわち自由の身である可能性の方が高く、以前、召使として働いていたものと推察されている。セヴラ女史は、写真に見られる衣服の身頃の仕立て直しについて、貴重な解説をしている。

> このようなぴっちりした身頃の服の仕立て直しは、たとえ腕のいいドレスメーカー（dressmaker）でも、身頃を完全にバラバラにしなければ難しい。ところが、写真の身頃は前も後ろもまん中の部分だけ幅を詰めてあり、身頃の下端では中心線が横にずれている。正面の上から下までを飾るパフを連ねたバンド状の部分は中心線から外れているうえ、ライン自体がゆがんでいる。そのうえ身頃のダーツは奇妙な角度である。肩と身頃の上の方は仕立て直しされておらず、身体にうまく合っていない（Joan Severa, p. 125より引用）。

写真 56　ダゲレオタイプ
1852 年
提供：***The California State Library*（911）, p. 138**

ティンタイプの写真52（1851）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X*］*39777*）の所蔵品である。

背景情報は次のとおりである。

ポメラニア出身の裕福なドイツ人農場経営者シーゲルコウ（Sigelkow）の一家は、1851年にドイツを発ってウィスコンシンへ向かう直前に、この家族写真を撮ってもらった。ウィスコンシンに到着した後もきっとこれらの衣服を着ていたであろうことと、1850年代には非常に多くのドイツ人移民がアメリカに渡ってきたことを考え合わせれば、この写真のシーゲルコウ家は当時のアメリカ国民のかなりの部分を占めた人々を代表すると言ってよい。元の写真（おそらくダゲレオタイプ）の撮影で一家が整列した時、後列右に写っている息子は一足先にアメリカに渡っており、一家が後に移住するウィスコンシン州マディソンの東で宅地を手に入れて管理していた。彼の写真だけは1860年頃に『追加で焼き付けられた』もので、その際に写真がティンタイプ（tintype）で複製された（Joan Severa, p. 132より引用 ）。

セヴラ女史はドイツからの移民女性の服装をアメリカ的としている。

前列左の女性のドレスは、長くて細い袖に1840年代末のカット特有のわずかなゆとりが見られ、ベルトを締めた曲線状のウエストの上にある扇形の身頃は、細かいプリーツをよせてV字の形に作られている。これは、よくアメリカのファッション・プレートに見られる短いウエストラインを応用したスタイルのひとつである。彼女のコルセットは、1840年代の板のように平らできついものには見えず、いくぶんゆったりしたタイプのようである（Joan Severa, p. 132より引用 ）。

ダゲレオタイプの写真 56（1852）は、*The California State Library（911）*の所蔵品である。

スタジオで撮影されていたダゲレオタイプの写真も、野外で撮影されるようになる。セヴラ女史は、金鉱地帯のオーバーン渓谷で撮影された貴重な写真を紹介している。セヴラ女史の解説に書かれた、次の情報は興味深い。

> 野外で撮影されたこのダゲレオタイプには『1852 年、オーバーン峡谷（Auburn Ravine）にて』というラベルが付いている。３人の採金者（うちふたりは兄弟に見える）とひとりの女性が、砂金と砂利を分ける流し樋の脇に立っている写真である。女性は、採金者の妻か姉妹だろうか。金鉱地帯の歴史記録によれば、男性が採掘現場で働いている間、女性は近隣の町で暮らしたという。オーバーン峡谷はカリフォルニア州プレイサー郡にあり、サクラメントから近い。この中で最も年代を推定しやすいのは女性の服装である。彼女のドレスは、下に着ているコルセットが窮屈な 1850 年代初めのスタイルであることを示している。またドレス自体も、ダーツを入れた前身頃と下向きに浅くカーブしたウエストフロントは 1850 年代初頭の流行である（Joan Severa，pp. 138-139 より引用）。

ダゲレオタイプの写真58（1852）（本書，p. 102）は、*The State Historical Society of Wisconsi（WHi［X３］24617）*の所蔵品である。

この写真は、袖の項目で紹介させていただいた。ゆるやかな丸みを帯びたウエストラインの貴重な一齣である。

> ドレスの身頃は、プレーンなフロントの両サイドに張り骨入りのダーツが２本ずつ入れられていて、下に着用された1850年代初めのまっすぐなコルセットにぴったりフィットしている。前身頃の下端は、自然なウエストラインのすぐ下あたりで、ゆるやかに丸みを帯びた線を描いている（Joan Severa，p. 141より引用）。

ダゲレオタイプの写真65（1854-56）（本書，p104）は、*The Bancroft Library（1905.16242）*の所蔵品である。

この写真も袖の項目で、紹介済である。繰り返しになるが、

おそらく婚礼写真として撮られたこの写真は、エドガー・ウェイクマン船長とその妻（Captain and Mrs. Edgar Wakeman）のものである。ウェイクマンは、ゴールドラッシュの時代にカリフォルニアへ向かう多くの採金者をホーン岬回りの航路で運んだアデレード号（*Adelaide*）の船長だった。彼と若き妻はカリフォルニアでこの写真を撮ってもらった可能性が最も高い（Joan Severa, p. 150より引用）。

ドレスの胴部について、セヴラ女史は、次のように解説している。

胴体部分の形は、最新式の短めでより曲線的なコルセットに合わせて作られている。このコルセットはウエストの下で身体を解放し、胸のところはより広く開いていた。バスクは、下の支えのおかげで、スカートの上に見栄えよく乗っている（Joan Severa, p. 150より引用）。

ダゲレオタイプの写真66（1855–57）（本書, p. 105）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X3*］*35653*）の所蔵品である。

この写真は、袖の項目で紹介済である。セヴラ女史は、ハビットフロント（habit front）スタイルとダーツ、およびコルセットについて、詳しく説明している。

写真の若い女性が着ているのは暗い色（おそらく黒）のシルクのドレスで、スカートの前に布の折り目がまだ残っているほど出来立てほやほやである。1840年代後半から人気があった、ハビットフロント（habit front）スタイルという、シュミゼットを見せて首の美しさを引き立たせる形に作られている（Joan Severa, p. 151より引用）。

引き続きダーツとコルセットに言及している。

身頃には前立てを閉じた部分の両側に等間隔で２本ずつ、張り骨入りのダーツがとられているし、身頃の下端は間違いなく、ウエストフロントが浅く下向きに弧を描く1850年代後半のスタイルである。ドレスは胸部がより楽な新しいコルセットの上に着用されている（Joan Severa, p. 151より引用）。

ダゲレオタイプの写真73（1856−58）（本書，p. 105）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*68:94:3*）の所蔵品である。

この写真も、袖の項目で紹介済である。セヴラ女史は髪型から写真の年代を推定している。

> この写真の年代推定に最も役立ったのは、1850 年代後半の髪型である。実際、姉の髪型—ゆったりと垂らした横髪を顔のまわりでいくらかカールさせて整えたスタイル—には、以前の横に張り出した翼のような髪型からの進化が見て取れる（Joan Severa, 159 より引用）。

セヴラ女史はコルセットの上の身頃のデザインを次のように描写している。

> 旧式の硬くてきついセットの上に着用された身頃は、ウエストフロントで細いバンド状のシャーリングによって収束させられているが、その上の部分にプリーツかダーツが入っているように見える（Joan Severa, 159 より引用）。

ダゲレオタイプの写真76（1856−58）（本書，p. 107）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］*35715*）の所蔵品である。

この写真も、袖の項目で紹介済である。喪服姿の被写体のバスクに関する記述がある。

> このドレスは、身頃のヨークの低いラインや長いスリーブキャップ、袖口、フレアーのきいたオーバースリーブの縁に、クレープ織の縁飾りが見える。ドレスはツーピースで、上はプレーンな裾布が付いたバスクである。バスクの身頃はウエストの中央で左右に分かれ、その下にギャザースカートが見える。前開きのこのバスクは、首もとを大きな黒玉のブローチで留めてある（Joan Severa, p. 163より引用）。

写真89（Ca. 1859）（本書，p. 109）は、*The Circus World Museum*（*R3-5*）の所蔵品である。

この写真も、袖の項目で紹介済である。繰り返しになるが、セヴラ女史は前身頃の素人っぽいデザインを次のように指摘している。

このシルクのドレスの袖は、元の袖を作り直したか、あるいは1850年代末のスタイルの袖を後から新しい生地で作って付け替えたかのいずれかであり、流行遅れのきついコルセットに合わせてダーツが入った前身頃のスタイルとはちぐはぐになっている（Joan Severa, p. 178より引用）。

カルト・ドゥ・ヴィジットの写真90　(ca. 1859)　（本書，p. 110）は、*The State Historical Museum Wisconsin*（*WHi*　［*X3*］　*40766*）の所蔵品である。

この写真も、袖の項目で紹介済である。被写体の着用法について、次のように書いている。

　コルセットは1850年代初めのもので、胸をつぶして押し上げ、平らで不自然なラインを作っている（Joan Severa,　p. 179より引用）。

(3) 衿

1850 年代の衿は白糸刺繍（whitework）やレース製で、時にはかぎ針編みやタッチングレース（tatting lace）のこともあった。1850 年代の、大きめに開いた新しいネックラインを反映して、以前の衿よりもずっと幅が広い形が一般的であった。『ピーターソンズ』は早くも 1850 年 4 月号で、「衿はこれまでよりも大きくなることでしょう」と予告している。 そうした衿は 1840 年代の小さな衿とは異なるつけ方で使われ、肩へ向かって平らに広がっており、首もとで端同士が出合わずに離れていることもあった。1840 年代後半に登場したジェニー・リンド・スタイル（Jenny Lind style）、つまりレースの縁取りやフリルのついた立ち衿は、依然として愛好されていた。立ち衿に小さな折り返し衿を取り付けたタイプもあり、これは特にシュミゼットで人気があった（Joan Severa,　p. 99）。。

衿が写った写真16枚を紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真38（1850年10月18日）（本書，p. 100）は、*Historic Northampton (1980.19.5)*の所蔵品である。

写真 42　アンブロタイプ［湿板写真］
1850 - 52 年
提供：***The Charleston Museum*****（*****MK 11*****）, p. 118**

記録によれば当時ファニーは自分と娘の服を全部手作りしていたとみられるので、この『水玉』のドレスと、同じ布で作られたペルリーヌ（pelerine）・ケープは、両方とも彼女の手作りであると考えてほぼ間違いない。実際、彼女は1850年７月29日に『バーサ（bertha, berthe）・ケープ』を作っていると日記に書いており、それがこの写真で着ているケープかもしれない（ただし、写真のようなケープは一般に『ペルリーヌ』と呼ばれていたが）。この服の素材は柔らかいウールで、丸い点々は織り柄である。ペルリーヌは前を全部閉じて着用されており、上腕を覆っている部分のフィットにやや不具合が見られる。明るい色の縞柄リボンのルーシュ（ruche）［レースやクレープなどにプリーツやギャザーを施した縁飾りの紐］による縁飾りが、ペルリーヌの正面や裾、さらに短いオーバースリーブにも付けられている。このような生地と装飾のはっきりしたコントラストは、この時代のファッション雑誌で、昼用のドレスにも適した装飾としてさかんに推奨されていた（Joan Severa, p. 113より引用）。

この手作りのペルリーヌについて、詳しく説明している。家庭裁縫にいそしむファニーの努力が良く伝わってくる。

アンブロタイプの写真42（1850−52）は*The Charleston Museum*（*MK11*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の出自について「サウスカロライナ州チャールストンの比較的裕福な一家」と記している。撮影時期については「撮影時期推定の最大の決め手は、女性のドレス、特にフレアーになったアンダースリーブと、平らに広がり首もとで両端が合わさっていない大きな衿である。」と述べている。

服装については「最新の流行を追った昼用の服を着て、家族写真に納まっている。」と書かれている。興味のおありの読者の方は、オリジナルの著作をお読みいただきたい。比較的裕福な女性は、普段着でも流行を追っていたことが、具体的に、詳細に描かれている。

ダゲレオタイプの写真45（1850–53）（本書，p. 101）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*69.201.20*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、写真の被写体のドレスの衿について「上質な白糸刺繍をほどこした衿は、首もとの正方形のブローチで閉じられている。」（Joan Severa, p. 125）と細かく観察している。「レディースドレスにおいて、非常にものをいうのは、しばしば重視された細々した所である。」とGodey'sで述べられている。おしゃれに対する細やかな感性が、この写真の服装にも如実に表れている。

ティンタイプの写真52（1851）（本書，p. 114）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X*］*39777*）*の所蔵品である。*

ドイツからの移民が写ったこの写真の撮影背景については、コルセットの項目で言及した。左の前列の女性のドレスについて、セヴラ女史は「ネックラインは浅いV字形で、衿ぐりと袖口は細いレースのフリルで仕上げられている。黒いベルベットのリボンを首に巻いて、ブローチで留めている。リボンの下には別にチェーンが１本あるように見える。」（Joan Severa, p. 132）と述べ、ドイツからの移民女性の服装がアメリカの服装に傾倒していた様相を良く伝えている。

ダゲレオタイプの写真56（1852）（本書，p. 115）は、*The California State Library*（*911*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影場所について、次のように考証している。

> 野外で撮影されたこのダゲレオタイプには『1852年、オーバーン峡谷（Auburn Ravine）にて』というラベルが付いている。３人の採金者（うちふたりは兄弟に見える）とひとりの女性が、砂金と砂利を分ける流し樋の脇に立っている写真である（Joan Severa, pp. 138–139より引用）。

女性の服装については、次のように解説している。

お揃いの生地で作られたバーサのノッチドカラー（notched collar）や袖口のカフスには、喪服用のクレープ織（crape, crèpe）のパフとおぼしいもので縁飾りが付けられている。この服はたぶん葬式の後で片付けられて、この写真撮影用に引っ張り出されたのであろう（スカートの皺は、最近トランクから取り出されたことをほのめかしている）（Joan Severa, pp. 138-139より引用）

スカートの皺に関する記述には、庶民の生活感がにじみ出ている。

袖の項目で紹介したが、ダゲレオタイプの写真58（1852）（本書, p. 102）の所蔵者は、*The State Historical Society of Wisconsin（WHi［X 3］24617）*であり、「ジェニー・リンド・（Jenny Lind ）衿のまわりには淡い色の幅広リボンが巻かれ、よくあるタイプのブローチで合わせ目が留められ、両端がきれいな扇型に広がっている（Joan Severa, p. 141）と解説されている。とてもおしゃれな装いである。

ダゲレオタイプの写真60（1850-52）（本書, p. 103）は、*The Charleston Museum（MK 16）*の所蔵品である。セヴラ女史はこう解説している。

彼女はとても小さな輪のイヤリングをつけており、1850年代に愛好された大きな横長楕円形のブローチが、三角形を並べたようなデザインの小さな白糸刺繍の衿に留められている。暗い色のヘアリボンらしいものが、後頭部の髪から垂れ下がっている。」（Joan Severa, p. 143）。

この写真も袖の項目で、すでに紹介済だが、安価な日常着を着た若い学生らしい女性の装いにしては、衿もとに細かい気遣いが見られる。

ダゲレオタイプの写真64（1854-56）（本書, p. 104）は、*Historic Northampton (59. 256)*の所蔵品である。すでに袖の項目で紹介済みである。セヴラ女史は、次のように解説している。

装飾とアクセサリーにはそれなりにお金がかけられている。丸溝襞のオーガンジーの衿は特に珍しい。この丸溝襞は『アイロン襞（goffered）』つまり丸い金属棒の付

いたアイロンで型をつけたもので、衿は背中側ほど幅が広くなっている（Joan Severa, p. 148より引用）

おしゃれに費やすお金に糸目をつけない女性の装いである。

ダゲレオタイプの写真73（1856–58）（本書, p. 105 ）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*68:94:3*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

写真 84　ダゲレオタイプ
1858 年頃
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *35810*）**,

（向かって右の姉の）丸い衿ぐりには、ジェニー・リンド・スタイルの衿が付いている。大人向けの黒いシルクのショールが上腕とドレスの前の一部を覆っており、この写真のために身に着けたという印象を与える（Joan Severa, p. 159より引用）。

ダゲレオタイプの写真74（1856–58）（本書, p. 106）は、*Kings County Museum*の所蔵品である。

この写真の背景情報は、p. 106に紹介した。
この写真は結婚式の写真であり、「上質のローンに刺繍をほどこした衿は極端に広く、1850年代半ばとしては非常にファッショナブルである。衿は首の比較的高い位置までを覆い、前を閉じて着用されている」（Joan Severa, p. 160）と解説されている。

ダゲレオタイプの写真76（1856–58）（本書, p. 107）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *35715*）の所蔵品である。

写真 86　ダゲレオタイプ
1858 年頃
提供：***Historic Northampton*** **（59.59）,**
p. 174

写真 88　アンブロタイプ
1859 年頃
提供：***Joseph Covais*** **, p. 176**

この写真は喪服姿で撮られている。セヴラ女史は、次のように解説している。この素晴らしいダゲレオタイプは、ニューヨーク市のJ・ガーニー（J. Gurney）によって撮影された。写っているのは、チャールズ・ミントン・ベーカー（Charles Minton Baker）の娘のメアリー・ルイーズ・ベーカー・リジャーウッド・ブラウン（Mary Louise Baker Lidgerwood Brown）で、喪服姿である。……この写真もそうだが、喪服女性の写真の多くは衿やアンダースリーブも含めて身につけるものすべてが黒なので、服喪の最初の１年に写真が撮られることが多かったことは明らかである。それ以外の場合に、アクセサリーまで黒くすることはなかったからである。この写真を撮った時、まだ若いメアリーは、最初の夫であるリジャーウッド氏の喪に服していたのであろう。黒いクレープ織（縮緬）のアンダースリーブと衿をつけたこの黒いシルクの服は、服喪の１年目にふさわしい服装を示す素晴らしい見本である（１年が過ぎた後の“服喪の第２段階”には、衿などに白を使うことが許された）（Joan Severa, p. 163より引用）。

服喪の慣習がよくわかる解説である。

ダゲレオタイプの写真84　(1858)　(本書，p. 123) は、*The State Historical Society of Wisconsin*の所蔵品である。

写真に写った女性は無名の女性であり、「毛皮の下のウール製のラップは、幅の広い袖が付いていて、首もとはシルクのタッセルで閉じられており、定番の着方どおりに幅広のキャンブリックの衿を上に出して着用されている。ドレスの首もとのタッセルの上には、ブローチが留められている」(Joan Severa，p. 172より引用) とのことである。定番のお洒落を楽しんでいることがよく読み取れる。

ダゲレオタイプの写真86 (ca. 1858) は、*Historical Northampton（59.59）*の所蔵品である。「16歳くらいと思われる若い娘を写したこの写真の撮影年代の決め手は、衿である。衿は、1858年頃に最も大きくなった。」(Joan Severa，p. 174より引用) という。セヴラ女史は、確信をもって衿の大きさを写真の撮影年代の決め手としている。

アンブロタイプの写真88 (ca.　1859) は、*Joseph Covais*の所蔵品である。セヴラ女史は、次のように解説している。

> 自分や子どもの服をほとんど全部自分で作っていたものと思われるこの母親は、流行の型紙で自分用に出来の良いコットンのフロックを作り、そこに1850年代を通して人気があった極端に幅広い衿を付けて着用している。衿の縁は幅広いレース編みになっていて、おそらくこれも彼女の手作りであろう (Joan Severa，p. 176より引用)。

母親の手作りの自分用のフロックに付けられた1850年代を通して流行した大きな衿に言及している。

写真89 (Ca.　1859)　(本書，p. 109) は、*The Circus World Museum（R3 -5）*の所蔵品である。

セヴラ女史は「サーカス経営でその名を知られるウィスコンシン州バラブーのリングリング兄弟 (Ringling Brothers) の両親であるオーガストとサロメ・リングリング (August and Salome Ringling) は、当時住んでいたミズーリでこの写真を撮ってもらった。」と被写体の背景情報に言及したうえで、写真に見るファッションがいかに流行遅れであるかが強調

されている。衿については「当時人気があった高価な幅広の白糸刺繍の衿をつけているもののドレスのネックラインは昔のままで位置が上すぎ、衿の形に対して時代遅れである。」（Joan Severa, p. 178より引用）とネックラインと衿のミスマッチが指摘されている。

カルト・ド・ヴィジットの写真90 (ca. 1859) （本書, p. 110）は、*The State Historical Museum Wisconsin (WHi ［X3］40766)* の所蔵品である。

被写体の服装については、「小さくて厚みのあるレースの上品な衿も、1860 年代のスタイルが近づいてきていることを物語っている。衿は“必需品”のブローチで合わせ目を閉じられ、細長い吊り下げ型のイヤリングがきちんとした髪型のアクセントになっている。」（Joan Severa, p. 179 より引用）と 1860 年代のスタイルに近づいてきたお洒落な装いに言及している。

以上の記述から明らかなように、セヴラ女史が収集された 1850 年代の女性服に見られる衿は、手作りして、流行を取入れたり、古いものに流行の衿を取り付けたり、見事に流行の衿に装ったりと着用者の経済状態によってまちまちであった。また、日常着、外出着、喪服といった TPO による衿の違いも見て取れ、いずれも貴重な写真である。

2. 下着

(1)　シュミーズ

短いコルセットの下に着用するシュミーズは、膝丈で着られていた。家でシュミーズを縫っていた女性たちは、よくそれを「シミー（Shimmie）」という愛称で呼んだ。シュミーズはたいてい白いキャンブリック製であったが、時には、一番上等なドレス用にリンネルで作られたものもあった。この頃に流行ったシュミーズのネックラインは広く開いており、どちらかといえば質素なバンド状布と白糸刺繍の縁取りで仕上げられていた。キャップ型の袖が肩からアームホールの高さあたりまでを覆い、腕に垂れてかぶさっていた。コルセットに皮脂が付くのを防ぐためにはシュミーズを洗って清潔にしておかなければならなかったので、シュミーズには替えが必要だった。1850年代の半ばには、シュミーズに付けられる白糸刺繍やレースの縁飾りの量がペチコートのスタイルの流行に合わせて変化しつづけ、1850年代末には前よりはるかに凝ったものになった。 ヒップまでの丈でより身体にぴったりしたシュミーズも1850年代中頃に登場したが、普及はしなかったようである（Joan Severa, p. 99を要約）。

(2) クリノリン、フープスカート

1850年代に女性のドレスにもたらされた最大の革新は、「クリノリン（crinoline）」すなわちフープ［張り輪］スカートであった。ところが、パリの女性たちは少なくとも1853年からは硬さのあるペチコートを着用し、それより前のフランスのファッション・プレートにも、そうしたハリのあるペチコートで支える必要のあるふっくらとしたスタイルのスカートが見られるというのに、アメリカの女性雑誌には「これからはフープスカートを着用しましょう」という宣言が見当たらないのである。パリの流行をほぼタイムラグなしに追っていたアメリカの女性たちは、間違いなく早い時期からクリノリンを着用していたはずだが、そうしたペチコートはあまりにも極端だとみなされたため、広く一般に受け入れられるまでには時間がかかった。1850年頃から麦藁を編んで作った紐が一部のドレスとペチコートの両方の裾に縫い込まれるようになり、同じ頃から、厚くキルティングしたり、しっかりした紐を縫い込んだりして補強したアンダーペチコートが、スカートの膨らみを出すために用いられた。それほど一般的に受け入れられるようになるためには、フープは1855年の時点で最低でも2年以上は着用されていたに違いない、と考えるのが妥当であろう。この製品は、非常に丈が短くて胴の全周に広がるフープをウエストに固定して、バスク・ウエストの身頃のフラウンスとスカートのトップ部分を支え、キャンブリック製で膨らみのあるスカートの下の方の部分には鋼鉄製のばねが使われ、取り外しができる構造になっている。 1850年代のフープが生み出した形—すなわち身体の周囲に均等に膨らみが出る形—は、婦人服の販売において、たしかに重要な意味を持っていた（Joan Severa, pp. 97-98を要約）。

フープスカートが写っている12枚の写真を紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真44（本書, p. 112）（1850-53）は、*Matt Isenburg*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

写真の服の身頃前面に見える膨らみは、プレスしていない長いプリーツによって生み出されている。プリーツの上の端は単にネックライン（neckline）の一番上に収めら

れ、そこから長くて平らな前身頃をだんだん内側に向かうようにプリーツが走っている。スカートはギャザーでとてもたっぷりとした膨らみが出され、ペチコート（petticoat）だけで支えられている。フープ（hoop）は1853年頃まで登場しないからである（Joan Severa, p. 122より引用）。

ダゲレオタイプの写真45（1850-53）（本書, p. 101）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*69.201.20*）の所蔵品である。

スカートのシャーリングの状態が、次のように描かれている。

写真のスカートの一番上には、3連のシャーリング（shirring）が見えている。張り骨入りの前身頃のウエストラインは低い位置で下向きの曲線を描いており、そこに合わせてスカートのシャーリングも曲線状に配置されている。ほとんどのスカートは、上半身との取り付け部分のシャーリングの上に身頃がかぶさって隠れるように作られたが、この写真のシャーリングは並はずれて位置が低い（Joan Severa, p. 125より引用）。

ダゲレオタイプの写真56（1852（本書, P. 115）は、*The California State Library*（*911*）の所蔵品である。「スカートはカートリッジプリーツを取ってウエストに縫い付けられている。スカートのたっぷりした膨らみを見れば、下に必需品のペチコートをはいて支えていることが明らかである。」（Joan Severa, pp. 138）とペチコートの役割が強調されている。

ダゲレオタイプの写真58（1852）（本書, p. 102）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X 3*］*24617*）の所蔵品である。

「カートリッジプリーツをとったスカートは、ハリのあるペチコートに全面的に支えられてこの上なく膨らんで見える。」（Joan Severa, p. 141）とやはり、ペチコートの役割が強調されている。

ダゲレオタイプの写真60（1850-52）（本書, p. 102）は、*The Charleston Museum*（*MK 16*）の所蔵品である。

写真の衣服は、日常着で、ホームメイドであるとセヴラ女史は述べて、ウエスト状態を次のように書いている。

> ウエストの扱いは、わずかにゆとりをもたせた身頃とふっくらしたスカートの柔らかい襞にまぎれてしまってほとんどわからないが、おそらく鎖状の細いベルトを、自然なウエスト位置にきつく締めているように思える（Joan Severa, p. 143より引用）。

ごく平凡な庶民服である。

ダゲレオタイプの写真65(1854-56)(本書, p. 104)は、*The Bancroft Library(1905. 16242)*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

> 若いウェイクマン夫人は、暗い色のウールのドレスを着ている。彼女が選んだ袖の形は1850年代半ば頃に見られた風変わりなスタイルのひとつで、身頃はとても短いバスクである。胴体部分の形は、最新式の短めでより曲線的なコルセットに合わせて作られている。このコルセットはウエストの下で身体を解放し、胸のところはより広く開いていた。バスクは、下の支えのおかげで、スカートの上に見栄えよく乗っている（Joan Severa, p. 150より引用）。

ダゲレオタイプの写真76（1856-58）（本書, p. 107）は、*The State Historical Society of Wisconsin（WHi ［X3］35715）*の所蔵品である。

「ドレスはツーピースで、上はプレーンな裾布が付いたバスクである。バスクの身頃はウエストの中央で左右に分かれ、その下にギャザースカートが見える」(Joan Severa, p. 163)とセヴラ女史は解説している。

アンブロタイプの写真88（ca. 1859）（本書, p. 124）は、*Joseph Covais*の所蔵品である。「ドレスは、1855年までにイリノイ州で完全に取り入れられていたが、確かに大きなフープスカートとペチコートの上に着用されている」（Joan Severa, p. 176 より引用）とセヴラ女史は解説している。

写真89（Ca. 1859）（本書, p. 109）は、*The Circus World Museum*（*R3 -5*）の所蔵品である。

「ドレスのスカートは、以前のようなカートリッジプリーツではなく平たいナイフプリーツ（knife pleats）を入れてウエストラインに付けられているので、彼女はスカートを裏返し、クリーニングして、新しいスタイルで作り直したのかもしれない」（Joan Severa, p. 178より引用） とセヴラ女史は解説している。

カルト・ドゥ・ヴィジットの写真90（ca. 1859）（本書, p. 110）は、*The State Historical Museum Wisconsin*（*Whi*［*X3*］ *40766*）の所蔵品である。

カルト・ドゥ・ヴィジットについては、解説において詳述した。「これがリフォームされたドレスだという証拠は他にもある。最新流行のスカートはナイフプリーツで取り付けられているのに、このスカートはカートリッジプリーツのままである」(Joan Severa, p. 179より引用）。

3. アクセサリー

首もとのリボンは 1850 年代に入っても人気を保ち、結び目にブローチをつける場合もあればつけない場合もあった。この頃には人気アイテムへの道を順調に歩んでいたシュミゼット（chemisette）は、1850 年 4 月号の『ゴーディーズ』で取り上げられ、「このとてもかわいい婦人用品は『シュミゼット』『スペンサー（spencer）』『アンダーハンカチーフ』などいろいろな名前で呼ばれています。これが今ほどさかんに着用されたことはかつて一度もありませんでした」と書かれている（Accessible Archives）。シュミゼットは、袖がなく、装飾的なフロントと上質の白いコットン製のプレーンな背部だけで構成されたところに衿が付いている。 丈はウエストまでで、ドレスの下でウエスト部分の紐を結んで着用した。 この洒落た品のおかげで、1850 年代には身頃のフロント部分のカットが深く、多様なスタイルになり、下に着用したシュミゼットはまるで白いシャツブラウスのように見えた。 シュミゼットには、あらゆるスタイルの衿が付けられた。

1850 年代には、アンダースリーブの使用がしだいに増えていった。 これは、丈が短めで袖口が広がったオープンスリーブのドレスが流行したためである。1850 年 12 月号の『ピーターソンズ』は、「セミフォーマルのドレス（demi-toilette）には、袖口が広く開いたレースのアンダースリーブを着けて、中国式に垂らしま

す」と勧めている。アンダースリーブは、他のどの年代よりも1850年代との結びつきが強い。多くの場合手首部分にカフスを着けて閉じられたアンダースリーブは、非常に大きくて膨らんだ形になり、時には念入りに刺繍やカットアウト［ある部分をくり抜いて、デザイン上のアクセントにしたもの］で飾られるか、あるいは白糸刺繍やレースのフリルで縁取りされるなどしていた。

アンダースリーブには、前腕部に何ヶ所かギャザーを寄せて、パフが連なるようにしたものもあった。

19世紀中頃には、女性が自分の長い髪を使って男友達や夫に懐中時計の紐を作ってあげたり、自分あるいは友人の髪を業者に送って思いを込めた装身具を作ってもらったりすることが流行した。『ゴーディーズ』の1856年7月号に載った次の記事を見ると、1850年代に利用できたヘアジュエリーの多彩さや、それぞれの価格がわかる。

髪飾り——髪の毛でブレスレット、ピン、（…）ネックレス、イヤリングを作ってほしい女性に、本誌のファッション編集者が便宜をはかって差し上げることができます。

女性が散歩や乗馬をする時に一番必要なアクセサリーはパラソル（parasol）だった。1850年代初めのパラソルは、サイズが小さく、独特の形をしていた。

以下において、アクセサリーを付けた写真9枚を紹介・考察する。

アンブロタイプの写真42（1850–52）（本書, p. 120）は、*The Charleston Museum*（*MK11*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

> 前身頃は比較的小さめのV字形に裁断されて（あるいは折り返されて）おり、そこから中のシュミゼット（chemisette）がのぞいている。シュミゼットの首もとは、1850年代初めに登場したばかりの横に長い楕円形の大きなブローチで留められている。時計は、片側から下がっている幅広の黒いリボンに吊るされているように見える（Joan Severa, p. 118より引用）。

ダゲレオタイプの写真45（1850-53）（本書，p. 101）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House（69. 201. 20）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

透けるほど薄い白のシルクのリボンが手首に蝶結びされ、よく似合うブローチで留められている。上質な白糸刺繍をほどこした衿は、首もとの正方形のブローチで閉じられている。やや斜めにかけた時計用の紐には小さなスライド［留め具］があり、その先に吊るされているはずの時計はスカートのポケットの中に入っていて見ることはできない（Joan Severa，p. 125より引用）。

ダゲレオタイプの写真60（1850-52）（本書，p. 103）は、*The Charleston Museum（MK 16）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

彼女はとても小さな輪のイヤリングをつけており、1850年代に愛好された大きな横長楕円形のブローチが、三角形を並べたようなデザインの小さな白糸刺繍の衿に留められている。暗い色のヘアリボンらしいものが、後頭部の髪から垂れ下がっている（Joan Severa，p. 143より引用）。

ダゲレオタイプの写真 64（ 1854-56）（本書，p. 100）は、*Historic Northampton（59.256）*の所蔵品である。

「クララは、黒玉か珊瑚でできたジュエリー（jewelry）のセット――大きなブローチと、中央に大きな浮き彫りメダルがついたペアのブレスレット――を身につけている（Joan Severa, p. 148 より引用）とセヴラ女史は解説している。

ダゲレオタイプの写真73（1856-58）（本書，p. 105）は、*The International Museum of Photograph George Eastman House（68:94:3）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

どちらの少女も首から懐中時計の細い金鎖を下げており、妹の鎖にはケースに入った金のペンシルがついているほか、スカートの小さな時計用ポケットの縁から「ウォッチ・フォブ」つまり懐中時計の鎖に付ける小さな飾りが下がっている。妹の首もとの、２本の鎖がスライド留め具で１本に合わさっている部分には、金の十字架が留められている。姉の膝の上にある長い扇子は1835年頃に人気のあったタイプで、この時代にあっては極端に旧式である（Joan Severa, p. 159より引用）。

ダゲレオタイプの写真 74（1856–58）（本書，p. 106）は、*The Kings County Museum* の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

手袋もはめておらず、アーロンの肩に乗せている手の手首には黒いシルクのリボンが見える。このリボンは幅が約 2.5 インチ［6.4 センチ］と広く、両手首に巻いて蝶結びかパフにするのが当時の流行であった。時には、ペアのブローチで結び目を留めることもあった。手には、馬車に乗る時に使う明るい色のパラソルを持っている（Joan Severa, p. 160 より引用）。

ダゲレオタイプの写真 76（1856–58）（本書，p. 107）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi ［X3］35715*）の所蔵品である。

「彼女はイヤリングも時計も身に着けていない。厳粛な黒一色を妨げるものは何もない。中指のふたつの指輪は、結婚指輪と婚約指輪だと考えられる」（Joan Severa, p. 163 より引用）とセヴラ女史は解説している。

ダゲレオタイプの写真84（ ca. 1858）（本書，p. 123）は、*The State Historical Society of Wisconsin*の所蔵品である。

「この身元不明のモデルは、新しい毛皮と彼女のお気に入りのラップと手袋のセットを身につけてポーズをとっている」（Joan Severa, p. 172より引用）とセヴラ女史は解説している。

写真89（Ca. 1859）（本書, p. 109）は、*The Circus World Museum (R3 -5)* の所蔵品である。

「特大の時計はボディス前面で上品な金のチェーンで吊るされていて、彼女は上品なレースのハンカチを持っている。彼女は耳に細長い金のしずくをつけている」（Joan Severa, p. 178より引用）とセヴラ女史は解説している。。

カルト・ドゥ・ヴィジットの写真90（ca. 1859）（本書, p. 110）は、*The State Historical Museum Wisconsin（WHi ［X3］ 40766）*の所蔵品である。

「衿は"必需品"のブローチで合わせ目を閉じられ、細長い吊り下げ型のイヤリングがきちんとした髪型のアクセントになっている」（Joan Severa, p. 179より引用）とセヴラ女史は解説している。。

4. 髪型・帽子

デイキャップは 1850 年代の写真にはめったに見られないため、外出用としては流行遅れと考えられていたに違いない。 女性誌には、家の中でかぶるのに適したアイテムとしてキャップの型紙や図が載っており、似たスタイルに異なる飾りをつけたキャップは、病人や高齢女性向け、家庭での朝食やディナー用のキャップに適していると勧められている。 少数の肖像写真には年配の女性がキャップをかぶって写っており、鍔が顔に接近した 1840 年代のタイプのキャップをまだかぶっている例も見られる。 ふっくらしたクラウン［頭にかぶる部分］が髪を包み込み、短い垂れ布が首を隠した。 ボンネットは、少なくとも街なかでは、依然として唯一の「適切な」女性用帽子であった。1850 年代のボンネットは横幅が広く、丸く広がった形状で、1853 年頃までには鍔が顎の下で曲線を描いて後方へ向かい、頭のずっと後ろの方に行きつく形になった。その後は、鍔の内側は依然として豪華に飾りたてられたものの、形はいくらかおとなしくなった。 片側のブロンドレースの中に花が飾られ、反対側にはベルベットのリボンを結んだ飾りが付いていたり、片側の飾りはこめかみの位置で、片側は下の頬のあたりに付いていたりする。 とはいえ、1854 年のファッションプレートでは、ボンネットは依然として後ろに傾けてかぶる形状であり、クラウンは非常に浅く、顔のまわりをブロンドレースのフリルで縁取るための大げさな「顎のフック（chin hook）」が付いていた。 1856 年 8 月、『ゴーディーズ』のファッション

編集者の女性はボンネットファッションへの嫌悪感をあらわにして、「カタツムリが殻から出ないのと同じくらい頑固にボンネットを脱ごうとしない女性」を目にしたと述べ、それに続けて、頭を覆うことに関する軽率な姿勢は「痛々しい顔面けいれん、耳痛、頭痛（…）」を起こすだけだと書いている。 図では、この帽子はクラウンが浅くて鍔が広く、鍔の全周から２インチ［５センチ］のブロンドレースのフリルが下がり、片側に１本の羽根が水平に取り付けられ、幅広のリボンの結びひもが付いている。２年後、この種の帽子が話題となり、ファッション編集者は今度は論評するに値すると考えた (Joan Severa, pp. 101–102 を要約)。

髪型と帽子を 9 枚の写真から紹介・考察する。

アンブロタイプの写真42（1850–52）　（本書,　p. 120）は、*The Charleston Museum (MK11)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体のステイタスや撮影時期について、服装と髪型の特徴に着目して、次のように述べている。

> サウスカロライナ州チャールストンの比較的裕福な一家が、最新の流行を追った昼用の服を着て、家族写真に納まっている。撮影時期推定の最大の決め手は、女性のドレス、特にフレアーになったアンダースリーブと、平らに広がり首もとで両端が合わさっていない大きな衿である。耳のあたりでループ状に結った髪が極端に横に広がっているのも、1850年代初めであることを示すもうひとつの確かな手掛かりである（Joan Severa,　p. 118より引用）。

ダゲレオタイプの写真 60 *(*1852–55*)*　*(*本書,　p. 103）は、*The Charleston Museum (MK 16)* の所蔵品である。

すでに、袖の項目で言及したように、この写真では、庶民の若い女性（学生らしい）が、手作りと思われる日常着を着用している。「暗い色のヘアリボンらしいものが、後頭部の髪から垂れ下がっている」（Joan Severa, p. 143 より引用）とセヴラ女史は解説している。

ダゲレオタイプの写真 65（1854-56）（本書, p.104）は、*The Bancroft Library (1905.16242)* の所蔵品である。

すでに、袖の項目で言及したように、この写真は婚礼写真のようである。「髪は特に若々しい髪型に結われていて、左右に分けた髪がなめらかに耳の上を覆い、耳の後ろの低い位置から長い巻き毛を何本も垂らし、さらに長い三つ編みが頭頂部を囲むようにアレンジされている」（Joan Severa, p.150 より引用） とセヴラ女史は解説している。

ダゲレオタイプの写真66（1855-57） （本書, , p.105）は、*The State Historical Society of Wisconsin* （*WHi［X3］35653*）の所蔵品である。

すでに、袖の項目で言及したように、セヴラ女史は、髪型から、この写真の撮影年代を推定している。「彼女の髪は顔から後ろの方へ流して長く柔らかい丸みをつけてあり、1860年代のスタイルに近い。このスタイルをさらにソフトにしているのが、耳の前に垂らしたとても短い巻き毛である。」 （Joan Severa, p. 151より引用）。

ダゲレオタイプの写真 73（1856-58） （本書, p. 105）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House* （*68:94:3*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、髪型が写真の撮影年代の推定に役立つことについて、言及したうえで、髪型の進化を指摘している。

> この写真の年代推定に最も役立ったのは、1850年代後半の髪型である。実際、姉の髪型—ゆったりと垂らした横髪を顔のまわりでいくらかカールさせて整えたスタイル—には、以前の横に張り出した翼のような髪型からの進化が見て取れる（Joan Severa, p. 159より引用）。

ダゲレオタイプの写真76 （1856-58）（本書p. 107）は、*The State Historical Society of Wisconsin* （ *WHi ［X3］35715* ）の所蔵品である。

撮影年代の推定に利用した主な手掛かりは、頭を飾る三つ編みをおだんごや結び髪にせず、頭に巻きつけるようにしている点である。……この写真を撮った時、まだ若いメアリーは、最初の夫であるリジャーウッド氏の喪に服していたのであろう（Joan Severa, p. 163より引用）。

ダゲレオタイプの写真 77（1856-59）（本書, p. 108）は、*Worcester Historical Society (1932.188.12)* の所蔵品である。袖の項目で言及したように、ボストンのティモシー・ビゲロー氏の妻（Mrs. Timothy Biggelow）が、娘（赤ん坊）の死後に撮影した記録写真である。「ビゲロー夫人の髪は、1850 年代後半に一般的だった横髪のウィングが耳の下まで覆う髪型の、保守的なバージョンに整えられている。」（Joan Severa, p. 164）。

ダゲレオタイプの写真86（ca. 1858）（本書, p. 124）は、*Historical Northampton (59.59)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

　彼女は滑らかに整えられた黒髪の上に、しゃれたボンネットを着用している。ボンネットは頭のかなり後ろの方にかぶられているので、鍔の内側のチュールのフリルによってボンネット自体の輪郭が隠されてしまっている。短いバボレ（bavolet）の縁の硬めのレースだけが見えている。また、白いリボンがクラウンの片側に垂れている。同じタイプのシルクのリボンが、ボンネットの結び紐として付けられており、ちょうど顎の下でぱりっとした水平の蝶結びで結ばれている（Joan Severa, p. 174より引用）。

おしゃれなボンネットの様相がとてもよく表現されている。

アンブロタイプの写真88（ ca.　1859）（本書, p. 124）は、*Joseph Covais*の所蔵品である。

セヴラ女史は「イリノイ州の無名の家族が写ったこの写真は、1850年代末の庶民の最も一般的な服のタイプを見せてくれる。」と述べ、髪型については「彼女の髪は、1850年代末に一般的だった横幅の広いスタイルをいくぶん小さく抑えたバージョンに結われており、耳のほとんどが覆われているが、三つ編みを頭の上に飾るのではなく、髪を丸く巻いて頭の後ろでおだんごにしている。」（Joan Severa, p. 176）と解説している。

写真89（Ca.　1859）（本書p. 109）は、*The Circus World Museum （ R3 -5）*の所蔵品である。

「リングリング夫人の髪型はおそらく、ネットによってまとめられている。」（Joan Severa, p. 178より引用）。

カルト・ドゥ・ヴィジットの写真90（1859）（本書, p. 110）は、*The State Historical Museum Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *40766*）の所蔵品である。

「髪型も、やはりどこか過渡期を思わせるスタイルである。長い髪をねじって頭の上に巻き、耳を髪で隠す1850年代後半のスタイルだが、1860年以降の髪型のように首まで低く垂れ下がってはいない」（Joan Severa, p. 179より引用）とセヴラ女史は解説している。

次に、帽子が写っている写真１枚を紹介・考察する。
ダゲレオタイプの写真74（1856–58）（本書, p. 106）は、*The Kings County Museum*の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

年代を推定するには、ドーシャのパメラ・ハット（pamela hat）を決め手にするのが一番である。この形の帽子は、1856年の春に『ゴーディーズ』で「新しいボンネットのスタイル」として詳しく紹介されている。ところが、もっと後の『ゴーディーズ』の記事を見ると、1858年には、リゾート地や子どもたちを除けばこのスタイルの帽子をかぶるのはふさわしくないとされていたことがわかる」（Joan Severa, p. 160より引用）と述べている。

そして、この帽子の特徴について、次のような面白い解説を行っている。

> 写真のドーシャはリゾート地でこの帽子をかぶっていたのか、それともカリフォルニアではこの帽子がもっと広く受け入れられていたのかを考えるのも面白い。帽子は暗色の麦藁製で、鍔の縁がダチョウの毛で飾られている。鍔の下に取り付けられた格子縞のリボンを顎の下で結び、片側にリボンの輪を、もう片側に縁飾りのついた端を出して、帽子を固定している。並はずれて幅の広い白糸刺繍の衿も、1850年代後半であることを示す特徴である（Joan Severa, p. 160より引用）。

デイキャップは 50 年代の写真ではそうめったに見られない。少なくともストリートウェアのファッションではない。ディナーキャップは朝食かホームウェアに好ましい。老女がキャップをかぶったわずかのポートレートには、1840 年代の型がもう廃れたものもある。丈が長く幅広の垂れひだは、しばしばフリルの付いたヴァレンシエンヌ・レースで飾られた。上質のローンでできたキャップや垂れひだは、いつもホワイトワークで美しく刺繍されていた。ふっくらしたキャップの頭部分は髪を中でまとめられた。

1856 年春、“Pamela” と呼ばれる丸くてほとんど平らな麦わら帽子は、“ボンネットの新しいスタイル“と言われたが、それに伴う解説はアメリカの写真では見つけることができなかった。

5. はきもの

1850 年代のほとんどの靴は、低くて薄いかかとが特徴だった。1853 年にゲイターに 1 インチ［2.5 センチ］のヒールを付ける試みがおこなわれたが、『ゴーディーズ』3 月号のメリフィールド夫人のコラム「芸術としてのドレス」で酷評された。 まったく、何と言えばいいのでしょう？ かつて人気のあったハイヒールが、再び流行しようとしているなんて。この有害な風習が広まらないことが(…)望まれます。」明らかに 1 インチのハイヒールはこの時期よりも前に登場していたので、ヒールの高さは写真の年代を推定するのに適した手掛かりではない。 1855 年になるとゲイターにも靴にも小さなヒールが付いており、なかには幅の広いヒールやわずかに底が細めのものもあった。この時代の女性の靴は、極端にまっすぐで幅が狭くてつま先が四角い靴型を使って作られていた（Joan Severa, p. 103 を要約）。

6. ラップ

1850年代のファッション記事で、他のどんなアイテムよりも多くの紙面を費やして説明されたのは、人気を集めた数々の種類の外衣だった。1850年代初めの外衣に関するとても長い論議を読むと、ショールはインド、フランス、イングランド、スコットランド、その他多くの国々から輸入され、おびただしい種類のものが入手可能であったことがわかる。 もう少し後に『ゴーディーズ』に載った「ドレスに関する良い質問」という記事には、あるファッションの提案が書かれている。「女性がショールを見せびらかすように身につけるとして、相当なで肩の人でなければそれは許されないというのであれば、私たちはショールを絶えず肩から下ろしたり肩に掛けたりすることをお勧めするべきでしょう。そうすれば、かわいらしい動きが生まれます。あるいは、ショールを片方の肩に掛け、もう片方は肩の下にまわすことや、

なにかしら変則的にはおって、画一的にならないようにすることもできます」（1852年11月号）。

極薄のウール地やバレージュ織をはじめとする透けるほど薄いショールは夏用で、レース製や、色染めのシルクの裏がついた極薄のモスリン製のマンティラと人気を争っていた。ハーフロングでゆとりのある外衣は、フープスカートの形に合わせて、大きな膨らみを持っていた。さまざまな外衣のスタイルには、1840年代と同じくらいエキゾチックな名前が、同じくらいいいかげんに付けられていた（Joan Severa, p. 160を要約）。

以下において、ショールが写った写真３枚を紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真 66（1855-57）（本書, p. 105）は、*The State Historical Society of Wisconsin（WHi［X3］35653）*の所蔵品である。この写真の撮影年代については、袖の項目で言及した。「暗色のシルク製でフリンジのついたショールを片方の腕に掛けている。」（Joan Severa, p. 151）。

ダゲレオタイプの写真73（1856-58）（本書, p. 105）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House（68:94:3）*の所蔵品である。

この写真の服装の特徴については、袖の項目で言及した。「大人向けの黒いシルクのショールが上腕とドレスの前の一部を覆っており、この写真のために身に着けたという印象を与える」（Joan Severa, p. 159）とセヴラ女史は解説している。

写真 74（1856-58）（本書, p. 106）は、*The Kings County Museum* の所蔵品である。
セヴラ女史は、次のように解説している。

> 彼女はフリンジのついたシルクのショールを対角線で折りたたみ、上下の縁のフリンジが重なって見えるようにして着用している。ショールは肩より少し下に巻かれ、ウエストの前中心に形よく引き寄せられている。もしかすると前中心でピン留めされているのかもしれず、フリンジがスカートの上に美しく広がっている（Joan Severa, p. 160 より引用）。

第3章　庶民男性の服装

1. 外衣

1840年代の細い袖とズボンは、1850年代になってもよく着られていた。1850年代後半には、流行遅れになったスタイルの服が仕事着に格下げされたことが、写真から見てとれる。男性は、時には平気で「普段のままの」格好でカメラの前に座ったように見える—つまり、職場からそのままスタジオにやって来たような格好をしていて、女性と比べてわりあい着慣れてしわが寄った、いくらか古く見える服を着ていることがよくあるのである。特に袖はより幅が広くなり、アームホールが1840年代より高い位置にあった。

ベストは1850年代にはダブルの打ち合わせが主流になる傾向が見られ、ノッチドカラー［刻み衿］が付くことが多かったが、写真にはショールカラー（shawl collar）のものも写っている。手の込んだ模様織りのシルクは正装用のベストに用いられ、そのなかには燃えるような色のものもあったが、昼間用ベストは黒のウール地で、コートとお揃いであった。夏には白または淡褐色のコットンのベストが着用され、一部は涼しさを考慮して打ち合わせがシングルだった。チェック柄のベストは1850年代終わり頃の特徴的な品で、チェック柄のズボンと一緒に着用されたが、ベストとズボンのチェック柄のサイズは同じではなかった。

写真 54　*ダゲレオタイプ*
1852 年 7 月 11 日
提供：*Historic Northampton*
(1980.19.8 and 1980.19.7.b), p.136

写真 81　カルト・ド・ヴィジット
［名刺判写真］　1857 - 60 年
提供：*The California Historical Society*
(FM-28401), p.169

1850 年代初めのファッション・プレートにはまだ細いスタイルのズボンも見られたが、当時の典型的なズボンは、足を入れる部分が比較的幅広の筒状で、折り目がなく、つま先の上で「しわがよる」よう長めに作られていた。1850 年代中頃には格子縞やチェック柄や明るめの色のズボンが「あかぬけた」服装をする男性たちに人気があったが、それでも写真では黒が主流である。ウールは年間を通して使用され、リンネルは夏に着用された。

1850 年代の男性用シャツでは、中ぐらいのサイズで首回りがあまり高く立ち上がらない衿を、ネクタイの上に折り返していた。この種のゆるいシャツは裾をズボンの中に入れて着用し、時には上にベストを着たが、スモックのように他の服の上に重ねて着用するものではなかった。当時の写真に見られるスモックは、膝が隠れるくらい長く、時にはシャツとネクタイをその下に着ていることが見てとれる（Joan Severa, p. 105 を要約）。

以下において、男性服の写った５枚の写真を紹介・考察する。

写真 82　*ティンタイプ*
1857 - 61 年
提供：*The National Museum of American History（C73.7.3）*, p.170

ダゲレオタイプの写真 54（July 11,.8 1852）は、*Historic Northampto（1980.19and 1980.19.7b）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、子どもを膝に乗せたフレンチ氏の服装について、次のように解説している。

フレンチ氏は、糊のきいた幅広の衿を立てて顎骨のすぐ下に尖った衿先を見せている。当時はまだ、このような衿がよく見られた。シングルの打ち合わせのベストの下にはシャツ・フロントが見えている。ベストには、1840 年代後半から 1850 年代初めのスタイルの細いショールカラー（shawl collar）が付いている。ベストとズボンは同じ生地のように見えるが、上にはおっている黒いコートは違う素材で、もっと濃い色である。ベストとコートは 1840 年代から続くぴったりとフィットしたスタイルで、多数の横皺が見える（Joan Severa, p. 136 より引用）。

写真 81　カルト・ド・ヴィジット［名刺判写真］（1857 - 60 年）は、*The California Historical Society（FM-28401）*の所蔵品である。

セヴラ女史は被写体の服装について、次のように解説している。

おそらく兄弟と思われるこのふたりは、当時『粋な』セットとして人気のあった
手な特大のコートとズボンを着用している。このような誇張されたスタイルは、当初は『いきのいい』スタイルをしたいと望む若者向けのファッションとして登場し、たちまち、もっと安価な量産品が現れた。写真のふたりが着ているのは既製服であるため、後期のスタイルである（Joan Severa, p. 169 より引用）。

写真 95　1859 - 65 年
提供：***The National Museum of American History*** **（C68.12.8）, p. 184**

写真 43　ダゲレオタイプ
1850 - 52 年
提供：***The Bancroft Library*** **（25）, p. 120**

ティンタイプの写真 82（1857–61）は、*The National Museum of American History*（*C73.7.3*）の所蔵品である。

スモックの作り方、デザイン、着装法が、詳しく解説されている。

細かいチェック柄の毛織物製のスモックは、生地の幅いっぱいをそのまま利用して作り、そこに袖を取り付けてある。肩の縫い目部分はボタンで留める開きになっているので、このスモックは衣服の上からかぶって着ることができる。他の服の上

に重ねて着るために必要なスモックのゆとりは、単にネックライン正面のボックスプリーツで生み出されている。おそらく背中側にも同様のボックスプリーツがあると考えられる。袖のふくらみは、アームホールと袖口のバンド状布にざっくりとプリーツをとって収められている。スモックの丈は膝よりもいくらか上である（Joan Severa, p. 170 より引用）。

写真95（1859–65）は、*National Museum of the American History*（*C68.12.8*）の所蔵品である。

セヴラ女史は「ゆったりしたズボン、幅の広い袖、長いコート—それが、この写真の撮影年代が 1850 年代末から 60 年代前半であることの証拠である」（Joan Severa, p. 184 より引用）と解説している。

2. ネックウェアー

1850 年代初めの写真で最もよく見られるネクタイファッションは、昼間用の次のようなスタイルであった。比較的硬そうな外見の幅 2 インチほどのシルクネクタイを水平方向の片輪結びにし、片側に大胆に輪を出すというやりかたである。このタイプのタイは、シルクの四角い布を対角線の向きに何度もたたみ、厚みのあるスカーフの形にして作ったのかもしれない。1857 年頃以降は、このスタイルは細くなり、より水平方向にのびる形状になっていった。

ダゲレオタイプの写真43（1850–52）はBancroft Library（25）の所蔵品である。セヴラ女史は、この写真の撮影場所について「「シャープス・フラッツのジョゼフ・シャープ（Joseph Sharp of Sharp's Flats）」とラベルに記されたこの写真は、シャープ氏（Mr. Sharp）がカリフォルニアの金鉱に仕事に行く直前に撮影されたものだと思われる。おそらく、サクラメントかサンフランシスコの近くの、鉱夫たちが必要な装備品を買うような場所で、間に合わせの写真撮影ブースで撮ったのだろう。」と述べている。そのうえで、ネクタイの結び方から、写真の撮影年代を割り出している。

この写真は、ゴールドラッシュの初期というおおざっぱな年代が付記されていることに加えて、彼のネクタイの結び方も撮影年代の推定に役立つ。ちょうど1850年には、どの男性も水平に結んだネクタイの片方の端を鋭く横に引き伸ばしていたらしいのである。結果として、1850年代初めの男性の写真のほとんどに、左右非対称のタイが見られる（Joan Severa, P. 121）。

3. 帽子

写真 40　ダゲレオタイプ
1850 - 52 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*** ***（WHi ［X3］ 35720）***, p. 115

1850年代にはかつてないほど多様な種類のハット［鍔あり帽子］が見られたが、50年代初めに人気があったのは、高さがあり、両サイドがまっすぐで、クリーム色の柔らかいフェルト製ハットである。

広縁の中折帽―幅が広くて水平な硬い鍔と、背が高く変形させやすいクラウンからなる、黒いハット―は 1850 年代を通じてたいへん人気があり、とりわけ西部諸州で撮られた写真に見られる。フェルト製の柔らかめの帽子は多彩な形のものがあり、労働者の間で人気があった。 ビジネスマンは、硬くてクラウン部分が深いフェルトの山高帽をかぶっていることもあったが、トップハットの方が一般的で、正装の際は依然としてトップハットが必須であった。以下において、帽子が写った 3 枚の写真を紹介・考察する。

*ダゲレオタイプの*写真 40（1850–52）は、*The State Historical Society of Wisconsin （Whi ［X3］ 35720）*の所蔵品である。

ウィスコンシン州マディソンの 16 歳の青年ウィリアム・B・ノイズ（William B. Noyes）が、紳士の服装をしてシルクハットをかぶり、成人姿での初めての写真のためにはにかんでポーズをとっている（Joan Severa, p. 115）。

*ティンタイプの*写真 59（1852–55）（本書, p. 130）は、*The National Museum of American* History *（59.229）*の所蔵品である。

写真 59　ティンタイプ
1852 - 55 年
提供：***The National Museum of American History*（*59.229*）**, p. 142

写真 78　ダゲレオタイプ
1856 - 60 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*　［*X3*］*315898*）**, p. 166

セヴラ女史の解説によれば、この写真には「仕事着を着たふたりの若い男性が、くつろいだポーズで写っている。」左側の男性は、「鍔の広い麦藁のセーラーハット（sailor hat）をかぶっている。」もう一人の紳士は、「クラウンの深い布製の帽子（キャップ）を身に着けている。」（Joan Severa,　p. 142）

ダゲレオタイプの写真 78（1856–60）は、*The State Historical Society of Wisconsin* の所蔵品である。

セヴラ女史は、ネクタイから撮影年代を推定して、次のように解説している。

　このとても若い「気取り屋」のふたりは、ジョージ・バクスター（George Baxter）とその弟である。撮影年代を 1850 年代後半と推定した決め手はネクタイの形で、どちらのネクタイも 1850 年代前半のような左右非対称のものではない。帽子について

写真 79　ダゲレオタイプ
1857 年春
提供：***Historic Northamption*** **(59.390)**,
p. 167

写真 91　ダゲレオタイプ
1859 年頃
提供：***The Bancroft Library*** **(1905.16242)**,
p. 180

は、左の弟の「白いパナマ帽には、粋に丸められた鍔と幅広の黒いリボンバンドがついている。」右の兄の「布で鍔の縁をくるんで黒いバンドを巻いた自然な色の麦藁帽子が、彼の『ファッションスタイル』を完成させている（Joan Severa，p. 166 より引用）。

4. ヘアー・スタイル・ヒゲの特徴

写真から判断すると、1850年代初めはたいていの男性がきれいに髭を剃っていた。 1850年代の半ばには、身なりの良い若い男性の間で、頬から下顎の輪郭にかけてふさふさした鬚を生やし、人によっては下唇の下に悪魔の絵によく描かれているような小さな鬚も生やすことが人気になったようである。 額の生え際から頭頂部にかけての髪が長く、その髪にマカッサル油を塗って、髪を分け、額の上方に高さのあるウェーブを作っているのである。 1850年代半ばを過ぎると、この頭上のウェーブの高さは低くなり、髪はシンプルな片側分けになって、ウェーブを描きながら後方へなでつけられている 1850年代を通して、後ろ髪は

衿あたりまでの長さだった。 両サイドの髪は、1857年頃には耳を覆うようになっていた。

以下において、髪型と髭が写った写真をそれぞれ1枚ずつ紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真79（Spring 1857）は、*Historic Northampton（59.390）*の所蔵品である。

セヴラ女史によると「マサチューセッツ州ノーサンプトンのチャールズ・J・スミス（Charles J. Smith）は、1857年春にこの写真を撮ってもらった時、せいぜい20歳前後であった。」という。「髪型は耳たぶの高さのブラントカット［切りっぱなしの髪］で、片側分けされている。」（Joan Severa, p. 167）。

ダゲレオタイプの写真91（ca. 1859）は、*The Bancroft Library*の所蔵品である。セヴラ女史は、この写真の背景情報について、こう述べている。写真業の発展の様子が、とてもよく紹介された貴重な解説である。

> ピーター・ブリット（Peter Britt, 1829−1905）はスイス出身の芸術家で、イリノイ州ハイランドでダゲレオタイプを学んだ後、1852年にオレゴン州ジャクソンビルに移り住んだ。若い3人の同行者だけを伴い、重さ300ポンド［136 kg］の撮影機材を持ち、馬車1台と牡牛4頭の陣容でオレゴン・トレイル［19世紀、北アメリカ大陸の西部開拓時代にアメリカ合衆国の開拓者達が通った主要道の一つ］を踏破した彼の旅の物語は、苦労と忍耐の見本と言ってよい。ブリットの伝記を書いたアラン・クラーク・ミラー（Alan Clark Miller）によれば、その旅は6ヶ月を要したという。」「多くの業績を残した彼の長い人生で、写真業はつねに中心的な仕事であった。彼は新しい技術が現れるとその都度マスターし、愛する山岳地帯の開拓地の風景を独自のステレオ写真にして販売もした。撮影旅行にはポータブルスタジオを携行した。自分自身を撮ったこの写真で、彼は1850年代末によく見られたスタイルのひげを生やしている（Joan Severa, p. 180より引用）。

第4章　子ども服

1. 乳・幼児の衣服の特徴

当時の赤ん坊の服は以前より凝ったスタイルになっており、通常、丈が前より長かった。決してあたりまえに行われていたわけではないが、途方もない金額を払えば、手縫いで作られ白糸刺繍で飾られた新生児用品セットを手に入れることもできた。ちなみに、雑誌に載っている洗礼式用の豪華なガウンは、その２倍もの丈がある。６ヶ月から９ヶ月を過ぎると、もっと自由に動けて歩きはじめる練習ができるよう、短いドレスを着せられた。３歳くらいからは、男児も女児も短いドレスの下にコットンの「ズボン（trowsers）」を履いた。男児のズボン（trousers）には暗色のコットン製やチェック柄のギンガムのものも見られたが、女児のものは一般的に白だった（Joan Severa, p. 107）。

以下において、乳児が写っている写真４枚を紹介・考察する。

ダゲレオタイプの写真39（1850年春）（本書, p. 112）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi［X3］43176*）の所蔵品である。

「赤ん坊は生後６、７ヶ月で、まだ赤ん坊用の広いネックラインと短い袖のついた長い服を着ている。また、1840年代に広く愛好された、ぴったりとした丸い帽子をかぶっている。手作りのレースか白糸刺繍（whitework）の丸い布で作られたこのキャップ（cap）には、小さな折り返し鍔とリボン結びが付いており、頭にしっくりと合うように作られている。母親が赤ん坊をくるんで抱えている無地で軽い羊毛製ショールは、基本的には女性が

写真 49　ダゲレオタイプ
1850 - 59 年
提供：***The National Museum of American History*　（C75.17.108 D）**，p. 129

写真 61　ダゲレオタイプ
1853 年
提供：***Historic Northampton*　（1980.19.9）**，
p. 144

外衣（wrap）としてはおるショール（shawl）と同じである。横に二つ折りにして両端の房飾りを合わせたショールが赤ん坊の服を覆っているため、赤ん坊のドレスの丈はわからない。」（Joan Severa, p. 114）。

ダゲレオタイプの写真 77（1856-59）（本書 p. 108）は、*The Worcester Historical Society (1932.188.12)* の所蔵品である。

セヴラ女史の解説には、次のように書かれている。

角度と光の加減で、赤ん坊の白くて長いスカートの細部ははっきり見えない。しかし、ドレスは浅いヨークに白糸刺繍が施され、短い袖が付いているようである。このドレスはフォトフレームの外まで広がっていて、ゆうに 1 ヤード［91 センチ］以上の長さがある（Joan Severa, p. 164 より引用）。

ダゲレオタイプの写真49（1850-59）は、The National Museum of American History (C. 75. 17. 108D) の所蔵品である。

被写体の子どもは、性別を問わない衣服を纏っている。セヴラ女史は、次のように解説している。

> ２歳から３歳くらいのこの小さい子は、男児か女児か確認できない。チェックのギンガム地を使い、腕の下で快適なフレアーができるよう裁断された長袖のピナフォーを着て、下には膝下丈で裾を暗色の布にして絞ったコットンかリンネルの「ズボン（trowsers）」をはくというこの服装は、性別を問わず広く子どもたちが着ていたスタイルである。サックに似たスタイルのこの服は背中が開いており、首の後ろだけボタンまたは紐で閉じられていた（Joan Severa, p. 129より引用）。

ダゲレオタイプの写真 61（1853）は、Historic Northampton（1980.19.9）の所蔵品である。

ドロワーズが写った貴重な写真である。ドロワーズは長い筒状で、かなり幅が広く、靴のはき口まで届く丈で、白糸刺繍の細いフリルを付けて仕上げられている。黒の深めの靴は、陰になっていてよく見えない（Joan Severa, p. 144 より引用）。

2. 幼児のサックの特徴

サックは上からベルトで締めることもできたが、サックの形状はつねに肩から下が膨らんでおり、ウエストラインには縫い目がなく、ドレスと同様に背中で閉じられた。少なくとも前面から見るとサックと似たスタイルの服としてピナフォー［エプロン型ドレス］があり、男児にも女児にも着られた。ピナフォーとサックの主な違いは、ピナフォーは背中の部分が開いていて、首の部分だけが閉じられているという点であった。サックもピナフォーも袖のスタイルはいろいろで、キャップスリーブもあれば、五分丈も、長袖もあった。 幼い子ども用に使われた生地には、ごく小さい模様がいろいろな色でプリントされていた。各地のコレクションに残っている生地には、暗色の地に小さなおもちゃの柄をプリントしたものもある。もっと柔らかい色合いでプリントされた小さい星、彗星、シャトルコックなどは、おそらくどちらかといえば女の子向けを意識していたのだろう（Joan Severa, P. 107より引用）。

写真62　ダゲレオタイプ
1853年頃
提供：*The Neville Public Museum*（*1370*）,
p. 145

ティンタイプの写真52（1851）（本書, p. 114）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*X*］*39777*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のように解説している。

一番小さい子（おそらく男の子）は、縞模様の足首丈のズボンをはき、肘丈の袖が付いた暗色のギンガムチェックのドレスとキャラコのピナフォーエプロンを着ている。前列中央の女の子は、小さな男の子のピナフォーと同じキャラコで作ったドレスを着ている。このドレスの袖は肘までで、袖口には共布のフリルが付いている。このような袖はわれわれが調べたアメリカのどの写真にも見られない。ただ、袖を除けば、このドレスはスカートの丈も含めてよくあるスタイルである。このふたりの子どものエプロンとドレスは、十中八九、年上の女性の古着を使って作ったと考えられる（Joan Severa, p. 132より引用）。

3. 幼児の帽子の特徴

女児用の帽子は広いリボンを結んで固定し、男児のものは細くてシンプルなテープかリボンを使った。男の子は6歳を過ぎた頃からこのスタイルの帽子をかぶらなくなり、代わりにいろいろな種類のキャップ［鍔なし帽］をかぶった。キャップは昔から長年にわたって人気があったが、この頃にひとつ新しい型が加わった。セーラーハットは適度に広い鍔があり、クラウンに巻いたリボンを後ろで結んで、端を長く垂らしてあった。1858年までには、平たい麦藁帽子が人気になっていた。ボンネットは大人の女性のためのスタイルであり、若い娘は16歳頃になってようやく—コルセットをして床丈のドレスを着て、流行の髪型に

写真 46　ダゲレオタイプ
1850 - 53 年
提供：***The Charleston Museum*** **（*MK 16*），**
p. 126

結い始めてから—ボンネットをかぶることができた（Joan Severa, P. 108 より引用）。

ダゲレオタイプの写真 62（ ca. 1853）は、*The Neville Public Museum (1370)* の所蔵品である。

麦藁帽がとても良く似合った幼児の写真である。セヴラ女史は、次のように解説している。

サラのドレスの詳細は、麦藁帽子に結んである幅広で立派なチュールスカーフのせいではっきりしない。このスカーフは、鍔の両サイドの下に取り付られているか、鍔とクラウンの境目近くの細長い穴に通してあるかのいずれかである。帽子の鍔の裏に張られた布の端は、繊細なネットのルーシュをかぶせて仕上げられている。この写真は、現存するこのタイプの帽子が大人の女性用のように見えても実はそうではなく、幼児や幼い女の子のためのものだったと特定するのに役立つ（Joan Severa, p. 145 より引用）。

4. 少年（10-14 歳）の衣服の特徴

男の子は、おおむね 10 歳から 14 歳くらいで長いズボンとチュニック（tunic）やジャケットを着始めた。 チュニックもラウンドアバウトも、裁断の面では女性服のカットを踏襲していた。1840 年代と同様に、12 歳か 13 歳くらいまでの少年が着る上着は、男性服よりは女性服のスタイルで作られていた。14 歳を過ぎると、彼らの服はずっと「男らしく」なり、大人のスーツや帽子を小型のレプリカにしたものもよくあった。

ダゲレオタイプの写真 46（1850−53）は、*The Charleston Museum*　*(MK16)* の所蔵品で

写真 48　ティンタイプ［鉄板写真］
1850 - 55 年
提供：***The National Museum of American History***（*C68.12.1*），p. 128

ある。

素材といい、デザインといい、おしゃれなフォーマルウェアーを装った少年の写真である。「この少年の服装はかなりフォーマルで、ベルベットの衿とくるみボタンの付いた、ダブルの暗色（おそらくは青）のウールのラウンドアバウト（roundabout）を着ている。長袖のシャツの袖口は、コートの袖から適切な長さだけ出されている」（Joan Severa, p. 126 より引用）。

5. 幼い少女の衣服の特徴

写真で見られる幼い少女のコットンドレスの多くは、広くて浅いネックラインまたは高いヨークのどちらかに、ギャザーをよせた身頃を直接付けて膨らみを出しており、袖は非常に短いフレアーで、時には中央を紐で引っぱり上げて肩で蝶結びにしてあった。 それとは別の、もっとドレッシーなシルク製のドレスは、ウエストラインが長めで、ぴったりフィットしたウエストの前中央部は少し下向きの丸みのあるカーブを描いており、肩まで見える浅いシンプルなネックラインになっていた（Joan Severa, p. 108より引用）。。

ティンタイプの写真48は、*The National Museum of American History*（*c.68.12.1*）の所蔵品である。

今日でも着れそうな服装の幼女の姉妹の写真である。「この姉妹が着ている普段着の夏服は、1850年代初めに一般的だったスタイルで作られている。ウエスト全体にベルトが付けられていることから、50年代のものと推定できる。生地は細かいギンガムチェックで、身頃が膨らむように裁断され、スカートはきれいにギャザーを入れて、自然なウエスト位置でウエストバンドに付けられている。ネックラインは浅く、曲線を描き、単にプリーツを見返しに向けて折り返して始末してある。」（Joan Severa, p. 128 ）。

6. 少女（8-14 歳位）の衣服の特徴

8歳から12歳くらいの少女たちは、大人の女性が着るドレスのスタイルに似ているが丈が短めの服を着ていた。冬用のドレスでは長くて細いバイアスの袖が付けられたが、それ以外の多くの場合、袖は短かった。 ドレッシーな服は、大人の女性のドレスと同じような型紙で作られ、格子縞や縞模様のシルク生地を使って作られた。大部分の服では、ウエストラインは自然なウエストの位置にあり、1850年代初めには長めだった。 多くの場合、ウエスト部分にはバンド状の布が縫い付けられていた。スカートは、大人の女性のスカートよりは短かったが、膨らみ具合は同じで、糊をきかせたペチコートとクリノリンで支えられた。 普通、14歳くらいになってドレスが床丈になるまでは、白い衿は付けられなかった。パンタレッツの着用については、多くの文献に書かれている。 この頃のストッキングは白が多かった。子どもたちには横縞の色物の長靴下が人気だった（Joan Severa, p. 109より引用）。

第5章　まとめ

1840 年代から 1850 年代にかけての女性服の基本的な変化はどうであったのか。各アイテムや部位ごとの変化については、本文で詳述した。多くの写真を敢えて、紹介させていただいた。例えば、袖のデザインのヴァリエーションの多様性が明らかとなった。本章の冒頭でセヴラ女史の見解を踏まえて述べたように、窮屈でないコルセットの登場、丸みを帯びたウエストラインの登場は、女性服の歴史における重大な改革と言える。女性服は、前下端部が丸みを帯びて、扇状の胸のついた大変高いウエストは、1840 年代末から 50 年代の日常着の写真に見られ、主に年配の女性に見られる。窮屈で硬いコルセットの代わりになる作業用タイプのコルセットが入手できたか、または昔のパターンを利用して家で手作りされたことは間違いない。これらの写真を収集されたセヴラ女史の努力は、アメリカの庶民女性の服装史に貴重な記録として、セヴラ女史の著作に刻まれている。本書に掲載させていただいた一枚一枚の写真を、筆者とセヴラ女史の解説を頼りに良くご覧いただきたい。

だが、他方において、1840 年代後半の、前身頃が長くて胸部を平らに押しつぶすコルセットは、1853 年までファッショナブルなドレスの下に着用され続けたのである。

アメリカでは、1850 年代を通じてひとつの“ドレスの規範”が支配していた。フープスカートがすべての階層に受け入れられるのに時間がかかったことを考慮に入れても、全国どの地域でも人々が同じようなスタイルできちんと身だしなみを整えていたことが、写真の中の姿に表れている。1850 年代には、最も貧しい層を除くすべてのアメリカ人が、規範にのっとった服装をして良い身なりを保つ能力を一様に持つことで知られるようになっていった。フープ・ファ

ッションは、それに飛びつきそうな人々、特に、そうしたお金と手間暇がかかるスタイルは富裕層の特権であると見なしたがる、裕福な流行牽引者や一部の道徳改革者たちよりも、労働者階級の女性たちの方に、急速に取り入れられた。それでも、このスタイルが確立されたのは 1856 年頃だと考えるのが妥当であろう。1850 年代の女性のファッションは最盛期には派手に飾り立てられたが、女性たちはシンプルな改造案とあまり高くない生地で似たようなものを容易に作り上げた。

個人の好みと状況に応じて生地や色の選択に幅広い違いが見られたにしても、アメリカの男性が平均的レベルではみな同じような服装をしていたことは明らかである。大きな帽子、片側だけに輪を作って水平に結んだ、気取ったネクタイ、1854 年以降は体より大きいサイズのコートとズボンがそれである。1850 年代半ばには、あらゆる階層の人々が同じようなスタイルの服を着ていた。

子ども服については、該当の項目にまとめた。

第 2-4 章　（注）

（1） Joan Severa，*Dressed for the , Photographer Ordinary Americans and Fashion，1840-1900，*The Kent State University , Press，1995.

第Ⅳ部　1860 年代

第 1 章　歴史的背景

1860 年代のアメリカは、南北戦争とその後の復興に力の注がれた 10 年間であった。南北戦争は、1861-1865 年まで続いた地域間戦争であった。南部地域は独立以前から、黒人奴隷を労働力とする大農園（プランテーション）が普及していた。特にイギリス産業革命以降綿花の需要が増大し、この地域の経済は発展を遂げた。南部地域はイギリスとは綿花の供給と工業製品の購入という相互依存の関係にあったため、自由貿易制度を主張し、奴隷制を存続させることを望んでいた。一方、北部は、産業革命が 40 年代以降本格的に進行することとなり、技術や生産においてイギリスと競合する関係にあった。そのため、イギリスに対抗する手段として保護関税対策を主張し、これを確実に実行するための連邦主義を望んでいた。また、奴隷制については道徳的見解から反対の立場を取っていた。このように、南部と北部の意識はことごとく対立していた。

両地域の対立は、西部に新しく誕生する州の争奪によってより一層激しくなった。1820 年両地域はミズーリ協定を結んで北緯 36 度 30 分以北に誕生した州は奴隷制を認めない自由州、以南を奴隷州にすることで対立は一時おさまっていた。しかし、1850 年カリフォルニアが自由州として連邦に加入、さらに 1854 年カンザス・ネブラスカ両準州が設けられ、その地域を自由州とするか奴隷州とするかは住民の任意に基づくとするカンザス・ネブラスカ法が成立した。この法案は、

ミズーリ協定を真っ向から否定するものであり、南北の衝突を起こした。それに伴い、奴隷制反対を唱える共和党が結成され、奴隷制をめぐる対立は決定的となった。1860年共和党のリンカーンが大統領選に当選した。しかし、南部はこれを認めようとせず、翌1861年にジェファソン＝デヴィスを大統領とするアメリカ合衆国を結成し、連邦を脱退した。そして、ここに空前の大内乱「南北戦争」が始まったのである。戦いは、初め南部軍は優勢であった。しかし、1863年1月、リンカーンは南部反乱地域の奴隷解放宣言によって内外世論の支持を集め、同年ゲティスバーグの戦いに勝利をえてから後は、北軍有利の情勢となった。1865年ついに南部の首都リッチモンドが陥落して南軍は降伏し、南北戦争は終結した。

南北戦争後、アメリカの経済・政治・社会・文化などあらゆる分野において主導権を握ったのは北部であった。戦後の北部は急速に工業化、都市化を進めていった。それに大西部開拓があいまって華々しい発展を遂げていた　(有賀貞, 大下尚一編, 1990年, pp. 196-197, 注〔和書（1）〕）。一方、南部の状況は悲惨なものであった。敗北以上に悲惨だったのは戦争による南部の社会全体の荒廃であった。建築物も農場も破壊され、かつての大農園制度は崩壊された（アリステア・クック著, 鈴木健次、櫻井元雄訳, 1994年, pp. 297-298, 注〔翻訳書（2）〕）。その結果、南部の土地所有者は没落、代わりに中産階級が台頭してきた。南部の恵まれた自然も、築き上げられてきた南部特有の文化も共に破壊された。南北戦争は戦前の繁栄していた南部農業を崩壊させ、一時的経済停滞の原因を作り出したが、この戦争がその後のアメリカの世界経済での中心として成長させたのであるという見方もある（斎藤真, 金関寿夫, 亀井俊介, 岡田泰男監修, 1986年, p. 336, 注〔和書（3）〕）。

しかし、当時の南部は経済・政治・文化あらゆる分野で悲惨な状況にあった。南北戦争の目的となった奴隷問題は、1865年「黒人諸法」といわれる法律の制定により、400万人の奴隷が解放されたことで表面的には決着した。しかし、彼らは行くあてもなく、また彼らに対する差別はその後も長く残ることとなった。そんな南部にはあらゆる分野において再建の必要性があった。経済復興、街全体の再建、文化の再生など幾つもの課題が残されていた。衣服も、その再建の対象の一つであった。経済復興の進まないなか、人々は十分な衣類を手に入れることができないでいた。そのため、女性たちは手に入れることのできた生地や古着を活用して、自分たちのスカートや子ども服など様々な衣服を作り出していた。このような女性たちの様々な努力によって衣服文化の再建は一歩を踏み出したのであろう。

第1章　［注］

和書

(1)　有賀貞, 大下尚一編, 『概説アメリカ史［新版］―ニューワールドの夢と現実―』 有斐閣 1990 年発行, pp. 196-197.

(2)　アリステア・クック著, 鈴木健次, 櫻井元雄訳 『アリステア・クックのアメリカ史（上）』 日本放送出版協会発行 1994 年, pp. 297-298.

(3)　斎藤真, 金関寿夫, 亀井俊介, 岡田泰男監修 『アメリカを知る事典』 平凡社発行 1986 年, p. 336

第2章
ヨーロッパがアメリカの服飾に与えた影響

1860年代半ばまでヨーロッパでは、クリノリン衣装（写真①②）が流行していた。クリノリンに用いられたローブは、ワンピース形式で、非常に精巧に仕立てられていた。また、前あきボタン留め形式のものが多く、女性らしい装飾的な衣服であった。しかし、60 年代半ばには、その流行は衰えを見せ始めた。そして、1868年頃には、半クリノリン（写真③④）で、スカートを後方で膨らませたポロネーズ型と呼ばれるドレスへと変化を遂げたのである。このように1860年代は、ヨーロッパでは新たな衣服文化が発達し、人々がファッションに興味を注ぐことのできた時代であったが、南北戦争を迎えたアメリカではそうではなかった（丹野郁, 原田二郎, 1996年〔和書（1）, p. 178）。第1章でも詳しく述べた通り、1865年4月、南部は北部に降伏して戦争は終結したのであるが、南北戦争は1860年代のファッションに明確な差をもたらした。セヴラ女史は、次のような見解を示している。1860 年代前半、南北戦争は当然のことながら物不足をもたらし、物不足は当然のことながら物価の高騰と一部地域での物資欠乏につながった。南部の綿が供給されなくなったため、ニューイングランドの織物工場は戦争中に深刻な生産縮小と工場閉鎖に直面し、綿業界は戦後も真に回復するに至らなかった。1860 年代初めにはアメリカの海運業が一時停止状態になり、海外からの織物の輸入が中断された。南部では、人びとはお金の不足に加えて、ほとんどの輸入品や北部の織物製品が手に入らず、物不足は壊滅的なほどであった。

写真①　クリノリン・ペティコート
ロンドン　ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵
丹野　郁撮影
丹野郁，原田二郎共著 『西洋服飾史』
衣生活研究会 1996

写真②　クリノリン衣装
ロンドン　ヴィクトリア・アルバート博物館所蔵
丹野　郁撮影
丹野郁，原田二郎共著 『西洋服飾史』
衣生活研究会 1996

結果的に、市民の窮乏は言うまでもなく、軍さえも十分な服、暖かい毛布、さらには包帯までの不足にあえいだ。 多くの記録によれば、南部の女性たちは国旗や軍旗を作るためにシルクのドレスを裂き、解きほぐしたウールの毛布や衣服で靴下やミトン（mitt / mitten）を作り、古い毛布や衣類から兵士の帽子やシャツを作るなど、目につく織物のすべてを使いきった。女性たちはお蔵入りさせていた家内作業を蘇らせ、糸紡ぎや機織りや編み物を学んだ。綿花農園に残された少数の人びとが育てて収穫した低品質の原綿は、紡がれて低品質の糸になり、織られて粗悪な布になった。ペチコートをすべて包帯や赤ん坊の服に作り変えてしまった南部の女性たちのうち、まだフープ（hoop）を持っていた者は、自分で織った布をフープにかぶせてそれだけを着用していたと言われる。 後年、多くの女性たちが当時を回想して、質素で貧弱な手織り布の衣服を着ることがひとつのスタイルになっていた、みんながそれを着ていたからだ、と記している。

写真③半クリノリン
パリ　衣装博物館所蔵
丹野郁，原田二郎共著 『西洋服飾史』
衣生活研究会 1996

写真④半クリノリン衣装
パリ　衣装博物館所蔵
丹野郁，原田二郎共著 『西洋服飾史』
衣生活研究会 1996

当時のそうした服の写真はほとんど現存していないため、南部でそのような状況がどのくらい広がっていたのかとか、代用衣類がどんな特徴を持っていたかを知ることは、今後も永遠に難しいままだろう（Joan Severa，p. 186）。

1860 年代の各地域の状況は、第 1 章で述べた通り、全く別個の様相を呈していた。だが、南部においても北部においても、ファッション雑誌の普及により、流行の情報が届けられていたことはほぼ間違いない。北部においてはたいてい至る所で発行され続けており、西部においても、質素な衣服でさえ、流行のスタイルに作られたようである。このファッション雑誌の影響は、かなり大きいものであったと推察される。セヴラ女史は、ファッション雑誌を手に取ることのできた女性たちは、たとえ貧しくても流行についていくことができたことを強調している。

本章には家庭裁縫に携わっていた人々、学校の教師、リフォーム・ドレスの運動に携わっていた人々、移民、西部入植者、農業労働者、解放奴隷、自由黒人、ネイティヴ・アメリカンなどミドルクラスや下層階級の様々なカテゴリーに属する庶民の写真が掲載されている。そこで、本章では 1840 年代、および 1850 年代とは異なる視点から、写真

の紹介、考察を行うこととする。すなわち、階級的視点・ジェンダーの視点から見た服装、人種・民族の視点からみた服装という分類をおこなった。なぜなら、解説に掲載した一覧表に見るように、写真技術の発展に伴い、被写体の範囲が一部の金持ちの中流階級以上の人々から、庶民、すなわち、中流・下層の民衆へと広がり、移民、西部入植者、農業労働者、解放奴隷、自由黒人、ネイティヴ・アメリカンなどミドルクラスや下層階級の様々なカテゴリーに属する庶民の写真が掲載されているからである。

【第2章】　〔注〕

和書

⑴　丹野郁，原田二郎共著 『西洋服飾史』 衣生活研究会 1996年発行

洋書

⑴　Joan Severa，*Dressed for the Photographer Ordinary Americans and Fashion，1840-1900，* The Kent State University , Press，1995.

第3章
階級・ジェンダーの視点から見た服装

1. 裕福な女性の服装

(1) 全体の特徴

1860年代、スカートは全体に膨らんだ状態が一般的であり、ソフトプリーツをあしらって膨らみを出していた。しかし、60年代半ばには、前スカートが平坦になり、前面から側面にかけて幅が狭くなって後方へ張り出し、新しい楕円形の張り骨をぴったりと覆う形状に改造された。また、1864年には襠入りのスカートが導入された。前スカートの幅は全体に縮小し、後ろスカートはプリーツで調整して引き裾にし、後方へ膨らみを出していた。この新しい裁断方法は、少なくとも1866年にはキャラコ製の日常着にさえも取り入れられていたようである、との見解をセヴラ女史は示している（Joan Severa, p. 194）が、残された日常着の写真からはこのようなスタイルはめったに見られない。1864年4月号のファッション雑誌がこのスタイルについて記載しており、1866 年頃のものと思われる写真には、このようなスタイルの女性が撮影されている（写真137, 本書, p. 174）。これは、明らかにファッション雑誌をすぐに取り入れることのできる余裕のある女性が着用した日常着であろうと推察され、彼女はこのような一部の余裕のある人々を対象にしてこのような見解を示していると考えられる。

写真119　カルト・ド・ヴィジット
1863 - 65年
提供：***The Chicago Historical Society***
(Chi-20251)， p. 245

その他の要素として、高いウエストの位置があった。この特色は、1865 年以降に誇張されることとなったようである。また、このときに作られていたのはヨーロッパのエンパイア・スタイルの影響を受けたものであり、60 年代を通じた典型的なスタイルとなった。

Plate 11 *Godey's Lady's Book* の 1865 年８月号には、ドレスをたくし上げる慣習についての記載が見られる。左から二番目の「ボールコスチューム。 緋色と青い三日月が刺繍された白い絹のアンダー・スカート。 アッパースカートは白いちりめんで、正面から鮮やかな羽の鳥で引き上げられています。」（Accessible Archives）。この慣習は、散歩用のドレススカートが道路に擦れないようにする必要性から始まったものであり、アンダー・スカートの装飾的なデザインを見せるという流行のファションへと発展した。このような事例は、写真 119 の二人の女性に見られるが、資料の写真の中では一枚だけである。この頃、スカートはもう既に地面を擦らないほどに短くなっていたといわれており、これは一時的な流行であったと思われるが、雑誌に取り上げられたこのような流行にさえも多くの女性たちが関心を抱いていたことがうかがえる。

60 年代に流行した裁断は、肩は、アームホールの上腕部分をほぼ水平にすることによって極端に長く勾配のあるドロップショルダーとなった。この時期の木綿製の日常着や労働着には、身頃やヨーク、ウエストバンドに襞やギャザーが入っていた。これらの事例は、資料の写真にも数多く見られる。

カルト・ド・ヴィジットの写真119（1863 - 65年）（Joan Severa, p. 245）は、*Chicago Historical Society (Chi-20251)* の所蔵品である。

Plate 11 ***Godeys' Lady's Book*** **August 1865**

被写体は、シカゴのテレーズ・コリの２人の独身女性である。彼女たちのおしゃれな外出着に注目したい。「たくし上げた」スカートをはいている。この装いについてのセヴラ女史の詳しい解説は興味深い。アメリカの服飾史上、必要箇所を紹介させていただく。

> 1861 年頃にパリで紹介されたスタイルを手本にしている。……このスタイルはもとはといえば、冬の雨の日や春の雪解けの時期にスカートが地面を引きずって汚れるのを防ぐために始まった。だが、流行のファッションとして若い女性たちに採用された時にはスカート丈は既に地面に付かないくらい短くなっていて、ルーピングは若い女性がどれくらい流行に敏感かを誇示するためのものになった。ただ、『ポルト・ジュプ（porte-jupe）［スカートをたくし上げる道具］』を使用してルーピングをする場合、本当なら格子縞またはストライプのしゃれたペチコートをはくべきなのだが、この少女たちはどちらもそうしていない。……

左のテレーズは、調節可能なスカートの上に、同じ生地で作ったダブルの短いパルトー・ジャケットを着ている。このジャケットには、袖の根元に先の尖った二重のエポーレットがあって黒いブレードで縁取りが施されているとか、ポケットも同様に二重のフラップが付いているなど、とてもファッショナブルな細工がほどこされている（Joan Severa, p. 245）。

セヴラ女史は、以上のように、たくし上げスカートについて、詳しい情報を掲載している。

（2） 袖

以下、セヴラ女史の記述の要約・紹介をさせていただく（Joan Severa , p. 196）。
1860年から62年までのファッション・プレートには、非常に幅の広いベル型をした八分丈のフレアスリーブが見られる。このタイプの袖は、上腕の周りにぴったりしたバンドまたは先の尖ったタイトなスリーブキャップ［袖の付け根の上に付けられたキャップ］が付いていることも多い。このスタイルの袖が付いている1860年代のドレスを1850年代末のドレスと区別する手掛かりは少なく、身頃のカットの短さ、レース飾りが付いたバルーン型の巨大なアンダースリーブだけのこともある。プリーツを取ってアームホールに取り付け、袖口はびっしりギャザーをよせて始末した極端に大きなビショップ・スリーブ（bishop sleeve）は、1857年初めにファッション・プレートに登場し、1862年まで時折掲載された。 このビショップ・スリーブが最大のサイズになったのは1861年で、この『レスリーズ・イラストレーテッド・ニューズレター（Leslies' Illustrated Newsletter）』3月号には「袖用クリノリン」の解説が載っている。そのクリノリン（crinoline）の挿絵を見ると、被覆針金を曲げて楕円形のバルーン形を描くように配置し、上腕と手首の位置には着脱用のバンドを付け、水平に渡したテープで被覆針金同士の間をつなげて、袖が腕から離れた位置に保たれるようにしている。このタイプの袖は、一部のスタイル（たとえばコンデ・スタイル）の服に付ける場合には非常にタイトなものが人気で、それ以外の場合はゆとりのある筒状に作られて、時には肘から下を大きく広げたスコップのような形にされ、袖口はアンダースリーブの下部が見えるくらい十分に大きかった。

ダゲレオタイプの写真99（1860-62）は、*The State Historical Society of Wisconsin* (*WHi*

写真 99　ダゲレオタイプ
1860 - 62 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi ［X3］ 35904）, p. 217

[X3] 35904) の所蔵品である。

被写体の背景情報は「この美しいポートレートでは、ウィスコンシンの若く裕福な母親であるフランシス・アダムズ（Frances Adams）が、おそらく生後８ヶ月くらいの娘とともにポーズを取っている。」とのことである。

ドレスの素材はシルクで、袖はオープンスリーブである。セヴラ女史は、次のように解説している。

> 柔らかな黒いシルクドレスはＶネックで、全体にソフトな襞が見える。袖は 1860 年代初めに流行したオープンスリーブで、上腕部に２つのパフが配され、肘の位置に黒いレースで縁飾りがほどこされている。非常にふっくらとしたアンダースリーブ（undersleeve）には、透ける薄さの黒いレースのバンドが縦に付けられている。これは 1860 年頃から女性雑誌のイラストに描かれ始めた、典型的な流行のアンダースリーブである （Joan Severa, p217 より引用）。

なかなかお洒落な袖とアンダースリーブである。

(3) 衿

白い衿は 1860 年代にも日常着とともに着用されていたが、サイズは一様に小さくなった。リンネルまたはコットンで作られた先の尖った白い衿は、衿先に刺繍がほどこされた。刺繍には時には色糸が使われ、人気のモチーフは蝶だった。無地のリンネルの立ち衿というのは、高さが 0.75 インチから 1.25 インチ［1.9～3.2 センチ］程度で、よくキャラコの日常着や軽いウール地のドレスに付けて着用された。オークの埋もれ木や黒玉の装身具が流行した 1860 年代末には、こうしたブローチにも非常に大きなものが現れた。ネックリボンは 1850 年代ほど

の人気がなく、着ける場合には、男性のネクタイのサイズの縮小を反映して、非常に幅の細いリボンが使われた。上質のモスリンのネックウェアーが人気だという話が、ファッション誌のコラムで取り上げられていたが、本研究のために調査した写真からはその裏付けは得られなかった（Joan Severa, p. 99）。

(4) ジャケット

1860 年代にはジャケットが多く着用されるようになり、一部のジャケットはドレスとお揃いの生地で作られた。1860 年代に入ってすぐに初めて紹介された時のパルトー・ジャケットは、正確にはサック（sack, sacque）であり、肩から緩やかにフレアーをなして広がるスタイルで、だいたいヒップの辺りまでスカートの上にかぶさっていた。1860 年代にしては非常に目新しいこのスタイルは、1850 年代のバスキーヌ・ラップにいくらか似ているが、ウエストの縫い目がない。1860 年代末近くなると、一部のパルトーはかなりぴったりしたフィットになり、両脇にスラッシュ［切り込み］があるにもかかわらず、ベルトを締めて着用された。

シャツブラウスの上に着る「スペイン風」または「ボレロ（bolero）・スタイル」の袖なしジャケットは、1860 年代に人気が高かった。このタイプのジャケットは非常に丈が短く、長くてもウエスト丈で、前身頃の正面の縁がカーブを描いて背中の方へ向かっていた。ジャケットはウエスト丈で、前の開きの縁は丸みを帯びたラインを描き、わずかにフレアーのある肘丈の袖には、袖口から背側の縫い目に沿って曲線のスリットがある。着古した身頃を切り離し、ウエストバンドから下のスカートは残しておき、スペイン風またはズアーブ・スタイルのジャケットを新たに作って、残したスカートとプレーンな素材のブラウスと一緒に着ましょう、というものである。 こうしたスカートとブラウスとジャケットの組み合せは若い女性のみに勧められ、大人の女性はカジュアルな装いでもワンピースドレスを着用する習慣を守るべきだとされていた。既製品の婦人用外衣は長い間輸入品がほとんどだったが、1860 年代になるとアメリカ国内の女性用外衣製造業が繁栄した（Joan Severa, pp. 202-203 を要約）。

(5) 外套

その袖は、ドレスやジャケットの袖の上に着れるように大きく作られ、生地と対照的な色の紐、ブレード、幅広のリボンで華麗に装飾されていた。袖口をフレアーにして広げるスタイルは、コートスリーブの流行にともなって 1860 年代初

めには消え去った。最新のファッション情報を伝える記事では長いクロークやラップが取り上げられていたが、そうした上衣は巨大なフープのせいでたくさんの布を必要とし、従って高価であった。写真に見られるラップの大部分は丈が短いものか、ショールである。丈の長い旅行用クロークや「レインコート（waterproof）」は比較的安い素材で作られ、すべての倹約家の女性にとって必需品とみなされた。この時代には「埃色をした（dust-colored）」リンネルのフードつき旅行用クロークについての興味深い記述が見られる（Joan Severa, p. 204 を要約）。

(6) 下着

① コルセット

1860 年代スタイルに合った形に胴体をこしらえるコルセットは、1850 年代末の流行の流れを汲んでおり、丈が短く、胸の部分は広く、胸郭は小さく、裾は大きく広がって、ウエストの下数インチまでだけを覆う形であった。上の方に襠が入っていて、1850 年代に比べてはるかに快適に着用者の胸を包むことができた。ドレスは、よりしっかりと形を保つために、縫い目やダーツの部分だけでなくその中間にも張り骨が入れられ、前中心でホック留めされるようになったが、背中での紐締めもまだ調整のために使用されていた。シュミーズには適度な膨らみがあり、それをコルセットで絞ることによって、コルセットより下では広がった短いアンダー・スカートになった。また、健康のためにリフォーム・ドレスを着用していた女性なども、この締めつけるコルセットを放棄していたようである（Joan Severa, p. 200 を要約）。

② シュミーズとペチコート、クリノリン

1860 年代中ごろのシュミーズの裁断について、キャサリン・E・ビーチャー［アメリカ合衆国の女性のための高等教育の初期の推進者］とハリエット・ビーチャー・ストウ［アメリカ合衆国の奴隷制廃止論者。『アンクル・トムの小屋』の作者］の『アメリカ女性の家庭（The American Woman's Home）』（1869）には次のように記されている。シュミーズには適度な膨らみがあり、それをコルセットで絞ることによって、コルセットより下では広がった短いアンダー・スカートになった。シュミーズの肩先には小さなキャップスリーブ（cap sleeve）が付いており、ネックライン（neckline）は一般に広く、カーブしていた。 シュミーズの上にコルセット、プレーンなペチコート（冬には、白いウールフランネルのペ

チコートも使われた）、何らかのクリノリンかフープの順に着て、最後にスカートをふんわりとさせるために上質のモスリンのペチコートを１枚か２枚重ねて、フープの針金を隠した。

このフープは通常、ケージ・クリノリン（cage crinoline）［鳥かご状のクリノリン］スタイルで作られ、前面には丸みをつけていない平らな被覆針金を使い、それらをテープで固定して、スカートの前面に平らなシルエットを作った。 この形のフープはアメリカでは1860年代末まで存続し、年を追うごとにヒップの幅が狭くなっていった。1850年代初めにパリでフープが紹介された時、保守的なアメリカの女性たちはそれをあまりに危険なものと考えた。ところが、1860年代末になってパリがフープ着用をやめると言いだすと、アメリカの保守的な女性たちは、フープがなくなったら体型がはっきり見えてしまうことを恐れて、フープなしで過ごすことを拒んだ。 大きなフープを使わないとなると、女性たちは手持ちのドレススカートをすべて裁断しなおして円周を小さくしたり、新しいスカートを作ったりしなければならないからだ。実際、1860年代中頃にはフープの着用が広まっていて、フープを使わない女性は奇異の目で見られてもおかしくなかった。1860年代の終わり近くには、コックやメイドでさえフープを着用していた。だが、たとえば、肉体労働をしていた女性や工場で働いていた女性たちは、たいていの場合フープを使わない方がうまく作業できるという判断を自ら下した（Joan Severa, pp. 200-201を要約）。

(7) アクセサリー

この当時のアクセサリーとして重要なものは、ベルト、パラソル、宝石などである。これらについては、多くの記述がファッション雑誌に掲載されている。レースが上流階級の基準としてみなされていたように、本当に余裕のあった人だけが、これらのアクセサリーを身に付けることができたのではないだろうか。また、この60年代にリフォーム・ドレスを着用していたドレスリフォーマーたちは、女性らしさを忘れず、可愛いアクセサリーを身に付けたり上質の素材を用いたりしていた。リフォーム・ドレスを受け入れたのは肉体労働をする女性だけであり、ドレスリフォーマーたちは新聞紙上で嘲笑されていたことは非常に興味深い（Joan Severa, pp. 197-199を要約）。

(8) 被り物

写真 108　　ダゲレオタイプ
1862 年 7 月 4 日
提供：*The Essex Institute* , p. 229

1860 年代、つけ毛の新しいファッションは、頭のバランスの取れたサイズを劇的に変化させ、帽子の形とサイズもそれに対応して変化した。60 年代末には、流行のヘアー・スタイルはますます複雑になり、サイズも増加したため、女性の頭の大きさをかなり変化させ、帽子やボンネットのスタイルにも変化を及ぼし、小さな帽子の流行に至ったようである。髪型を整えるために、1860 年代後半には、ヘアグッズの広告が女性誌や新聞紙上に現れていたが、精巧なスタイルに女性が例外なく従ったというわけではない。しかし、誇張された髪型でないにしろ、女性たちは小さな帽子やボンネットを被ったり、三つ編みやアップの髪型に結ったりしていた。60 年代、年配の女性を除く全ての女性によって帽子が身に付けられていたようである。

60 年代において、髪のアクセサリーとして特に重要なものはヘアーネットである。また、ボンネットは初期には高く、スプーン型をしていた（写真 110）（Joan Severa, p. 232）が、1864 年頃には小さくなっている。この時代のボンネットは、頭のはるか後方に被られ、幅の広いリボンの紐を使用していた。そして、被り物もまた、多くのファッション雑誌の記述が残っている（Joan Severa, pp. 205-207 を要約）。

以下において、裕福な女性が写っている写真の紹介・考察をする。

ダゲレオタイプの写真 108（1862 年 7 月 4 日）（p. 229）は、*The Essex Institute* の所蔵品である。

被写体の場面と背景情報であるが、セヴラ女史は、次のように解説している。

> この珍しいダゲレオタイプは、ジョージ・ニコルズ（George Nichols）の 84 歳の誕生日を祝うパーティで撮影された。彼は中央に座っており、彼から見て右隣に妻のベッツィー（Betsy）がいる。……ニコルズ家はセイラム の有力者で立派な家に住んでいたが、町の記録によると彼らは何度も経済的失敗を経験しており、決して大富豪で

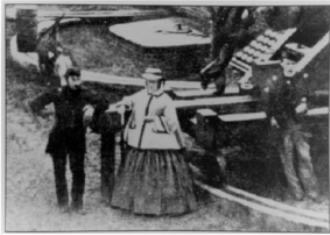



写真 111　1862 - 64 年
提供：*The Fort*, *Pulaski National Monument*,
p.233

はなかった。

セヴラ女史は写真の右端の女性のドレスについて、興味深い解説をしている。

一番右端の孫娘のマーサ（Martha）は、ドレスの下にフープを着用しているのが明らかにわかる。ここに写っている女性全員がフープを身につけていると考えて間違いないだろう（ただし、もしかしたら祖母だけは例外かもしれない）。マーサのドレスはこの写真の中である程度まで全体が写っている唯一の服だが、1860 年代初めの若い『未婚の』女性用の典型的な形に作られている（Joan Severa, p209 より引用）。

写真 111（1862-64 年）（p. 233）は、*The Fort Pu1aski National Monument* の所蔵品である。

場面についてであるが、要塞化された島の宿営地に滞在した女性がターゲットである。セヴラ女史は、この宿営地の様子について、次のような貴重な記録を書き綴っている。

当時は、要塞化されたこの島に渡る手段としては、船しかなく、島内には将校たちの住居区画と、徴兵された兵士が暮らす兵舎があった。将校の一部は妻を呼び寄せたが、それが占領後どれくらい早い時期だったのかは不明である。記録によれば、比較的安全な時期には妻たちがあちこちの宿営地を訪れ、時には何週間も滞在したという。島の要塞での占領活動の様子は、多くの写真に記録された。それらの写真は、画像こそ鮮明ではないものの、歴史的に重要な価値を持っている（Joan Severa, p233 より引用）。

写真に見る女性の外出着は、次のように描かれている。

将校とその妻と思われる女性が写っているこの写真は、1860 年代初めのある晴れた日に砦の砲床で撮影された。女性の外出着の全身像をはっきり捉えたすばらしい例

写真 137　1866 年頃
提供：***The Oakland Museum***
p. 270

であり、写真として珍しいものである。若い女性が、四方に大きく広がるフープの上に床丈の濃色の外出用ドレスを着用し、パルトー（paletôt）・ジャケットを羽織って、麦藁帽子をかぶり、扇子を持っている。フープの幅が広くて丸い形であることは、撮影されたのが 1862 年に近い日付である可能性を強く示している（Joan Severa, p233 より引用）。

写真 137（1866 年頃）　(p. 270）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。

セヴラ女史は、ふたりの裕福な若い女性の最新型のファッションを、以下のように、非常にリアルに描写している。必要箇所を引用させていただく。

並はずれてファッショナブルな若いカリフォルニア女性がふたり、ポートレートのためにポーズを取っている。立っている女性はコルセットをきつく締め上げ、最新型の楕円形のフープ（前は膨らまずに下に落ち、後ろは大きく膨らんだ形のもの）を着用している。このフープのおかげで、たくさんプリーツを入れたゴアードスカートの三角形のラインがきれいに出ている。ここまで滑らかなラインを出すためには、クリノリン（crinoline）の上にコットンのペチコートを少なくとも２枚重ねなければいけなかったろう。座っている女性も、負けず劣らずの高価なドレスを着ている。ただ、スカートと袖は立っている女性のドレスほど鮮烈なデザインではない。……身頃はハート形に仕上げられ、シルクのフリンジで装飾され、共布リボンのバンドが巻かれている（Joan Severa, p271 より引用）。

2. 庶民女性の服装

(1)　家庭裁縫の女性服

写真 116（1863－65 年）　(p. 242）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。庶民の女性のドレスの写真である。

写真 116　　1863 - 65 年
提供：***The Oakland Museum,*** p. 242

一見すると流行を取入れたファッションに見えるが。庶民性はどこに現れているのであろうか。セヴラ女史はこう語っている。

　スカートの丸く広がった（引きずっていない）裾近くには、フープの一番下の輪があることが容易に見てとれる。スカートは、ウエストラインのサイドフロントにナイフプリーツ（knife pleats）が取られているが、下のフープが比較的小さく、普通のドレスほどの膨らみが出ていない。これは布を節約して裁断したことをあらわしているのかもしれない（彼女の背後にある台のせいでフープは不自然に押し出されてゆがみを引き起こしているせいもあるだろうが）。この女性が保守的な性格であることは、シンプルでかっちりとした髪型や、おそらくお手製と思われるズアーブ・ジャケットからはっきりと見て取れる。ズアーブ・ジャケットは丈の短いタイプのジャケットで、古くなった黒いシルクの外衣やスカートをリフォームして作り、生地代をかけずに済ますことがよくあった。写真のジャケットは、縫い目と縁を全部、明るい色のパイピングで飾っている。1860 年代に黒い服のパイピング（piping）としてよく紹介されているのは、マゼンタまたは赤いシルクのパイピングである（Joan Severa, p242 より引用）。

写真 117（1863-65 年）（p.243）は、*Nancy Marsha1 Fischer* の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の背景情報を次のように書いている。多産の母親の逞しさが如実に感じ取られる。

写真 117　1863 - 65 年
提供：***Nancy Marshall Fischer*** **, p. 243**

1823年生まれのロザンナ・レイスロップ（Rosanna Lathrop）は、写真撮影時には40歳から42歳くらいである。このポートレートの年代推定の一番の手掛かりは、彼女の一家の歴史記録である（子孫の手で完全な家系図が作られている）。

ロザンナと夫のアゼル（Azel）は、ミシガン州のアッパー半島のマーケットという町の近くでかなり広い土地を耕作していた。……彼女は42歳の頃までに少なくとも８人の子を生み、うち６人（女の子４人と男の子２人）が生存していた。ロザンナは、自身と子どもたちの服の大半を自分で作っていたことが知られている。一家は貧しく、お針子に仕立賃を払う余裕がなかった。しかし、この写真で彼女が着ている新しいキャラコのドレスは大きなビショップ・スリーブとたっぷりした膨らみのプリーツスカートを持つしゃれた形で、スカートの下にはフープをはいてる。ロザンナはどちらかといえばウエストが太いが、コルセットを着用している。彼女の体型は、当時流行したウエストが細く曲線のラインを見せる新しいシルエットに、何度も妊娠・出産を経た身体を適合させた様子をよくあらわしてい（Joan Severa, p. 244 より引用）。

セヴラ女史は何度も妊娠・出産を経た庶民の女性の体型とおしゃれ心をこの衣服を通して、とてもリアルに表現している。まさに、民衆の生活文化をありありと感じ取れる
一枚の写真である。

写真 118（1863-65 年）（p. 244）は、*Nancy Marshall Fischer* の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の背景情報について、詳しく解説している。

写真18　1863-65年

提供　***Nancy Marshall Fischer,* p. 244**

前ページのロザンナ・レイスロップと夫アゼルの長女メアリー・レイスロップ（Mary Lathrop）は、この写真の撮影時には10歳前後であった。……農家の娘で、他に少なくとも5人のきょうだいがいたメアリーは、新しいドレスをわずかしか持っていなかった。……メアリーの子ども時代のドレスは間違いなくすべて母親の手作りで、メアリー自身もおそらく10歳くらいから縫い物の手伝いを始めたはずである。細かいチェックのギンガムを使ったメアリーのドレスは、わざと少し大きめに作られ、背が伸びることを見越して裾に大きなタックがとられている。……ロザンナはメアリーのドレスに、実用性のほかにいくらかの可愛らしい若々しさを盛り込んだ。

……ただひとつ違うのは、裕福な家の子であればこのような服は日常着でしかなく、あらたまった場面ではもっと大人びたファッションを身にまとったであろうという点である（Joan Severa, p. 241より引用）。

我々は、これらの写真117と118を通して、母の子に対する深い愛情をしみじみと感じとることができる。筆者の母親もフェルトの真っ赤なジャンパースカートにヘムを沢山付けて作ってくれ、私が成長すると紫色に染めて、スカートの丈を長くして身長に合わせてくれたのを思い出す。

(2)　ドレスメーカーによって仕立てられた女性服

写真115（1863年頃）（p. 240）は、*The Rock County Historical Society*の所蔵品である。

とてもおしゃれな二人の女性の写真である。衣裳は1860年代初期のスタイルのように思われる。セヴラ女史は、彼女たちの衣裳について、詳細にわたる解説をしている。一部を紹介させていただこう。

写真115　1863年頃
提供：***The Rock County Historical Society(RCHS4),*** p. 240

ウィスコンシン州のふたりの若い女性が、ポートレートの中で上品なコントラトを見せている。どちらも、この頃に流行し始めた楕円形で細めのフープではなく、1860年代初頭の大きく広がったフープを使用している。右側の女性が着ている比較的おとなしい服のうち、スカート部分を仕立て直したもので、薄い色で厚地のウールかウール混紡の生地で作られており、裾には幅の異なる黒ベルベットのバンド状の布が２本付けられている。彼女は全方向に大きく広がるフープの上にこのスカートをはき、ウエストは金属製のバックルの付いた黒のベルトできつく締めている。上は、大きく膨らんだ袖が付いた白のコットン（またはリンネル）のガリバルディ・ブラウスの上に、ゆるやかに垂れる袖を持つ黒いシルクまたはベルベットのズアーブ・ジャケットを着ている。シンプルな髪型をして、まったく飾り気のない暗色のパラソル（ parasol）を持っている彼女は、1860年代の若い女性のうち、流行を意識してはいるものの保守的で節約を心がけるタイプの代表といえる。……左側の女性が着ている新型の曲線形状のコルセットの上にぴったりフィットした最先端のスタイルの身頃は、ウエストフロントがジョッキーポイントにデザインされ、ヨークライン、前立て、ウエスト、袖に黒い縁飾りが多用されている。袖は、膨らみのあるコートスリーブにさらに手間をかけたデザインで、肘のところがカーブを描いており、カフス部分は大きく広がっていて縁に精巧な装飾がほどこされ、袖口の下からたっぷりとしたアンダースリーブがのぞいている（Joan Severa, p240より引用）。

写真 98　カルト・ド・ヴィジット
1860 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*** *（WHi ［X3］ 45125）*, p. 216

写真 130　1865 - 67 年
提供：***The Rock County Historical Society*** *（RCHS 12）*, p. 258

ずいぶん長くて、詳細にわたる解説である。セヴラ女史の衣服に対する造形の深さがありありと伝わってくる。衣服の実物を知らなければ、ここまで具体的な解説を書くことは能わないであろう。さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

(3)　日常着

カルト・ド・ヴィジットの写真 98（1860 年）（p. 216）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *45125*）の所蔵品である。

撮影場所については、こう書かれている。「1860 年、メアリー・バグリー（Mary Bagley）が 45 歳の時の写真。写真には『カートン写真館、ウッドストック c.w.（Kirton, , Photographer, Woodstock c.w.）』というスタンプが捺されている。」服装は、中年女性向けの保守的な散歩着か外出着であるとのこと。デザインや素材について、次のように解説されている。

写真 103　　ティンタイプ　1861-62 年
提供 *Historic Northampton*　(*56.698*)，
p. 221

バグリー夫人はもっぱら中年女性が着るような保守的な服を着ており、まったくの流行遅れとは言えないものの流行の盛りに合わせたファッションではない。むしろこの姿は、ある程度の金持ちで趣味もそれなりに良い女性が、訪問や散歩の際に着用することを期待された服装をあらわしている。彼女が着ているのは、1850 年代末の肩幅の広いスタイルに裁断された上質の黒いアルパカ（alpaca）の昼用ドレスで、肩からウエストの前中心へ向かって次第に細くなるプリーツ（pleat）が取られている。ウエストは前中央がほんのわずかに尖っている以外は丸く作られてパイピングされ、身頃は前あきでくるみボタンで留められている（Joan Severa, p. 216 より引用）。

写真 130（1865-67 年）（p. 258）は、*The Rock County Historical Society*（*RCHS 12*）の所蔵品である。

写真の背景情報は、次のように書かれている。

> この写真に写っているのはウィスコンシン州ロック郡のつつましい中産階級の夫婦であり、農村部と都会のどちらに住んでいたかはわからない。写真が撮影されたのはおそらくジェーンズヴィルで、この町は洗練された都会であったが、それ以外のロック郡の大部分は、当時は農村であった。ふたりが着ているのは、どこの田舎でも見られたありふれた昼用の服である（Joan Severa, p. 258 より引用）。

次に服装であるが、服飾の専門家の目線で、素材や裁断やデザインや TPO が具体的に記されている。

彼女のドレスの素材は、安価で実用的なウールかウール混紡の目の詰んだ生地で、ストライプの柄織りである。スカートの裁断は 1860 年代の半ばから終わり頃にかけての流行の形で、比較的広がりが小さい。ゴアードスカートであることは正面やや左のはぎ合わせ部分のストライプの柄でわかる。しかし、ウエストラインにはまだ全周に小さなプリーツが入っており、ありきたりな方法でウエストバンドに縫い付けられている。スカートは、膨らみこそ少ないが、下に小ぶりなフープを着用して滑らかな形に整えられている。スカートの丈はかなり短めで、これは 1860 年代後半の外出用ドレスの流行であった。裾は、斜めに裁断した共布で作った三段のフラウンスで飾られている（Joan Severa, p. 258 より引用）。

ティンタイプの写真 103（1861 - 62 年）（p. 221）は、*Historic Northampton (56. 698)* の所蔵品である。

この写真に見る衣服についても、服飾の専門家の目線で、素材や裁断やデザインや TPO が具体的に記されている。

ダーツを取って身体にぴったりフィットさせたハイウエストの身頃と、四角く裁断した生地にギャザーを寄せてウエストに縫い付けたスカート、そして大きく広がったフープも、1860 年代初め頃であることを示す明らかな証拠である。……胸がふたつの膨らみとしてはっきり認識でき、胸郭は細いウエストに向かって漏斗のように締められているのである。……光沢があり、比較的薄くてハリのあるこの素材は、フープの上のスカートのふんわりした軽い見た目を生み出し、袖のパフにも軽やかさを与えている。色は、ミディアムブラウンまたはワイン色の地にクリーム色のチェックである可能性が最も高い。金めっきの大きなバックルが付いた暗色の革ベルトが、ウエストにきっちり締められている。これは学校教師あるいは家庭の主婦が日中に着るのにふさわしいドレスであり、もっと上流の女性の場合は朝に着用するのが適切とされていた（Joan Severa, p. 221 より引用）。

この解説では、TPO や素材の質感、色彩が、まるで衣服の実物を手にとっているかのごとくリアルな描写が行われている。残された一枚の写真から、ここまで解説できるのは、衣服の実物に精通されているセヴラ女史ならではの仕事である。

(4) リフォーム・ドレス

写真 122　　カルト・ド・ヴィジット
1864 年
提供：***Deborah Fontana Cooney*** , p. 248

19 世紀アメリカにおける女性の服装改革は、国内外において多数の研究が見られる。フィッシャー女史（Gayle Veronica Fischer, 1966 〔洋 (2) 〕）は、既存のブルーマーリズム研究を再検討し、19 世紀アメリカにおける女性の服装改革をⅠ期 1824–1851 年、Ⅱ期 1851–1879 年に区分して、新しい研究を行っている。

Ⅰ期（1824–185 1 年）はイギリス人の空想的社会主義者ロバート・オーウェンが中心となり、インディアナ州のニュー・ハーモニーに、アメリカのユートピア共同体を結成し、平等主義のニュー・ハーモニー運動を興した時期である。また、1830 年代から 1840 年代にはニューヨーク州北西部のオナイダにジョン・ハンフリー・ノイズを創始者、指導者として新興宗教団体のオナイダ・コミュニティが結成され、ドレスの改革運動が興された。Ⅱ期（1851–1879 年）はドレスの改革運動が、一般大衆の注目を浴びるようになった時期である。ズボンをはいた女性たちとアメリア・ブルーマーの「ブルーマー・コスチューム」が登場する 1851 年を経たその後の変遷の時期である。ブルーマースタイルが定着することはなかったが、服装改革者として知られる医師メアリー・エドワーズ・ウォーカー（1832–1919 年）の試みはこれまでのドレス改革の変遷の縮図といえる。彼女はアメリカ初の女性医師であり、南北戦争中の働きで勲章を授与され、医学生時代から結婚式とその後の生活の場でもパンツスタイルのリフォーム・ドレスで過ごした。

以上のドレス・リフォーム運動の詳細については、濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史近現代篇―』（株式会社 R&D ，POD 出版サービス、2019）を参照されたい。以下において、セヴラ女史の著作から、リフォーム・ドレス関連の貴重な写真を 4 枚、紹介・考察する。それぞれの写真には、他に類を見ない詳細な解説が付されている。服飾史上、大変、貴重な解説であるが、一部を引用させていただく。さらなる情報については、セヴラ女史の著作と濱田の著作を参照されたい。

水治療師もドレス・リフォーム運動に取り組んだ。さて、水治療とはどのような医療なのであろうか。

ジェームズ・C・ジャクソン（James C. Jackson, 1811-1895）博士は、19世紀後半の代表的な水治療師で、ドレス・リフォームを提唱した人物であり、アメリカのコスチュームを独自のものとして採用した全米ドレス・リフォーム協会の創設を奨励した。

さて、ジャクソン博士とは、どのような経歴の人物であろうか。ジョーン・セヴラ女史の著作に掲載された写真（写真 122）にみるジャクソン博士像に迫ってみよう。

カルト・ドゥ・ヴィジットの写真122（1864年）（p. 248）は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。

> ジェームズ・C・ジャクソン（James C. Jackson, 1811-1895）博士は、1864年にニューヨーク州のシラキュースとオスウェゴに店を持つ『H・レイジアー写真館（H. Lazier）』でこの全身写真を撮影し、カルト・ド・ヴィジットつまり名刺判でプリントしてもらった。……ジャクソン博士はニューヨーク市で『水治療ハウス（Water Cure House）』を運営していた医学士のラッセル・サッチャー・トロール（Russell Thatcher Trall, 1812-1877）の弟子であった。トロールのシステムは水療法、体操、食事、睡眠、運動を組み合わせたもので、彼は1854年に『ニューヨーク水治療・生理学学校（New York Hydropathic and , Physiological School）』を設立している。この学校は、部屋代・食事代の150 ドル（夏は100 ドル）を払えば入学ができた。生徒たちは、女性のドレスの改革、健康的な食事、風通しを良くすること、熱情（特に性欲）のコントロールについて教授された。紅茶、コーヒー、ウイスキー、ワイン、タバコは禁止され、脂肪のない肉は認められたものの、量は控えるようにと釘をさされた（Joan Severa, p. 239 より引用）。

さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作と濱田の著作を参照されたい。ジャクソン博士を紹介したが、ジャクソン博士は多くの著作を著している。非生理的なドレスがいかに健康に良くないかについて書かれた“American Womanhood” の第 5 章 非健康的なドレス（James C. Jackson, American Womanhood, its , peculiarities and necessities 1870, Chapter V Unhealthy Dress）の内容は、ドレス・リフォーム運動の考察に当たって、なかなか得難い、貴重なものである。

「ブルーマー運動」の衰退後、ドレス・リフォーム運動が復活する。リディア・セイヤー・ハズブルック（Dr. Lydia Sayer Hasbrouck, 1827-1910）は、この運動の復活に取り組

んだ。掲載されたリディア・セイヤー・ハズブルックと彼女の夫、ジョン・W・ハズブルックの写真と解説の一部を紹介させていただく。

写真 114　　カルト・ド・ヴィジット
1862 - 67 年
提供：*Deborah Fontana Cooney*, p.238

カルト・ド・ヴィジットの（写真 114）（ p. 238）は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。

この珍しい写真に写っているのは、ドレス・リフォーム論者とその夫である。リディア・セイヤー・ハズブルック（Lydia Sayer Hasbrouck, 1827−1910）は、全米ドレス・リフォーム協会（American Dress Reform Association）の機関紙『シビュラ（*The Sybil*）』の編集者であり、協会の創設メンバーであった。彼女は、この写真の姿が物語るように自らの責務を真剣に果たし、つねに改革派らしいドレスを着ていた。彼女の夫、ジョン・W・ハズブルック（John W. Hasbrouck, 1821−1906）は、その面での彼女の努力を全面的に支持していたに違いない。でなければこの服装の彼女と一緒に写真を撮りはしなかっただろう。写真のハズブルック夫人の服装は、非常に低いウエストライン、長い袖、縁飾りのスタイルから判断して、上質のシルクの錦織生地を使った 1850 年代中頃のドレスを、節約のためにリフォームしたように見える。（彼女はそれが流行遅れだということを気にしなかったろう。……彼女は、当時流行していたやわな靴ではなく、きちんとした頑丈なブーツをはいている。このブーツとズボンの細い脚部だけは、当時の人に『がさつな』服という印象を与えた。極めて女らしい雰囲気を出すために、よく考えた上で黒いレースの手袋が身に着けられている。ドレス・リフォーム論者たちが提唱したとおりにカットされた彼女の髪は、多くの女性たちがしていたように、シンプルにネットをかぶせてまとめられている。ハズブルック氏の方は、上質の黒いウールで作った丈の長いゆったりとしたサックコート、同じ生地のベスト、こざっぱりとした白いシャツ、細い黒い蝶ネクタイという服装であり、典型的な 1860 年代のファッションである。薄い色のズボンは生地が柔らかく、折り目がない。ブーツは、つま先

写真 123　カルト・ド・ヴィジット
1864 年
提供：***Deborah Fontana Cooney*****, p. 250**

がスクエアなプルオン式のありふれたタイプである。」（Joan Severa, p. 239 より引用）

さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

次に、ニューヨーク州ダンズヴィルにあった保養施設「丘の上のわれらの家」に滞在していたルーシー・J・ラッセル（Lucy J. Russell, 1830-92）をセヴラ女史の著作から紹介させていただく。解説から保養施設「丘の上のわれらの家」での生活が読み取れ、現代人の我々にとっても大変、興味深い。カルト・ド・ヴィジットの写真 123（1864 年）（p. 250）は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。セヴラ女史は、リフォーム・ドレスについて、貴重な解説を行っている。

ルーシー・J・ラッセル（Lucy J. Russell, 1830-92）は、ニューヨーク州ダンズヴィルにあった保養施設「丘の上のわれらの家」に滞在していた 1864 年に、この写真を撮ってもらった。彼女は、この保養所生活の主たる特徴だった健康的な食事、軽い運動、ウォーキングといった養生法を最大限活用するための服を着ている。

この服は、ダンズヴィル滞在のために特別に作られたものか、そうでなければコルセットをつけない前提で作られた服である。なぜなら、ゆったりとした前身頃とウエストの仕立が作業用ドレスの形になっているからである。ドレスのスタイルは、丈が短いこととフープを使用しないことを除けば、当時の女性たちが着ていた服とそれほど違わない。ネックライン、縁飾りがついた前立て、袖付け部分にプリーツを入れたビショップ・スリーブは日常着によく見られるデザインだし、ダーツを入れてゆったりさせた身頃も別に珍しくない。彼女の細いズボンは、スカートの裾を短く縮めた時に切り落とした布か、または服を最初に仕立てた際の残り布で作られている。彼女は、この保養所生活の主たる特徴だった健康的な食事、軽い運動、ウォーキングといった養生法を最大限活用するための服を着ている。

写真 129　カルト・ド・ヴィジット
1865 - 67 年
提供：***Deborah Fontana Cooney***, p. 257

> 彼女のブーツは、ドレス・リフォーム派が履いていたのと似たタイプだが、靴底は比較的薄い革製のように見える（Joan Severa, p. 250 より引用）。

さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

カルト・ド・ヴィジットの写真 129（1865 - 67 年）（p. 191）（本書，p. 190）は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。

この写真を紹介させていただくに当たって、ドレス・リフォーム運動に関わるエピソードを紹介しておこう。ジェラルド・カーソンは、1851 年 6 月、アメリア・ジェンクス・ブルーマーとエリザベス・キャディ・スタントンが、グレン・ヘヴンで開催されたヘルス・コンベンションに参加したときに、トルコ風のズボンと短いドレスをジャクソンとオ ースティンに紹介した。カーソンの報告の中に、オースティンは衣装を見て、すぐそれに「恋に落ちた」という記述が見られた。オースティンは「自由服である衣裳を採用して」自分のデザインであるアメリカのコスチュームを作ったという。

セヴラ女史は、ハリエット・オースティン博士について、次のような興味深い解説を書いている。歴史的な記録である。

> ジェームズ・C・ジャクソン博士の養女であったハリエット・オースティン博士が、彼女流の「アメリカン・コスチューム」を着てポーズを取っている。彼女は温泉保養施設「丘の上のわれらの家」の共同経営者だったので、この服はおそらく彼女の普段の服装のひとつの見本といってよいだろう。」「このアンサンブルはブルーマードレスに似てはいるが、ズボンが非常に男性的なことと、平らな靴をはいている点が違っている。しかし、黒いベルベットのチュニックは、1860 年代半ばに流行した女らし

写真131　1865 - 67年
提供：***The Rock County Historical Society (RCHS5)***，p. 260

いスタイルである。細くてほんの少し先が広がった長い袖の下には、手首にフリルの付いた上質の白モスリンのアンダースリーブを着用しており、これとお揃いの衿もとのフリルとの効果で、全体の印象がいくらかやわらげられている。」「黒いシルクスカートは膝の少し下までの丈で、当時の一般的なスカートと同じくらい膨らみが出るよう裁断されている。フープは着用していないものの、スカートの膨らみを支えるために十分な枚数のペチコートをはいており、スカートの形に女性らしさを与えている（Joan Severa，p. 257 より引用）

(5)　貧困層の衣服

本項目では、貧しい人々が写った貴重な写真を2枚、紹介・考察する。

写真131（1865 - 67年）（p. 261）は、*The Rock County Historical Society*（*RCHS5*）の所蔵品である。

セヴラ女史の解説を必要に応じて、紹介させていただく。

写真はおそらくジェーンズヴィル市内で撮られているが、彼女たちは都市住民ではなく、近郊の農村地帯に住んでいたと思われる。……

左の女性がはいているコットンのスカートは洗いざらしでくたびれているように見えるが、上に着ているパルトー・ジャケットは良い品で、軽いウールで作られ、フロント部分にブレードで装飾がほどこされている。……

右の女性は、ありふれたキャラコのドレスを着ている。ドレスは濃色のプリント生地で作られ、袖はカフス部分にギャザーを寄せて、肩部分にはゆとりを持たせた、適度な膨らみがある形である。スカートの膨らみはあまり大きくなく、スカートの下に着けたフープのワイヤーが2本、かすかに出っ張って見えている。スカートをファッショナブルに膨らませるにはフープの上にはくペチコートの枚数が足りていないの

写真 141　ステレオプティコン［立体視眼鏡］の画像　1867 年頃
提供：*The State Historical Society of Wisconsin (WHi ［X3］ 37029)*，p. 278

である。……彼女たちの髪型は、1860年代を通してずっと日常的に見られた２種類の髪型であるため、写真の年代推定にはあまり役立たない（Joan Severa, p. 261 より引用）。

次に、排他的なドレス・リフォーム派のグループとも温泉保養施設ともまったく縁のない場所で、明らかに実用的な理由から「アメリカン・コスチューム」を日常的に身につけた女性の写真を紹介させていただく。

ステレオプティコン［立体視眼鏡］の画像写真 141（1867 年頃）（p. 278）は、*The State Historical Society of Wisconsin (WHi ［X3］ 37029)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この女性の服装について、次のような服飾史上、とても貴重な解説をつけている。

　ミルウォーキー出身の写真家ジョージ・T・リンドマン（George T. Lindeman）は、立体視写真［ステレオカメラで撮った２枚の写真を並べて専用の眼鏡で見ると立体的に見える］を撮影して売りながら、ウィスコンシンを旅していた。……

　排他的なドレス・リフォーム派のグループとも温泉保養施設ともまったく縁のないこの場所に、明らかに実用的な理由から『アメリカン・コスチューム』を日常的に身につけた女性がいたことが、この写真からよくわかる。丈を短くしたスカートをはいてコルセットをほとんど（あるいはまったく）使わない姿は独立心のあらわれであり、開拓地生活の必要性にぴったりと合っていた。ルーシュ飾りと手の込んだ袖のついたウールのチェック柄のドレスは、最初は長い丈のドレスとして作られて、教会や街に出かける時にフープの上に着用されていたものだと考えてほぼ間違いないだろう。…実際のところ、このスタイルの服を着た女性の大半は、その服装によって何らかの主義主張を表明していたわけではない（Joan Severa, p. 279 より引用）。セヴラ女史の「アメリカン・コスチューム」を日常的に身につけた独立心をいだいた女性に関する解説はリフォーム・ドレスの項目と合わせてお読みいただきたい。

第 4 章　庶民男性の服装

男性は多くの場合、コート、シャツ、ズボン、ベストの組み合わせを着用していたようである。ドロップショルダー、広いラペルのついた 50 年代末の上着の大きめの裁断は、60 年代中期までに丈が短く、体にぴったりとフィットする形になった。ベストは、一般的に衿がつけられ、たいていショールカラーであった。また、ズボンは幅の広い、管状の形でたいていかかとまで長く裁断されていた。これらにはプリーツや折り目はなかった。50 年代と同様、帽子を着用しない男性は異例であり、写真において帽子を被っていない男性は、撮影のために一時的に脱いでいるものと推測される。戦争後、A. W. Russell によって撮影された写真では、都市の洗練とはかけ離れた状況にもかかわらず、ほぼ全員の男性がコート、ベスト、ネクタイ、帽子を着用している。また、資料の写真の大半の男性の様子から、1860 年代にはほぼこの習慣が普及していたと推察される。産業革命によって発展した既製服産業は、男性のファッションに大きな影響を及ぼした。特に 1860 年代、西部の開拓地では男性服の製造が激増し、強力な販路を提供していた。これらには、鉄道線路の延長や蒸気船の発展だけでなく、ミシンの営利的な利用の影響があった。ミシンを利用した多くの女性たちは衣服の作り方を記録し、衣服費を節約していた。この時代には、多くのパターンシステムが普及しており、比較的簡単にフィットさせる衣服を作成することができたようである。しかし、男性服の作り方をメモすることは少なかったことから、男性の既製服の普及が大きいことを予想させる。これに対し、女性の既製服はまだ普及していなかったようである。

写真 96　キャビネ判　1860 年頃
提供：***Historic Northampton***，**p. 214**

キャビネ判の写真 96（1860 年頃）は、*Historic Northampton* の所蔵品である。

セヴラ女史の解説には、1860 年代庶民男性の服装の特徴が詳しく書かれている。まず、写真の場面であるが、次のように書かれている。「三人の若い男性が、わざとらしいくだけた雰囲気で写っている。おそらくスタジオのセットで撮影したものだろう。」(Joan Severa, p. 214 より引用)。

次に、服装であるが、一人一人の服装が詳しく描写されている。一部を紹介させていただく。

カウンターに腰かけた紳士は、流行の短い頬髭をはやし、薄い色の比翼仕立て（fly front）［短い目びさしつき、頭にぴったりとフィットした縁なし帽］をかぶっている。薄い色のウールで作られた揃いのスリーピース・サックスーツ（sac suit）は、袖が最新のゆったりしたコートスリーブ（coat sleeve）で、広い折り衿が付いている。……

真ん中の紳士がかぶっている薄いクリーム色の帽子は、硬いフェルトのボーラースタイル（bowler-style）の山高帽で、調和したバンドが巻かれている。……白いシャツの首もとには、やや高さのある折り返し衿が見える。フォア・イン・ハンド（four-in-hand）［ネクタイの結び方で、普通の下げ結びのこと。結び目の下から大剣の先まで、ちょうどこぶし 4 個分の長さになるところからこの名がある］に結んだ太めのネクタイをしているが、素材が明るい色のシルクなので、白いシャツとほとんど区別がつかない。黒いウールのベストは、幅の狭いショールカラー（shawl collar）が付いていて、金属製のボタンで高い位置までボタン留めされている（Joan Severa, p. 214 より引用）。

写真 105　　ティンタイプ
1861 - 69 年
提供：*The National Museum of American History*（*C78.26.21*），p. 223

写真 134　ティンタイプ
1865 - 69 年
提供：*The National Museum of American History*（*83-7987*, p. 264

次に旅回りの写真家が撮影したとセヴラ女史が推測している写真を紹介させていただく。労働者の服装の貴重な写真である。

鉄板写真の写真 105（1861–69）p. 223 は、*The National Museum of American History*（*C78.26.21*）の所蔵品である。

セヴラ女史は写真の場面をこう推測している。

写真の中の椅子の形が別々であることと、背景が無地であることから、このポートレートはおそらく旅回りの写真家がテントの中か仮設スタジオで撮影したものだろうと考えられる。旅回りの写真家が田舎の町や小さな村にやって来ると、農夫や労働者たちは、比較的安い料金を払い、その時に着ていた服のままで写真を撮ってもらった。……きちんと揃っていない顎髭を生やした左側の男性は、縞柄の胸当て付きオーバーオール（overall）の上に明るい色のサックコートを着て、薄い色のコットンシャ

ツは首もとまで全部ボタンを掛けている。……右の青年は、ウールの格子縞のズボンと、やや濃いめの色（おそらく青）のストライプ生地で衿はネックバンドのみのシャツの上に、濃いめの色の無地のオーバーオールを重ね着している。彼もやはりシャツのボタンは首もとまで掛けている（Joan Severa, p. 223 より引用）。

ティンタイプの写真 134（1865–69 年）（p. 264）は、*The National Museum of American History*（*83-7987*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の場面について、こう語っている。

このポートレートが撮影されたのは、一種の移動スタジオだと思われる。背景は絵を描いたキャンバスであるし、わずかな小道具、写真館らしからぬ椅子、床に敷いた布など、どれもすぐに片付けて馬車の荷台に積み、翌日は旅立てるような品ばかりである（Joan Severa, p. 265 より引用）。

被写体の服装については、詳しく描写されている。既製品の庶民男性の服装がリアルに描かれている。解説の一部を紹介させていただく。

自信に満ちたふたりの若い男性が着ているのは明らかに日常着であるが、どちらも最新のスタイルの服である。特にジャケットは 1860 年代後半のカットで、もはやダブダブではなく、身体に合ったフィットになっている。ジャケット以外はかなり着古してすりきれているため、彼らは洒落者ではなく、単にその時期に流行っているスタイルの実用的な既製服を買うタイプの男性だったことがわかる（Joan Severa, p. 265）。

既製品の詳細について、ご興味がおありの読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

このティンタイプの写真 142（1867 - 70 年）（p. 280）は、*The National Museum of American History*（*C69.25.4*）の所蔵品である。

痩せてはいるが、なかなかお洒落な男性である。セヴラ女史は、この男性の服装をとても詳しく解説している。

写真142　ティンタイプ
1867 - 70年
提供：***The National Museum of American History***（*C69.25.4*）, p. 280

この痩せた若い男性は、1860年代末頃のスタイルの、まだ新しい黒いウールのスーツを着ている。おそらく20代半ばを過ぎてはいないと思われるが、堂々たる顎鬚をはやしている。丈が短めのサックコートは、前あき部分のクセから見て、たまに一番上のボタンだけを掛けて着用されていたようである。袖は、この時代によく見られた肘先が張り出した形に裁断されており、逆に手首部分はかなり細い。一見するとベストを着ていないように見えるが、実際はおそらくコートの下に、下のボタンだけ留めて上は開ける形でベストを着ていると考えられる。……ズボンは1860年代の太いカットで、ブーツの上でたるみ、わずかに踵の方に垂れている。……この帽子はブライトン（Brighton）・スタイルといい、硬くしっかりした黒のフェルト帽で幅広の黒いシルクのリボンバンドが巻かれている（『ゴーディーズ』の1866年5月号のチャールズ・オークフォード&サンズ社の広告にこの形の帽子の絵が載っている）（Joan Severa, p. 280）。

セヴラ女史が男性の服装に精通しているのには感心せざるをえない。

第5章　子ども服

写真97　ダゲレオタイプ
1860年10月20日
提供：***Historic Northampton*（59.205）**，
p. 215

60年代には、男の子も女の子もフリルやレースのついた長く白い衣服を着用していた。このように、非常に似た衣服を着せられていたのである。だが、女の子が優美なプリント地や薄い色で作られていたのに対して、男の子はブレード装飾や強烈な色彩で作られていたなどの相違点があった。ファッション・ライターがその必要性を書いたのにもかかわらず、この時代の子ども服についての記述はほとんど見られない。ファッション・プレートの豊富にデザインされた子ども服は、写真に見られるような服装とは異なる場合が多いようである。写真は、主に見せるために大人と同じようなスタイルをしたものがほとんどだからである。

この時代、小さな女の子の衣服は多くが母親のものと同じスタイルに作られていたようである。子どもの衣服が大人のものを元にして作られているというだけでなく、子どもの衣服を自ら製作していた母親は、子どもの成長を考慮して

衣服を製作していたようである。これは、経済的に倹約するために取られた手段に他ならない。母親が製作したと思われる女の子のドレスは、わざとスカート丈を長くしたり、身頃を広げるためにカートリッジプリーツがヨークに寄せられたりしている。

ダゲレオタイプの写真97（1860年10月20日）（p. 215）は、*Historic Northampton (59.205)* の所蔵品である。

セヴラ女史によれば、撮影時期と場所は次のようである。

小さなケイティ・マコーリー・イーガー（Katy Macauley Eager）の家族は、このポートレートに「14ヶ月の時、セントルイスにて撮影した肖像写真——1860年10月20日」と記した。」とのことである。特に感心するのは、モノクロ写真であるにもかかわらず、被写体のケイティの着ているドレスのテキスタイルの種類と色が記載されていることである。

> ケイティは、この撮影のために暗色のチンツ（chintz）［光沢のある平織の綿布］を着ている。……ドレスは背中で留めるタイプで、身頃はプレーンで膨らみのない形に作られ、ネックライン（neckline）は広くあき、首周りにはおそらく引き紐が通されているので、成長と体重の増加に合わせて調節できるうえ、アイロン掛けもしやすかった。シンプルなキャップスリーブ（cap sleeve）はモスリン（muslin）を二重にしたフリル（frill）で縁飾りされ、フリルの部分を肩先に持ち上げて結び付け、ドレープを作って美しい効果を出している。……ウエストの縫い目にはパイピング（piping）がほどこされており、そこから0.5インチ［1.3センチ］ほど上の身頃にもう一列パイピングがある（Joan Severa, p. 280より引用）。

何とも愛くるしい写真である。筆者は子どもの頃、黒地に赤い水玉のワンピースがお気に入りであった。この写真の水玉のドレスは、筆者のこのワンピースを思わず想起させる。

写真100（1860‐64年）（p. 218）は、*The Valentine Museum (61.1.1)* の所蔵品である。

若い子守女と赤ん坊の写真である。この娘さんは、13歳位とのこと。悲哀が感じられる。彼女の服装が詳しく解説されている。一部を紹介させていただく。

写真 100　1860 - 64 年
提供：*Valentine Museum*（*61.1.1*），p. 218

写真 101　ダゲレオタイプ
1860 - 65 年
提供：***Joseph Covais*, p. 219**

若い子守女は、このポートレートでは 13 歳より年上には見えない。彼女は、1860 年代初期のたっぷりとしたビショップシリーブの日常着のスタイルで、斑点のある濃い色のチンツで作られており、召使いに非常にふさわしいと考えられる。小さく上品な白いリネンの衿がついており、彼女は細長いピンで留めていた。スカートにはしわがなく、なめらかにふっくらしているのは、張り骨の使用を示している。彼女の髪は真ん中で分けて、頭の周りにまわされた平らなリボンタイで後ろにまとめられている（Joan Severa, p. 218 より引用）。

この解説の「召使いに非常にふさわしいと考えられる」という表現が奴隷制のない自由な社会に生きている現代人の胸を痛める。

このダゲレオタイプの写真 101（1860 - 6 年）p. 219 は、*Joseph Covais* の所蔵品である。

この写真の解説は、子どもらしさを感じさせる。

写真 102　　アンプロタイプ
1859 - 64 年
提供：***The National Museum of American History*** ***（C-1566）***，p. 220

写真 112　　カルト・ド・ヴィジット
1862 - 65 年
提供：***Nancy E. Rexford***，p. 234

一般に 8 歳から 10 歳くらいの少年は、田舎で過ごす時や遊ぶ時には、ベルトをせずにサック（sack, sacque）を着ることが許されていた。この少年が来ているサックはリンネル製で、非常に低いショルダーラインに 1860 年代初めに流行った大きく膨らんだセット・イン・スリーブが取り付けられ、袖口部分はギャザーを寄せて柔らかいカフス（cuffs）を付けてある。このサックには衿がなく、前でボタン留めされている（Joan Severa，p. 219 より引用）。

このアンプロタイプの写真 102（1859 - 64 年）(p. 220）は、*The National Museum of American History*　*（C-1566）*　の所蔵品である。

この写真に写った子どもは、現代の目からは、女の子と見まがうような服装を纏っている。セヴラ女史の解説によると「1850 年代末に男の子の服として推奨されたゆったりしたサックコートは、1860 年代初めにもまだ着用されていた。」（Joan Severa，p. 220）という。

写真 121　ダゲレオタイプ
1863 - 65 年
提供：***The International Museum of Photography George Eastman House*（68:097:25）**，p. 247

写真 127　1864 - 68 年
提供：***The National Museum of American History*　（C771.10）**, p. 255

さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

このカルト・ド・ヴィジットの写真 112（1862 - 65 年）（p. 234）は、*Nancy E. Rexford* の所蔵品である。

服飾史上には、軍服がもとになっている衣服があるが、この子どもが纏っているジャケットも「ズアーブ・ジャケット（Zouave jacket）は 1850 年代には主に若い女性が着ていたが、この（おそらく）赤い色のウールフランネルのジャケットを飾るスタッシュ・ブレードの装飾は、男性の軍服をモデルにしたものである」という。セヴラ女史はこの男の子の衣服をこう解説している。

> 1860 年代になると小さな男の子の服としても人気を集めた。写真の少年は、ズアーブ・ジャケットとガリバルディ・シャツを一緒に着ている。この（おそらく）赤い色のウールフランネルのジャケットを飾るスタッシュ・ブレードの装飾は、男性の軍服をモデルにしたものだが、男児、女児、大人の女性のいずれの外衣にも区別なく使われた（Joan Severa, p. 255 より引用）。

このダゲレオタイプの写真 121（1863 - 65 年）（p. 247）は、*The International Museum of Photography, George Eastman House*（*68:097:25*）の所蔵品である。

子どもながら、何ともいえない風格のある写真である。セヴラ女史の解説が気になるところである。一部を紹介させていただく。

> この５～６歳くらいの少年のポートレートは、照明にかなりの注意を払って撮影された見事なダゲレオタイプの見本であり、絵画的な印象を与える。少年は、「パイロット・スーツ（水先案内人の服）」スタイルに装っている。このスタイルは、長ズボン、ズボンと同じ生地のパルトー・ジャケット、やはり同じ生地で作ってなめし革のひさしを付けた背の高い『パイロット・キャップ』から成っている。スーツはウール製で色はおそらく茶色だろう。ジャケットは女性のパルトーと全く同じように裁断されていて、かなり長く、やや裾広がりである。
> このスタイルの起源は、川船の水先案内人が着ていたショートコートだといわれている。写真のジャケットは非常に丈が長く、ボタンが裾まで付けられており、脇の縫い目の一番下はＶ字型のベンツ（切れ込み）になっている。袖は肘のところでカーブしており、肩の低い位置に付けられている（Joan Severa, p. 247 より引用）。

この写真解説についても、さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

このティンタイプの写真 127（1864 - 68 年）（p. 255）は、*The National Museum of American History*（*C771.10*）の所蔵品である。

５歳前後の男の子の写真であるとのこと。何ともおませな子どもである。セヴラ女史の解説を一部引用しよう。

写真 113　1862 - 65 年
提供：*The State Historical Society of Wisconsin (WHi [X3] 39873)*, p. 236

おそらく５歳前後のこの男の子は、ニッカーボッカーズ（knickerbockers）スタイルのズボンをはき、丈の長い、紐で締めるタイプのブーツをはいている。このスーツ（suit）は 1860 年代中頃のファッションイラストに５歳未満の男児向けとしてよく描かれているタイプで、長いコートスリーブの付いたウエストまでの短い丈のジャケットが、脇ポケットのあるゆったりとしたズボンにボタンで留められている……首もとには小さな柄の入ったシルクネッカチーフが結ばれている（Joan Severa, p. 255 より引用）。

写真 113（1862–65 年），p. 236 は、*The State Historical Society of Wisconsin* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の背景情報を次のように紹介している。ローマ・カトリック系の女子寄宿舎の質素な服装が、克明に説明されている。

この写真は、サミュエル・マズケリ（Samuel Mazzuchelli, 1806–1864）神父によって設立された女子寄宿学校であるセント・クララ学園（St. Clara Academy）で撮影さ

写真 148　1869 年
提供：***The National Museum of American History*** **(83.7983)，p. 288**

マズケリ神父は聖職者であると同時に教育者で、19 世紀半ばまでにウィスコンシン州内に 24 のローマ・カトリック教会を建てた。……学園の生徒にはウィスコンシン州の名家の子女たちも多く、彼女たちは 14 歳くらいまでここで暮らし、み書きや算数に加えて音楽も学んだ。晴れた暖かい日に撮影されたこの写真からは、修道女たちが生徒にシンプルな服装を心がけるよう指導していたことがうかがわれる。ドレスによって見栄を張っている様子が見られないからである。どの少女も上質のキャラコでできた主に濃色やチェック柄や格子柄のドレスを着ているが、フープを使っている子はおらず、ほとんどは最低限のペチコートのみを着用しているようである。年かさの少女たちはコルセットをつけている。最も注目に値する特徴のひとつは、スカートの丈である。年長の少女たち（最年長は 14 歳だったことが知られている）は床丈のドレスを着ており、最前列左端に座っているそれより年下に見える少女のスカートもやはり床丈である。……それよりさらに幼い少女たちのスカートはもっと短めだが、どの子のスカートも膝丈よりは長い（Joan Severa，p. 236 より引用）。

写真 148（1869 年）（p. 288）は、*The National Museum of American History*（*83.7983*）の所蔵品である。

この写真の被写体のドレスから、撮影年代が推定されている。

８歳か９歳ぐらいのこの女の子は、厚手のコットンの可愛いゴアードドレス姿で蝋人形と一緒にポーズを取っている。少女の髪は後ろに流され、後頭部の上の方で 1860

年代末によく見られたスタイルでまとめられているし、ドレスにも撮影年代を推定する助けとなる多くの特徴が見られる。」「第一の手掛かりは、生地である。筆者が見たり扱ったりしたことのある多くの現存サンプルの知識に基づき、この濃いめの色のコットン生地は厚手の織物で、暗い色の格子柄に少し盛り上がったストライプを織り込んだものだと確言できる。……スカートはプレーンなゴアードスカートで、裾にバイアス布のフラウンス［襞飾り］をつけ、境目も細い襞で飾られている。……身頃には深いヨークがあり、ヨークの下で身頃に少しギャザーが寄せられている。……袖は以前のものよりだいぶ細いが、依然として２枚の布を縫い合わせたツーピーススリーブで、共布をバイアスに使ったルーシュで仕上げられている（Joan Severa, p. 289 より引用）。

多くの衣服の実物に触れて来られた服飾の専門家ならではの、大変、克明な解説である。筆者もアパレル産業で 10 年間、衣服生産に携わった経験があるので、裁断の話は興味深い。セヴラ女史は、まさに、実学に裏付けられた服飾研究者である。

第6章

人種・民族の視点からみた服装

1. 西部入植者の服装

ガラス板ネガ［湿板写真］の写真145（1868年）（p. 284）は、*The Oakland Museum （12.50）*の所蔵品である。

セヴラ女史の解説を紹介させていただく。

> A・W・ラッセルは、ユニオン・パシフィック鉄道が西へ西へと延伸する過程を撮影するかたわら、入植者の写真もよく撮っていた。これは、アシュトン家（Ashton）というモルモン教徒の拡大家族が芝屋根［木で屋根を葺いた上に土をかぶせ草を生やす］の小さな丸太造りの家の外に集まったところを写した写真である。1868年8月、鉄道作業員がユタ州ケイズヴィル郊外で働いている時に撮影された。アシュン家の人々の質素な服装は、このような家（おそらく彼らが働く牧羊場内にあると思われる）での生活に適応している。しかし、女性たちのドレスは、簡素ながらも流行を全く無視しているわけではない。彼女たちは、3～5年前くらいに人気があった昼用のドレスを着ており、実際にこれと同じ簡素なスタイルはあらゆる場所で身体を動かして働く女性たちに採用されていた（Joan Severa, p. 284 より引用）。

庶民のお洒落心が伝わってくる写真である。

写真 145　ガラス板ネガ
1868 年
提供：***The Oakland Museum*（*12.50*）**, p. 284

写真 135　1866 年 2 月
提供：***The Southern Historical Collection*（*P3615-819*）**， p. 266

2. 解放奴隷の服装

1865 年に北部軍の勝利によって南北戦争が終結すると、次いで北部勢力による新しい南部社会の建て直しが始まった。法的には、1865 年に奴隷制度が廃止され、1868 年の黒人への公民権付与、1870 年には黒人への選挙権付与という流れの中で、一応の整備が実現され、南部黒人の多くが選挙投票を経験した。既に戦争中から、北部軍が占領した土地では解放奴隷への対処が求められており、北部各地に組織されていた南部黒人救済を目的としたボランタリーな協会が活躍していたが、これらの組織は南部各地に黒人学校を設立し、解放奴隷に読み書きなどを教えるようになっていた。戦後の 1865 年 3 月には連邦政府によって解放民局が設立され、ボランタリーな協会の黒人教育事業の援助を行うようになる。こうして 1875 年までに、50 以上の北部のボランタリーな組織が解放奴隷教育の仕事を展開し、それらの組織が南部に派遣した教師の数は 1860 年代の終わり

には 2560 人以上、学校数は 2039 を 数えた。解放奴隷の衣服の問題も、当然、再建の課題であった。

写真 135（1866 年 2 月）（p. 266）は、*The Southern Historical Collection (P3615-819)* の所蔵品である。

この写真は解放奴隷の学校「ペン・スクール（Penn School）」の先生と生徒たちの写真である。セヴラ女史は、この学校の設立、教育内容、先生や生徒たちの衣服について、次のように解説している。貴重な歴史的資料である。そこで、全文を紹介させていただく。

1861 年、サウスカロライナ州沿岸の島にあるボーフォートの近くのフロッグモア（Frogmore）という場所に、クエーカー教徒の組織であるフィラデルフィアのフリードマン協会によって、「ペン・スクール（Penn School）」という学校が創設された。この学校は、付近のプランテーション［大農園］に暮らす解放奴隷の子どもたちを生徒として受け入れた。子どもたちは読み書きと計算を学び、自由民として生活していくための準備教育として社会の慣習や多くの一般的な仕事の実技が身に付くよう、非常に実践的な教育を受けた。男の子は大工仕事やその建築関係の技術を学び、女の子は裁縫、料理、掃除、洗濯を学んだ。

学校草創期の生徒と教職員の写真が多数残されており、それらの写真から、ある程度の推察が可能である。写真を見る限り子どもたちの衣服は古着のようなので、おそらく多くのクエーカー教会に寄贈を求めたのであろう。いちばん幼いアモレッタ（Amoretta）は、ちぐはぐな組み合わせの服装である。薄地でスカートの膨らみも小さい色褪せたドレスの上に、大きすぎるうえ色褪せた 1850 年代のバスク（basque）を着用していて、ドレスのスカートにはグロウス・タック［成長に合わせてほどいて丈を伸ばすためのタック］をほどいた線が見えている。白いペチコートはドレスの下に斜めにのぞいており、ペチコートが短すぎるため、大きくて古い靴と白い綿ストッキングが見えてしまっている。どうやら子どもたちは学校で靴を履かずにいることを許されていなかったらしい。座っている女性はローラ・M・タウン（Laura M. Towne, 1825-1901）で、ペン・スクールに 1861 年に着任した最初の 3 人の教師のひとりである。彼女はクエーカー教徒の女性にふさわしい質素な服を着ているが、その服にも 1860 年代半ばの流行の要素は取り入れられている。ふっくらと膨らんだスカートは暗色のシルクで、スカートの下にはフープではなく、大きく広がるペチコートを着用している。黒い絹製の短いジャケットはスカートのウエストバンドが隠れるくらいの

丈で、袖は肘あたりでカーブする太いコートスリーブであり、幅の広いカフスが付いている。ジャケットの裾は、カフスや前立てと同じブレードで飾られており、細く黒いサテンリボンの蝶結びの下には、ジャケットの前を閉じるための組紐ボタンが並んでいる。ジャケットの前は開いていて、細いバンドカラーのついた白いブラウスがのぞいている。彼女の髪は、下方向にとかして、こめかみでウェーブをかけ、うなじのあたりでねじっておだんごにまとめたシンプルなスタイルである（Joan Severa, p. 267 より引用）。

南部再建期の解放奴隷の衣服の問題は、服飾研究者の重要な研究課題である。
次の写真解説も解放奴隷の衣服の問題に言及している。

写真 149（1860 年代末頃）（p. 290）は、*The Library of Congress*（*LC-B-8171, 152-A*）の所蔵品である。

セヴラ女史によると、これは南北戦争後の破綻状態の深南部に住んでいた貧しい黒人家族を記録するために、写真家が撮影したものであるという。次の解説は、歴史的記録として、大変稀少価値が高い。それゆえ、必要箇所を抜粋して、紹介させていただく。

貧困はいつの世にも存在する。従って、ある時代の服装習慣について論じるのであれば、服を買うお金がない人々はどのような恰好をしていたかも扱うべきである。写真ではその研究がなかなかできない。証拠となる写真がほとんどない――服にかけるお金を持たなかった人々の写真はごくわずかしかない――からである。……これはそんな写真の１枚で、おそらく講演の際に見せるために撮影された一連の写真に含まれていたものであろう。……南北戦争終結後にかつての主人から強制的に解放された南部の黒人家族にとって、最初は有給の勤め口を見つけるあてはなく、おまけに最高に温情ある主人でさえも彼らに支払うお金を持っておらず、さらに世の中には、働き手が必要なビジネスを新たに起こそうという動きもなかった。何年もの間、貧しい黒人の家族にできることといえば、せいぜい農場の季節労働者として働くことくらいであった。……この写真の家族の衣服は、全体として年代が推定できない。個々の衣服はそれぞれ一定の時期を連想させるが、われわれにわかるのは、それらの服がどれくらい長い間人々に着られてきたかだけである。ここに写っている服はほぼ間違いなく古着として入手されたものであり、非常に長く着古されている。赤ん坊を抱いて立っている女性のドレスは、小さなプリント柄のキャラコのスカート（おそらく古いドレ

写真 149　1860 年代末頃
提供：***The Library of Congress***
(LC-B-8171, 152-A)，p. 290

スから切り離したもの）と白いシャツブラウスで、ブラウスの袖はまくりあげられている。エプロンは明るい無地か、あるいはひどく色褪せたキャラコである（Joan Severa, p. 291 より引用）。

解放奴隷への衣服の支給の問題が解明されなければならない。アメリカ史研究においても、まったく未開拓の分野である。写真記録の史料的価値と重要性が、改めて問い直される写真である。

3. 自由黒人の服装

写真 138（1866 - 68 年）（p. 272）は、*The Essex Institute （14.849）* の所蔵品である。

この写真の被写体は、自由黒人である。解放奴隷とは、全く異なる 1860 年代後半の流行の衣服を纏っている。セヴラ女史は、彼女の一家の仕事や衣服のデザイン、裁断、装飾について、詳しく解説している。見るからに良い服装をしている。黒人間の格差が衣服に如実に表れている。貴重な記述であるので、全文を紹介させていただく。

マサチューセツ州セイラムのジェームズ・バブコックの妻（Mrs. James Babcock）の写真。バブコック夫人は自由黒人［奴隷ではない黒人］で、彼女の一家は優れた仕出し料理ビジネスを営み、地域でよく知られていた。彼女のドレスのあまり太くなくてカーブしたベルスリーブ（bell sleeve）は 1866 年頃以降のもので、肘のあたりで内側の縫い目に沿ってカーブするように作られているので、コートスリーブと同じように身体の正面の方へ向かって曲線を描いている。1850 年代から 1860 年代初めのベルスリーブとは違って、この袖は手首の近くまで丈があり、カフスのついたアンダースリーブを見せるために内側の縫い目に向けて大きくカーブしている。身頃は以前と同じスタイルに裁断されているが、縁飾りのつ

写真 138　1866 - 68 年
提供：***The Essex Institute（14.849）***，p. 272

け方はまぎれもなく 1860 年代後半のスタイルである。この頃からボタンが重要視され始め、とても大きいボタンがよく使われ、またしばしば布やかぎ針編みをかぶせたくるみボタンも見られた。縁飾りは 1860 年代半ばに向けて次第に手の込んだものになっていき、時には（この写真のように）、張り骨入りのフロントダーツに沿ってスカートの装飾と同じ細いルーシュが付けられることもあった。開いた袖口の縁は共布をピンキングしてプリーツを取って作ったルーシュで仕上げられ、そこから白いアンダースリーブがわずかにのぞいている。

衿は典型的な小さくて白いレースである。スカートを膨らませるために着用されているフープは、おそらく当時望ましいとされていた広がりが小さめで前が平坦な形のものだろうが、フープを身体に保持するための鉄の支持具のせいで不自然な形になっている。ドレスの色は、1860 年代を通じて人気があったさまざまな色のどれかであろう（Joan Severa，p. 272 より引用）。

4. ネイティヴ・アメリカンの服装

カルト・ド・ヴィジットの写真 136（ 1866 年）（pp. 268–269）は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。

この写真の背景情報であるが、次のように詳しく書かれている。

この２枚のカルト・ド・ヴィジットは、ミズーリ州セントジョセフの無名の家族を撮影したものである。それぞれの裏面に貼られた３セントの納税印紙［tax stamp とし

写真 136　カルト・ド・ヴィジット
1866 年
提供：***Deborah Fontana Cooney*** , pp. 268 - 269

て写真の裏に貼るものだったらしい］には 1866 年という年号が手書きされ、『ウールマン&リッペル写真館、ミズーリ州セントジョセフ市、三番街の至急便オフィス向かいとエドモンド通り 51 番（Uhlman & Rippel, Photographers, Third St., opp. Express Office, and 51 Edmond St., Saint Jpseph, MO）』と記されている（Joan Severa, p. 268 より引用）。

いずれも珍しい写真である。それゆえ、セヴラ女史の解説の全文を紹介させていただく。セヴラ女史は、父親の服装から社会的地位を推察している。

父親は、ブレードの縁飾りと真鍮のボタンのついた厚手のウールのスーツと小さな衿のついた白いシャツを着て、人気のあった水平結びのネクタイのうち一番小さいものを締め、単独でポーズを取っている。よくあるスタイルの顎鬚と口髭は、丁寧に手入れされている。懐中時計を下げる金の太い鎖がベストのボタンホールに結びつけられている。どんな職業かはわからないが、彼は社会の中で確たる地位を得ていることがうかがわれる（Joan Severa, p. 268 より引用）。

セヴラ女史は、もう一枚の写真の母親と息子の服装を解説している。服装という表象手段で、白人社会に融合しようとするネイティヴ・アメリカンの信条が読み取れる。

　これと対になるもう1枚のポートレートには、彼のふたりの息子が母親と一緒に写っている。彼女の服は、それなりに裕福な中流の女性のものである。彼女のつやのある黒い直毛と風貌はネイティヴ・アメリカンの血筋を感じさせ、それがこの写真をとりわけ珍しいものにしている。もっとも、たとえば強制移住させられたチェロキー族が黒人と同じ地区で暮らしていたことはしばしばあり、両者の結婚も多かった。彼女のドレスは白または薄い色の小花模様を散らした軽いウールかウール混紡の生地で作られているように見える。しゃれた袖と身頃のヨークラインは、生地と対照的な色のサテンリボンで装飾されている。低いヨークラインは1860年代後半の特徴であり、実際に布が切りかえてあるのではなく、単にダーツを取ってフィットさせた身頃の上にリボンを縫い付けただけの、見せかけのヨークである。ドレスには、厚いレース製のおしゃれな幅の狭い衿と、縁をスカラップにした白いリンネルのカフスがつけられている。ウエストラインは以前のスタイルより低く、自然なウエスト位置に近い。プリーツスカートは控え目なフープの上に優美に整えられている（Joan Severa, p. 269より引用）。

5. 移民の服装

中国人移民の移民背景は何だったのであろうか。貫堂嘉之は、この問題について、次のように述べている。「各国政府は、世界商品の生産継続と奴隷制廃止に拠る労働力喪失の補填のため、経営者に対し有償対応した。そこで導入されたのが契約労働制であり、その典型的なものが中国人労働者の導入だったのだ。」（貫堂嘉之、2018, p. 69）。このような背景を踏まえたうえで、中国人移民の写真を紹介させていただく。

写真120（1863 - 65年）（p. 246）は、*Bancroft Library* （*Catlin,* p. *20*） の所蔵品である。セヴラ女史は、この写真の背景情報について、次のように解説している。

　この中国人女性と幼い息子の服は、完全にアメリカ風である。1840年代から1850年代にかけてのゴールドラッシュ時代には非常に多くの中国人家族が移住したので、この

写真 120　1863 - 65 年
提供：***The Bancroft Library***（**Catlin, p. 20**），
p. 246

若い女性は幼少 時に海を渡ってきたか、またはカリフォルニアで生まれたかのどちらかであろう（Joan Severa, p. 246 より引用）

次に、母と子の服装について、完全にアメリカ風の衣服をきちんと纏っていると述べている。

19 世紀にカメラの前に立った多くの人々と同じく、母親はこの写真では眼鏡をかけている。彼女はコルセットとフープの上に、こざっぱりした、おそらく黒いアルパカの昼用ドレスを着用しており、流行に気を配った上品な印象を受ける。スカートはゴアード (gored)［何枚かの襠をはぎ合わせる］ではないが、ウエストの位置に均等に配置されたダブルボックスプリーツでフレアーを出し、後ろ中心には深いプリーツを入れている。

黒いサテンのベルトはウエストをきつく締めており、精巧な時計チェーンや懐中時計ポケットを引き立てている。ネックラインはきちんとしたリンネルの立ち衿と小さなブローチで仕上げられている。髪は極端に保守的なスタイルで、下におろしてから後頭部に回してしっかりと結ってあり、頭に黒いリボンを巻いて後方に垂らしているように見える（Joan Severa, p. 246 より引用）。

第７章　まとめ

１．写真の服装を通して見た1860年代のアメリカ社会

本章では1840年代、および1850年代とは異なる視点から、写真の紹介、考察を行った。すなわち、階級・ジェンダーの視点から見た服装、人種・民族の視点からみた服装という分類をおこなった。なぜなら、解説に掲載した一覧表に見るように、写真技術の発展に伴い、被写体の範囲が一部の金持ちの中流階級以上の人々から、庶民、すなわち、中流・下層の民衆へと広がり、移民、西部入植者、農業労働者、解放奴隷、自由黒人、ネイティヴ・アメリカンなどミドルクラスや下層階級の様々なカテゴリーに属する庶民の写真が掲載されているからである。

２．裕福な階級の人々の上昇志向

1860年代、スカートは全体に膨らんだ状態が一般的であり、ソフトプリーツをあしらって膨らみを出していた。60年代半ばには、前スカートが平坦になり、前面から側面にかけて幅が狭くなって後方へ張り出し、新しい楕円形の張り骨をぴったりと覆う形状に改造された。前スカートの幅は全体に縮小し、後ろスカートはプリーツで調整して引き裾にし、後方へ膨らみを出していた。この新しい裁断方法は、少なくとも1866年にはキャラコ製の日常着にさえも取り入れられていたようである、との見解をセヴラ女史は示しているが、残された日常着の写真からはこのようなスタイルはめったに見られない。1864年４月号のファッション雑誌がこのスタイルについて記載しており、1866年頃のものと思われる写真には、このようなスタイルの女性が撮影されている。

産業革命によって発展した既製服産業は、男性のファッションに大きな影響を及ぼした。特に 1860 年代、西部の開拓地では男性服の製造が激増し、強力な販路を提供していた。これらには、鉄道線路の延長や蒸気船の発展だけでなく、ミシンの営利的な利用の影響があった。

3．階級社会のリアルな現実

本章の分析から、1860 年代アメリカの階級社会では、そのリアルな現実が衣生活にも反映されていることが明らかになった。その背景をなしているのは、とりもなおさず、写真技術の発達である。1860 年代のミドルクラス、あるいは下層階級のアメリカ人の中には、ヨーロッピアン・フレンチ・ファッションに追随しようとした上流階級や中流以上の人々とは異なり、経済的理由から、多かれ少なかれ流行遅れの粗末な衣服を着用していた人々がいたこの現実について、以下の 4 から 6 の項目において、簡潔にまとめる。

4．家庭裁縫の発達と衣生活の様相

① 布を節約して裁断したこと。

② 古くなった黒いシルクの外衣やスカートをリフォームして作り、生地代をかけずに済ますことがよくあった。

5．ドレス・リフォーム運動

第 5 章で、セヴラ女史の著作から、リフォーム・ドレス関連の貴重な写真を 4 枚、紹介・考察させていただいた。それぞれの写真には、他に類を見ない詳細な解説が付されている。服飾史上、大変、貴重な解説であるが、一部を引用させていただいた。さらなる情報については、セヴラ女史の著作と濱田の著作を参照されたい。

6．奴隷解放後の解放奴隷の生活の様相

① 奴隷解放後、例えば、Pen スクールにおいて、子どもたちは読み書きと計算を学び、自由民として生活していくための準備教育として社会の慣習や多くの一般的な仕事の実技が身に付くよう、非常に実践的な教育を受けた。男の子は大工仕事やその他の建築関係の技術を学び、女の子は裁縫、料理、掃除、洗濯を学んだ。

② 学校草創期の生徒と教職員の写真が多数残されており、それらの写真から、ある程度の推察が可能である。写真を見る限り子どもたちの衣服は古着のようなので、おそらく多くのクエーカー教会に寄贈を求めたのであろうことが明らかとなった。

③ 写真 135 に見るように、いちばん幼いアモレッタ（Amoretta）は、ちぐはぐな組み合わせの服装である。薄地でスカートの膨らみも小さい色褪せたドレスの上に、大きすぎるうえ色褪せた 1850 年代のバスクを着用していて、ドレスのスカートにはグロウス・タック［成長に合わせてほどいて丈を伸ばすためのタック］をほどいた線が見えている。 白いペチコートはドレスの下に斜めにのぞいており、ペチコートが短すぎるため、大きくて古い靴と白い綿ストッキングが見えてしまっている。 子どもたちは学校で靴を履かずにいることを許されていなかったらしい。

④ 解放奴隷の処遇は、歴史研究の重要な課題である。

7．写真産業の発展に伴う被写体の変化

同じことを繰り返し述べるようだが、以下の点を再確認しておかねばなるまい。

① 1860 年代の写真の大半は、ガラス・プレート・ネガティヴ、キャビネット・カード、ステレオ・カードの技術が開発されたため、1840 年代、1850 年代のスタジオでダゲレオタイプの写真に収められた写真とはかなり趣が異なっている。

② 1860 年代のミドルクラス、下層階級のアメリカ人の中には、ヨーロッピアン・フレンチ・ファッションに追随しようとした上流階級や中流以上の人々とは異なり、経済的理由から、多かれ少なかれ流行遅れの粗末な衣服を着用していた人々がいたことを具体的に読み取れる。。

あらためて、ジョーン・セヴラ女史の著作が、アメリカの服飾史研究において果たした役割を具体的に認識できたのではないだろうか。

さて、その後のアメリカ服飾史の進展は、いかがなものであろうか。いわゆる「金ぴか時代」1870 年代へと筆を進めていこう。

【第 3 - 5 章】　参考文献

和書

貫堂嘉之著『移民国家アメリカの歴史』（岩波新書　2018 年）。

洋書

(1) Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion,1840-1900,* The Kent State University, Press, 1995.

(2) Gayle Veronica Fischer, *Who wears the pants? Women Dress Reform and the Power in the mid-nineteenth century United States*, UMI 9614547 Copyright 1996

第Ⅴ部 1870 年代

第 1 章　歴史的背景

1. 南北戦争後の再建の終了

南北戦争がもたらした被害は莫大なものであり、80 年代になっても戦債利子が予算の約 40 パーセントを占めることとなった。再建がかなり困難であったことは、容易に推測できる。70 年代は、戦争直後の『風と共に去りぬ』のラストシーンにみられる南部の荒廃した土地からの再建、復興のために国民があらゆる方面で力を注いだ時代であった。

しかし、結論からいうと試行錯誤された再建は失敗に終わった（貫堂嘉之，2019 年，注〔和書（1）〕，pp. 105-152）。財政上の困難、共和党の失策、人種的憎悪、その上テロなど、あらゆる要因が結びつき、共和党体制は崩れていった。だが、最大の要因は、人種間の問題であったのではなかろうか。

黒人に白人と平等の権利が与えられたとはいえ、まだまだ黒人に対する差別は色濃く残っていた。特に南部白人のそれはとても暴力的で、投票に行った黒人は脅迫されたり、ひどい暴行を受けたり、最悪の場合は殺された。70 年代初頭までには、すでに再建の成功への道はとざされたも同然であった。しかし、70 年代に入りしばらくすると工業の発達にと

もなう金儲けが人々の関心を違う方向へと向けた。この後、1870 年代から 1890 年代にかけての急速な産業の発展を背景とする、金がものを言う時代の“金ピカ時代”へと突入していったのである。

そこへ至るまでの過程をたどっていく。1865 年リンカーン大統領が暗殺され、A・ジョンソン（Andrew Johnson）が後を引き継ぐことになる。しかし彼は、リンカーンに比べあまり急進的な政策をとれた人物ではなかった。南部社会の再建には、物足りない指導者ではなかったかと思われる。彼の計画は、ともするとまた奴隷制度を蘇らせることになりかねなかった。それをみかねた議会では、奴隷制廃止を規定した、憲法修正第 13 条の復活の企てがみられた（貫堂嘉之，2019 年，注〔和書（1）〕，pp. 118-119）実際には奴隷の身は自由ではなかったからだ。さらにこの時、黒人 1 人を 5 分の 3 人とみなす、いわゆる 5 分の 3 条項も消滅することとなった。ここに、早くも再建計画の壁が立ちはだかり、議会内と大統領の間に重苦しい空気が流れた。

1867 年、ジョンソン大統領とは全く対立した再建案が共和党急進派から出され、極めて急進的な再建法を成立させた。その翌年、黒人にも白人と平等の市民的諸権利を取得するための憲法修正第 14 条が、憲法で裏打ちされた。1870 年までには南部諸州は連邦復帰を完了し、合衆国は 10 年ぶりに統一連邦に戻り、明るい兆しが見えたかのようにみえた。黒人にも選挙権が付与される憲法修正第 15 条や、黒人議員の登場、黒人を啓発する教育が生まれたのもこの年からである。しかし、当時の黒人の切実な要求は、「40 エーカーの土地と 1 頭のラバを！」（貫堂嘉之，2019 年，注〔和書（1）〕，pp. 143-144） という言葉であった。まだまだ問題の山は崩れることはなかった。政治的・社会的には成果をあげたこれらの改革をもってしても、経済面、特に土地問題を解決するには至らなかった。

一方、旧奴隷所有者たちは、再建運動に反対する活動を強力に行なっていた。これはまさに暴力的な秘密結社で、中でも「クー・クラックス・クラン」は南部各地に真っ白な布を頭からかぶって登場し、黒人や、黒人を支持する白人の命さえもいとも簡単に奪った。南部でのこのテロは、再建政府の基礎を崩す方向へ向かわせた。

1872 年、旧南部における支配階級の人々の政治的諸権利を復活させる、と同時に、テロによる被害を少しでもなくすため、黒人に同調する解放民局（黒人と白人同盟者たちによる、黒人を教育する大学設立の援助等を行なった）（Accessible Archives Freedmen's Bureau ）の活動も停止した。その年の大統領選では、共和党の内部分裂により黒人の期待は見事に裏切られた。新大統領 U・グラント （Ulysses Grant）が当選したことは、南部再建の挫折過程を導く結果となったからである。彼の執権期は、アメリカ国内が堕落していった時期でもあった。

そして南部再建時代の終了をむかえる。1876 年の大統領選で、共和党は旧南部政治勢力の復帰完成を予告した。この選挙には、共和党から R・B・ヘイズ（Rutherford Birchard Hayes）を、民主党からは S・ J ・ティルデン （Samuel Jones Tilden） を候補に立てた。その結果、ティルデンが勝利をおさめるが、共和党は一部の州で不正があったことを主張し、彼の当選を認めなかった。もめにもめた末、両党内に政治的な妥協案が成立した。共和党は、サウスカロライナ、ルイジアナ両州の連邦軍を撤退させることを条件に、ヘイズの当選を手に入れたのである。こうして共和党は、南部を民主党の支配下にゆだね、黒人の期待を完全に裏切ることにより、南部再建運動の挫折を明確なものにした。

南部の再建については、多くの人々の努力もむなしく花を咲かせることができなかった。その一方で、産業面の上昇や資本主義的発展をとげ、アメリカではある程度経済的に余裕が見えてくる。それにともなってファッション業界も発展してゆく。流行に敏感な当時のアメリカ女性にとっても、流行の最先端をゆくフランスのスタイルを取り入れるのが、大変容易になった。しかしフランスのファッションを全て取り入れることができたのは一部の裕福な家庭の女性であった。当時アメリカでは、*Godey's Lady's Book*、 *Peterson's Magazine*、*The Delineator*、*The Lady's Home Journal*、*Harper's Bazaar* などのファッション定期刊行誌が発行されており、これらの雑誌にはドレスの作り方が掲載されていた。中でも、*Godey's Lady's Book* には、フランスの上流階級の人々のスタイルが見られる。アメリカの女性は、フランスのスタイルに憧れを抱き、あまり裕福でない家庭の女性はミシンをフル活用して流行を取り入れ、また、それを楽しんだ。このように、南北戦争、産業の発展、鉄道やミシンの発達、ファッション誌の発行、という過程を踏んでアメリカのファッション業界は変化と発展を遂げたのである。変化及びフランスファッションの内容については第 2 章で詳しく述べた。第 2 章では、*Godey's lady's Book* と、J・セヴラ著 *"Dressed for the Photographer"* の 1870 年代のファッションを比較している。

以上、アメリカの南北戦争と再建の歴史をたどってみた。この歴史は後の節で述べてゆく要因と共に、1870 年代におけるアメリカの女性服にも影響を与え、変化をもたらした出来事であった。

2. 普仏戦争のアメリカ・ファッションへの影響

ドイツ統一をめざすプロイセン国の宰相ビスマルク（Bismarck）の挑発から、それを阻もうとするフランス皇帝ナポレオン 3 世（Napoléon III）とプロイセンが衝突し、開戦したのが普仏戦争である。この戦争は 1870 年、アメリカの南北戦争再建期に起きた戦争であるが、翌 1871 年セダンの戦いの後、ナポレオン 3 世はプロイセン王ウィルヘルム 1 世（Wilhelm I）に降伏を余儀なくされる、という結果に終わる。

この戦争の敗北により、フランスは大きな痛手をこうむった。80年代に入ると、回復をたどり再び栄えるが、その10年間でさえも、フランスはファッションの発信地的な存在であったものと思われる。しかし、フランス中を苦労と困難の渦に巻き込んだ普仏戦争は、アメリカとイギリスとではかなり違うとらえ方をされている（Joan Severa, p. 292）。

アメリカのファッション記者には、戦争やその結果についてあまり語られなかった。反対に、イギリスにおいては英語雑誌で徹底的に話されていた。ここで述べた普仏戦争も、諸外国へのファッションの伝達を一時中断させた大事件であった。

イギリスのファッション記者の目から見るフランスへの思いは、次の様なものであった。フランス流のスタイルに愛着は感じるものの、フランスが常にイギリス女性のスタイルを決定している不公平さに憤りを感じている、ということである。つまり、記者自身はイギリスのスタイルが気に入っていて、満足もしているのに、なぜイギリス女性はこんなにもフランスファッションを受け入れるのか、という思いからではないだろうか。

そのイギリス記者によると、当時のイギリスでは多くのアイデアと多量の材料をフランスから手に入れていた。一方、アメリカの雑誌では、フランスの最新作から選び抜いたファッション・プレートを供給し続け、詳細に討論した。マンネリ化したものですら、"*la belle ellle France*" から発する最新の情報は、 *Godey's Lady's Book* に掲載され、アメリカの記者やおしゃれなアメリカの女性たちにとって、 明らかに重要であった。中断されていた通商が再開されたとき、新しいフランスの流行はいちはやく模倣された。フランスが発信するファッションの情報は、海を越えて各国へ様々な形で伝達され、その国に影響を及ぼし、また重要視されたのである。

第 2 章で詳しく述べるが、当時ヨーロッパではクリノリン衣裳からバッスル衣裳への変化が見られた。それはナポレオン 3 世の皇后ユージュニ（Eugenie）が着用していたことが流行の先がけとなった。クリノリン衣裳とは、胴部から裾にかけてのスカートのラインを、釣鐘状に見せたスタイルである。スカートの下に、針金とテープを用いて鳥かごのような形に固定したクリノリンを装着していたため、こう呼ばれた。また、バッスル衣裳とはバッスルという腰当てを後腰にとりつけ、後部を膨らませたスタイルである。バッスル衣裳は、アメリカやイギリスだけでなく日本でも1883年（明治16年）に鹿鳴館で大流行した。

普仏戦争の影響は、1860 年代にアメリカで起こった南北戦争が引き起こした不況とともに、当時の世界各国へファッションの変化をもたらしたといえる。しかし、*Godey's Lady's Book* に掲載されているファッションは、フランス国内でもビクトリア朝の上流階級に位置する人々のスタイルといえよう。したがって流行に敏感なアメリカ女性たちの中でも、フランスのスタイルを忠実に追うことは一握りの裕福な家庭にのみ許された。中産

階級の女性たちは、衣服の一部、すなわち装飾部分に流行を取り入れつつ、自分で作ることの労力を惜しまずに楽しんでいたのではないだろうか。この時活躍したミシンについては、次節で詳しく述べている。

3. ミシンの発達

1870 年代アメリカ・ファッションの公式化の要因は、第 2 節で述べたフランスからの影響によるもののほかに、ミシンの発達、鉄道の発達にともなう輸送の大幅な改善によるアメリカの布地メーカーの成功、そしてパターンシステムの発達だった。この節では、その中の、ミシンの発達について述べたいと思う。

南北戦争を契機にした、アメリカ産業の発達はめまぐるしいものであった。戦争以前は河川や運河に頼った製造品の運搬であったが、戦争後は鉄道による運搬がそれを上回る状態となった。1830 年に最初の鉄道が開通し、ボルティモアとオハイオ間を結んだ。1869 年には西からのセントラル＝パシフィック鉄道と、東からのユニオン＝パシフィック鉄道が結びつき、大陸初の横断鉄道の完成をみた。このあいだにもアメリカ各地に鉄道は敷設され、様々な都市へ向けて衣料の発展にも力を添えた。南北戦争は輸送を崩壊させ、商売にも大きな打撃を与えたが、軍服の製造により、再び盛り返した。

一般に、南北戦争は産業の発展において重要な役割を果たしたと言われている。戦時中、軍服の製造にはミシンが一役も二役もかっていた。アメリカの衣服産業では 1850 年代にミシンが登場し、そして 60 年代にはミシンはすでに普及していた。1850 年、シンガーは研究に研究を重ね、実用性を立証した、ミシンの改良版を発明した。その出来事はＥ・ホウ（Elias Howe）の主張を変え、シンガーをミシンの発明者にした。特許をとったミシンの影響は、ミシンの競争を引き起こし、縫うことのできる機械のアイデアを宣伝することになった。家庭の主婦に依頼されていた軍服製造作業も、新しく作られた工場で労働者が工場制で行なっていた。品質はあまり良くなかったが、戦争中には重宝がられた。ここで身に付いた技術と標準サイズの研究は、後になって既製服の発達に大いに役立った。

ここで、ミシンの発明の歴史をたどってみよう（田中千代, 1991 年, pp. 1006-1007, 注〔和書（3）〕）。1589 年、イギリスのＷ・リー（William Lee）によりミシンの基本となるものが発明された。これは毛糸編の針の動きからヒントを得たもので、今日の鎖縫ミシンの元祖となった。ミシン針の発明は、1834 年、アメリカのＷ・ハント（Walter Hunt）によって発明された。当時の針は、現在のものと同じくらい高性能なものだと考えてよい。その針は先端に穴があいており、そこに糸を通してそのまま布に刺し、縫い合わせていったものであった。これは大変画期的な発明で、今日のロック・ステッチ・ミシンと言われる本縫い、あるいは錠縫いの機構の基盤を築き上げた。

ミシンを使用することで、手縫いの時よりもどれだけ仕事が楽になったかという例を挙げておこう。シャツを一枚作るのに、粗末なものでも 14 時間 26 分ほどかかっていたのが、ミシンで縫うと 1 時間 16 分で縫えた（Claudia B. Kidwell/Margaret C. Christman, 1974, p. 75）。また、手縫いではシャツを 1 週間に 9 枚が限度だった。これでは大量生産はおろか、作り手側からしても、労働は過酷であったし賃金も安いという悪条件の下で働かなければならなかった。しかしミシンの登場により、針目が均一で、労働時間も短縮され、その上大量生産も可能になる。また、ミシンメーカーも衣服の大量生産のための前述にみられる利点をアピールした。さらにミシン自体も 1880 年代までに発展を見せた。手回し式や足踏み式など、動力が人間であった間には飛躍的な発展はなかったが、蒸気や電気が使用され始めると、1 分間に縫える量も以前に比べ 3. 5 倍に膨れあがった。ミシンに付随して、裁断機やアイロンの加熱法の進歩なども、労力を削減し、産業の発展にともなう大量生産をとげた要因の一つではないかと思われる。

このように、ミシンはその登場や進歩により急激に需要が伸びたが、伝統的テーラーにとってはおもしろくない話であった。熟練した裁縫婦さえミシンとの競争に敗れ、賃金が下がるという打撃を受けたためである。戦中から戦後において、紳士の上着についてはテーラーに依頼するのが普通だった。ミシンで仕上げる箇所もあったが、柔らかい感じに仕上げる裾始末、衿やラペルの箇所など、着用者の好みに適応しなければならない場合も多かった。なかなか仕事が進まない上に、低賃金では当時の裁縫婦の暮らしも楽にはならなかったであろう。

戦時中の婦人服については、まだ救いがあった。流行に関する考えは、戦時中であるにも関わらず消え失せることはなかった。よい衣服に必要とされたのは完全なフィットで、これは大変重要視されていた。衣服をスムーズにフィットさせることを達成するという点では、専門の仕立屋のほうが主婦やお針子よりも技術的に熟練者であった。

19 世紀末までは、以上のようにミシンの発達による利点ばかりでなく問題点もみられ、衣服の種類により使用される箇所が限定されるにとどまった。70 年代においては、全ての衣服についての縫製にミシンが使用されることはなく、婦人服も一つの例外であった。

1870 年代、アメリカでのミシンの所有者と教会に行く人の興味深い資料が残っている（Joan Severa, 1995, p. 294.）。ミシンを所有している家庭は、所有していない家庭よりも既製品をわずかに多く使っており、教会によく行く家庭の 59%がミシンを所有していて、それは、教会に行かない家庭よりも幾分、多いパーセンテージなのである。つまり、ミシンを所有している家庭は既製服をよく用い、さらに教会にもよく行くことが多い、ということである。裕福になりつつある家庭の基準は、文化・宗教的向上に加えて、特定の

財産の所有にあることを認識することであった。このことから、各家庭におけるミシンの所有が流行について行くためのシンボルであったものと推察される。

女性たちは戦争中よりも戦争後の方がいくぶん気楽にミシンを使用できた。なぜなら、家庭で自分の好みの服を低コストで作ることができたし、この年代に著しく急増した既製服にも、自らミシンを使って装飾することによって、流行を追うだけでなくオリジナリティや楽しみが加わったからである。そしてアメリカで家庭裁縫が発達したばかりでなく、日本でも同様に発達した。しかし両国において戦争による影響で一時発展が中断されたことは、少々皮肉な一致である。さらに、フランスからのファッション情報が、世界のあらゆる場所でもてはやされたことも理解できた。

４．1870 年代のパターンシステム

1864 年、*Demorest's Monthly Magazine* は、依頼人が 25 セントと彼女自身の寸法を測って郵送すると、オーダーメイドフィットのジャケットとブラウスのペーパーパターンを提供すると宣伝した。女性はそのパターンを購入し、自分の体にフィットするように作り変えたのではないかといわれている。1870 年代に人気の上昇を続けたデモレストのカタログは、裕福な婦人のためにドレスメーカーによって用いられ、もちろん自分のために縫う主婦によっても使用された。その他のファッション誌は、読者の目をデモレストに向けさせながら、パターン、材料に対する注文を完全に充足し、さらなるファッションアドバイスや情報の発行をおこなった。そしてそのような方法でビジネスを進展させていったのであった。

1870 年代に入ると、E・バタリック（Ebenezer Butterick）によるパターンメイキング作業がデモレストよりはるかに大きく、さらに成長するようになった。また、バタリックは、アメリカで薄葉紙のパターンの大量生産に初めて成功した。

バタリック社の宣伝文句は以下のことであった。“我が社のパターンを購入する際には、あなた自身の身体の寸法を正確にメジャーで測り、その値に相当するサイズを見る。測定してもらう相手に、前側あるいは後ろ側を別々に測ってもらうかどうかはあまり重要でない。いずれにしろ、測定する方法は、下図に示してある通りである。このことをきちんと守れば、次のような測定ルールのすべての衣服の場合において、満足する出来上がりを保証する。”測定ルールについての説明も広告に載っている。婦人用のポロネーズ、胴着、ゆったりめの上着、クローク（マント）、ドレス、ブラウス等の測定の基本は、バストの寸法を測ることであった。他にも、シャツや男子のジャケット、コート、ブラウス、ベスト、オーバーコート、パンツの測定法も簡単に書いてある。1870 年代の女性服の流行の特徴は、身体にフィットさせることであった。それゆえどのパターンの測定法にもみられる

注意は、あまり窮屈に測るのではなく、少しゆとりをもって測ることであった。さらに、このパターンは、アメリカ国内、カナダのあらゆる地域に届けることが可能であることで締めくくられている。

バタリックのパターンは、比例段階のシステムにより、サイズに合わせて作られた。このパターンは、1863年に初めて発行されたが、男子用衣服、女性のファッションのために1866 年に種類が増やされ、まもなく大量のデザインが作られた。女性用のスカート、下着、ポケット、エプロン、ガウン、ジャケット、男性用のジャケット、オーバーコート、スーツ、男児用の半ズボン、長ズボン、ブラウスがあった。この写真のパターンは1873年夏のもので老若男女あわせて、それぞれに値段やサイズ、時には適用年齢が書いてあるものもあった。また、パターンそれぞれの値段は10セントから1ドルの範囲にあり、サイズもワンサイズから14サイズまで揃っていた。

興味深いのは、袖のみのパターンや赤ちゃんのよだれかけのパターン、ポケットのみのパターンなど、現代の我々の考えからは想像もつかないほど魅力的なパターンが販売されていた、ということである。また、バタリックパターンの値段の範囲が10セントから1ドルに対し、既製服の値段はほとんど1ドル以上であった。安価でパターンを入手する代わりに、労力を惜しまずに製作に打ち込んだと推察される。それに加え、女性だけでなく男性服や子ども服のパターンも載っていたので、家庭の主婦が節約するのに大いに役立ったであろう。

すでに1868年までには、バタリックはバラエティーに富んだスタイルの、15種もの標準パターンを提供していた。流行が変化するたびに新しいパターンを出版しており、安価で使いやすかったため、早いペースでパターン生産を認められた。売り上げは大変好調で、1871年だけで600万以上のパターンが売れ、その状態が1900年まで続いた。バタリックは、そのデザインとパターンの豊富さをもって、中産階級の主婦に向け裕福な人にならってスタイル選択の幅を広げることを主張し、衣服の選択の仕方、身につけ方に革命を起こした。パターンの普及の範囲はアメリカ国内でも広範囲に及び、都会や田舎に届けられていた。デザイン、パターン、作り方の載ったバタリックのカタログから作られた衣服は、農場でも繁華街でも同様に着用されていた。

以上により、バタリックのパターンがデモレストのパターンの生産や売り上げを抜いて、一気に人気が上昇したことがわかった。また、そのことが長期にわたって中産階級の人々に愛用された理由とも結びつくのではないか、という結論に至った（濱田雅子, 2009, 第7章 pp. 186-202, 注〔和書 (2)〕）。

4. 既製品と家庭裁縫の関係

(1)　男性服の既製品化

衣服の既製品化は、男性服から始まった。通説ではまず、軍服をはじめとする制服の生産から始まったと言われている（ 鍜島康子，1988年，p. 9,　注〔和書　(4) 〕）。戦争中の軍服の需要拡大にとどまらず、復員してきた兵士たちも既製品を購入することになり、ますます需要が拡大し既製品の生産拡大につながった。その点から、南北戦争はアメリカにおいての既製品発達において、重要な役割を果たしたと言える。そして、大量の移民が各地から入ってきて、アメリカ社会に同化するためにスーツを必要としたことも、既製品発達の重要な一因であると考えられる、と鍜島は述べている（『同上書』pp. 34-37）。

この意見に筆者も賛成である。なぜなら、復員してきた兵士にしろ、移民にしろ、仕立てのものを入手するほどの経済的余裕があったとは考えにくいからである。そこで、より安価に手に入れることのできた、既製のものを購入していたのであろうと推察される。移民の服装の問題は興味深い今後の研究課題である。

また、鍜島論文では既製服はヨーロッパでは、あまり歓迎されるものではなかったのに対して、アメリカでは最も一般民衆の欲求を代表する衣服であり、したがって、人口の大部分を占める階級層の支持を得ていたことも、既製品発達の一因であると考えられる、と述べられている（ 鍜島康子，1988年，　p. 3,　注〔和書　(4) 〕）。

制服以外での、既製服製造は、通常表着としている上着とズボン、チョッキから始まり、上述の要因から、男性服の既製品化は着実に進んでいった。そして、1878年には、アメリカの産業史の著者、A. ボウラー（Bolle s　Albert　S.）が「今や家庭で男性服を作ることは実際になくなり、すべての人、農夫から鉄道の総裁に至るまで、店に行き、棚から選びさえすれば、体に合う服を得られる」（Albert S. Bolles, 1811，p. 399）と述べるほどにまで、男性服の既製服産業は発達していった。このことから、1870 年代には男子の既製服は、かなり浸透していたものと考えられる。

(2)　女性服の既製品化

女子用既製服の製造は、1880から1890年代に成長期を迎え、1910年代には男子用既製服を追い越すまでになったが、一般に、男性服に比べて約100年も遅れて始まったと言われている（鍜島康子，1988年，　p. 81,　注〔和書　(4) 〕。

女子用の既製服は、男性服と衣服の種類の似ているものから始まった。はじめに主に取り扱われたものは外套（クローク）類であり、これは、外套類が、衣服重量が大きく、作るためにテーラーの技術が必要で、家庭では容易に作れなかったからであろうと、鍜島は

述べている（鍜島康子，1988 年，　p. 81，　注〔和書　(4)〕が、筆者もこの研究を通じて、同じ考えに至った。

男性服の既製品化が、通常着用されている上着やズボンなどから始まったのに対して、女子の通常着用するドレスは、洋裁店か、家庭に回ってくる裁縫婦によって作られていた。既製品製造が始まった当初、クローク以外は製造し、販売に値する商品はないといわれ（鍜島康子，1988 年，　p. 81，　注〔和書　(4)〕、1880 年まではほとんどの製造業者が、クローク以外の既製服製造に手を出していなかったものと推察される。

このことから、1870 年代には女性服の既製品は外套類が主であったと考えられる。J. セヴラ（Joan Severa）によると、いくらかチュニックやジャケット、スーツも見られるようになってき始めたようである（Joan Severa，1955，p. 297）が、これらの服種の共通点は、体にフィットすることを期待されていないということであり、量産に適していたものと考えられる。

このように、男性用既製服と異なり、日常着用されるドレスが既製品として出回らなかったのはなぜだろうか。それに対して、鍜島はいくつかの要因について述べている。

第一に、当時のドレスのスタイルが、体にぴったりとフィットしているものが好まれていたこと。次に、アメリカにおける家庭裁縫の進歩、そして最後に、ドレスの仕立ての複雑さと手作りの物に対する価値観が依然として高かった時代の風潮、が挙げられている（鍜島康子，1988 年，pp. 91-93，　注〔和書　(4)〕）。

この鍜島の意見について、筆者は以下のような見解に至った。

第一の要因については、18 世紀末に姿を消したコルセットが、クリノリン衣装のころには完全に復活し、1870 年代にはそれなしで衣裳は考えられず、コルセットによって造られた体のラインはとても重要視されていた。しかし、それにはどうしても一人一人の体に合わせて作ることが必要とされ、既製品化することに無理があったのであろうと考えた。

次の要因についてであるが、女性服の既製服産業が発達し始めるとほぼ同時期に、1860 年代にはデモレスト（Demorest）、また、1870 年代にはデモレストを抜く成功を収めることになる、E. バタリック（Ebenezer Butterick）によって、既製の型紙が販売されるようになった。デモレストは、主に裕福な婦人のためのドレスメーカーに型紙を販売していたが、バタリックは大々的な広告や代理店及び通信販売用カタログを使用し、様々なサイズやスタイルの型紙の小売をはじめた（鍜島康子，1988 年，　p. 91，　注〔和書　(4)〕）。このことにより、一般の婦人たちはサイズが豊富で、安い型紙を入手できるようになった。また、このころには、ミシンを所有する家庭も増え、家庭裁縫がより容易になり、流行のスタイルの衣服を作ることができるようになった。ドレスにおいても、かなりフィットした、

または凝ったものでなければ、そこそこおしゃれなものを作ることができるようになったと考えられる。

最後の要因についてであるが、1870 年代から 1890 年代にかけて、ドレスのスタイルはクリノリンからバッスル、S カーブシルエットと変化している。特に、1870 年代はドレスのスタイルが、クリノリンから、バッスルへ移行した時期にあたるとされている。バッスル・スタイルでは、様々な仕方で布地を腰の上にまとめ、後方のふくらみに過剰な装飾の付いているものが多かった。下スカートと上に乗せるバッスルのための 2 枚のスカートは、おのおのに襞飾りやボー、ブレードやルーシングや縁飾りなどをつけていた。上体部とスカートは分かれているものが多く、胴部にぴったりついた袖には、襞飾りやフリルがついている。また、胴着の切り替え線には、芯となる張り骨などが入れ込まれていた。このように、1870 年代から 1890 年代にかけてのドレスの裁断と仕立ては、これまでの歴史には見られないほど複雑なものであった。また、手作りのものに対する価値観が高いということに関しては、現代の私たちと何ら変わりのないことのように思え、当時の人に親近感さえ覚えた。

以上のような要因により、女性用のドレスは既製品には向かなかったものと考えられるのである。

(3)　家庭裁縫

当時の家庭裁縫について知るための資料がいくつかある。

1 つは、1877 年 11 月号の，Prairie Farmer の中の“A Woman's Wardrobe”という記事（Joan Severa, p. 295）である。この記事の中で J. ジューン（Jenny June）は、彼女自身の不可欠なアイテムを挙げており、それは当時の女性にとって、何を着て過ごすべきかについてのアドバイスになっていた。

シルクのウールドレス	65 ドル
ウールのスーツ	35 ドル
部屋着	15 ドル
サマードレス（素材・装飾・付属物）	40 ドル
ネグリジェ　2 枚	10 ドル
スリッパを含めた靴	20 ドル
夏冬用帽子	15 ドル
下着・コルセット・靴下	25 ドル
クローク・ショール・その他アウター	25 ドル
	計 250 ドル

この資料について、ヘルベンストン（Helvenston）は、この見積りはとても大胆なもので、この価格は少なくとも、一部分は家庭裁縫によって作られることで、よい素材を保っていたに過ぎないと述べている（Helvenston Sally, 1985, p. 112 注〔洋書 (5)）〕 ）。つまり、これだけのワードローブをそろえることが、当時の女性にとって最低限必要とされてはいたが、すべてを仕立物でそろえるのにはかなり無理があり、彼女たちは自分たちの足りない経済力を、彼女たち自身が家庭裁縫によって衣類を作ることによって、補っていたのである。

もう１つは、ウィスコンシン州のロック村で、ジェーンズヴィル郊外で暮らしている農夫の妻が 1877 年から 1881 年にかけてつけていた日記である。1877 年のある期間が例に挙げられている（ Joan Severa, p. 300）。

1/15： スージーは彼女の真っ赤なドレスを縫うピッチが遅くなってきて、私はいくらか継ぎを施していた。

1/19： スージーと私はドレスを縫い、私は新しい"Waste"を裁断した。

1/23： ジェーンズヴィルに行き、鳥を持って帰ってきた。スージーは、ドレスに飾り付けをした。私はスカートを裁断し、部屋着に付けた。

1/24： スージーは私のオーバースカートを作り終えた。

1/25： スージーは私のドレスに刺繍を施した。

2/17： ドレスをあわせるために、中央へ行った。

2/19： スージーは自分のために部屋着を裁断した。

3/7： 一片のジェーンズヴィル綿を買った。

3/22： カーターさん宅に泊まった。私のドレスを作ってもらうために彼女に代金を払った。

この資料は、当時の女性が彼女の家族の衣生活を維持する努力が、どれほどのものであったかを物語っている。

そして、この２つの資料から推測できる、彼女たちの行動を支えるのに、ミシンは第１章でも述べたように、とても重要な役割を果たしていたと考えられる。なぜなら、当時の衣装のスカート幅、パイピングなどの装飾類、構造の複雑さ、どの点をとっても手縫いでは、１着のドレスを作るのに、気の遠くなるほどの時間を費やさねばならなかったことが、容易に想像できるからである。しかし、ミシンがあった事は、彼女たちの余暇の時間が増えるのではなく、代わりに、彼女たちはミシンの虜になってしまい、より多くの衣服を作る、または一着を早く作るという方向へ進んでいったと考えられる。その裏づけとして、Jensen and Davidson 35 では、以下のように述べられている。"実際、ミシンは時間を節約しなかった。それどころか、むしろ、労力の節約に役立つその他の装置と同じように、

ミシンは期待を増大させた。（Jensen Joan and Davidson, eds., 1984, p.35.〔Quoted in Joan Severa, p. 295.〕）”

4.　既製品と家庭裁縫の関係

第 3 節で述べたように、当時の女性は必要に駆られていたとしても、いくらかの楽しみは持って、家庭裁縫に取り組んでいた。それにもかかわらず、家庭裁縫で扱うには無理があった外套（クローク）類以外の既製品までもが、だんだん発達していったのはなぜだろうか。

それには 1 つ、興味深い資料がある。それは、1870 年 7 月 2 日に、Smith and Bostwich で既製服を宣伝しているもの（Joan Severa, p. 297.）である。

フランネルスーツ	8. 50 ドル
女性用スカート	0. 375 から 125 ドル
リネン・キャンブリックスカート	1 から 9 ドル
白いベスト・外套	1 ドル

これを見て、第 3 章の“A Woman's Wardrobe”と比較してみると、同じ種類の衣服はないにしろ、明らかに価格が安い。このことから、既製服の利点は、現代と同じように、大量生産できるための安い価格であったことが分かる。

しかし、セヴラ女史は、既製服は完全に家庭裁縫で作られた衣服の替わりになるわけではなかったと言っている（Joan Severa, p. 297）。

当時の女性たちは、基本的には衣服を家庭裁縫によって作り、その他の既製品を購入する理由としては、安い既製品を購入することで、お金を節約し、彼女たちの楽しみでもあった家庭裁縫で、よりよい素材を使い、よりよい衣服を作り、またもっとお金がたまれば、とびっきりの仕立てのドレスを購入していたと考えられる。

以上の考察から既製品と家庭裁縫の関係についてまとめると、既製品は、家庭裁縫の衣服や、ましてや仕立ての衣服と対等に扱われていたのではなく、あくまで、クロークのように作れないものを購入して、家庭裁縫の補いとして利用されていたものと結論づけられる。

【第 1 章】〔注〕

和書

(1)　貫堂嘉之『南北戦争の時代』（岩波新書、2019）。

(2)　濱田雅子『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）。

(3)　田中千代『新・田中千代服飾事典』同文書院 1991 年、

⑷　鍜島康子『既製服の時代―アメリカ衣服産業の発展―』家政教育社 1988 年初版発行。

洋書

(1)　Accessible Archives　Freedmen's　Bureau

(2)　Joan Severa, *Dressed for the Photographer Ordinary Americans and fashion, 1840-1990*, The Kent State University, Press, 1955.

(3)　Claudia B. Kidwell/Margaret C. Christman, *SUITING EVERYONE The Democratization of Clothing in America*, Smithsonian Institution, Press, 1974.

⑷　Albert S. Bolles, *Industrial History of United States, Re*, p*rints of Economic Classis*　(Augustus M. Kelley, Publishers, New York, 1966)　third ed., 1811.

(5)　Helvenston Sally, *Feminine Response to a Frontier Environment as Reflect in the Clothing of Kansas Women, 1854-1895*, Ph. D. Kansas State University, 1985.

(6)　Jensen Joan and Davidson, eds., *A Needle, A Bobbin, A Strike: Women Needle Workers in America.*, P*hiladelphia*: Temple University Press, 1984.　(Quoted in Joan Severa, op. cit., p.295.

第 2 章
クリノリン衣裳からバッスル衣裳へ

I　階級別にみた女性服

ヨーロッパでは、1860 年代から 1870 年代にかけての衣服は、1852 年から 1860 年代末まで服飾界を華やかに彩っていたクリノリン衣裳からポロネーズを経てバッスル衣裳に至った（丹野　郁編，1980 年，pp. 131-132，320-321　注〔和書（1）〕）（Plate 12 ）。当時クリノリンは、ナポレオン 3 世の皇后ユージュニが美しく着用していたため、拍車をかけて流行していった（『同上書』p. 132）。特徴としては、布に張り骨として鯨ひげや針金をつけ胴から裾にかけて釣鐘状に形作り（丹野 郁 ，1999 年初版，p. 179　注〔和書（2）〕）、スカートに膨らみをもたせたものであった。スカートは何段かになっており、そこに対照的な色で装飾を施し華やかに見せていた。バッスルは、宮廷デザイナーとして実権を握っていた F. ワース（Frederick Worth）のデザインによるもの（丹野　郁編，1980 年，p. 124，注〔和書（1）〕）と伝えられており、また日本においては明治 16 年、鹿鳴館において貴婦人達が直輸入のバッスル・スタイルのドレスを着用していた（丹野　郁編，1980 年，p. 321 注〔和書（1）〕）。特徴は、後部を強調させたいがために今までの横の膨らみを後部へ追いやっている上に、装飾もたくさん施しているため、まるで重い荷物を背負っているという印象を受ける。シルエットもクリノリンの時のふんわりしたものからシャープなものへと変化している。そして、バッスルを装うことによって後ろスカートが短くなってしまうのである。バッスル・スタイルはアメリカにも伝えられ、上流階級の

Plate 12　*Godey's Lady's Book*　July 1870

人々だけにとりいれられる。アメリカの新聞の Brinker 201 にバッスルに関する興味深い記事（Joan Severa, p. 296）がある。それは、教会へ行く際バッスルの代用品として、白い布片に新聞を詰めて紐でしばってまとめたものをバッスルとしていた、という滑稽な記事である。手作りにしてまでもバッスルを身につけており、もし、つけないで行ったときには場違いだと感じるほど必要最低限のもので、一種のマナーであったようである。 しかし、この頃はコルセットとバッスルをつけて、技巧的に無理矢理人間の体を締めつけるスタイルに価値がないということになり、バッスル・スタイルを最後に自然の体型にそったものが身につけられるようになっていった。バッスル衣裳はクリノリン衣裳の残照として、約 10 年間流行したのであるが、この無意味な膨らみも、近代生活の著しい変化に対応して、1890 年頃には完全に姿を消すことになる（丹野　郁編, 1980 年, p. 179, 注〔和書（1）〕）。

写真 153　スタジオ・ポートレート
1870 年頃
提供：***The Oakland Museum*** **, p. 325**

本節では当時のアメリカの女性服をドレス、外套、部屋着、装飾物などに分類し、装飾やデザインについて、写真資料も混じえて考察してみたいと思う。また、ドレスに関しては同時期のフランスにおける流行の衣裳のイラストが掲載されていた *Godey's Lady's Book* 掲載の衣裳と比較してみる。以下において、階級別にみた女性服の写真を 7 枚、紹介・考察する。

このスタジオ・ポートレートの写真 153（1870 年頃）（p. 325）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。セヴラ女史の解説には、写真の場面について、次のように書かれている。

「写真の裏の手書きのメモによると、アリス・ウォーナー・ヒュイット（Alice Warner Huit）はこのとき 18 歳、写真はカリフォルニア州メアリーズヴィルのオッドフェローズ・ビルディングに所在するウッズ・ギャラリー（Woods Gallery, Odd Fellows Building, Marysville, California）という写真スタジオで撮影された。」写真を一目見ると、この娘はかなり派手な服装であると誰しも感じるであろう。セヴラ女史は細やかに、この服装を説明している。

> このドレスは厚手のシルク製で、カーブした裁断で作られたコートスリーブの上腕部と袖口が、共布のルーシュ（ruche）のパフで装飾されている。……衿はまったく見えず、かわりに幅の広いシルクのネックリボンを巻いて平たい蝶結びにし、蝶結びの輪の部分の中央を楕円形のブローチで留めて、リボンの両端は幅いっぱいに広げてある（Joan Severa, p. 325 からの引用）。

髪型はおとなしい方だとして、アクセサリーにも言及している。

> アリスは、後ろ髪に詰め物をしてロール状に結い、目の粗い黒のネットをかぶせて首の後ろの低い位置で保持している。前の髪は真ん中で分け、ウェーブをつけた

写真 154　スタジオ・ポートレート　1870 年頃
提供：*The Essex Institute*（*14,845*），p.326

こめかみのロールを両側に高く引き上げている。……指には指輪をふたつしているが、片方はおそらく黒玉製であろう（Joan Severa, p. 325）。

いかにも金持ちそうな装いの少女の写真である。

スタジオ・ポートレート写真 154（1870 年頃）（p. 327）は、*The Essex Institute*（*14,845*）の所蔵品である。被写体のアグネス・レノックス・バブコック（Agnes Lennox Babcock）は、とてもファッショナブルな 20 歳未満の若さであるという。

セヴラ女史は、金持ちで保守的な好みの若い女性の髪型、アクセサリー、服装について、詳しく解説している。一部、紹介させていただく。

彼女は髪をぴったりと後ろに引き、長くねじった髪を頭の後ろでぐるりと巻いて首の後ろへ垂らすアレンジにしている。……長いイヤリングは、たくさんの飾りを吊ったその下にファセットカット（facet cut）［ダイヤモンドや色石の表面をカットする場合に、複数の平面を石の上にカットする手法をいう］の黒玉を下げて仕上げたデザインで、極めておしゃれな、1870 年代としては新しいものである。

……シルク製、またはシルクとウールの混紡のドレスは単色であり、同じ生地で作ったソフトな折り返し衿がついている（Joan Severa, p. 326）。

さらに詳しい解説は、オリジナルを参照されたい。

この写真 155（1870 年頃）（p. 328）は、*Gail Putnam* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の背景情報について、次のように書いている。

写真 155 スタジオ・ポートレート
1870 年頃
提供：***Gail Putnam***，p. 328

父のフリーマンは船長で、一家は１年の半分はエリー運河に浮かぶ彼の定期船で暮らして旅客や貨物の輸送にたずさわり、残りの半分はバッファローで暮らした。次に、ふたりの娘の服装であるが、「この写真でふたりが着ているドレスは、一家の財力がなかなかのものであったことを物語っている。」という。これらの衣裳は、バッスル衣装である。衣服の解説は、詳細にわたっている。一部、紹介させていただく。

> 同一のドレスが２方向から写っているこの写真は、1870 年代初めの極端なスタイルを見るのにうってつけである。……ややベルスリーブ（bell sleeve）状に先が広がり全体にカーブした形の袖の肩から手首にかけて、共布のルーシュが付けられているが、このルーシュはそのシーズンのファッション・プレートで特に目立つデザインだった。ワンピースタイプでフレアーの入ったチュニック・オーバードレスの腰の後ろの部分には、大きく膨らんだ高いバッスルに合わせたアレンジがほどこされ、裾は２段になった共布のフラウンスで仕上げられている。……このすべてが、1870 年代初めに女性たちが好んだ『詰め物を入れた』見た目がどんなものだったかを如実に見せてくれる。……これは曲線形状が最もきつかった時代のコルセットで、このコルセットが生み出す大きく膨らんだ高いバストラインが、先端部が開いたダーツによる身頃の膨らみで目立たせられている……アイダは長いネックレス（necklace）（おそらく黒玉のビーズを紐に通したもの）を首にかけ、ふたりとも長いドロップイヤリングを付けている（Joan Severa，p. 329 より引用）。

貴重な解説である。髪型や帽子に関するさらなる詳細は、オリジナルを参照されたい。

このカルト・ド・ヴィジットの写真 156 （1872 年頃）（p. 330）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *45282*）の所蔵品である。

写真 156　カルト・ド・ヴィジット
1872 年頃
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
(WHi [3] 45282), p. 330

まず、被写体と場面についてであるが、セヴラ女史は、次のように解説している。

このグループ写真に写っている４人の若い女性は、おそらく 14 歳から 15 歳だろう。写真の裏には『プラム&ルーミス［写真館名］、ウィスコンシン州ポーテージ市（Plumb and Loomis, Portage City, Wisconsin）』というスタンプが捺されている。……８年生を終えて卒業することを記念した写真かもしれない。

セヴラ女史は、4 人のそれぞれやや異なるスタイルについて、詳述している。簡潔に紹介させていただく。

左端に立っている子の服装は一番少女っぽい［成人女性の服よりは少女服に近い］スタイルで、ゆるい身頃を単にスカートの中にたくし込み、袖はフレアーになった長袖（1870 年に再登場した）である。……

もうひとりの立っている少女は、ストライプの入ったシルクのドレスを着ている……V 字になったネックラインの内側は明るい色の透けるレースで飾られ、……形の整ったコルサージュ（corsage）には上質の黒いレースでアクセントがつけられている。コートスリーブの形に仕立てられた袖には幅の広いカフスがあって、腕の外側の縫い目に沿って小さなフリルが飾り付けられ、袖口は明るい色のレースで縁取られている。……左手前に座っている少女が着ているのはウールのドレスで、背中で締めるバスク型の身頃は前の左右の上の部分が尖っている。３人は後ろの髪をウェーブにて垂らしているが、右側に立っている少女だけは後頭部で三つ編みを輪にし、肩ごしに長いカールを１本垂らしている（Joan Severa, p. 331

写真 182　　カルト・ド・ヴィジット
1878 年頃
提供：***Deborah Fontana Cooney***，**p. 368**

より引用）。

卒業したての若い女性たちのファッションが写し込まれた貴重な写真である。

このカルト・ド・ヴィジットの写真 182（1878 年頃）p.(368) は、***Deborah Fontana Cooney*** の所蔵品である。

セヴラ女史によると、「この若い女性は、新しいスタイルの外出着に身を包み、ミズーリ州カンザスシティのソーマン・スタジオ（Saurman studio）で写真を撮ってもらった。」とのことである。服装は、バッスル衣裳ではなく、1878 年の流行のスタイルのウエストのくびれた美しい、見事なスタイルである。

セヴラ女史は、次のように解説している。

まずコルセットから始まる。この写真でもコルセットのラインがはっきりと見てとれる。バスト位置がとても低く、ウエストが細く、ヒップと腹部にかけてコントロールを保ちながら広がっていく。……このドレスはおそらくリンネル製で、幅の広い折り返し衿とカフスとスカートバンドには格子縞に織った生地が使われている。最新のスタイルに従った袖は腕にぴったりに裁断され、袖付け位置は、まだ若干ドロップショルダー気味ではあるものの以前よりはずっと高い。……スカートは、バイアスに裁断された格子縞の幅広いバンドの上に水平方向のタックがとられていて、前中心の低い位置には、胸の前のリボンと同じ暗色のシルクの蝶結びの装飾が付いている。裾はスカートと同じ布のフラウンスで飾られ、フラウンスの端は格子縞のバイアスの布で縁取られている（Joan Severa, p. 368 より引用）。

写真 183　カルト・ド・ヴィジット
1878 年頃
提供：***The Chicago Hiatorical Society* (*IChi-03599*)，p. 369**

これまで、上流階級の金持ちの女性と中流の家庭の少女の服装、婦人の服装を写真から紹介してきたが、最後の 2 枚は労働着である。

このカルト・ド・ヴィジットの写真 183 （1878 年頃）(p. 369) は、*Chicago Historical Society (IChi-03599)* の所蔵品である。

被写体の少女は新聞売りである。服装史上、珍しい写真である。原文を引用しながら、紹介させていただく。

写真撮影のためにポーズをとっているのは、シカゴ初の新聞売りの少女、ネッティーィー・ミルソン（Nettie Milsson）である。快活で有能そうな外見とこざっぱりしたドレスのネッティーは、多くの新聞少年と競いながら、自宅の近くで新聞を売っていたのだろう。……彼女のツーピースのコットンドレスは、1877〜1879 年の、バッスルを用いないクイラス・ファッションで仕立てられている。身頃はヒップ丈で身体にフィットしており、クイラス・ス タイルの飾りが縦に長く付けられていて、ベルトで締めている（ベルトは若い娘たちの共通のファッションだった）。……オーバースカートはとても長くて幅が狭く、裾はストライプ生地をバイアスに使って縁飾りがされている。

……アンダー・スカートの裾には、濃色に水玉模様を配した生地を使ってギャザーを寄せた幅の広いフラウンスが付けられており、フラウンスの上下の端はオーバースカートの裾と同じストライプ生地のバイアスバンドで飾られている。このドレスは、流行にのっとった女性用ドレスと比べてみるとオーバー・スカートの丈が長く、アンダー・スカートのフラウンスの上部のバイアスと重なってほとんど覆い隠され

写真184　　スタジオ・ポートレート
1879 - 80年
提供：***The National Museum of American History*** **（86-3987）**，p. 370

ている。…… 彼女は黒い麦藁帽子をビジネスライクにかぶり、一対の 優美なイヤリングと女性らしいレースのジャボ（jabot）［胸の部分に付けたレースの襞飾り］を身につけて、陽気な若き事業家としてのいで たちを非の打ちどころのないものに仕上げている（Joan Severa, p. 369より引用）。

スタジオ・ポートレートの写真 184（1879 - 80年）（p. 370）は、*The National Museum of American History（86-3987）*の所蔵品である。

被写体は、織物工場の女子行員である。この写真も、服装史上、珍しい写真である。。原文を引用しながら、紹介させていただく。

写真スタジオで絵に描かれた背景を背にポーズをとっているふたりの女性は、織物工場の女子工員であることを象徴する織機の杼（シャトル）［経糸の間に緯糸を通すのに使われる道具］を持っている。……左の女性のドレスは、1878 年頃に作られたと十分に判定できるだけの部分が見えている。アンダー・スカートは後ろが長く、前中央は短くて逆 V 字状になっており、その下にフラウンスの付いたアンダー・スカートが着用されている。……アームホールは適度に低い位置にとられ、袖はかなりゆったりしていて、手首の内側にはこぎれいな白いリンネルのカフスがタッキングで取り付けられている。……成人女性用としては丈がひどく短いスカート、実用的なウォーキングブーツ、タイトでコンパクトに結い上げた髪型は、危険の多い機械を使って長時間立ち仕事をするためにファッショナブルな見てくれを断念した妥協の産物である。そのかわり彼女のエプロンは、ハートの形の胸当てをドレスにピンで留め、ウエストバンドを後ろで結んできっちりフィットさせ、スカート部分がきれいな形をしていて、とてもしゃれているうえ、ていねいに洗濯され糊付けされている。……

もうひとりの女性のドレスの方は判断の手掛かりが少ないが、白いスタンドカラーと柔らかいネックリボンは1870年代の典型的な特徴である。この種の小さなフラウンスによる縁飾りは長年にわたって仕事用ドレスに広く採用されており、特に、ウエストバンドでシンプルにギャザーを寄せただけの、膨らみが少ないコットンスカートによく見られた。……はっきりとは見えないが、ふたりとも間違いなく硬いコルセットを着用し、最低でも1枚はペチコートをはいているはずである（Joan Severa, p. 369 より引用）。

II　服種別、部位別にみた女性服の特徴

1. ドレス

(1)　衿

1870年代の衣裳の衿の特徴をとらえるのには写真151がよい。この写真には、他の多くの写真に見られる様々な衿が見られる。よく見られる衿は、後列中央の女性の衿のようなプリーツが取られたレース製で、小さなフリルの立ち襟である。この写真は1870年のもので、この10年間の初期のものであるためか、同じような衿のものはないが、これが1870年代後半になると写真182（本書, p.237）、184（本書, p.239）のようによく見られる。このことからこの衿が、1870年代の流行であったことが分かる。また、晴れ着の場合ネックラインは四角あるいはV字型でそこにレース飾りが施されていたことが分かる。その裏付けとして、写真156（本書, p.236）は、とても適した資料である。

また、衿もとの装飾としては、写真151の同じ女性に見られる黒いネックリボンや、幅の広い蝶結びのリボンがよく見られる。今も昔も流行に敏感だったのは若者であったものと推察される。それに対し、フランスでも衿は首廻りに垂直に立った細かいプリーツがほとんどで、それ以外はV字や胸元の近くまで開き、その時はネックラインに沿ってフリルが施されている。これらの点に関しては、アメリカの衣裳の特徴と共通している。しかし、フランスでは *Godey's Lady's Book*, Plate12 のように、高価なネックレスが付けられている。この点に関してはアメリカではこのような豪華なアクセサリーが付けられることはほとんどない。

スタジオ撮影のグループ写真 151（1870年）（p. 322）は、*The Villa Louis Historic Site* の所蔵品である。

写真 151　スタジオ撮影のグループ写真
1870年
提供：***The Villa Louis Historic Site***, p. 32

セヴラ女史に拠ると、このグループ写真はニューヨーク市マンハッタンヴィルの「聖心女子修道会学校（Convent of the Sacred Heart）」のクラスメートや先生の写真であり、後列中央のニーナ・リン・スタージス（Nina Linn Sturgis）は、1870年に、上流層の子女が通うこの学校を卒業したとのことである。セヴラ女史は、写真の服装を次のように説明している。

左端の先生は教師にふさわしい控えめな服装で、1860 年代末のスタイルの黒いアルパカ（alpaca）のワンピースに 白い無地のリンネルの小さな衿を付けて着ている。彼女のそばに立っている少女は、おそらくニーナより年下だと思われる。……彼女が着ているのは暗色のウールのワンピースドレスで、身頃は若い人向けのスタイルにしばしば見られたゆとりのある柔らかい膨らみを持ち、首もとは先が尖った白いリンネルの衿を付けて黒いシルクのリボンを結んでいる。ニーナの隣に立っている少女が身に着けているのは、ニーナの服とは違うがやはり人気のあった形のドレスで、……首のところは白いリンネルの衿を付けて小さな黒玉のブローチ（brooch）で留めている。

床に座ったもうひとりはエラ・マリー・スタージスである。　……衿は白いリンネルをファッショナブルなカットで仕立てたノッチドカラーで、前の部分はV字形をなしている。

画面中央に座っている若い女性は、シニョンの上で明るい色のリボンを蝶結びにしている。彼女の黒いドレスの身頃でよく目立つのはネックラインのあたりで、美しいレースの衿と暗色のリボンが首もとを飾っている（Joan Severa,　pp. 322 - 323 より引用）

白いリネンの衿やレースの衿を着けている。

(2) 袖

1870 年代の袖の特徴は写真 156（本書 ，p. 234）ではっきりと見られる。袖の形態の特徴としては、左側に立っている女性の細長く開いたオープンスリーブと、他の３人の女性の先が次第に細くなったとてもゆったりしたコートスリーブである。割合としてはコートスリーブの方が多く、これは動き易さを考えてのことであろうと推察される。装飾においてもこの写真から分かるように、袖と合ったフリルのレースが施されていた。

ヨーロッパではオープンスリーブが大半で、それには袖口の縁にフリンジがあしらわれていたり、細かいプリーツが施されたりしており、アメリカと比べると形は同じであるが、ヨーロッパの方が装飾が多く、かなり華やかであった。

(3) 裾

コットンドレスやラッパーも含め、1870 年代の多くのドレスは--特にプリンセス・スタイルのワンピースドレスは、70 年代の 10 年間を通して後ろの裾を引きずるデザインであった。 このトレーン［引き裾］には反対する声もあり、実際、裾を引きずらないスカートが流行したこともあったが、流行に敏感な女性たちはトレーンという「不便さ」を「典雅と美」のために喜んで耐え忍んだ。 裾を引きずるドレスが象徴したのは、暇を持つ優雅な女性であるということであった。それに対して、フランスの場合は、*Godey's Lady's Book* のファッション・プレート Plate12 の左から２番目の衣裳のように小花をあしらったり、ちょう結びを付けたりしたものが多いので、表面装飾で華やかさを出していたのではないかと推察される。写真では座っているものが多いため、裾がどの位の長さであったかよくわからない。だが、床丈が多かった様に見受けられる（Joan Severa, p. 303 を要約）。

2. 外套

ショールは、1860 年代には上衣の服種であり、1870 年代には、イブニングドレスのための外套として有効なものであった。ショールよりもさらに人気があったのは、その後登場するドルマンであった（Joan Severa, p. 306）。これは裾がなく、多少身体にフィットしていてバッスルを引き立たせるためにデザインされた外套であった。素材は、シルクや羊毛で、縁周りにはファーやルーシングで装飾されており、10 年間ずっと人気を保っていた。しかし、はるかにポピュラーな上着があった。それはジャケットである。襞はなく、

背中に 3 本の縫い目があるためウエストにゆとりがあり、丈は 1870 年代初めのものは短かったが、後半に入ると長くなっていた。また後半の特徴として、アザラシの皮で作られるものが多く、凝った装飾が施されており、それは本体と異なる素材で作られていた。1870 年終わりの 2、3 年は、細身で丈長のフィットしたウールのコートが流行した。このようなシルエットになったのは、バッスルが小さくなったからである。袖口は、以前と変わらず装飾されていた。

1870 年代初期は、外套はバッスルを引き立たせるためのものであったから、バッスルによってそのドレスラインも決まっていた。さらに、大げさなバッスルが装われなかった 1877、1878 年には、衣裳の後部を目立たせるために強調され、飾り立てられていた（Joan Severa, pp. 306–307 を要約）。

3. 部屋着

部屋着のラインは、二重のワトー襞で流れるようにゆったりと上品なものであり、装飾物はスカラップであらゆるところに縁取りされていて、結構手が込んでいたようである。妊婦のための服は、ゆったりとしてフィット感のないものであり、縁にわずかにギャザーのはいった 3 段の裾襞があるスカートがはかれていたようである。マナーとしてコルセットは身につけられていたこともあるが、強制的ではないようである（Joan Severa, p. 310）。

4. 装飾物、髪型、かぶりもの

10 年間を通じて最もよく見られたのは、黒いベルベットの首元のリボンである。これは、首の後ろで蝶結びにされ、前はブローチでとめられていた。イヤリングは初期の頃はとても長くぶら下げられていた。だが、後期に入ると極端な髪の撫で上げによって、存在感のある真珠のボタン・イヤリングがつけられていた。髪飾りは、鼈甲の手の込んだ櫛で、打ち出し細工で飾られたり彫られたりしていた。

女らしい柔らかさを出す巻き毛や、1876 年頃から流行した額に柔らかさをだす短く縮れた前髪が、1880 年代にはいっても人気があった。髪は、首の周りからてっぺんにかけて櫛でかき上げられていた。そして、一般的なドレスに合うように頭の上に高く結われていた。後部はシニョンの形で膨らんでおり、頭の後ろで固められた 1 つの固まりの上に、毛髪のつけ髪を輪にしたり曲げたりしてアレンジされて、自然な髪型にしていた。ボンネットは頭の後方に被せられ、前を覆っていないもの、果物や花がふんだんにあしらってあるものがあった。1878 年頃、幅の狭いカポットという衣裳に合うように作られたボンネット

が不可欠なものとなり（Joan Severa, p. 312）、衣裳の流行を刺激した。衣裳全体のバランスをとることが何よりも大切で、ボンネットが足を引っ張らないように、衣裳の色に合ったものが被られていた（Joan Severa, p. 313）。以上の資料から、アメリカはフランスほど貴族的でなかったため衣服の装飾が華やかではなかったが、視覚を通して見ると似かよっているためフランスを追っていたのであろうという結論に至ったのである。

第3章　移民の服装

19 世紀後半のアメリカには、大量の移民が各地から入ってきていた。例えば、1870 年代のミネソタへの移民はドイツ出身者が 24%、ノルウェー出身者が 22%、アイルランド出身者が 14%、スウェーデン出身者が 13%、カナダ出身者が 9%である（濱田雅子，2009 年，p. 177，注〔和書（3）〕）。アメリカにやってきた移民は、アメリカ社会に同化するため、一般にできるだけ早く「故郷」の服装のなごりを脱ぎ捨てた。それは隣人と同様にアメリカ人らしく見えるようにするためであった。本節では、3 枚の写真を通して、移民の服装を考察する。セヴラ女史の解説は、移民の服装に関する稀少な解説である。

濱田はカンザスとミネソタの移民の服装について、拙著『アメリカ服飾社会史』に、次のように書いた。

「カンザスの女性たちの生活は『自給自足生活のモデル』でもあった。これに対してミネソタの都市部ではハイファッションを装う女性も多く見られる一方、外国からの移民は 1860 年代から靴や衣服や帽子の生産に携わっており、また、中流家庭では家庭裁縫が盛んに行われていた。さらにアンナのような北欧から移民した農民は、カンザスの女性と同様に『自給自足生活のモデル』であった。このようにミネソタにおける衣文化の発展は階級や民族によってその違いがはっきりしていた。」（濱田雅子，2009 年，p. 185，注〔和書（3）〕）。「筆者はミネソタにおける家庭裁縫に興味をもち、2007 年 3 月末、衣服の遺品調査のためにミネソタ大学のゴールデンシュタイン・ミュージアム・オブ・デザインを訪れて、同館の所蔵品から 14 点の中流女性の衣服の遺品を調査する機会を得た。その内訳はウェディング・ドレス３着、日常着（ドレス２着、ガウン、ラッパー３着）、子どものドレス１着、ウェディング・ドレスまたは外出着３着、日常着（２着であった。」

写真 165　ガラス板写真
1873 - 79 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* 〔*D31*〕 *92*）**, p. 348

「遺品の中には手縫いによる自家製の衣服も見られたが、とくに家内で着る衣服は手紡ぎ→手織り→手縫いによる手作りが行われたことを裏付けるものがあった。縫製はプロ的なものと素人的なものとが見られ、デザインはカートリッジ・プリーツ（袖、ウエスト）やパイピング（袖、ウエスト、ヨーク）が特徴的で、ボーンが挿入されているものが多いのは、とくに印象深かった。」（濱田雅子，2009 年，注〔和書（2）〕p. 181）

以上は、濱田の現地調査からの報告の一部である。Joan Severa 女史の移民の服装に関する解説と合わせてお読みいただきたい。

ガラス板写真 165 （1873 - 79 年）（p. 348）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* 〔*D31*〕 *92*） の所蔵品である。

ノルウェーからの移民夫婦の写真である。彼らは移民の民族衣装の晴れ着を纏っている。アメリカに移住してきたノルウェー人は、このような衣裳をアメリカの衣裳に脱ぎかえたとセヴラ女史は語っている。

よそゆきの晴れ着を着てアンドリュー・ダールのカメラに収まったこの年配のノルウェー人移民夫婦は、自らの民族的な伝統を見せている。アメリカにやってきた移民は一般に、隣人と同様にアメリカ人らしく見えるようにするため、できるだけ早く『故郷』の服装のなごりを脱ぎ捨てた。年配の移民を写した写真では、概して彼らは質素でいくぶん流行遅れの暗色の服――他の年配のアメリカ人が着ているものとなんら違わない服――を着ている。……ここに写っている服はそれほど特別なお祝い用ではなく、ノルウェーで何十年間も大きなスタイル変化のなかったタイプの、農民の衣服である。……フロックコートは 20 年、流行遅れだが、かつては広く流行したコートであり、これ自体に民族的な意味はないものの、彼がノルウェーで着ていた服であることはまず間違いない。実際、ほとんどの民族衣装や民族的な服は、古くなった服を使って作られ、目につきやすい細部の特徴を取り付けて、装飾や、特別なシャツ（shirt）

とキャップのスタイルや、その他の装身具で地域的な違いを出したものである。……首まわりには幅の狭い白いレースの立ち衿を付け、飾り気のないギャザースカートは、フープなしで着用されている。……つまりこのドレスには、もともと別の国で作られたために見られる［アメリカの服との］違いは何もない。……白い帽子は、1840年代にアメリカでかぶられていたデイキャップ（daycap）［昼にかぶる、鍔なしの帽子］に似ているが、縁に付けられた入念な丸溝襞は、デイキャップとはまったく性質が違う。ノルウェーの多くの地方のキャップの縁は、きちっと糊付けされたうえで特別なアイロンを使って規則的な丸い襞を作ってあった。写真のキャップは縁全体がその種のアイロンを使って仕上げられている。「旧世界」の各地の民族衣装の識別は、こういう細部を手掛かりにおこなわれるのである。」（Joan Severa, p. 349より引用）。

ガラス板写真160（1872-73年）（p. 338）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*D31*］ *527*）の所蔵品である。
この写真の背景情報について、セヴラ女史はこう述べている。

『アンドリュー』ことアンドレアス・ラーソン・ダール（Andreas Larson "Andrew" Dahl）は、21歳だった1869年に、生まれ故郷のノルウェーからウィスコンシン州デーン郡にやってきた。到着後さほど経たぬ頃から、彼はマディソン［州都にして郡都］や周辺の田園地帯や小さな町を旅しては、そこに暮らす人々や家や農場を写真に撮り始めた。……ダールが撮影したなかで最も古い日付が記された写真は、1873年のものである。……彼がデーン郡のスプリングフィールド・タウンシップの農場経営者シュール・レック（Sjur Recque）の家の前で拡大家族にポーズをつけてこの写真を撮ったのは、1870年代初めである。大きな膨らみを持つ女性のスカートや、長いオーバースカート、裾がフレアーになった短いバスクから、撮影時期は1873年に近い頃だと判断される。……左端に座っているマーサ・レック（Martha Recque）は、暗色のキャラコで流行に合わせて仕立てた（おそらくホームメイドの）とてもしゃれたドレスを着ている。このドレスに付いている長いオーバースカートは、ヒップ部分にプリーツがなく、背側にいくほど丈が長く、腰の後ろにはバッスル・パフが作られている。……幅広の縁取り布が付いたオーバースカートはたっぷりと膨らんだスカートの上にかぶさり、そのスカートはペチコートによって支えられている。ぴっちりした身頃はコルセットによくフィットしており、袖はコートスリーブになっている。……中央に座っているマリ・レック・リー（Mari Recque Lee）は、中年女性向けの極端に保守的な「とっておきの黒いアルパカ」を着て、きちん

写真 160　ガラス板写真
1872-73 年
提供：*The State Historical Society of Wisconsin*
(WHi [D31] 527), p. 338

とした白いリンネルの衿を付け、小さな白いタイを結んでいる。……スカートは、1860 年代末に流行した非常に大きく膨らんだスタイルだが、フープで支えてはいない。おそらく、少なくとも２、３年前に作ったドレスだろう。マリのウェーブがかかった髪の毛は、シンプルに後ろへ引いて、低い位置で巻いてまとめられている。三つ編みにして巻いているのかもしれない。

彼女の右に座っているブリタ・レック・クエール（Brita Recque Quale）もマリと似た服を着ているが、こちらにはヨークの縁にそって黒いベルベットのリボンで２本のラインが入っており、1868 年頃のものと思われる。……後ろに立っているルイス・クエール（Louis Quale）は、もっと新しい、身体に合ったカットのサックコート（sack coat）を着て明るい色のズボンをはいている。クラウンが丸味を帯びた黒いフェルトの帽子は、この時代の典型的なものである。ルイスの隣に立っている、若いアンナ・マリー・レック（Anna Marie Recque）は、前身頃がなめらかで裾がフレアーになったバスクを着ており、その下のオーバースカートにはバスクと同じフラウンスやバンド飾りが付けられている。……ふたりの小さな女の子は、よく似たコットンの普段着を着て、大きなバックルの付いた革のベルトを締めている。どちらのドレスも裾に幅の広いフラウンスがあり、身頃はゆったりと作られ、長いコートスリーブが付いている。右側の少女が着ているドレスには、パフをあしらったオーバースカートが付いている（Joan Severa, p. 339 より引用）。

以上のようにセヴラ女史は、被写体一人一人の服装を詳しく解説している。実にすばらしい。貴重な説明文書である。当初、写真館で肖像画の代わりとして撮影されていた写真は、写真技術の発展にともなって、撮影の場は都市から農村へと繰り広げられ、アメリカ社会の壮大なパノラマが繰り広げられていったのである。

写真162　　ガラス板写真
1873年頃
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi［D31］760），p. 342

ガラス板写真162（1873年頃）（p. 342）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*［*D31*］*760*）の所蔵品である。

セヴラ女史はこの写真の場面について、こう述べている。

これもアンドリュー・ダール撮影の集合写真で、デーン郡のレンガ造りの家の外で撮影された。若い人々が写っており、おそらく、ひとつの家族の成員たちであろう。撮影年代については、衣服のデザインと髪型から、1873年頃に撮影されたものと推定している。1870年に登場したベルスリーブは、1873年8月になってもなお『ゴーディーズ』で触れられていたが、それ以降はファッション記事から消え去る。写真の若い女性のうち3人のドレスに見られるベルスリーブと、短いバスクと、何段ものフラウンスが付いたスカート、そして巻き髪を垂らした彼女たちの髪型を合わせると、この写真が1873年頃に撮影されたという強力な証拠になる。
……この中の4人の女性が同じストライプのコットン生地を使ったドレスを着ている年下の少女ふたりも、やはりまったく同じ形のフロック（frock）を着ている。
後列左からふたり目の若い女性は、暗色のウールのバスクを身につけているが、このバスクは裾にラッフルが付けられ、その根元に白と黒という対照的な色のブレードがあしらわれている点がなかなか面白い。……一番幼い子どもは、おそらく女の子だろう。というのも、ブーツの丈が小さな男の子用のものよりも長く、他の年上の女の子の靴に似ているからである。当時は幼い子は男女を問わずこのようなドレスを着ていたので、ドレスからは性別は判断できない。前列右からふたり目の少年は12歳くらいであろう。白っぽいナチュラルな色のリンネル生地で作られた、ヒップ丈のサックジャケットを着ている。（Joan Severa p. 343より引用）。

より詳しい解説は、オリジナルの著作を参照されたい。

第 4 章　庶民男性の服装

1870 年代の男性の一般的なスタイルは、写真から見ると、暗い色のサックジャケットに、シングルもしくはダブルの打ち合わせのベスト、白いシャツにウールのパンツ、そしてクラウンの円いフェルト帽であったと思われる。サックジャケットに関しては、写真 170 に見られる年配の男性のゆったりしたものから、写真 169（本書，p. 251）のような若い男性のぴったりとしたものまで様々あるが、最新のものはぴったりした裁断のものであったようだ。また、色は黒がほとんどである。ほとんどの男性に見られる白いシャツは、たいてい衿とカフス無しで作られ、取り外し可能にされていたという。また、ベストを着用することは、もっともカジュアルな服装にさえルールとされていた。

面白いのがウォッチチェーンであり、写真 169 に収まっている。このことから、ウォッチチェーンを持つことがステータスシンボルであったのではないかと考えられる。また、ほかの特徴として毛皮が人気であり、それはアザラシの皮やカワウソの毛皮で、特に縁なし帽に用いられ、手袋、コートの縁にも使用された。

このカルト・ド・ヴィジットの写真 169（1876 年頃）（p. 353）は、*State Historical Society of Wisconsin*（*WHi* ［*X3*］ *3706*）の所蔵品である。

写真の場面について、セヴラ女史は、こう語っている。

「この若いカップルはウィスコンシン州ポーテージ市のプラム＆ルーミス写真館（Plumb and Loomis）でポーズを取っている。どういう機会に撮影したかは記されていな

写真169　カルト・ド・ヴィジット
1876年頃
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi ［X3］ 3706）, p. 353

いが、女性は手の指輪を見せているように見え、また、ふたりとも結婚写真としても十分通用する服装をしている。年代推定の決め手は、1870 年代中頃に大いに流行した、小さくしっかりカールさせた額の生え際の髪である。この推定を裏付ける衣服の要素として、袖の幅広カフス、エプロンの飾り、細めのスカートがある。」（Joan Severa, p. 353 より引用）。

セヴラ女史は、男性の服装について、大変、詳しい解説を行っている。

若い紳士のサックスーツは身体にフィットする最新流行のスタイルで、前裾の角は丸くカットされ、下に同じ生地で作ったダブルのベストと細い金の懐中時計チェーンが見えている。コート（coat）とベストの衿は両方とも、幅の広い、角が丸みをおびた最新の形である。……同素材のズボンは脚の部分が筒状で、折り目がなく、とても細くて丈が長い。……ウェーブが高く盛り上がったように見えるのは、髪が多いのでどうしてもそうなってしまうのだろうが、当 時の男性の髪型は、髪に油などを付けてもっとしっかりなでつけることが多かった（Joan Severa, p. 353 より引用）。

スタジオ・ポートレートの写真170（1876年頃）（p. 354）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の被写体について、次のように書いている。

このウィリアム・B・ラトレッジ（William B. Rutledge, 1826–1917）の写真には、『エイブラハム・リンカーン大統領時代の P.S. Marshall 補佐』と記されているが、現在のと

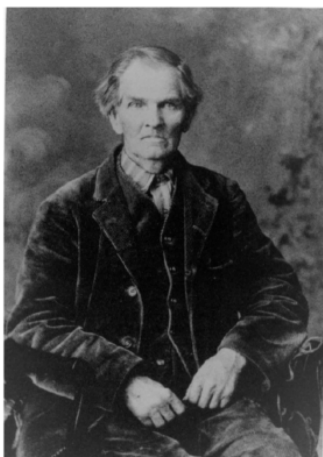



写真 170 スタジオ・ポートレート　1876 年頃
提供：***The Oakland Museum***, p. 354

ころ“P.S. Marshall 補佐”なるポストがあったという情報は見つかっていない（イリノイ州立歴史図書館は、ラトレッジがリンカーンの閣僚だったことはないとしている）

［P. S. Marshall ではなく、U. S. Marshall（連邦保安官）補佐の間違いではないかと考えられる—濱田注］。若きリンカーンがイリノイ州のニューセイラムで暮らしていた時に近所に住んでいたラトレッジ家の名は、主としてウィリアムの妹のアン（Ann）の存在によって知られている。アンはリンカーンの初恋の相手とされるが、1835 年に 22 歳で亡くなったため恋は成就しなかった（Joan Severa, p. 354 より引用）。

リンカーンにまつわるエピソードが興味深い。

次に服装であるが、今日的で、カジュアルな格好である。セヴラ女史の解説を紹介しよう。

ラトレッジ氏は、既製でそう高価ではないコーデュロイのスーツを着ている。色はおそらく暖かみのある茶色だろう。1870 年代半ばの典型的なスタイルのサックジャケットは、ダブダブではないもののゆったりとしたカットで、袖は自然なショルダーラインに取り付けられている。……このシャツはネクタイが必要なように見えるが、ラトレッジ氏はネクタイを締めていない。この写真は、キャンプ用の折り畳み椅子に暗色のペイズリー柄を配したウールの大きなショール（shawl）を掛け、そこに被写体が座って撮影されている。ショールは、ラトレッジ氏がはおって来たものか、カメラマンの小道具かのいずれかであろう（Joan Severa, p. 354 より引用）。

第５章　子ども服

子ども服の特徴は、写真から見ると２つの方向性があるように思われる。まず１つは子ども服に特有なディテールである。女児では、写真 161 の前列中央の女児に見られるポイント状のヨーク、写真 181 に典型的に見られる、幅広の、色みのあるサッシュによってウエスト部分にギャザーが寄せられたスカート、スカラップの縁飾りが挙げられる。タッタソールチェックをはじめ、布地の色柄なども豊富である。男児では、ニッカボッカースタイルのズボンが挙げられる。写真 179 にサイドベンツのボタンなど細かいディテールもはっきり見られる。また、男児女児どちらにも見られるのは、白いストッキングに黒い子ども用ブーツの組合わせである。

もう１つは、当時の成人の衣服の特徴を反映しているものである。女児服では、写真 161 の様に腰当て（Tournure）を入れているものや、コートスリーブのものがある。また、首元の蝶結びのリボンなども多く見られる。男性服では、ほとんど、ニッカボッカースタイルのズボンの上に、黒いサックジャケットを着ている。

このガラス板写真 161 （1872 - 73 年）(p. 340) は、*The State Historical Society of Wisconsin (WHi ［D31］ 746)* の所蔵品である。

移民の家族の写真のようである。セヴラ女史は、この写真の場面を次のように説明している。

よく似た顔が並んだこのグループは、アンドリュー・ダールが撮影したノルウェーか

写真 161　ガラス板写真
1872 - 73 年
提供：*The State Historical Society of Wisconsin*
(WHi ［D31］ 746), pp. 340–41

らの移民家族かもしれない。とはいえ、彼の撮影テーマには地元の「アメリカ人（Yankee）」家族も含まれていたので、断言はできないが。少なくとも1着のドレスのスカートの下にフープが着用されているのが見えることから、この写真はおそらく、撮影年が書かれた最も古いダールの写真（1873 年）よりもっと早い時期に写されたものであろう（Joan Severa, pp. 340–341 より引用）。

服装については、次のように描いている。

> 最前列にいる女の子は、タッタソールチェック（tattersall check）［地色に対し対照的な2色を使った単純な格子柄。タッタソールとは、ロンドンの馬市場の名前。それを創設したリチャード・タッタソールにちなんだもの］のコットンで作ったドレスを着ている。身頃には膨らみがあり、スカートはギャザーを寄せてウエストバンドに縫い付けられ、袖はコートスリーブである。……白いストッキングは膝下までの丈で、ドロワーズ（drawers）との間には少し隙間があって足が見えている。……その後ろにいる少女が着ているのは白かごく薄い色のコットンドレスで、手前の女の子のチェック地のドレスと似たスタイルだが、薄い色のリボンのサッシュ［飾りベルト］の幅がとても広いので、ドレスのウエスト位置が高いかのように見える（Joan Severa, pp. 340–341 より引用）。

写真 181　（1878 - 80 年）（p. 366）は、*The Roger Schrantz Family* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の場面について、次のように語っている。

写真181　1878 - 80年
提供：***The Roger Schrantz Family***, p. 366

写真179　1877-80年
提供：***The Oakland Museum***, p. 364

ジョージーとルーシーのシュランツ姉妹（Josie and Lucy Schrantz）は写真175（本書，p. 255）のマイケルとマーティンのきょうだいで、少年たちの数年後に間に合わせの背景の前でこの写真を撮ってもらった。……この写真が物語っているように、当時の母親たちも女の子たちもファッション誌に掲載される可愛らしいドレスのことを知っていて欲しがっており、特別な折にはそれを手に入れることができたのである。彼女たちのドレスは、既製品として安く買うことができ、メールオーダー（mail-order）さえ可能なタイプの服である。もちろんホームメイドの可能性もある。生地はコットンサテンのように見える。色は黒のようだが、濃いワイン色か、濃い茶色かもしれない。ふたりのドレスはまったく同じ型である。上はチュニックスタイルで、チュニックの裾はステッチとパイピングで装飾され、明るい色の小さなボタンがたくさんついている。　……チュニックの下のスカートは、無地のコットンキャンブリックで作った袖なし身頃に取り付けられていて、おそらくスカートの上部は、裏地素材で作られていたと思われる。スカートの裾に軽くギャザーを寄せたフラウンスが4段あり、これがスカートに当時の流行である控えめな膨らみを与えている。一番下のフラウンスだけは上の3段よりも短いように見えるが、実際にはフラウンスの長さは同じで、た

だ翌年に背が伸びたら丈を伸ばせるように取ったグロウス・タックの下に付いているのだろう。……首の高い位置までを覆う幅広の白い衿は、おそらく厚手のコットンか織りむらのないリンネルで、縁にはかぎ針編の幅の広いフリルが付いている。袖口も同じかぎ針編みの小ぶりなフリルで飾られている。ボタン留めのブーツのつま先は角に丸みをもたせたスクエアトウで、丈は長いが、ドレスの裾までは届いていない（Joan Severa, p. 367 より引用）。

既製品の子ども服について、詳しい解説がおこなわれている。

写真 179（1877-80 年）（p. 364）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。

このほほえましい光景は、カリフォルニアの夏の暑い日に、とある家庭で撮影された。母親のドレスの長いオーバースカートは両サイドがなめらかにフィットし、前で左右に分かれていて、後ろはバッスルの支えなしでそのまま下がっている。……
左の少年は白いスタンドカラーの付いた典型的な長袖シャツを着ていて、短めのズボンは 1870 年代の男の子たちのスタイルのすばらしい見本を提供してくれる。ズボンは丈が短め（ブーツの履き口の少し上）のいくらかゆったりした筒状で、サイドのベンツはボタン留めになっている。素材は明るい色の軽量ウールで、外側の脇は伏せ縫いで縫われ、サイドポケットととても幅の広いウエストバンドがある。サスペンダーは使っておらず、おそらくシャツはズボンのウエストバンドにボタン留めされていて、幅の広いバンドはボタンの上のベルトなのだろう。彼は白いコットンの靴下をはき、丈の高いキッド革のブーツをはいている。ブーツの外側のボタン留め部分と高さ１インチ［2.5 センチ］のヒールがよく見える（Joan Severa, p. 364 より引用）。

スタジオ・ポートレートの写真 175（ 1876 年頃）（p. 360）は、*Roger Schrantz Family* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影時期と被写体の年齢、そして、服装について、次のように解説している。

シュランツ（Schrantz）家のふたりの少年が写ったこの写真の撮影時期を 1876 年頃と判断したのは、彼らの誕生日がわかっていることによる。1863 年生まれのマイケル（Michael）は、見た目から 13 歳くらいに違いないと思える。

写真175　スタジオ・ポートレート
1876年頃
提供：***Roger Schrantz Family***, p. 360

1872年生まれのマーティン（Martin）は、4歳くらいに見える。1870年代 しっかりした体つきで腕白そうなマーティンは、前裾が丸くカットされた黒の短いジャケットを着ている。

……シャツは白でその上に着たVネックのベストにズボンと同じ生地のウエストバンドが付いている。ズボンの裾は、つま先が銅張りのブーツの中に入れられている（Joan　Severa,p. 363より引用）。

カルト・ド・ヴィジットの写真178（1877 - 79年）（p. 363）は、*The State Historical Society of Wisconsin（WHi［X3］ 43707）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、素敵な新しい服を着たこのきょうだいの写真の撮影時期を服装のスタイルから推察している。今日の子ども服のデザインにも参考になるような詳しい解説が見られる。

右側に立っている一番年上の子は、おしゃれなカットの濃色のウールのドレスを着ている。全体が写っているこのドレスはプリンセススタイル（princess style）で作られており、フラットなトゥルニュールがある。彼女の妹も同じデザインのドレスを着ており、どちらも当時の大人の女性のスタイルを取り入れているが、胸当ての縁を飾るプリーツと極端に大きいレースの衿は、女の子向けとしてとても人気があったものである。……男の子が着ているのは濃色のウールのスーツで、小さな衿があり、首もとまで全部ボタンをかけている。スーツの衿の内側に、白いシャツの衿がわずかに見えている。丈の長いブーツが見えるので、パンツはニッカーボッカーズ（knickerbockers）のようだ（Joan Severa,　p. 363より引用）。

写真 178　カルト・ド・ヴィジット
1877 - 79 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi ［X3］ 43707），p. 363

今日、このような男のスタイルは、男の子を持つお母さんたちの人気を集めるのではないだろうか。

【第 2 章】　〔注〕

和書

(1)　丹野　郁編『総合服飾事典』（雄山閣、1980）。
(2)　丹野 郁『西洋服飾史－増訂版－』東京堂出版 1999 年初版。
(3)　濱田雅子『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）。

洋書

Joan Severa, *Dressed for the* Photographer, *Ordinary Americans and Fashion*, Kent State University, Press, Ohio, 1995.

第6章　まとめ

「1870 年代に入ると、最初の 2、3 年は不景気で新しい服を購入するだけの余裕はなかったのだが、衣服に関して徐々にではあるが社会が全ての人に対して流行を追わせていた」とセヴラ女史は述べている。社会と流行の結びつきを示す見解がセヴラの文献に述べられている。セヴラ女史は、「流行において地方の女性が遅れているのは、働く上で、細かい装飾の施してあるものや豊かすぎるスタイルのものは、実用的ではないから故意に避けているためである。しかし、トレンドについて行くために都会へ訪れ、新しい感覚に触れることが必要とされていたようである」と述べている（Joan Severa, p. 292, 295）。また、「輸送の発達のおかげで、何処に住んでいてもパターンや布地を手に入れることが可能となり…」、これによって地方だからといって良い物が手に入らないということはなくなったのではないかと思われる。つまり、ほとんど全ての中産階級の人々が同じライン上に立たされたことになるのである。それゆえに、地方だから流行遅れになっても仕方ないというのは通用しなくなったのではなかろうか。」（Joan Severa, p. 293）。

ここまで述べられたことに関してみても、社会が流行へ、流行へと後押ししているように思える。さらにもっと強い意見が述べられている。それは、新しい服を手に入れる能力が重要視されており、「流行に遅れてしまったら社会追放を蒙るであろう…」とセヴラ女史は考えているのである。社会追放とまで大々的に述べられているので、流行を追って服を着ることができる情熱は計り知れないものであろう（Joan Severa, p. 294）。

ある田舎の女性の写真から見ると、年老いた女性も流行にほぼ近い服を身につけていたことが推察できる。つまりこれだけでは判断できないが、流行は、地方にほぼ浸透してい

たのではなかろうか。 1870 年代は、バッスルの締め付けや多くの装飾のために、衣服は快適とはいえず、制約されていた。

当時の写真から見ても、ファッション雑誌にはファッション・プレートを真似たスタイルで収められていたため、そこから強制的な最新服が好んで着用されていたことがうかがいしれる。1870 年代は戦後の混乱の中にあった 1860 年代と比較すると、生活水準も上昇し、また、社会の圧力もあったことから見ても、セヴラ女史の強い考えまでには達しないにしても、中産階級ほとんど全ての人々が流行を追っていたのではないかと推察する。

またフランスは流行発信地であったため、クリノリンからバッスルへの移行期も早く、アメリカはそれを追っていた。そして、77 年頃からは写真を見る限り、両国ともバッスル衣裳と一目で分かる。しかし、フランスの方が比べものにならないほど装飾的で華やかであったが、シルエットはバッスルであったため、70 年代はクリノリンからバッスルへの移行期であるという結論に至る。

南北戦争後の再建期の解放奴隷への衣服の支給の問題は、今後の研究課題である。

庶民男性服の特色は、第 4 章の冒頭で述べたとおりである。

子ども服の特色は、第 5 章の冒頭で述べたとおりである。

第Ⅵ部　1880 年代

第 1 章　歴史的背景

華やかなバッスル衣裳で始まる 1880 年代は、アメリカにとって激動の時代でもある。鉄道建設と先住アメリカ人の駆逐によって 1890 年までには、将来合衆国に含まれることになる大陸のほとんど全域に農場、牧場、鉱山、そして大小の都市が見出されるようになった。1883 年 9 月 8 日にはノーザン・パシフィック鉄道（大陸横断の北方ルート）を完成した。鉄道は主要都市をつなぎ、国内市場体制を完成させ、これ以降ある地域の商品や原材料は合衆国のどの地域においても入手可能となった。

1900 年代の初頭までに、農村の入植者と近代社会をより密接につなぐ二つの変化が現れた。第一の変化は、1870 年代ないし 1880 年代に始まったモンゴメリー・ウォード社およびシアーズ・ローバック社などのメールオーダー（通信販売）会社が拡張され、工業社会の生産物がほとんどすべての人々に利用されうるようになったことである。第二の変化は、政府が農村無料配達制度を大幅に拡大したことであった。農民たちはもはや情報不足に悩まされることはなくなり、ほとんど毎日彼らの家に手紙、新聞、広告そしてカタログが届けられるようになった。

工業化学における新たな発明や改良は、次のような結果をもたらした。すなわち、20 世紀の工業発展の技術的基礎を築き、仕立て業界における工業化は進展した。アメリカにおける生産性は進展し、機械の導入による利便性が拡大した。だが、雇用者による利益の追

求は労働者の労働条件の悪化をもたらした。

女性の社会進出と労働条件に目を向けると、賃金への労働者の不満が爆発し、機械化は労働災害をもたらした。労働者は労働組合に加入した。機械の導入、流れ作業は、熟練労働者の必要低下を結果し、女性や子どもの雇用が増加し、女性の労働人口は 1880–1900 年には、260 万人から 800 万人へ増加した。私的サービス業（メイド、調理師、洗濯婦）で働く女性の割合は、急激に減少し、事務職（事務員、タイピスト、帳簿係、販売員）は急上昇した。

女性の社会進出は、ファッションに影響を及ぼした。働く女性が求めた衣服は、動きやすく、着やすい、手入れの簡単な衣服であった。

1880–1890 年代は、拘束性の高い近代衣裳から現代衣裳への移行を示す時期であった。上流階級の女性のハイファッションと直接、現代の衣服に通じる活動的な衣服が並存したが、ファッションの民主化が進められた。

セヴラ女史はこのような背景のもとに発達した庶民のファッションを、写真を通して解説・分析している。

洋装化が実際に日本で推進されるのは、明治に入ってからであった。政府自らの動きによって洋装化は奨励され、軍服はもちろんのこと、警官、官吏、官立学校の教師、学生の制服と洋装化はおしすすめられた。

特に宮中の儀礼服を洋装に改正したことや、政治間における外交の場としての鹿鳴館の完成（明治 16 年）と、上流人における男女同伴の社交と洋装が顕著であり、民間の服装にも大きく影響を与えた。

第2章 衣服の民主化

1880年代の女性のファッションの特徴について、セヴラ女史は、以下のような注目すべき見解を述べている。箇条書きに紹介させていただく（ Joan Severa, p. 390を要約）。

① 1880年代には、ドレスの新しい選択肢が増えたこととドレスの入手方法の変化により、選べるスタイルがかつてないほど種々雑多になった。またファッショナブルなドレスそれ自体にも最高にビビッドな変化が起こった時代であった。

② この時代の最大の特徴は、仕事を持つ女性と家庭の主婦にとっての常識的な選択肢が極めてたくさんあり、それらは高級なおしゃれ着とは大きく異なっていながら、それでいて高級なおしゃれ着の流行と深く関係していたことである。間違いなく、働く女性たちと健康を意識する活発な女性たちの意見が大きくものを言い、なにもかもがもはや海外から指図されたものではなかった、という点にある。

③ ファッションやドレスについて書かれたアメリカの新聞雑誌の記事は、かつてなかったほど、少数の恵まれた人々ではなくもっと多数の人々をターゲットとした。目的の２本柱は、貧しい女性でもしゃれたファッションを手にできるようにすることと、すべての女性が自分のライフスタイルに応じて必要な実用的ドレスを着られるようにすることであった。

④ そうでありながらも、女性の服には相変わらず本当の着心地のよさはなかった。働く女性の写真を見ても、どんなに「シンプルな」ドレスのスタイルであろうが、コルセット、細い袖、動きにくい長いスカートが写っている。この面での進歩は遅々としていた。

⑤　とはいえ、あらゆる経済レベルの人に共通して普段着として受け入れられるプレーンなドレスを見出すべく調整を行うなかで、1880 年代の女性は高級服の最先端の流行の束縛から、それまでで最も離れることができた。

⑥　もっと重要なことに、1880 年代末になると日常用のドレスとある種の「芸術的」ドレスのスタイルがファッションに影響を及ぼしはじめ、コルセットの圧政の終焉を告げる先触れとなった。簡素で着心地の楽な大量生産の衣服が、ついに視野に入ってきたのである。

セヴラ女史は本章では 40 枚の写真（女子 16 枚、男子 3 枚、男女のカップル 3 枚、子ども 2 枚、集合写真 16 枚）を紹介・解説している。一枚一枚の写真の解説は、上記のセヴラ女史の見解に見られる多種多様なドレスの特徴を子細に分析した、女性服史上、他に類を見ない貴重な解説である。そこで、第 3 章では、被写体の服装の全体的な解説と部位別の特徴に関する解説を紹介させていただく。この紹介は、必要に応じて、一部であることも、全文であることもある。まるで、文学作品にみる生活文化史を目の当たりにするかのような場面の数々が登場する。

第3章　金持ちと庶民女性の服装

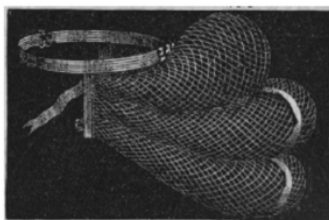
1. 金持ちの女性服

1882 年にパリのスタイルの一部が高い位置にバッスルを付けるフィットを採用しはじめ、ヒップのパニエが再登場すると、新しいスタイルのフランス製コルセットが作られ、歓迎された。このコルセットはそれまでのものより丈が短く、胸の膨らみが大きかったが、そのために胸郭部分の寸法は小さくなった。

胸部は高い位置に持ち上げられ、ウエストラインの脇と背中も非常に高い位置になった一方、ウエストの正面部分は下向きにカーブして突き出た腹部に届き、先端は尖った形にして鯨髭が挿入された。「マダム・クラークの健康コルセット（Madame Clark's Hygeian Corset）」の 1886 年の広告イラストには、ゆとりのあるカットで、お腹の部分は長めで膨らみがあり、両脇が短く、左右の腰の部分に編み上げ紐がついたコルセットが描かれている。

大部分のペチコートは依然として白いコットン製だったが、普段着用には時折淡褐色のキャンブリックか色染めしたフランネルが使われ、イブニングドレスにはシルクの色物のペチコートが合わせられた。1883 年に『デモレスツ』に載った広告に出ているバッスルはどれも針金を使った比較的小さい構造で、ウエストの周りはテープで固定されているが、サイズと形は多種多様である。入念にタック（tuck）が取られ、刺繍がほどこされ、縁飾りが付けられた白いコットンのコルセットカバーが 1880 年代ほど人気だった時代は他にない。

アメリカの写真資料は全部で 40 枚ある。そのうち、女性の姿のはっきりした写真は

写真 199 スタジオ・ポートレート
1886 年頃
提供：***The Valentine Museum (C68.89.F)*** **,** p. 413

バッスル
Godey's Lady's Book　July 1886
Accessible Archives

31 枚である。最初に、女性服が写った９枚の写真を紹介し、引き続き、部位別の考察を行う。

スタジオ･ポートレートの写真 199 （1886 年）(p. 413)は､*The Valentine Museum (C68.89.F)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影場所、被写体、服装について、次のように解説している、

> 写真家ジョージ・クック（George Cook）のスタジオで優美なドレスを着てポーズを取っているのは、ヴァージニア州リッチモンドのＡ・Ｌ・アダムソン夫人（Mrs. A. L. Adamson）である。ドレスの形と大きなバッスルは、写真の撮影年代をはっきり教えてくれるだけでなく、ポーズをとる夫人と写真家の間でどんな会話が交わされたかが想像できるような興味深いヒントを与えてくれる。要するに、この写真の主役は夫人ではなくむしろバッスルなのである。アダムソン夫人は当時のリッチモンドの名家の一員で、彼女の一家はつねに最新かつ最高級の服装をすることが期待されていた（Joan Severa，p. 413 より引用）。

写真 186　スタジオ・ポートレート
1880 - 81 年
提供：***The Rock County Historical Society***
(RCHS 10)，p. 392

スタジオ・ポートレートの写真 186（1880 - 81 年）（p. 392）は、*The Rock County Historical Society (RCHS 10)* の所蔵品である。

被写体の女性は、フォーマルな肖像写真のために、厚手のシルクのポロネーズ・カザックを着ており、セヴラ女史は、このドレスを「バッスル衣裳」と区別して、次のように、詳しく解説している。

> フォーマルな肖像写真のためにこの女性がおしゃれに着こなしているのは厚手のシルクのポロネーズ・カザック（polonaise casaque）で、身頃の前の部分は他の部分より濃い色（といっても間違いなく調和する色）のシルクサテンのパフになっている。
>
> このオーバードレスは、スリムなプリンセス・スタイルで裁断されていて、背中側は体に合わせて形づくられ、非常に浅いドレープで膨らみを出しているものの、バッスル（bustle）を演出するための仕掛けはないはずである。この時期のオーバースカート（overskirt）は、必ず前中央の合わせ目から裾にかけてのラインがゆるやかなアーチか浅い逆 V 字型のどちらかを描くようになっており、縁全体に装飾が付けられ、たいていの場合は前中央にパフか蝶結び飾りでアセントがつけられていた（Joan Severa, p. 392 より引用）。

以上の解説で、特に注目したいのは「バッスル（bustle）を演出するための仕掛けはないはずである。」という文言である。バッスル衣裳から初期現代衣裳への

写真 187　1880 - 82 年
提供：***The Rock Country Historical Society* (*RCHS 6*)**，p. 393

過渡期の衣裳様式と位置付けて良いのであろうか、との疑問が湧いてくる。以下に紹介される写真を注意深く観察してゆきたい。

さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

写真 187 (1880 - 82 年) (p. 393) は、*The Rock Country Historical Society* (*RCHS 6*) の所蔵品である。

撮影時期、衣服の構成、裁断、素材、装飾について、とても詳しく解説されている。

丈が長く前裾の中央が下向きに尖ったこのタイプのバスクは、1879 年には『デモレスツ』で取り上げられ、その後 1882 年までファッションイラストに登場し続けた。……サイドフロントに幅 1 インチ［2.5 センチ］の黒いベルベットリボンが縦に配され、その縁に、ドレスと同じ生地を使って細かいプリーツを取ったフリルがバスクの正面と首に向かって取り付けられている。コートスリーブは高い位置に付けられているが、まだかなりゆったりしていて、カフスは 1870 年代から人気が続いていた幅広の巻きつけたようなスタイルである。

前の打ち合わせ部分には大きめで光るボタンが狭い間隔で並び、上の方はより合わせた暗色のシルクスカーフで隠れている。長く細いオーバースカートは前中心をわずかに持ち上げて釣合いのとれたドレープを出し、両サイドを後方に引いて、後部で小さなパフを作ってある。……アンダー・スカートの裾には 3 段のフラウンスがある。フラウンスには一定の間隔でプリーツが配され、その間に黒いベルベットのタブが下がっている（Joan Severa, p. 393 より引用）。

写真 189　スタジオ・ポートレート
1882 年頃
提供：***The California State Library*　*(20,506)***，p. 396

以上、実物に精通している服飾の専門家ならではの詳しい説明である。さらに、詳細をお知りになりたい読者の方は、セヴラ女史のオリジナルの著作を参照されたい。

このスタジオ・ポートレートの写真 189 （1882 年頃）（p. 396）は、*The California State Library* *(20,506)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、撮影場所について、次のように述べている。

『長老派教会の聖歌隊』と題されたこの端正な集合写真は、カリフォルニア州ワトソンヴィル『ヘリオグラフ［初期の写真技法のひとつ］芸術家チャールズ・W・J・ジョンソン（Heliographic Artist Chas. W. J. Johnson によって撮影された。

被写体の服装は、ひとりひとりについて、次のように解説されている。

長いオーバードレスは、それぞれ見た目は大きく異なっているが、全体の形は似ていて、どれも正面中央の縁飾りと左右対称の横皺状の襞がある。……右から 2 番目に座っている女性のスカートに垂直方向と水平方向の両方の装飾がふんだんに使われている点からも、1882 年という年代が裏付けられる。……

左端の女性の服は非常にドレッシーである。おそらくストライプのシルクで作られており、前中央と袖とアンダー・スカートにはベルベットが使われていて、色は暗紫色か茶色の濃淡であろう。衿は高さのあるバンドカラーで白のネックフリルが付き、袖口にも同じフリルがある。彼女は膝を写真中央に向けて座っているので、ストライプ柄のオーバースカートの前中心のループ状のリボンがあしらわれた部分がほとんど見えないが、…… 長いオーバースカートの裾からはシェニール糸のフリンジが下がっている。……

その隣の女性が着ている比較的シンプルな黒い（ウールの？）ドレスは、……オーバードレスは身頃の正面に並ぶたくさんのボタンで前が閉じられており、縁はシルクの広いバンドで仕上げられ、逆V字にカットされた前裾の上の部分には大きなリボン結びがあしらわれている。細身のアンダー・スカートの裾には、部分的にナイフプリーツが配された幅の広いフラウンスがあり、端は同色のシルクのリボンバンドで飾られている。 衿はまっすぐに高く立ち上がり、レースのネックフリルと黒いリボンの蝶結びと金のブローチによって引き立っている。 袖口がフレアーになったカフスにも、フリルが付けられている。……

右から２番目の女性も似たような作りの服を着ているが、……黒いシルクのリボンにプリーツを寄せて作ったロゼット［バラ飾り］が、首、前身頃のサイドフロントの縫い目、カフス、チュニックのへり、フラウンスの上など、およそ付けられる場所すべてに取り付けられている。短い袖の袖口では、ナイフプリーツが扇状に広がっている。袖は流行に合わせて短くなっているが、細くはないので、古いドレスを新しいスタイルに合わせて作り変えたのかもしれない。……

右端に座っている若い女性はおそらくこの中で最も若く、着ている服は間違いなく一番簡素である。……別仕立てのオーバースカートはカザックの前身頃の続きのように扱われ、正面中央にタックを取って持ち上げ、そこにリボンループを留めている。……また、この少女だけが、髪を細い螺旋状に巻いた縮れ毛の髪型をしている。……

３人の紳士は、服のスタイルこそ大きく違っているが、全員が黒のウールのスーツ（suit）を着ている。左の紳士の服は比較的フォーマルな下衿の広いサック（sack, sacque）で、非常に値の張る縁取りがほどこされている。中央の男性はそれほどフォーマルではないサックコート、右の男性は丈が長くドレッシーなダブルの打ち合わせのフロックコートを着ている。３人とも

写真 193　　1884 年頃
提供：***The Oakland Museum***, p. 402

ネクタイは幅が狭く、黒で、ウィングカラーの下で蝶結びされている（Joan Severa, p.397 より引用）。

4 人の女性が着ているオーバードレスは、テキスタイルはシルク、あるいはウールであり、装飾にはフリルやリボンやボタンプリーツやフレヤーなど、ヴァリエーションが見られる。だが、全体の形は類似している。アンダー・スカートのプリーツにもリボンバンドがあしらわれるなど、創意工夫が見て取れる。女性のお洒落心が感じられる写真である。

写真 193（1884 年頃）（p. 402）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。

被写体と彼女の服装について、次のように書かれている。

「1830 年生まれのマリエッタ・ストウ（Marietta Stow, 1830 or 1837-1902）が、『アメリカン・ドレス』と呼ばれた改革派ドレスの 1880 年代バージョンを着て写っている。」

この女性の背景情報が詳しく述べられている。長い解説である。必要箇所を引用させていただく。

彼女は、ベルヴァ・ロックウッドが改革派候補としてアメリカ大統領選に立候補した際に副大統領候補としてコンビを組み、その選挙運動の一環としてこの服を着た。彼女は 2 度副大統領候補になっている［1884 年はロックウッドが大統領候補であったが、1892 年にストウが 2 度目に副大統領候補になった時の相棒（大統領候補）はヴィクトリア・ウッドハルだったので、「こ

のチームが２度大統領選に立候補した」という原文の記述は間違いである］が、この写真はおそらく1884年の１回目の選挙運動のため撮られたものだろう。……

［スカート丈を短くする前の］元のドレスはいくらか古いスタイルだったので、ストウ夫人はそのドレスをこの種の服に仕立て直すことになんのためらいも覚えなかっただろう。

ストウ夫人は1880年代のカリフォルニアと全米の政治の世界では――毀誉褒貶相半ばしてはいたが――有名人であった。……最初、ワシントンD.C.に暮らす若く裕福なベル夫人だった彼女は、貧しい売り子を支援するために結成された協会で、メアリー・トッド・リンカーンとともに働いた。…

その頃に彼女の心を捉えたのがサンフランシスコの金物商のストウ氏で、ふたりは1866年に結婚した。ところが1870年代に彼が亡くなると、彼女が以前の婚姻から持ち越してきたお金だけでなく、ストウ氏との結婚生活で築いた共有財産すべてまでも、遺言検認裁判所が横取りしてしまった。彼女はカリフォルニアの法廷で極めて教養あふれる抗弁を行ったものの、ついにそのお金を取り戻すことができなかった。彼女は婚姻中の財産の平等を保障する法案を起草したが、ストウ法案と名付けられたその法案は何度も否決された。

1880年、マリエッタは地方政治の世界に入り、1882年にカリフォルニア州知事選に出馬、1884年と1892年の大統領選では平等権利党の副大統領候補となった［原書の1888は間違い。Equal Rights Party の1888年の正副大統領候補はベルヴァ・ロックウッドとアルフレッド・H・ラブ（Alfred H. Love）だったがラブは途中でチャールズ・スチュワート・ウェルズと交代した］。……1884年10月27日の『オークランド・デイリー・イブニング・トリビューン（*Oakland Daily Evening Tribune*）』紙は、冗談めかしてロックウッド・ストウ・コンビの服装を次のように評した。「民主党はどうしてベルヴァ・ロックウッドと手を組まないのか？　彼女なら、活気のない民主党にいくらかの『bustle』を与えてくれるだろうに［bustleにはドレスの“バッスル”と“活気”という両方の意味がある］」。

この写真のストウ夫人の服装は、彼女が講演の時や公的な場に姿を現す際に着ていた服と似たスタイルで、1882年頃のドレッシーな衣服をもとに作られている。……　スカートを支えるバッスルは着用されていないが、その点を除けば、スカートのカットもドレープも1882年頃のファッショナブルなドレスと同じである。　この手の込んだスカートの上に、彼女は黒いベルベットの長いバスクを着て、白いレースのスカーフとフリルをつけ、時計の金鎖を男性と同じやり方で下げている。スカートの下には、脚を入れる部分

が男性用と同じ形をした、黒のサテンと思われる素材のズボンをはいている。（Joan Severa, p. 403より引用）。

この写真には「マリエッタ・ストウ（Marietta Stow, 1830 or 1837-1902）が、『アメリカン・ドレス』と呼ばれた改革派ドレスの1880年代バージョンを着て写っている」のは、大変、興味深い。

そこで、ドレス・リフォーム運動が衰退に至った経緯を、濱田の著作に基づいて、簡潔に振り返ってみよう。

ロバート・オーウェンのドレス・リフォーム運動は、閉鎖されたコミュニティから始まったため、1827年に、このコミュニティの崩壊後は、オーウェンが提案したリフォーム・ドレス（パンツとドレスのコンビネーション）は着られなくなった。

それから20年後の1848年にオナイダの共同体において、ジョン・ハンフリー・ノイズによって、衣服改革が行われた。

ノイズが提案した改革衣服の評判は、どうであったのか。ノイズが改革衣服として提案した衣服は、「子どもたちの服とパンタレッツ」であった。コミュニティのメンバーは、女性たちがこの衣服を着て登場した時に、彼らは子供のように見えるために、笑われるのを恐れていたという。

オナイダの改革衣服は、ニュー・ハーモニー同様に、男性が提案した衣服であり、閉鎖的なコミュニティでしか着用されなかった。また、オナイダ共同体では、女性は労働に携わっていたため、短いドレスとズボンのようなスタイルの機能的で、動きやすい作業着を必要とした。だが、審美的で、ファッショナブルな衣裳を好む女性には、このような半男性的な衣服は受け入れられなかったのである。

ブルーマー・コスチュームと運動用衣裳の間には、その形状においてほとんど違いが見られなかったはずなのに、運動用衣裳としての側面だけが生き残ったというところにも、当時は女性が男性と同じ権利を持つにはまだ遠かったということが充分理解できよう。

上の写真の「アメリカン・ドレス」が、1884年頃に、政治的意味合いをもって復活したのは、大変、興味深い。

写真 208　スタジオ・ポートレート
1887 年 2 月 23 日
提供：***The Valentine Museum*（*60.34.4*）**，p. 426

スタジオ・ポートレートの写真 208（1887 年２月 23 日）（p. 426）は、*The Valentine Museum*　（*60.34.4*）の所蔵品である。

被写体と撮影場所に関する情報は、次のように記されている。

はっきり日付がわかるこの写真の中で、高価でおしゃれで意匠を凝らしたドレスを身につけてポーズをとっているのはラヴィニア・ストレンジ（Lavinia Strange）、場所はワシントン D.C.のジョーダン・スタジオ（Jordan Studio）である。身体によくフィットしたこのジャケットは丈が長く、ウエストから下が大きく張り出し、裾はどこも水平で、裾とオーバースカートの間に隙間がある。 腰の後ろは高いバッスルに合わせてスリットを入れるかプリーツを取るかされ、前と脇はオーバースカートのドレープの上に丸みをつけぶさっている。 ……このポーズだ　と、1880 年代のコルセットの曲線がわかり、袖は当時のファッション・プレートを想起させる。袖は肩の高い位置に取り付けられ、腕まわりが細く、ゆとりがほとんどなく、丈は少し短めで袖口は細く、白いリンネルのカフスが１インチ［2.5 セチ］ほど出ている。……オーバースカートも最新のスタイルで、高い位置でギャザーを寄せて ドレープの入ったエプロンを演出し、背側は極端に膨らませて、バッスルの上にかぶせてある。 ……アンダー・スカートの前側は、幅の広いタックが水平に何本も並んでいる。彼女の持っている手袋は自然な黄褐色のキッド革で、1880 年代に昼用のドレスに合わせるのに最も適しているとみなされていたタイプである。 装身具は上品で、指に結婚指輪か婚約指輪をはめ、首もとにブローチか厚みのある十字架をあしらい、落ち着いた金のイヤリングと黒い時計紐をつけている（Joan Severa，p. 427 より引用）。

Plate 13 ***Godey's Lady's Book*** **April 1885**

写真 210　キャビネ・ビュー
1887 年頃
著者のコレクション，p. 430

写真 186，187，189 に写っている衣裳が、ポロネーズ・カザックであるのに対して、写真 208 の被写体が纏っている衣裳は、腰の後ろは高いバッスルに合わせてスリットを入れるかプリーツになったバッスル衣裳である。クリノリン衣裳からバッスル衣裳を経て、初期現代衣装に変ってゆくプロセスはどのようであったのであろうか。「図 6 と 7–女性のハウスドレスの正面図と背面図。2 つの色合いの無地の古い青いスーラとチネシルクでできており、明るい地色に暗い色合いの人物が描かれています。アンダー・スカートは非常に細かいひだでできています。オーバースカートは、後ろでループ状になっている 2 つの素材の折り目で構成されています。後ろにダブルボックスのひだが付いたジャケットのボディス、前に斜めにボタンが付いており、折り目がトリミングされています。ベルトは後ろのひだの下から来て、片側のバックルで留められています。このコスチュームは、ウール製品、または今シーズンに見られる多くの美しい綿のサテンのいくつかで作られています。」（Plate 13 のキャプション）。これらの衣裳は、バッスル衣裳が廃れる過渡期の衣裳であろう。

キャビネ・ビューの写真 210（ 1887 年頃）は、著者のコレクションである。

被写体と撮影場面について、次のように書かれている。

> この集合写真に写っているのは、ウィスコンシン州北部の小さな町の若い女性のグループである。全員がきちんとコルセットを着け、正装し、髪も美しく整えている。もしかすると卒業記念写真かもしれない。

> 彼女たちはみな、1886 年に奥行きの大きいバッスルがすたれた直後の、保守的な服装を見せてくれている。……新流行のシルエットがわかるのは右端の女性のドレスで、スカートは両サイドでプリーツを取ってウエストバンドに縫い付けられ、後ろは襞を作って垂れ下がっている。このスカートのウエストを隠すように上半身に着ているのは丈が短くてぴったりフィットしたバスクで、前の中央下端は下向きに長く尖っており、ウエストより下の部分にフレアーはない。左端の女性のスカートはエプロンフロントにドレープがあり、後ろ側には、黒いジャケットの四角いジョッキー・テイル［ジャケットの背側の、後方へ張り出した裾］がわずかに見えている。 写真で見ることのできるバスクはすべて丈が短く、コルセットの上になめらかにフィットし、いずれも狭い間隔で並んだ小さなボタンで装飾されるか、前あき部分が閉じられるかしている。どのドレスも衿はとても高いバンドカラーで、ふたりは衿の内側に白いリンネルのバンド、他の女性たちは白いレースのフリルを付けている。 前あき部分が斜めになった新しい流行のスタイルが、２着の身頃に見られる（Joan Severa，p. 430 より引用）。

筆者は「クリノリン衣裳からバッスル衣裳を経て、初期現代衣裳に変ってゆくプロセスはどのようであったのであろうか。」という疑問を提起した。写真 210 の「彼女たちはみな、1886 年に奥行きの大きいバッスルがすたれた直後の、保守的な服装を見せてくれている。」とのことである。筆者の疑問が解けたものと確信する。

写真 213（1887 年）（p. 265）は、*The State Historical Society of Wisconsin（Whi ［X3］36722）* の所蔵品である。被写体と撮影場面について、次のように書かれている。長い解説であるが、必要に応じて引用させていただく。

> ガーハード・ゲセル（Gerhard Gesell）は、1875 年から 1906 年まで、ウィスコンシ　ン州アルマで肖像写真と商業写真の撮影スタジオを経営していた。……例えばこの写真は、エマ・プロッツ（Emma Protz）とクララ・テスター（Clara Tester）とその間にいる氏名不詳の女性（おそらく、エマの姉妹のジュリア（Julia））が 1887 年６月のある日にゲセルに撮ってもらったものである。……射撃クラブ（Schuetzenverein）は（スイスにもあるような）的撃ち射撃を愛好する男性の集まりで、アルマでは 1863 年５月に設立されていた。…… 1887 年には、これに９人

写真 213　　1887 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
(Whi ［X3］ 36722)，p. 434

の女性が招待されたのである。３人の若い女性は特製の射撃用ライフルを手にポーズを取り、腕の良い射撃手に見えるように最も効果的な見た目を演出しているが、彼女たちの３人のドレスはいずれも最新のファッションで、バスクの身頃は極めて短く、スカートには片側に寄せたドレープが作られてドレスの前を斜めに横切り、ヒップの上に高く引き上げられている。もし後ろから見たなら、腰の後ろの低めの位置に当時流行のバッスル効果を出す典型的なプーフがあり、まっすぐな布端が左のヒップから背側の裾へ向けて下りていることだろう。３人がかぶっている小さいフェルト帽は３つともそっくりな形なので、特別な射撃用帽子の可能性もあるが、実のところ、この帽子の形状とスタイルは女性が外出用ドレスに合わせてよくぶっていたものである。……左のエマは薄手のウールのスーツを着ている。この服は、前身頃がとびきりファッショナブルな濃色のベルベットとタックで飾られ、手首の上には新しいしゃれたカフスが付けられている。……真ん中の女性は、軽量のウールかコットンの小枝模様の生地の、きちんとしたドレスを着ている。……

右のクララの服は、よく見られるスタイルである。丈が短く前の下端が下向きに尖ったバスクは身頃に何も飾りがなく、なめらかにフィットし、短い間隔で並ぶボタンでとめられている（Joan Severa, p. 435 より引用）。

2. 庶民女性の服装

ティンタイプの写真 224 （1889 年頃）（ p. 451）は、*The National Museum of American History* （C84.618.9）の所蔵品である。

4 人のメイドの仕事着を撮った写真である。セヴラ女史の解説を紹介させていただく。

写真 224　ティンタイプ
1889 年頃
提供：*The National Museum of American History*（*C84.618.9*）， p.451

1880 年代のぎりぎり末の時期に、仕事着を着た４人のメイドが飼い猫と一緒に写真に収まっている。1890 年代にまさに入ろうとする時代の特徴である前髪の扱いの変化が、４人の髪型の４通りのヴァリエーションによくあらわれている。

彼女たちはもはや、前髪を短く切り揃えたり、何本にも分けて螺旋状にカールさせて垂らしたりはしていない。実際、ひとりは中央で髪を分け、伸ばしはじめた前髪に短いウェーブをかけてこめかみへ流しているし、前列右の女性は、ウェーブのかかった長い前髪を額に下ろしている。……片側ヒップまで引き上げたオーバースカートの前部がスカートの裾のフラウンスに向かって浅い襞を作りながら斜めに下がり、背中の方は下がったバッスル襞へとつながって、端は［着用者本人にとって］左側の縫い目の後ろに、真っ直ぐに垂れ下がっている。

細くて前腕の中ほどまでの丈の袖と、明るめの色のウールに対照色のサテンの飾りが付いているところも、撮影時期の推定を裏付ける。…

片方の女性は糊のきいた衿を挿し入れた上に黒いシルクのリボンを結び、もうひとりはドレスの立ち衿の上に目の粗いレースの折り衿を付けている。右に座っている女性のドレスは黒いウール製で（アルパカではないかと思われる）、1880 年代末の高い衿が付いている。４人のうち３人はギンガムチェックの長いエプロンを着け、四角い胸当てをドレスにピンで留めている（Joan Severa, p. 451 より引用）。

以上の解説から、仕事着は依然として、バッスル衣裳であったことが明らかである。

3．部位別にみた女性服の特徴

（1） 袖

1880 年代のドレスの袖の特徴を写真の服装に拠ってまとめさせていただく（Joan Severa, pp. 376-377 を要約）。

1881 年頃の写真 186（本書，p. 267）や写真 187（本書 p. 268）では 70 年代から持ち越されたコートスリーブと呼ばれるゆるめの袖も見られるが、1880 年代を通してほとんど全ての袖はぴったりと腕に沿ったものである。袖はとても高い位置に取り付けられ、アームホールは後ろにある肩先よりも少し内側に入って裁断してある。もっとも活動着としてのドレスの袖には、いくらかのゆとりはあったようであるが流行はしなかった。そして手首の骨よりも短く裁断されていた。しかし、87 年以降、時に膨らみのある、ゆったりとした高い位置の袖が現れた。袖のてっぺんのキャップスとジョケイもみられるようになる。しかし、写真資料ではこのような袖はあまり見ることが出来ず、ゆとりのない細い袖がほとんどである。

1880 年代初期の袖や袖口には装飾が見られるが、だんだんと袖の装飾は簡素になっていったようだ。写真 186（本書，p. 267）は初期のドレスであるが、これには肘より下全体にひだ飾りがつけられ、カフスはナイフプリーツで、袖口には白いレースのフリルで飾られている。ナイフプリーツの袖口は写真 187（本書，p. 268）にも見られる。また、写真 189（本書，p. 269）では様々な袖口を見ることが出来る。一番右の女性のように袖口から白いリネンカフスがのぞいている袖は、他の写真でも多く見られる型である。右から２番目の袖口にも、細かいナイフプリーツの装飾がある。このように 80 年代初期の袖口には装飾が多く見られるが、中期以降の袖にプリーツやレースという装飾はほとんど見られない。全体的に見てみると、装飾的な袖口はほとんどプリーツによって装飾されていて、レースでの装飾も写真上で見られるが、数はとても少ない。

一方、ヨーロッパを見てみると、1880 年代を通してアメリカと同様に腕にぴったりと合った袖がほとんどである。装飾は、初期から中期にかけては様々なデザインが凝らされているが、後期になるにつれてすっきりとした袖になっていく。Plate14 の袖口にはレースの装飾が施されている。これはアメリカでも同じ流れをたどっている。しかし、アメリカで多く見られたプリーツは、ヨーロッパの袖にはほとんど見られず、華やかな装飾は全てレースやフリルによるものである。レースは高価なものであったため、アメリカの女性はおそらく、ヨーロッパ女性のようにたくさんのレースを用いることが出来なかったと考えられる。それでも流行を追う女性は、レースのかわりにプリーツで袖口を飾っておしゃれを楽しんでいたのではないだろうか。

Plate14　*Godey's Lady's Book*　January 1887

(2) 衿

1880年代のドレスの衿の特徴を写真の服装に拠ってまとめさせていただく。

1880年代の衿の特徴は高い立ち衿である。写真186（本書,p.267）のように、高い衿から白いフリルがのぞいている写真や、写真187（本書, p.268）のように白いリネンカラーが挿入されている写真が多く登場する。

80年代初期では小さいプリーツの立ち衿も見られる（写真187、本書,p.268））。また衿元の装飾にも注目してみると、多いのは白いスカーフをリボンにして飾ったものや、ネックリボンを付けているものがある（写真193，本書, p.271）。他には、カメオのブローチ（写真213本書, p.277）や金の時計のチェーン（写真210, 本書, p.276）などのアクセサリーでの装飾も写真で見ることが出来る。ヨーロッパの衿に注目してみると、80年代半ばまでは、フリルやレースの装飾的な衿が目立つ。高い衿が首のまわりを華やかにしているが、80年代半ば以降ではすっきりとした立ち衿がほとんどである。それらではフリルなどのロマンティックなものは見られない。そして、バッスル衣裳の頃の華やかな衿もほとんどが高い衿である。すっきりした立ち衿には白いリネンカラーの挿入も見られる。

フランスのファッション・プレートが上流階級であるということもあり、バッスル衣裳の頃などはアメリカに比べて、より豪華であることがわかる。しかし、そのようなヨーロッパのファッションを出来るだけ取り入れようとしたことは明らかである。衿に関して、立ち衿であるところは全く同じで、立ち衿から白いフリルやリネンカラーを見せる手法はヨーロッパでも一般的であったこともうかがえる。ヨーロッパのファッションは、雑誌などを通じてかなりはやく情報が伝わっていたと思われる。Plate 14にはレースの立ち襟が見られる。

(3) 裾

1880年代のドレスの裾の特徴を写真の服装に拠ってまとめさせていただく。

写真189（本書p. 269）の裾を見てみる。一番右の女性の裾は二段のボックスプリーツ、右から二番目のアンダー・スカートの裾にはナイフプリーツがある。（写真202，本書, p. 289）だが、どの女性の裾もひだで飾られているのが見られる。写真189（本書，p. 269）では、オーバースカートに黒いリボンと細かいプリーツが見られ、アンダー・スカートにも黒のベルベットのタブがはさまれたプリーツがある。このように裾にプリーツがあるスカートの写真は、裾まで写っている写真28枚中、11枚である。「ナイフプリーツはすたれつつあり、シャーリングやギャザーの入ったひだ飾りとボックスプリーツがそれに取って代わっている。」と1882年のPeterson's に書かれていて、裾には細かい技巧的な装飾が

なされていたことが分かる。しかし、裾も袖と同様に、そのような装飾は 80 年代後半になるにつれ見られなくなっていく。丈は、床から 3 センチの丈が 80 年代初期のマナーであった。

ここで、ヨーロッパのファッション・プレートを見てみると、初期のスカートの裾には小さいプリーツが何段にもなっているものや、レースで豪華に飾ってあるものがある（Plate 14）。しかし、中期から後期にかけて裾はシンプルなものになっていき、現代衣裳への移り変わりがうかがえる。

(4) 胴着

1880 年代のドレスの胴着の特徴を写真の服装に拠ってまとめさせていただく。

オーバードレスである“casaque”は､80 年代初めの 2 年ほどの独特のスタイルである。81 年の *Demorest's* に、「コートバスクは、バスクスタイルの先頭に立っているが、キュイラスは深いカサックと同様によく着られ、それはヒップの上を滑らかに描かれ、正面をシャーリングで仕上げて､背中側へひだが取られ､おそらく洗いやすい材料で作られた物。第 2 の身支度として最も人気がある。」と書かれている（写真 186，本書，p. 267）。カサックは他に写真 202（本書 p. 289）の中央左の女性で見られる。

写真で多く見られるのは多くのボタンが一列に留められている胴着である。写真 202 を見てみると、左 2 人の胴着にびっしりとボタンが並んでいることがよく分かる。そして胴着は、全てとてもぴったりとしたものであった。

ヨーロッパの胴着は､それまでのドレスに比べかなり現代的で､80 年代を通してかなりの変化があったことがうかがえる。

(5) ラップ

1880 年代のラップの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 376 - 381）。

1870 年代終わりに、スカートが細くなった時、より細い上着が流行した。これは 80 年代初めの特色を成している。細い肩とスカートは全体で円柱形になった。上着とマントは多くの場合ダブルで、一般的な衿の形は高くてまっすぐであり、一番上でボタンをとめて着用された。コートスタイルは 80 年代を通して残ったが、80 年代なかばまで背中は深いバッスルの上に落ちるため、それに合わせて必要なデザインが凝らされた。

87年、The Delineatorが「長いコートと短いフードジャケットは、新しく非常に重いウール製でエレガントである。」と報告した。ファーは80年代、外套に使われた。「この冬ファーはハーフ丈のコートにたくさん使われた。外出用スーツには、ファーで仕上げられたフラシ天が、より金持ちの人に好まれた。」（*Peterson's* 1882）と書かれている。アザラシの毛皮のジャケットと短いマントは、1876年から使われ、長い胸当て胴着とポロネーズの導入によって好まれた。70年代の上着は、時にダブルで、時に開いた折り衿と高いまっすぐの衿の普段着として全て80年代に残った。

ショールは実用的なものとイヴニング用ショールがあり、役立つものであった。また、スタイルには驚くような多様性があった。カールしたフリンジ付きフランス製カシミアで、青やピンク、グレイ、黄褐色、Oxblood、クリーム色、緋色などが流行した。他に、ペルシャの両面仕立てのものやインド製に見立てたショールもあった。

写真202の前中央に座っている少女の着ているものは、写真ではめったに見ることのない「ルダンゴート」と呼ばれる、両前の長い婦人用コートである。これはヨーロッパでもおしゃれなコートであったが高価なものであり、この写真で見られるものはルダンゴートに見せかけて仕立てられたものであるようだ。肩とアームホールの前の縫い目に取り付けたオーバードレスで、おそらく背中も同様に仕立てられたものである。また他にキャラコとギンガムが飾っており、これらから暗い生地に明るいプリント模様（水玉や花柄）が流行していたことがうかがえる。

(6)　髪型・かぶりもの

1880年代の髪型・かぶりもの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 385-387）。

最も一般的なのはボンネット型である。それは、極端に細く垂直なひも付き、または紐の付いていないもので、巨大なブリムはなく中央前だけの高い位置に装飾が付いているものである。このスタイルは80年代を通じて広まり、後半になるにつれ高さは強調されるようになった。他の一般的なタイプには様々なブリムが付いていて、多数のサイズや形が見
られる。サイズはtop-hat　型からporkpie　と小型の山高帽まである。それらの写真ではフェルト製が多く見られる。装飾は頭全体を囲んだ羽飾りやリボン、レースの組合せか、単に中央前か片側だけにあるリボンパフや羽飾りで構成されている。花飾りはこれらの装飾ほどは流行していない。1887年には、極端に高いフェルト帽が人気になった。

素材で人気があったものは、プラッシュであり、無地のプラッシュ、縞模様のプラッシュ、そしてヒョウ柄、トラ柄と呼ばれたまだら模様のプラッシュなどがあった。高級な色

の組み合わせとして青銅色や金とガーネット色とくじゃくの青、青銅と金などがあり、これらは目立っていた。そしてそれらは、たくさんの色合いの羽や金のレース、たっぷりのリボンで装飾された。

髪型は写真202（本書, p. 289）から判断して、小さくカールした切り下げ前髪で、後ろでシニョンを作ったりしてふんわりとまとめているスタイルが多く見られる。

ヨーロッパでは、初期の頃は高さのない帽子で、羽根飾りのたくさん付いたスタイルがよく見られ、中期からだんだん高さが増していき86年から88年ころはとても高い帽子が流行したようである。

髪型もアメリカの特徴と同様で、前髪はとても小さくカールしている。そしてウェーブのある髪を様々なスタイルでまとめている。

(7) 装飾物

1880年代の装飾物の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 385-387）。

① アクセサリー

80年代のアクセサリーのスタイルは新趣向に向かっていた。例えば、ラペルのピンには様々なおもしろいテーマがあった。柵の上にいるネズミや柵を通り抜けるブタ、テニスラケットにボールというような具合である。アクセサリーは、イヤリングやハンカチーフのピン、そして外出用のスリーブボタンが主であった。ピンは、銀製の奇抜なデザインのものや、金属製のものが多く見られた。

88年、Dakota共和制のファッションコラムには驚くほど多様なピンやチャームペンダントを報じている。銀のチューブの油絵の縮小図や、小さなエナメルのオペラグラス、酸化された銀で穴をあけられたもの、銀の大げさな棒、ロープで螺旋にしたコイル、金の持ち手の絵筆や、赤や白のエナメルのブラシ、金のコイルを持っているダイヤモンドの目を持つ金のトカゲなどである。

写真資料ではイヤリングや指輪がよく見られる。また衿の項目で述べたように、カメオのブローチ（写真213）や時計のチェーン（写真210）で首の辺りを飾っているものも見られる。

② 扇子

ヨーロッパでも扇子（Plate 15）はたいへん人気があり、ファッション・プレートでたびたび登場する。東洋の装飾品が、西洋のドレスと合わせて持たれたことはたいへん興味深いことである。西洋の女性にとって、神秘的な雰囲気が魅力的に感じられたのであろう。

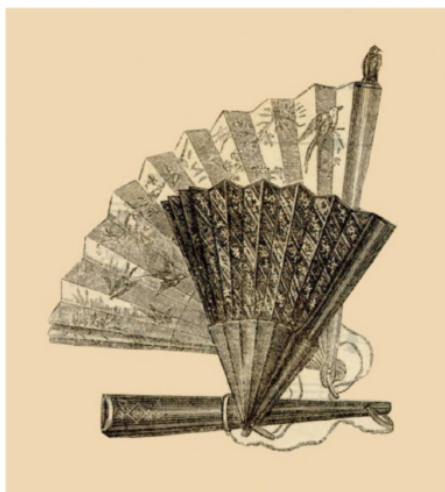



Plate 15 ***Godey's Lady's Book*** **August 1880**
典拠 Accessible Archives

③ 日傘

レースの日傘は、スペイン製のものやChantilly のレースのひだで覆われていて、色つきのサテンの上にスペインのレースで完全に覆われていたものが、秋に流行した。室内での写真が多いためか、写真上での日傘は少ないが、一般的に日傘は流行していた。また、ヨーロッパのファッション・プレートでは、日傘はたびたび見ることが出来る。バッスル・スタイルなどで華やかなファッションが流行しているとき、日傘もフリルなどの装飾が多く、80 年代後半に近づくにつれ、すっきりしたファッションが流行すると日傘もシンプルなものになったようだ。この日傘は日本のもののようで、扇子とともに東洋的なものが西洋の女性の興味をひいていたことがよくわかる。

(8) 履き物

1880 年代の履物の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, p. 387）。

80 年代多くのスタイルの靴が作られたが、写真では散歩着と合わせて、足長ブーツが最もよく見られた。かかとは、通例低くて広い。そして時に平らで、しかし小さく 1 ないし 1. 5 インチのカーブしたヒールも履かれた。ブーツのつま先は基本的に卵形で、先は角張っているが角は丸みを帯びていた。French Kid Boots は、艶のないものは 4 ドルから 8 ド

ル50セント、艶のあるものは9ドル50セントで宣伝された。Curacao Kid bootsは、ヒールがなく1ドル50セントで広告された。

ドレッシーなドレスのための靴は、高いかかとで70年代後半には甲にいくつかのストラップが付けられていた。パンプスもおしゃれで、大きな飾り締め金と靴の舌皮がついたストラップシューズはフォーマルドレスに影響を与えた。

靴下にも様々な色があったようだ。青緑、インディアンレッド、オリーブ色、薄紫色、ペールピンク、ガーネット、真珠色、青、茶など明瞭な色である。

(9)　下着

1880年代の下着の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 382-384）。

1880年代の最新ファッションにおける体の修正は極端であった。80年代初期、縦長のラインから、曲線美を強調するラインへと変化があった。

コルセット、クリノリンケージとペチコートはこのような変化に対応できなければならなかった。

ペチコートは、80年代半ばふくらみを増し、より重要なものとなった。それらは裾ときちんと並んで背中に垂れ下がるひだ飾りなどがついていて、引き裾のドレスと着用された。くすんだ茶色のキャンブリックか色付きフランネルは日常着に、色付きシルクはイブニングドレスに合わされたが、ほとんどはまだ白の綿だった。ペチコートは、バッスルを覆ってその構造を隠してラインを滑らかにするために着用された。

全ての女性がバッスルを着用したわけではない。バッスルは、上等のドレスのために着用され、むしろ極端過ぎない型のバッスルが好まれたようである。

写真上で、コルセット着用がはっきりとわかるものは31枚中10枚である。

第４章　庶民男性の服装

1880 年代の男性服の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 387-388）。

1880 年までにゆるいサックコートのすべてのなごりは流行から消えた。男性のスタイルも女性と同様に、細くぴったりとしたスタイルが好まれるようになり、年を取った男性のためのサックコートスタイルでも、長く裁断されたが細いラインであった。ラペルはとても小さく、コートはのどの高い位置で締められるように作られ，ネクタイをするのがやっとであった。コートは多様な種類が作られていて、高価な裏地付きの長いモーニングコートやフロックコートを買う事も出来たが，写真上で見られるのは唯一サックであることから、サックは一般的に日常着として着られていたと考えられる。色は黒が多く見られる。

写真上で見られるシャツはおもに白であり、人気があったのは立ち衿などの堅苦しい衿である。そして、その首の周りにネクタイが巻きつけられていたようで、それを覆う衿はなかった。ネクタイは柔らかな大きな結び目で結ばれ、多くの場合、とても明るい色のシルクであったが、模様付きのものもあった。黒のネクタイも同様に人気があり、端で蝶結びに結ばれた。

ズボンは，80 年代までのズボンの中で最も細いものとなり、折り目はなくかかとはいくぶん長めで、前の長い分は足の甲の上で折れ曲がっていた。そして黒のズボンが一般的であるが、写真上で時折、縞模様のズボンも見られる。

日常靴としてブーツに人気があり、黒の皮製が常であった。写真上で見られるこれらのつま先は、幅があり角が丸みを帯びた四角で幅広のかかとであった。浅いクラウンのフェ

写真 202　1886 年
提供：***The Neville Public Museum***，p. 418

ルト製山高帽は、左右両側の鍔が粋に上向きにカーブしていて、少し額にかかるようにかぶった。写真で見られるソフトなフェルト帽は黒と並んで灰色とベージュのものが多く、クリース［クラウンの頂上部の折り目］があり、柔らかい鍔はいろいろな曲げ方で形をつけられている。日中にドレッシーなスーツを着る時にかぶる帽子として非常に人気があったのは、硬くてクラウンが深い黒のホンブルグ帽だった。レジャーの時に撮った写真には麦藁の水兵帽が写っており、カジュアルな服の写真には幅の広いキャップがよく見られる。

1880 年代の典型的な男性のスタイルは、写真 202 で見ることができる。

写真 202（1886 年）は、*The Neville Public Museum*　（p.418）の所蔵品である。

写真 217　　ガラス板写真
1888-90 年
提供：***The Museum of New Mexico* *(76778)*，**
p. 441

セヴラ女史は、背景情報と男性の服装を次のように解説している。女性の服装については、同じタイプの服装で写っている写真をすでに紹介済みであるので省略させていただく。

> グリーン・ベイ高校を 1886 年に巣立つ 10 人の卒業生が、教師とともにポーズを取っている。女子学生の割合がとても高い。農村地帯に囲まれたこの小さな町では、男子生徒の多くは家業を手伝うために中途退学したのだろう。……３人の少年は、揃って 1880 年代によくあった窮屈なサックジャケットを着ている。生地はそれぞれ色の違うウールで、一番上のボタンだけを掛け、下にはジャケットと同じ生地のベストを、ボタンを留めて着ている。彼らのシャツカラーは小さくて前が閉じており、ネクタイは目立たない。男性教師は着古して傷んだフロックコートを着て黒のウールのズボンをはき、1880 年代に権威ある人々が好んだタイプの髭をはやしている（Joan Severa, p.　448 より引用）。

次に庶民の男性の写真を紹介させていただく。

ガラス板写真の写真 217（1888‒90 年）は、*The Museum of New Mexico*（76778）　の所蔵品である。

セヴラ女史は、被写体の背景情報を次のように述べている。

写真家 J・C・バージ（J. C. Burge）は 1880 年代の最後の２年間、W・A・ギルモア

（W. A. Gilmore）のスタジオがニューメキシコ州デミング（Deming）に開いた支店を切り盛りしていた。この若い紳士の写真は、その時期にバージが撮影したものである（Joan Severa, p. 441 より引用）。

被写体の服装について、次のように述べている。

彼の服はすべて、当時のアメリカのどこででも見られた安い既製品である。チェックのサッカー生地の窮屈そうなサックジャケットと同じ生地のベストは、おそらく当時最も一般的だった茶色と黄褐色の組み合わせだろう。ストライプのズボンはコーディネートを考えることなく選ばれ、簡素な硬い立ち衿を付けた白いシャツに、黒いシルク製の細いネクタイを締めている。ウォーラス（セイウチ髭）とサイドで分けた短髪は、1880 年代末の特徴である（Joan Severa, p. 441 より引用）。

第５章　子ども服

1880 年代の子ども服の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa，pp. 388-390）。

小さな男の子のスタイルは、しばしばドレススカートやキルトのセーラースーツやタータンの格子柄キルトの下に短いズボンをはいていた。5 歳くらいからの女の子の衣服はいくらか入念に作られ、ドレス（ワンピース）には最低でも裾襞飾りやひだが付けられ、レースがトリミングされていた。男女ともに，大きな白い衿付きであった。衿はしばしばレース製であったが、多くの場合はリネンで、それと合わせて柔らかいシルクの（少年の場合、たいてい黒の）ネクタイをつけた。６，７才の少女になってくると、確実に婦人服の流行が反映していた。ポロネーズスタイルの流行時には、長いプリンセスラインが快適で、これは 80 年代の典型的なスタイルであった。極端なバッスルが流行した時、本質的にはバッスルの構造ではないが、若い女性のパフやパニエのように膨らませドレープされた。スカートが狭くなり，バッスルが垂れ下がった時、少女のスカートは同様になった。暗く落ち着いた色と、シルクとベルベットの光沢のある衣服の写真が見られる。80 年代後半のベストやウエストコート、高いひも衿のような一時的流行は，忠実に映し出された。

12 才くらいまでの少女のスカートは膝丈ではあるが短く着用された。14、15 才くらいの少女のスカートは、大人の女性たちのスカート丈に達した。また、少女たちは長くてぴったりしたコートの流行を追っていた。

写真 192　スタジオ・ポートレート
1883 年頃
提供：***The Chester Kinder Family***，p. 400

スタジオ・ポートレートの写真 192（1883 年頃）（p. 400）は、*The Chester Kinder Family* の所蔵品である。

セヴラ女史は被写体の背景情報と服装について、次のように解説している。

> ウィスコンシン州の農業地帯に位置するボスコベル（Boscobel）近郊で比較的豊かな農場を経営していたアンソン・クック（Anson Cook）の４人の子が、町にお出かけして撮ってもらったのがこの写真である。立っているのはアンソン・ジュニア（Anson Jr.）、座っているのは左から順にエフィー（Effie）、リリー（Lily）、イーディス（Edith）である（Joan Severa, p. 400 より引用）。

女の子の服装については、次のように述べている。

> 年かさのふたりの少女は、濃色（おそらくワインレッド）のシルクタフタで作られたとても良いドレスを着ており、上着はチュニックスタイルである。この２着のドレスは地元で仕立てた可能性も十分考えられるものの、当時はすでに、これとよく似た品質のドレスを店で買ったり通信販売で入手したりできた（Joan Severa, p. 400 より引用）。

男の子の服装については、次のように述べている。

> アンソン・ジュニアはウールかウール混紡の軽いサックスーツをこざっぱりと着こなしている。彼のジャケットのラペル［下衿］はとても幅が狭く、胸ポケットのあき

口には対照色の布でバインディング［縁をくるむこと］がほどこされている。衿なしのベストは成人男性が着るカジュアルなベストと似た形で、下の方にジャケットのポケットと同じタイプのポケットがついている（Joan Severa, p. 400より引用）。

入手方法についての貴重な情報が記載されている。

衣服の裁断、デザイン、入手方法、髪型について、より詳しい情報に興味のおありの読者の方は、オリジナルの著作を参照されたい。

第6章　まとめ

1880年代は、女性のファッションにおいて、とても重要な意味を持っている。衣服の大量生産が可能となり、デパートやメールオーダーシステムの発達により、衣服の民主化が急激に進んだ。高価でない衣服が既製服で入手可能になり、またパターンシステムの発達から家庭裁縫である程度の流行を取り入れることが可能となった。またライフスタイルの変化から徐々にシンプルな衣服へと移行していく様子がうかがえる。

しかし、その変化はゆっくりとしたものであり、アメリカ女性にとってヨーロッパのハイファッションは憧れであったことは事実である。つまり、すぐに拘束性の高いハイファッションがなくなったというわけではなく、この時代これらの衣服を共に見ることが出来るのである。1880 年代の女性ファッションの特徴は、バッスル衣裳の登場であり、また1890年代に広まった現代衣裳へ近づく衣服をかいまみることは大変興味深い。

第2-5章注

洋書

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900,* The Kent State University, Press（October， 1995）

第Ⅶ部　1890 年代

第 1 章　歴史的背景

ヨーロッパの各帝国と争い、独自の民主的発展を遂げてきた歴史を持つ米国は、ヨーロッパのライバル諸国とは異なる道を歩んだ。19 世紀末における米国の拡張主義にはさまざまな原因があった。国際的には、この時期に帝国主義の熱狂が高まり、ヨーロッパ列強がアフリカで植民地競争を繰り広げ、アジアでは日本と共に影響力と通商を求めて争った。セオドア・ルーズベルト、ヘンリー・カボット・ロッジ、エリフ・ルートなどの有力者は、米国がその国益を守るためには、経済的勢力圏をも広げなければならないと考えた。

近年、日本では南北戦争の時代に関する新しい研究書が出版されている。そこで、以下において、貫堂嘉之氏の著作から、移民行政、鉄道事業、石油精製業、製鋼業、先住民支配、フロンティアの支配に関する貫堂氏の見解を要約・紹介させていただく（貫堂嘉之, 2019, pp. 158–173）。

アメリカは「移民国家」として誕生したわけではなく、南北戦争で奴隷解放が達成されるまでは、奴隷労働に依存した「奴隷国家」であった。移民受け入れの最盛期を迎えた 20 世紀転換期、ニューヨークのエリス島連邦移民入国管理施設が最多の移民を受け入れた。開設された 1892 年から閉鎖された 1954 年までの期間に 1200 万人の移民がここを通って入国し、現在の米国民の約 4 割がこの入

国者の子孫にあたるとされる。移民たちはここで入念な医療検査、法律検査・尋問を受け、移民登録を済ませた者がマンハッタンへの上陸を許可された。ヨーロッパ移民向けの連邦行政は、総じて、アメリカ社会に常に大きな労働需要があったために、産業市民として有用な移民労働者を歓迎し、労働力創出のための巨大な包摂メカニズムとして機能していた。重要だったのは、誰に入国を許可し、誰を入国禁止するのかという移民行政が、誰に市民権を与えるのかという連邦政治と直結したことであった。

鉄道史家によれば、1910 年には世界の鉄道軌道の三分の一が合衆国に集中していたということである。1890 年の鉄道収入は 1 億ドル、連邦収入の二倍半であった。大陸横断鉄道の完成が、地方ごとの時間、教会の鐘で刻まれる生活習慣を変え、鉄道時刻が全米で統一の標準時となって、全米は四つの標準時刻帯に分けられた。

鉄道以外の業種でも、「金ぴか時代」のアメリカには、技術革新をおこし新たな産業を発展させる大企業家が現れた。ジョン・D・ロックフェラーは、石油精製業の将来性に目を付け、1870 年にスタンダード石油会社を設立。競争相手の株式を買い取り、圧倒的な地位を得て、1898 年までに国内総生産量の 84%の原油を精製し、パイプラインのほとんどを支配下におき、石油王となった。

アンドリュー・カーネギーは、スコットランドからの移民であり、大企業家である。彼はスペリオル湖岸で鉄鉱石の鉱脈が発見されたことを活かし、製鋼業を急成長させ、この会社は世界一の高収益の会社となった。

1890 年とは、ウーンデッド・ニーの虐殺に象徴されるように、先住民の掃討の完了を意味していたのである。

西部・中西部の人口は、1860 年の約 972 万人から、1890 年には約 2544 万人へと増加しており、大平原および西部への移住・入植はとてつもない数であった。農家数も 1860 年の 200 万から 1910 年には 600 万強へと 3 倍に増えた。 こうして、異様なまでの移住熱と投機熱により、国内移住が進み、1890 年、国勢調査局はフロンティア・ラインの消滅を宣言した。

第 1 章　注

和書

貫堂嘉之著『南北戦争の時代』（岩波新書　2019 年）。

第２章 バッスル衣裳の終息

1890 年代は、1880 年代に流行したバッスル衣裳から現代衣裳に近いものへと変わっていく衣服の歴史を語る上で重要な過渡期である。この時代に既製服に対する需要が一般化し始め、女性の衣服に大きな変化をもたらし、衣服の価値観も変わった。装飾の凝った衣服からよりシンプルな形へ移行していくのである。ライフスタイルの変化が確実におこり、１人がたくさんの服とその種類を持つことが経済面からも可能になった。ファッションの発信源としてパリはいまだ強い影響を与えるものではあったが、腰を細く締める傾向は、アメリカではこの時代においてはあまり見られなかった。実際流行のファッションとして、英国スタイルはとりいれられたが、労働スタイルは別に存在していた。

本部では、セヴラ女史の著書をもとに、当時の写真資料をまじえて、アメリカの衣服を項目別に具体的に考察していく。そのなかで、女性服においては当時のアメリカのファッションに影響を及ぼしてきた *Godey's Lady's Book* のファッション・プレートを使い、ヨーロッパの衣服と比較する。

第３章　庶民女性の服装

1. TPO・職種別にみた女性服

1890 年代のドレスの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 455-458）。

1891 年 10 月に、*The Ladies' Home Journal* で紹介されたドレスは前面が極度のロングウエストで、首からウエストの先までたくさんのギャザーがよせられていた。ウエストラインの正面で深いヒップ丈のオーバーブラウスは、ウエストラインでＶ字型にベルト締めされていた。肩先で、大変高くギャザーがよせられ、シャープなパフが立ち上がった腕が細い長袖のついたドレスは、粋だと考えられていた。ボストンの Jordan Marsh は、1891 年に発行したカタログに、極度に高くまっすぐな衿のついた胴着とスーツの形を掲載している。その衿は急速にドレスの必需品となっていった。新しいスーツの袖は肩の高い位置の膨らみからだんだんとしだいに細くなり、少し短めの手首丈であった。

1890 年代におけるウエストラインは、1890 年の前身頃の長いスタイルから始まり、90 年代半ばには横隔膜の近くに膨らみがつけられ、90 年代の終わりには、ほとんど普通のウエストラインに落ち着いた。1898 年に新しく胸部を低くしたシルエットが流行になり、ウエストラインは下げられた。

1890 年代の終わりには、衣服は簡素に作られたが、高級なシルクやウールで、胴着の正面には織物や模様のプリントされた明るいシルクを用いていた。

90 年代初期に好まれた色合いは、明度の高い対称色を用いて、組み合わせることであった。黒とトルコブルー、オールドローズとダークグリーン、ウッドブラウンとダークブルーなどの対称色で、どちらかに濃い色をもってくることであった。1896 年においては、黒

と金、緑と茶、黒とシルバー、深紅と青で、素材はウールとベルベット、シルクとベルベット、などの組み合わせで、多くの人は良い感触を考慮していた。巨大な袖が流行した時代に、シルクには多くの色とタイプが見られたが、東洋風のプリントは人気があった。縁飾りは、サテンやベルベットの無地が頻繁に使われていた。90 年代のドレスのひだ飾りは胴着に集中していた。パフやフリルやギャザー、タック、プリーツの表面装飾に、通常ベルベットかサテンのリボンやレースが付け加えられた。ベルベットかレースで作られたヴァロア（Valois）衿は人気で、ジェットがひだ飾りとしてもちいられ、パセメントリーも装飾に使われた（Joan Severa, p. 460）。

1890 年代の女性のリフォーム・ドレスに自転車が大きな影響を与えた。自転車の流行とともに、再びブルーマーが議論されはじめた。サイクリングコスチュームとして一部の女性に受け入れられたが、スカートをはいた上流の女性達には受け入れられた様子はなかった。保守的な女性達のサイクリングコスチュームは、せいぜいシルクの裏付きの Eton（Eton 校の制服をとりいれたジャケット）、短いリーファと前開きコート、もしくは、革ベルトでしめたブラウスとあわせて、プリーツかたっぷりとゆとりのあるスカートであった。1894 年の Janesville Weekly Gazette は、「普通の町で服を着て自転車に乗った 3 年前の女性はシッシといって追い払われたり、やじられたりしたけれど、自転車に乗ってズボンをはいている今日の女性は、ほとんどもしくは、全く批判されない。」と書かれている（Joan Severa, p. 467）（写真 248, 本書, p. 312）。

喪服については、女性のファッションにおいて、制限がゆるやかになったことはなかったようだ。喪服のなかで最も正式な未亡人の衣服は、クレープつきか、またはついていない質素な Henrietta の布か、ボンバジーンから成っている。真の未亡人のベールは、スカートの前後の端に達するべきだと考えられ、3 ヶ月間全身を覆い隠すように着用される。羽飾り、黒玉、レースや装飾品としてのリボンは許されない。これらはすべて黒の場合のみ許された。クレープを着ているとき、これらをもちいるのは、非常に悪趣味であるといわれたようだ。

以下において、女性が写った写真を 11 枚、紹介・考察したうえで、部位別の考察に進みたい。

ガラス・プレート・ネガティヴの写真 232（1891 - 93 年）（p. 485）は、*The State Historical Society of Wisconsin*（*WHi*　［*V2*］　*1154*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の場面と撮影時期について、次にように書いている。

写真 232　ガラス・プレート・ネガティヴ
1891 - 93 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
(WHi　[V2]　1154)，　p. 485

チャールズ・ヴァン・シャイクが妻のこの写真を撮ったのは、ブラック・リバー・フォールズの近くにキャンプ旅行に出た際だった。上腕の袖の膨らみがまだわずかで、袖が腕に沿っていることと、身頃の左右非対称な打ち合わせから、この写真の撮影時期は最も早くても 1891 年であることがわかる。

次に、服装はキャンプに着てゆくドレスであるという。詳しく解説されている。

ヴァン・シャイク夫人は、少なくともひとつのテントで料理と後片付けの責任者をしていたと考えられ、女性がキャンプで着るのにふさわしいとみなされていたドレスを着ている。このスーツはおそらくカーキ色のコットンツイルで作られており、スカートには歩きやすいよう十分にフレアーが入り、足に裾がからまないように幅の狭いフラウンス（flounce）［襞縁飾り］が付けられている。……足は見えないが、こうしたアウトドア用の服の場合、普通は筒丈が長めで、紐で締める靴かハイキングブーツを履いた（Joan Severa, p.　485 より引用）。

写真 247　（1895 年）　（p. 503）は、*The Valentine Museum　(72.23.3)* の所蔵品である。

この写真は、ガートルード・バックナー（Gertrude Buckner）の看護学校の卒業写真で、撮影時期は、1895 年で、ヴァージニア州リッチモンドのフォスター・スタジオ（Foster Studio）で撮影された、とのことである。今日の目から見て、袖の膨らみといい、細いウエストといい、とてもファッショナブルな制服である。

セヴラ女史は、こう解説している。

写真 247　1895 年
提供：***The Valentine Museum*** ***(72.23.3)***，
p. 503

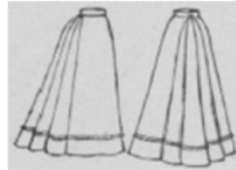



Plate 16　***Godey's Lady's Book***
April 1986
典拠：Accessible Archives

バックナーはとてもスリムなのでコルセットはまったく必要ないが、パリッと糊をきかせたツーピースの制服の下にはコルセットをつけている。制服はしっかりした立ち衿の付いた白いシャツブラウスと、糊のきいたスイス・ウエスト（Swiss waist）スタイルのスカートからなり、ブラウスはタックを取ってスカートのウエストに入れられている。こうした制服にも流行の袖のスタイルが取り入れられていることは、この袖の手入れには簡素な袖よりずっと多くの時間がかかるという事実を考えると、非常に興味深い。……きちんとしたナースキャップをかぶっている（Joan Severa, p. 503より引用）。

Plate 16　*Godey's Lady's Book* にこの制服と瓜二つの挿絵と解説が掲載されている。上段のイラストは、ウェイスト（ブラウス）で、下段はスカートで、後にアコーディオン・プリーツが入っている。

写真 256　1896 年頃
提供：***The Oakland Museum***，p. 515

写真 256 （1896 年頃）（p.515）は、*The Oakland Museum* の所蔵品である。

これは、セヴラ女史の著作に掲載された写真のなかでも、とりわけ目を見張って、見入ることを余儀なくされる写真である。何はともあれ、セヴラ女史の解説の必要な個所を紹介させていただく。

> カリフォルニアのネリー・リード・メイヨン（Nellie Reed Mayon）が、限界まで大きく膨らんだ袖の付いた 1896 年の最新流行スタイルのツイードの新品スーツで写真に収まっている。この巨大な袖は、身頃の肩幅を極端に狭くしたところに大きくてかさ高いプリーツを取って付けられており、裏でしっかりと支えられて、広く横に広がる見た目を演出している。……この頃には多くの仕立屋は、重い袖をうまく支えるために身頃のショルダーラインを広くしていた。……ネリーのスーツスカートの正面の生地はA 字形に裁断されており、布目に対して斜めに裁断された端に、布目に沿ってまっすぐ裁ったサイドゴアが縫い付けられている。このスタイルであれば、背中側はおそらくガセット［三角襠］が入れられ、後ろ中央にボクスプリーツを取って膨らみと広がりを出しているはずである。この種のスカートは一般に裏付きで、裾から 12〜14 インチ［30〜35 センチ］くらいの部分はしっかりハリを持たせ、裾の縁には、裾のラインを保ちつつ擦り減りを防ぐために、ヘムセーバー（hem saver）のブレード（硬めの毛でブラシ状になったスタイルであることが多い）が挿入されていた（Joan Severa, p. 515 より引用）。

まるで、美空ひばりのような一世を風靡した歌手の舞台衣装とみまがうセンセーショナルな衣装である。

写真 261　1897 年
提供：*The State Historical Society of Wisconsin (WHi [X3] 43893)*，p. 520

写真 236　1891 年 6 月 30 日
提供：*The San Francisco Public Library (MC)*，p. 489

写真 261（1897 年）（ p. 520）は、 *The State Historical Society of Wisconsin (WHi [X3] 43893)* の所蔵品である。

この写真の撮影者、撮影場所、撮影年代について、セヴラ女史は、詳しく書いている。

> ウィスコンシン州マディソン（Madison）地区の芸術家アニー・シーヴァース・シルドハウアー（Annie Sievers Schildhauer）は 1890 年代に写真という趣味にのめりこみ、自分の家族や友人やその家族などを題材とした芸術的な写真を多数撮影した。1897 年の夏に彼女がＦ・Ｄ・アイアリー（F. D. Eyerley）一家を撮ったこの写真は、ウエスト・ジョンソン通りにあったアイアリーの家の前庭が舞台である。（夫婦の後ろに自転車の前輪とハンドルが見えていることにも注目されたい。）（Joan Severa, p. 520 より引用）

服装と髪型、女の子の服装は、次のように描写されている。母も娘も流行の膨らんだ袖のファッションに装っているのは、大変、興味深い。

袖のスタイルは 1897 年という撮影年にぴったり合っており、上腕の途中までがタイトで、その上がボールの形のパフになっている。……

女の子のドレスは長袖で少女向けのバーサ衿が付いているが、高い位置のヨークにたっぷりギャザーを寄せた前身頃が取り付けられ、スカートの裾近くにはタックとレースによる飾りがあしらわれている。……

アイアリー氏はスタンダードな黒のサックスーツと白いシャツを着て、夏用の白い蝶ネクタイを締めている（Joan Severa, p. 520 より引用）。

写真 236　1891 年 6 月 30 日（p. 489）は、*San Francisco Public Library （MC）* の所蔵品である。

場面と服装は、次のように描写されている。

サンフランシスコに住むミュスドーファー（Meussdorfer）という苗字の少女の、14 歳の誕生日の記念写真。

ファッショナブルな濃色のシルクのドレスの袖と衿は、1891 年の最新スタイルである。髪は大人びたポンパドゥール・スタイルに結い、帽子は馬毛と麦藁で編んだ少女らしいものをかぶっている。……ドレスは、見たところ透けるほど薄いシルク製のようで、ストライプの織り柄が入っており、黒だとしてもおかしくないくらい非常に濃い色である。普通この種のドレスではあまり見られない、黒っぽいレース製で縁がギザギザになった衿が付いていて、この組み合わせはどこか喪服を思わせる。ビショップ・スリーブ（bishop sleeve）の非常にしゃれた膨らみ、ロゼット［バラ飾り］があしらわれた身頃、そしてシルクのフラウンスが、ドレスの質の高さを物語っている。つま先が適度に尖ったシンプルな黒のブーツが足首のあたりまで見えている（Joan Severa, p. 489 より引用）。

写真 269　1898 - 1901 年（p. 530）は、*The State Historical Society of Wisconsin (WHi ［B451］50）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、撮影者、撮影年代、場面について、こう説明している。

写真家ハーマン・C・ベンキー（Hermann C. Benke）が、ウィスコンシン州マニトウォク（Manitowoc）の婦人帽子店の前で、店主と従業員を撮影した写真である。

写真269　1898 - 1901年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（WHi［B451］50）, p. 530

撮影年代の推定の際に『最も早いとすればこの年』という時期を示してくれるのはつねに最も新しい流行のアイテムであるが、この写真の場合は一番ドレッシーな衣裳の袖の小さなボールのような膨らみがそれにあたる。……彼女のしゃれた外出着は、高い衿が付いていて長袖の上にボールのような膨らみがある、当時アフタヌーンドレスに適しているとされたスタイルで、滑らかなフレアーのスカートは地面に届く丈である。

左端にいる中年の女性従業員は、ティーエプロンをして羽根のはたきを持っている。前身頃はサープリス（surplice bodice）・スタイル［前打ち合わせが斜めに重なったスタイル］で、打ち合わせの縁は黒いシルクのルーシュで飾られ、首から胸にかけて下に着た白い服と黒いリボンのバンド衿が見えている。袖はとてもドレッシーで、ぴたりとした長袖の肩の部分に、黒いシルクで縁を飾ったスリーブキャップが２枚重ねてあしらわれている。彼女の隣で肩を組んでいるふたりの女性は、年が若いぶんスカートとシャツブラウスという日常着的な服装をしており、スカートの丈は短めである。……きれいに磨かれたウォーキングブーツは筒丈が高く、適度な高さのヒールが付いている。髪はふたりとも後方に引いており、そのまま長く垂らすか三つ編みかのどちらかにして、おそらく首の後ろでリボンを巻いて結んでいるだろう。

入り口の右にいる若い女性は黒いドレス姿で、袖は上腕部の上方にふたつ膨らみが付いている。首にはリボンを巻いて蝶結びにし、フレアー状に広げている。彼女のスカートも短めで、靴の履き口の高さまである。彼女の隣の、ビショップ・スリーブのシャツブラウスを着た若い娘は、高い衿のまわりに白い水玉を散らした濃色のネックリボンを巻いている。どちらの女性も髪に分け目をつけ、こめかみの脇の髪はウェーブさせ、頭頂部はわりあい平らに整えている（Joan Severa, p. 530 より引用）。

写真 276　1900 年頃
提供：***The Museum of New Mexico*** **, p. 539**

写真 228　1890 - 91 年
提供：***The Georgia Historical Society***
（*SH-4216*）, p. 479

この写真の服装は、近代から現代への移行期の服装で、スカートとシャツブラウという日常着的なスタイルであり、スカートの丈は短めであることに注目したい。

写真 276 （1900 年頃） (p. 539) は、 *Museum of New Mexico* の所蔵品である。

セヴラ女史は、撮影者、撮影年代、場面、および服装について、こう説明している。

> ３人の女性が、ニューメキシコのラスベガスにあった自宅の前で、写真家Ｔ・Ｇ・マーニンのカメラに向かってポーズを取っている。彼女たちの服装は 1890 年代を通じてよく見られた最も典型的な服装で、ごく小さな特徴だけが、1890 年代末の服であることを教えてくれる。……左の女性のブラウスのケープレットは大きなエポーレット（epaulettes）の形をしているのに対し、右の女性のブラウスの肩の装飾は、３層構造のバーサ衿の続きのように見える。……19 世紀末の女性のブラウスやドレスの袖にはさまざまなスタイルがあり、肩から手首までが大きく膨らんだビショップ・スリーブから、膨らみが肘までのビショップ・スリーブ、小さな羊脚袖、さらには一番上が

ボールのように膨らんでその下はタイトな長袖まで多種多様だったが、どんな袖にもこのケープレットのような肩の飾りが付けられる傾向があった。……この膨らみはウエストラインの下に少し垂れ下がっており、20 世紀の最初の数年に流行った有名なモノ・ボザム（mono-bosom）スタイルの始まりを示している。……当時の女性のシャツブラウスとドレスの多くには、写真の一番年上の女性の服に見られるような、高さがあってぴったりした衿が付いていた。だが、若い方のふたりの女性の服には、適度にアレンジしたリング状の衿が付いている（Joan Severa, p. 539 より引用）。

ブラウスにスカートと言う組み合わせの現代的な感覚の二部式衣装である。

写真 228（1890‐91 年）（p. 479）は、*Georgia Historical Society (SH-4216)* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影者、被写体（奉公人）の服装について、次のように解説している。随時、省略しながら、必要な個所を引用させていただく。

ジョゼフィン・ビーズリー（Josephine Beasley）がエレガントな流行のドレスを着て写っている全身ポートレート。撮影したのはジョージア州サバンナの写真家 J・W・ウィルソン（J. W. Wilson）である。国勢調査の記録によると、ジョゼフィン・ビーズリーはサバンナで働く奉公人で、彼女の夫のエイブラム（Abram）は父親の後を継いで執事を務めていた。この写真は、召使いや労働者や中産階級の下層の家族もちゃんとした身なりがどういうものかを知っており、経済的に豊かではなくともよい服装をしようと努力していたという説を裏付けている。……袖付け位置はまだ肩の先で、袖の一番上の膨らみはおろか、腕を動かしやすくするゆとりがまったくない。1891 年であれば、袖の上の膨らみが見られるはずである。あまりお金に余裕のない女性はとっておきのドレスを 1 年か 2 年は着たものだが、全身の写真を撮る時には一番新しいドレスを身につけたと考えられる。……

写真のツーピースドレスは厚手で濃い色のシルクで作られており、スカートフロントには、両脇のオーバースカートの間に下までステッチが施されたプリーツのタブリエ（tab1ier）のようなアンダー・スカートが見えている。……シルクニットのミット（mit）と、カーブした骨の柄がついた黒いシルクの大きなパラソル（parasol）が、

写真 242　1893 - 96 年
提供：***The Connecticut Historical Society*（882）**, p. 496

この装いの趣向を完璧に仕上げている。ビーズリー夫人の髪は中央でシンプルに分けられ、前髪は 1890 年代の典型的な扱いとは違って短くカットしていない（Joan Severa, p.　479 より引用）。

上記の解説における「この写真は、召使いや労働者や中産階級の下層の家族もちゃんとした身なりがどういうものかを知っており、経済的に豊かではなくともよい服装をしようと努力していたという説を裏付けている。」（Joan Severa, p.　479）というセヴラ女史の見解は重要である。

写真 242 （1893 - 96 年）（p. 496）は、*Connecticut Historical Society*（*882*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この工場で働く従業員の女性たちの服装を、次のように解説している。

> コネチカット州ハートフォードのチャピル・プレーン（Chapil Plane）工場の写真。はなやかさのかけらもない作業場での単調な仕事にもかかわらず、彼女たち従業員は上等のブラウスを着ている。袖カバーで保護さえしていないので、これらのブラウスは１日かせいぜい２日間だけ着たら手洗いするか手動洗濯で洗い、糊をつけ、霧を吹いてアイロンを掛けなければならなかったろう。このような環境でも彼女たちがあくまでファッショナブルなブラウスを着ていたことは、1890 年代における「女性らしく見られたい、きちんとした身なりでいたい」という願望のあらわれを示している。……見た目を重視する姿勢は、この若い女性たちの――全員ではないにせよ――少なくともひとりが、明らかにコルセットをしているという事実によっても裏付けられる（Joan Severa, p. 496 より引用）。

写真 262　1897 年
提供：***Deborah Fontana Cooney*, p. 522**

確かに、ブラウスとスカート言う現代的な二部式衣装ではあるが、コルセットも付けている女性もみられ、決して、機能的な作業着とはいえない。

写真 262（1897 年）(p. 522) は、*Deborah Fontana Cooney* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の撮影時期、撮影の場面、および被写体の服装について、次のように解説している。多少、省略しながら、必要箇所を引用させていただく。

このスタジオ写真は、マクレラン博士がサウス・カロライナ州チャールストンに創設した看護学校の 1897 年の卒業生の記念写真である。流行の袖が付いた制服に糊をきかせて身を包んだ彼女たちはいかにも誇らしげだが、それにはちゃんとした理由がある。当時は黒人が看護教育を受けられる機会は少なかったし、入学を志願するには一般教育を受けて基礎学力を持っていなければならなかったのである。アフリカ系アメリカ人の看護婦の養成は、1890 年代に黒人患者の治療に携わる看護婦を確保するために始められた。この頃には、病気治療や出産のために病院に行くだけの金銭的余裕を持つ黒人が増えていたのだが、多くの医療施設は黒人患者を受け入れようとしなかった。ティンダル（Tindall）によれば、この若い女性たちに産科の看護教育を行ったのは、フィラデルフィアの女子医科大学（Women's Medical College）の卒業生で長老派教会の黒人聖職者の妻だったL・ヒューズ・ブラウン（L. Hughes Brown）だという。…左端はもちろんマクレラン博士である。……身頃には、ウエストフロントが少し下がりはじめた 1890 年代末の傾向があらわれており、ジャケットフロントはアームホールと横の縫い目に付けられている。袖は肘から下がぴったりとフィットし、上の方はやや抑え目に膨らんだ形になっていて、肩幅を強調するように付けられた幅広のショルダーフラウンスがアクセントを付けている。……白い制服は同じではなくそれぞれ少しずつ違い、1890 年代後半にあり得た袖のスタイルがいろいろ揃っている。彼女たちが好んだスタイルは、袖の下部はタイトで、上は極端に高く丸いパフになったも

写真 248　1895 年
提供：***The Atlanta History Center　(4209)***，
p. 504

Plate 17　*Godey's Lady's Book*
A pril 1996
典拠　Accessible Archives

ののようである。（Joan Severa，p. 523 より引用）。

黒人の看護師養成と黒人患者の医療施設への受け入れに関する重要な歴史的文書である。

写真 248　(1895 年)　(p. 504) は、*Atlanta History Center (4209)* の所蔵品である。

セヴラ女史によると「これは、1895 年 8 月 25 日の『アトランタ・コンスティチューション (*Atlanta Constitution*)』紙に載った自転車に関する記事に添えて使われた写真である。」という。服装史上、とても貴重な場面である。そこで、解説を全文、引用させていただく。

> 1890 年代に女性が愛読した定期刊行物と並んで、この新聞も、90 年代半ばには女性がスポーツをする時の服装に大きな関心を寄せていた。……この若いアトランタの

女性はまだ丈の長いスカートをはいているが、長いスカートはこのあと間もなく、アメリカの女性たちが『自転車用の服』と呼んだものに取って代わられることになる。自転車用の服は、丈が少し短めで広がりの大きいスカートの下にズボンを隠してはくのが主流だったが、丈の短いスカートの下に大きく膨れたブルーマーをはいた脚を見せるという、悪評をかこったスタイルもしばしば見られた。写真の羊脚袖のウールのドレスは、1893～95年の外出用ドレスとなんら違わない。身頃の肩幅はこの頃には極端に狭いカットではなくなって少し広がり、袖は襞取りしていくらかしっかりしたハリを出してある。……世紀末を迎えるいくらか前には、サイクリング用にデザインされたコルセットが売り出された。それらの新しいコルセットは股関節の部分が高く裁断されており、また、腕の皮膚が擦りむけないように、張り骨が腕のだいぶ下でカットされていた（Joan Severa, p. 505より引用）。

Plate 17には、次のような解説がつけられている。

このスタイルのスカートは、機械のペダルを吹き飛ばしたり、干渉したりすることはなく、キャッチして危険な落下を引き起こす危険もありません。

最新の自転車スーツの1つは、摩耗を防ぐために、スカートの裏側に革の裏地が付いています。 そのようなスカートのための優れた表面仕上げは強い革です。 アレセントイングリッシュモデルは、分割されたスカートの形をした茶色のツイードで、足の周りに3インチ幅の茶色の革のバンドで仕上げられています。 ポケットフラップ、revere、袖口、ベルトもオフレザーでした（Accessible Archives）。

ヨーロッパでもアメリカでも、時期を同じくして、自転車用衣服が登場している。

アメリカの写真の女性は、スカートの下に、ブルーマーをはいている。Plate 16の女性は、デバイデッド・スカートをはいている。

2. 部位別にみた女性服

(1) 袖

1890年代のドレスの袖の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 458-459）。

1890 年代の写真の撮影時期を推定するうえでウエストにまさる最上の手掛かりは、袖の形とその変化である。一時期は羊脚袖がたいそう好まれ、時には唯一

の選択肢とまで言われたが、実際にはそんなことはなかった。まず、1890 年には上腕部の袖は細いままで、膨らみは肩の高い位置に縦に作られた。写真を見ると、ファッション雑誌でこの袖が紹介されて間もなくから 1891 年を通じて、洗濯のできるコットンのドレスやブラウスにまでこの新しい形の袖が付けられている。1893 年になると、上腕の袖は非常に大きく膨らんで垂れ下がり、肘のあたりで絞って、その先は細いというスタイルになった このスタイルは 1830 年代の流行のリバイバルだと称されたが、肩幅は 1830 年代よりも狭かった。膨らんで垂れ下がった袖は 1893 年から 1894 年の途中まで生き延びたが、1895 年に入る頃には、袖はもっとずっとしっかりしたハリがあって広がりの大きい形になった。そのために、プリーツを取った袖をアームホールに付ける前に、硬いクリノリン（crinoline）または「フィブル・シャモワ（fibre chamois）［セーム革ともいう。鹿や羊など繊維の細い小動物の床革を油なめしによりスエード調に仕上げた革］」という革のような素材で上腕の袖に裏打ちをした。

1896 年以降は、さまざまなスタイルの小ぶりな膨らみを肩から上腕に配置する袖が見られ、それとともにブレテル（bretelles）のいろいろなヴァリエーションをはじめとして肩幅を広く見せる装飾が身頃に付けられるようになった。1897 年になると、一部のスーツとドレスに、上部が少しだけ膨らんでいて他はほとんどまっすぐな袖が見られた。

1898 年頃に最も人気があったのは、長く細い袖の肩先の部分に小さくて丸いボール状の膨らみがあるスタイルだった。ビショップ・スリーブのボリュームは 1890 年代前半にだんだん大きくなり、1896 年頃には、肩と袖口の両方にびっしりとギャザーが入っていた。夏服として好まれた色は白か濃紺だったが、ファッション記事では、赤または白のピケも非常に「粋な」色とみなされた。大きな袖が流行した時代にドレスに用いられたシルクにはさまざまなタイプと色が見られたが、繊細でとりとめのないモチーフや、多色使いのワープ・プリント（経糸捺染）（warp print）で霧のようにかすんだ模様を出した非常に軽い織物や、透ける布地に模様を散らしたものなどが好まれる傾向があった。 シルクでドレスを作り、肘の少し下までの丈のパフスリーブを付ける場合には、袖口をレースあるいは対照的な素材の垂れ下がるフリルで飾ることが流行した。

(2) スカート

1890 年代のスカートの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 461-462）。

1890年代初めに主流だったのは、チューリップを逆さにしたようなベル型で、腰に沿ってなめらかな曲線を描いた後にその下で劇的にフレアーとなって、裾がとても大きく広がっていた。女性たちは、お金をあまりかけずによい身なりをするために、ブラウスとスカートを活用するよう勧められた。『レディーズ・ホーム・ジャーナル』の1891年11月号は、人気のある「フレンチ・スカート」を作るための型紙の縮小図を提供した。フレンチ・スカートというのは、1枚はぎで引き裾スタイルの全円（サーキュラー）に近いスカートで、左右のヒップに3本ずつダーツが入れられ、背側には深いボックスプリーツが取られている。ボックスプリーツ部分のスカート丈は、前部に比べて6インチ［15センチ］ほど長い。この裁断のスカートは、正面では身体の周りにぴったりとフィットして裾がフレアー状に広がり、特に厚手の生地を使うと効果的だと書かれている。これを作るには幅45インチ［114センチ］の布地が必要で、横二つ折りにして裁断したので、少し引き裾にしたければ布地は97インチ［246.5センチ］なくてはならなかった。

もうひとつ別のタイプのスカートもあり、地方新聞のコラムで、ウエスト部分から何枚ものゴア［襠布］を入れたスカートと定義されている。この頃には、外出用のスカートはすべて地面にまったくつかない丈になっており、スカートが床につくのは悪い形だと考えられていた。1898年から世紀末を通して、スカートの装飾はしだいに身頃の装飾の延長として扱われるようになり、カーブを描く引き裾や、ブレードまたはレースのスカラップ飾りを対角線状に配したものが見られるようになった。

この時期に流行したスカートの形はチューリップ形や花瓶形で、最低でもヒップの少し下、たいていは膝のあたりまでは「砂時計」のようにくびれ、そこから裾に向かって急に広がるスタイルであった。普段着のスカートで実際にこのラインに従ったものも一部に存在したが、日常用のシャツブラウスと合わせて着る実用的なスカートは、相変わらず歩きやすいようにヒップから下が広がっていた。 1890年代末頃は、ウエストバンドの周り全体にギャザーを寄せたスカートは、夏用のコットンスカートでさえあまり一般的でなかった。かわりによく見られたのはゴアやパネルやステッチダウンプリーツで、ところどころに縦のプリーツや折り目がウエストから裾まで入っていることが多かった。

(3) 下着

1890 年代のドレスの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。(Joan Severa, pp. 462-464)。

① コルセット

1890 年代は、19 世紀の他のどの時期にも増してコルセットの形が論争の的になった時代だった。1890 年代までに、身体を束縛しないこと、運動すること、新鮮な空気を吸うことが健康につながるという考え方が確立された。本当に高級な婦人服は極端に窮屈に紐で締め上げるコルセットに基づいて作られていた。きつく締めるコルセットを信奉する人々は多数いたが、彼らはなぜコルセットが必要かという論理的な理由を示せず、見た目が好ましいとしか言えなかった。

多くのメーカーはコルセットの代替品を広告した。1890 年 6 月と 8 月には、さまざまな女性誌に、人気ファッション・ライターで運動と服装改革の主導者だった「アニー・ジェンス=ミラー（Annie Jenness-Miller, 1859-?）推奨の」いくつかの代替コルセットの広告が載った。ジェンス=ミラーは、自らもいくつかのコルセットを考案して提案した。たとえば、ボストンのジョージ・フロスト&カンパニーが製造する「最高の代用コルセット（The Best Corset Substitute）」、「妥協的身頃（Compromise Bodice）」、「均衡胴着（The Equipoise Waist）」などである。『デリニエーター』の 1891 年 8 月号には、「女性やメイドや少年や少女や子どもたちに医師が薦める、リースト社（Reast's）の特許取得・元気になるコルセット（Invigorator Corset）」の広告が載っている。 リーストが取った特許には、子ども用コルセットの肩の留め具とストラップに関する新案が含まれていたが、女性用の製品は依然としてウエストを細く絞って曲線を強調する紐締め式のコルセットだった。

あまりにも長い間ファッショナブルなドレスの一部でありつづけてきたコルセットの守りは堅く、身体の自由という概念が前進するための道のりは遠かった。『レディーズ・ホーム・ジャーナル』の 1890 年 1 月号では販促品としてコルセットが使われさえした。『マダム・デモレストの月刊ファッション・ジャーナル（Mme Demorest's Monthly Fashion Journal）』は年間購読料を 50 セントに割り引き、6 か月間のキャンペーンで 50 万個のコルセットが景品として贈られるとした。1893 年にエンパイア・ドレス・スタイル［フランス帝政期を連想させる、ウエストラインが高いスタイル］が一時的に再流行した。 このスタイルは、本来のウエストの 2 インチ［5 センチ］上からバストの下までの間のどこかにウエストラインがあるため、専用コルセットが生産された。 「エンパイア用の短

いコルセットは、（…）現在大流行中のウエスト位置が高いエンパイア・スタイルのドレスだけでなく、ティードレスやギリシャ風ドレス、室内着や普段着、（…）この短いコルセットの下部には、エンパイア・スタイル用のペチコートを取り付けられるよう、適切な間隔でボタンが付いています（『デリニエーター』1893 年 7 月）こうしたスタイルは、普通のものよりさらにきつく締めることができた。

② ペチコート

80 年代の最後までにペチコートもすでに変わっていて、柔らかく、短く、軽いものになり始めていた。流行のフィットしているペチコートは、シルク、キャンブリック、ネインスーク、ローンでシャープに裁断されたもので、重厚に刺繍されたひだはそんなに長くなかった。白いキャンブリックはこのペチコートのために使われ、膝丈でありレースの深いフリルで仕上げられていた。正面はさや状のスカートと同様に窮屈にフィットしていて、各サイドからの広がりを引き起こす構造になっており、後ろ開きでボタンホールがつけられている。1890～1891 年の窮屈なスカートが、1893 年に郷愁を呼び起こす広がったスカートのスタイルになった時、ペチコートにも大きな変化があった。流行の広がりの効果をとりいれるため、ゴアが深くとりつけられ、垂れ下がる充分なひだがつけられ、フレアーがかなり増加するためにギャザーがよせられた。

③ シュミーズ

コルセットの下に着られていたものであるシュミーズは、全体的に姿を消した。シュミーズは、ポンパドュールのネックの輪郭の、袖なしのものがよく着られていた。多くの女性達はシュミーズを着なくなったかわりに、ぴったりとした小さなシルクのベストで、1 枚で暖かく丈の長いものを選んだ。これはすべての色で手にいれられたが、はっきり好まれたのは黒である。

④ ランジェリー

ランジェリーはどぎつく飾りたてられた手法をとられており、小奇麗なスカラップがつけられ、安価な下着のためにもりっぱなレースの装飾がほどこされた。それは、ナイトガウン、シュミーズ、ウールのドロワーズとセットで売られ、シルクウールの下着の組み合わせは代わりにもちいられた。これはコンビネーションやユニオンスーツの傾向であった。

(4) シャツブラウス

1890年代のシャツブラウスの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 456-457）。

テーラースーツは1880年のカタログで時々宣伝されたもので、ジャケット、スカート、ベストからなるものであった。Blooomingdalesは、9つの選択を1886年に提案していて、1890 年までにテーラースーツは、時々ブレザーとスカートの形で頻繁に登場するようになった。それが単独で着られるようになって、シャツブラウスの新しい需要が始まる。1891年までシャツブラウスはスカートだけと、合わせて着られる衣服の別々のアイテムとして、提供された。これは、働く女性にとって大きな利益であり、1つのスカートに合わせてシャツブラウスを変えて、衣服にたくさんの変化をもたらすことができた。

シャツブラウスは夏の衣料として主にもちいられてきたが、すべての季節において、一般的に用いられるようになった。あらいる機会において女性はシャツブラウスを採用し、日常着としても多く用いた。ショッピングや昼着、そして、非公式のイブニングドレスにでさえも用いるようになった。当時の様子を裏付けるものとして、“シャツブラウスは、家の周りに出歩く時、私達若い女性のきちんとした美しい外観とおおいに関係がある。古い化粧着のかわりに既製のシルクのブラウスは驚くほど低価格で売られている。”と1895年のJoan Siville Weekly Gazetteに書かれている。既製服は実際、働く女性が最新のトレンドについていくことを可能にしていたし,90年代の女性の衣服の選択はひろがっていた。シャツブラウスは、ドレス胴着の全ての新しいファッションの要素を取り入れていた。シャツブラウスのスタイルは度々変化し、素材は綿や、織物、シルクなどで、色は暗いトーンのものから、ストライププリントや、模様をプリントしたものまであった。ディナードレス用にもシャツブラウスが利用されることもあり、それは柔らかく作られ、黒いシルククレープ、またはサテンで作られた。1890年代のシャツブラウスのきわだった特徴は、胴着の肩の裁断が極端に狭いことと、大きくした袖に密なプリーツがあり、1890年代に変化した袖をとりいれている。そして、前身頃にいくらかの膨らみがあり、後ろ身頃は前身頃よりもたいてい短く、背中でフィットしていた。背中でぴったりとフィットさせるため、しばしば前で結ぶためのテープがついていた。綿で作られたものは、前の膨らみは一般にプリーツによって調節され、柔らかい生地のものは、パフやギャザーがつけられた。衿はたいてい高くて堅く、まっすぐであった。

(5) ラップ

1890 年代のラップの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 464-465）。

1890～1892 年のスーツやドレスの袖は窮屈で、肩の先でかなり膨らんでいたために、同じ手法でデザインされたコートスリーブがよくフィットしていた。ジャケットの袖は 1890 年までに、肩の高いパフが顕著になり始めて、腕から円錐にあがった。ショートコートとジャケットは 90 年代初めの二年間人気があった。それらはヒップの上でフィットしていて、刺繍や表面に装飾がほどこされ、多くはファーが取り付けられた。ファージャケットは 80 年代から人気を保っていた。1890 年 The Ladies' Home Journal は、“スレンダーな若い女性達のために、高い立ち衿の Valois カラーと合わせた、簡素でエレガントにフィットしたキュイラスは、真冬に着るのにこの上なく美しい。”と宣伝している。またこれには、長いコートのユグノースタイルは、地面に垂れ下がっている袖と毛むくじゃらのファーや、綿毛のような装飾のあるものがエレガントとされていた。ロングクロークの黒いものや、ショットベルベット、プラッシュ、velour de nord も広告され、高い立ち衿の Medici カラーは特徴的とされていた。ファーに使われた色と素材は、Isabelle ベア、と黒に茶、シルバーで、黒きつねやくろつばめ、オオヤマネコである。巨大な袖以前には、ロングコートが支配していて、窮屈であった。これは、close-rig スタイルとよばれ、princess Redingote が長くフィットした形で見られ、いくつかはファーの袖と、Castor、ビーバー、アザラシ、アストラカン（子羊の毛皮）とチンチラのようにきつく刈られたファーの飾りをともなっている。アストラカンの素材で作られた高く立った形で、深い正面のポイントでダブルで留められたロシアンカラーはよく見られた。ケープとコートのすべての丈は長く、簡素な円形のクロークは、最も人気の腰丈のケープに勝った。しかし 90 年代後半に広がった袖はきついコートとジャケットにスタイリッシュでなく、動きを与えたケープはそれらの人気にとってかわった。

90 年代、女性達は、外套を多くのカタログから入手することができ、デパート店においても多くの選択肢があった。手工業者が問屋や小売店を通さず、直接販売する例もあったようである。水を通さない素材の、ケープやマントも存在していたが、完璧なものはなかった。“防水の服は高価であり、安価なものは質がよくない。私はかわりにアルスターをもちいる。とても寒い日は、シャモアのジャケットを着る。” といわれていた。

1 世紀以上立派な服装の女性に愛用されたショールは、1890 年代までに完全にすたれてしまった。

(6) アクセサリー

1890 年代のアクセサリーの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 468-469）。

90 年代のアクセサリーの中から、レースのピンが姿をけしてしまった。90 年代にはハート型が、あらゆるジュエリーのなかで顕著に見られ、その他にも多くの型が登場している。ゴルフボールとスティックのミニチュアで、chain-and-padlock のブレスレットは、キューピットの弓と矢の愛の象徴として人気があった。婚約指輪にはダイヤモンドが好まれ、イヤリングは小さくて、ぴったりとしたものが好まれた。

かつての懐中時計の鎖は、90 年代あまり使われなくなった。鎖のかわりに、安全に手の込んだピンで、胴着に優雅で小さな懐中時計を留め付けた。サイクリングブームの到来によって、手首に時計を巻きつけるという現代の方式がもたらされた。腕時計は 90 年代半ば以降、広告でますます登場した。

日焼けした肌が嫌われたため、日傘はなお重要な装飾品とされた。黒か暗めの色のシルク製サージ、あるいは、散歩着とマッチした色合いの日傘をファッショナブルな少女達は持っていて、それには精巧にカーブした木製の取っ手がついている。シルクの服に合わせてシルクの日傘を持つのが、格子柄の服には、格子柄の傘をもつのが良い趣味であったようだ。黒と白のチェッカー盤の格子柄は、ほとんどの衣服と合わせられるので、実用的な日傘として良く、午後の装いに海水浴場で女性は薄織りで、絹製の優雅な傘を携行した。これには裏地はなく、ひだ飾りやシャーリング、房飾りで装飾されている。

扇子は 90 年代注目の対象であった。Watteau（仏の画家）の影響と、色の円形模様を差し込んだアンティークパターンのレース製の Watteau の扇子は、非常に価値がある。1896 年、Godey's には「日本の黒と金の扇子は、どんな場合にも適している。」と書かれていた。

手袋は 90 年代にとても重要であって、脇があいたもの、またボタンなしのサックの手袋は、90 年代の間テーラースーツと喪服に合わせてつけられた。自然ななめし革のものは、いまだ日中使用するのに、好まれ、様々なボタン数の長く白いキッド製の手袋は、ディナー用やイブニングドレス用にふさわしかった。

多くの種類の衿巻きは、1890 年代のファッションで特徴づけられたものである。この時代のボアは短く、首の周りにリボンで結ばれ、時折のイブニングドレスに合わせた白か黒が一般的であり、刈り取ったヒヨコの羽製であった。フィーシュー（三角形の肩掛け）は、古いケープのように、いくらか形を変えて形づくられていたものであった。「フィシューは、時代おくれになったような衣服に新鮮味を与えてくれるという経済的役割を担ったものであったが、優雅な装い方をしていないフィシューは、少しも魅力的ではない。」と Godey's は、1896 年に書いている。これは、柔らかい素材の薄いシフォンか、絹モスリン製のものが、レースのフリルなどで、縁取られているものが最も良いとされた。

(7) 帽子

1890 年代の帽子の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 469-470）。

柔らかで短い前髪と頭のてっぺんでまとめ髪にしたスタイルは、90 年代の特徴的スタイルであった。とりわけ流行の衣服を着るために、髪は頭のてっぺんの高い位置に結ばれていたようで、ボンネットは前頭部にかけてかぶられるのが良いとされていた。てっぺんが円錐状の形で、その上に流行のターバンが巻き上がっており、幅の広いブリムがクラウンから出ているスパニッシュハットや、ボレロのフェルト製のものが、若い女性に似つかわしいものであった。そして、ベルベットの花飾りをあしらったボンネットをかぶることによって、女性達は流行で上品な衣服を着ている、と感じることができた。

96 年までに前髪がなくなり、長い髪は中央分け目からこめかみにそったウェーブになでつけられた形になった。ボンネットは後ろのカーテンがなくなり、前と側面につばがついたものになったため、1890 年代のハットとボンネットを区別して言及することは難しい。圧倒的に多かったのは、好まれた装飾であるしわのあるサテンと、オーストリッチの羽付きで、細くて高さのあるものである。同時に粋な麦わら帽子は、スポーティな夏服のために、90 年代を通して好まれていた。1893 年、非常につばの広い帽子には、しわにした布地と、羽飾りか花と組み合わせて、つばの正面中央に固定された。1890 年代半ばまでの帽子はかなり丈夫であり、しわにしたリボン、ベルベットと綿の花、そして羽飾りでたっぷりと装飾された。これらは、卵を抱いためんどり（settin'hens）と呼ばれた。額の低いところでフィットしたトーク型は、貴婦人スタイルで人気があり、染められカールしたオーストリッチの羽のみで飾られたフェルトのつばつきで、多くの型があった。

(8) はきもの

1890 年代のはきものの特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa， p. 471）。

1890 年代の女性のファッショナブルな靴やブーツは、しだいに先が尖っていった。90 年代半ばに好まれたドレッシーなウォーキングブーツは、足首より上でひもを結び、いくぶん高いヒールにカーブしたかかとに、尖ったつま先であった。1896 年 *Godey's* で、1 足 3 ドルで広告された pingree shoe は約 1．5 インチ内側に入ったヒールと、長く先の尖ったつま先で、柔らかい舌皮と幅広のひもがついていた。色は黒に限らずシャンパン色、ブロンズ、茶が広告されていた。ドレスブーツは多くはボタン留めされた。ドレス用のローカ

ットの高いヒールの靴は、いろんなスタイルで流行した。黒い靴とストッキングはたいていの衣裳と合わせても上品だ、といわれた。

第４章　庶民男性の服装

1890 年代の男性服の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく。（Joan Severa, pp. 471-472）。

1890 年代の一般の男性は、大量生産で作られた衣服を着ていた。それは、この時代の男性の衣服は、通信販売を含んだ多くの販売代理店から標準化されたスタイルやサイズで、全て入手でき比較的安かったためである。Wisconsin, Janesville の Zeigler は 1894 年 1 月、Janesville Weekly Gazette の中でシングルのサックスーツ、サックかバイアス裁ちのビジネススーツ、そしてダブルのサックコートをそれぞれ 7 ドルで、そして Sacks &Cutaway in Corkscrew, clay&Cheviot のドレススーツを 15 ドルで広告した。

この時代理想的だったのは窮屈にも見えるスタイルだった。もっとも至る所で、着用されるスタイルのサックコートは、とても短く細い袖でぴったりとフィットしたものがついていて、極端な細いラペルのあるもので、前の下端部で丸くされている。窮屈な印象に加えて、とりわけ正装用ではコートの一番上まで完全にボタンをかけるのが習慣であった。その他のコートであるモーニングコートや、フロックコートも同様にぴったりと作られていた。普段着では、暗い色のジャケットと合わせて明るい色のズボンを着用する習慣が続いていた。スリーピースの黒いウールのサックスーツは疑いなく、最も一般的な服装における流行であった。1890 年までにこのスーツは、安い素材だけでなく高価なものも作られ、さらにビジネススーツの選択肢となった。90 年代のサックジャケットでとりわけドレッシーなものは、裏付きで、安いスーツのいくつかは、ストライプか格子縞や明るいツィード製であった。黒は男性服において至るところに存在していた。

ズボンもまたぴったりとした筒状で、足に細くフィットして作られた。裾広がりの傾向はなくなり、靴の上より少し短めであった。普通の男性の写真はほとんど細い足の折り目のない黒いウールのズボンがはかれたものである。

広告でドレスシャツは白地に色付きのストライプを特集されていたが、白いシャツが、写真で見ると普及しているように見える。シャツは流行のジャケットの下にフィットするように、高いアームホールに細い袖付きで、体にぴったりとフィットして作られていた。シャツの衿は一様に小さく、堅く、バンド状で作られ小さく先が尖っている。多くはセパレート型の衿で、リネンや綿で作られ、ボタンホールでシャツの衿をしっかりとめられるようになったものであった。カフスは板のようなかたさで作られ、コートの袖口から下にかなりでていた。

仕事場での男性の衣服は、写真によるとたいてい簡素な青いキャンブレーで明るい色の仕事着用のシャツか、衿なしで、袖口をまくりあげた普通の白いシャツのどちらかである。格子縞の綿か、ただの綿、またウールのフランネルのシャツは、寒い日の仕事着として、広告された。ベストは、仕事着用のシャツの上に着用され、たいてい古い黒で、多くの場合長く細いネクタイがつけられている。仕事中の男性服のなかに、セーターが現れ、それはVネックのミリタリー、プルオーバーのジャージから、カーディガンスタイルのコートのセーターまであげられる。農民や労働者のほとんどの写真はひかえめな衣服で、黒ズボン、ベスト、サックコートは、仕事のために使われた。働く男性のワードローブに加えられるもので、1890年代一般的なものが、胸当て付きのオーバーオールである。普段の服装の上に着られた。

スーツと着用されたネクタイは、長く細い黒か模様の絹製のもので、シンプルな結び方をされ、端を残して垂らされた。チョウネクタイが仕事着のなかでも一般にみられた。 帽子で1890年代人気を得たのは、堅くした山高帽で、仕事場の写真でも見られた。グレイか黒の柔らかいフェルト製の縁の垂れたソフト帽も一般的であったようである。

髪型は、短いヘアー・スタイルであって、ほとんどサイドをそり落とし、えりあしを刈り上げた髪型である。前髪は真中で分けられ油がぬられた。そして、セイウチ髭スタイルが多く見られる。

以下において、男性服が写った写真を２枚、紹介・考察する。

写真246 （1895年頃） （p. 502）は、 *Chester Kinder Family* の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の背景情報について述べたうえで、被写体の服装を解説している。

写真 246　　1895 年頃
提供：***The Chester Kinder Family***, p. 502

エフィーとアロンゾのキンダー夫妻（Effie and Alonzo Kinder）は、ウィスコンシン州南部のボスコベル（Boscobel）という小さな町の北西約5マイル［8キロメートル］のメイプル・リッジ（Maple Ridge）に土地を借りて農場を営んでいた若夫婦である。……写真撮影のために彼女が着ている素敵な外出用ドレスは黒のウール製で、プリーツを取って形づくられた最新の巨大な袖がついている。……ベルベットのハイネックの衿の正面には棒状の飾りピンが留められ、良いアクセントになっている。ボタン留めされた身頃は流行のコルセットの上でぴったりとフィットしており、スカートは当時よく見られたトランペット型にゴアが入っている。エフィーの地味な髪型は、忙しい若い母親の現実的な選択と、彼女が少女だった頃に流行っていた小さく巻いた前髪へのノスタルジックな愛着が組み合わさったものと言えるだろう（5章の 1880 年代の写真 192 に、子ども時代の彼女が写っている。本書, p. 293）。……黒いシャツの首もとに締めたネクタイは、明るい色で幅が広い柔らかなシルクを蝶結びにしたものである。コートの前は斜めにカットされていて、ベストの正面の下方で金の時計鎖がループを描いている。……前立ての両側と広い衿のまわりにフリルがあしらわれた格子柄のコットンシャツに、白いリボンのボウタイを合わせている。ズボンは短く、きれいに磨かれた足首丈のブーツの上に黒いストッキングが見えている（Joan Severa, p. 502 より引用）。

決して裕福ではない家族だが、家族ともども流行の衣服をきちんと身に着けている。ガラス・プレート・ネガティヴの写真 264（1897 - 1900 年）（p. 525）は、*The State Historical Society of Wisconsin （WHi ［V22/D］ 1398）*の所蔵品である。

写真 264　ガラス・プレート・ネガティヴ
1897 - 1900 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin* (*WHi* 〔*V22/D*〕 *1398*）, p. 525**

セヴラ女史は、この写真の背景情報について述べたうえで、被写体の服装を解説している。

この男たちは、ブラック・リバー・フォールズに丸太材の筏を係留して陸に上がった後すぐにチャールズ・ヴァン・シャイクのスタジオにやってきたか、あるいは呼び止められて入り、その場でこの写真を撮影したように見える。後列左の立っている男性はよくあるスタイルのストレートカットのウールのジャケット（色はおそらく濃紺）を着て、金属のボタンを留めている。３人はソフトなフェルト帽をかぶっているが、どれも長く使っているのでそれぞれに形が違っている。彼らは靴底の滑り止めを付けておらず、ごく普通の、どちらかといえば靴底が薄いブーツを履いている（Joan Severa, p. 525 より引用）。

庶民男性の普通の日常着が着られている。

第５章　子ども服

1890 年代の子ども服の特徴について、セヴラ女史の見解を要約・紹介させていただく（Joan Severa, pp. 471–472）。

子ども達のフロックコートは 8 歳の時点で、ひざにそって、2, 3 センチに達しているべきで、12 歳まで年を増すごとに、足首までの長さに達するべきだと考えられていた。暗いか、または、対照的色合いのベルベットのスパニッシュジャケットは、飾りがつけられ小さなボタンがつけられた。簡素なカシミアのフロックは、ハイネックで、ヨークからウエストにシャーリングがあった。 ビッショップスリーブは手首でシャーリングがほどこされ、ギンガムドレスは英国ヨークや、ハンバーグ刺繍がほどこされ、ビショップスリーブと同じくギャザーをいれたカフスで作られた。Nassue は少年の普段着で最も人気のあるスーツで、前面が四角く、黒のフロッグまたは組みひもがついたジャケットである。長いズボンと、セーラージャケット、キャップを合わせたブルーのミドルスーツが見られ、ハイランドスーツはスコットランドと同じ装い方が、人気であった。 これは、タータンのキルトと簡素なジャケットで、タータンは肩を横切らせ、大きな cairngorm で、固定されていた。 Lord Fanuntlerroy スーツが着られていて、洗えるシャツブラウスと飾り帯をあわせると、これよりかわいらしいスタイルをできるものはない。タキシードドレスは、ジャケットのかわりに、短いサックコートがあったという点において、Eton の正式スタイルと違っている。1890 年代を通じて子どものファッッションは変化した。 大人のためほど用意はできていないが、少女の袖の変化は同様に起こってくる。

写真 253　ガラス・プレート・ネガティヴ
1896. 7 .26
提供：***The Museum of New Mexico（77440）***，
p. 511

常に少年・少女も、足首丈の黒い靴をはいていたが、少女達に好まれたドレスシューズは、つま先が丸く、１本のストラップのついた黒のエナメル皮の Mary Jane であった。ドレスと帽子は、大人の流行と同じスタイルを追っていたが、広くて平らな長いリボンのついた暗い麦わらのセーラー帽をかぶっていた。少女用は、非常に大人びたスタイルであったが、飾りは簡素で、たびたび驚くほど大きく豊富にリボンが施された。

以下において、子どもが写った写真を３枚、紹介・考察する。

ガラス・プレート・ネガティヴの写真 253 （ 1896 年 7 月 26 日）（p. 511）は、*Museum of New Mexico*（*77440*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、次のようにこの写真を解説している。子どものドレスの袖のスタイルを注目したい。

ニューメキシコの若い女性が写真に連ねた文字は、求婚者からの手紙を読んでいるつもりになって書き付けられたもので、「彼は私を愛していると言うけれど、そんなの信じられないわ。1896 年 6 月 26 日」とある。写っているドレスには、1896 年の女性用と女児用のドレスでこのうえなく重要だった袖の取り扱いが見てとれる。……

最もはっきり写っているのは右の子どものドレスで、明るい色（おそらくクリーム色）の地に小さな水玉を散らしたシャリ織（challis）か柔らかいコットンで、サテンと薄手のレースで縁どられた幅の広いバーサ（berthe）衿が水平に広がって、羊脚袖の上にかぶさっている。ネックラインは広いレースのフリルで飾られ、身頃の正面には小さなボタンが並んでいる。リボンベルトの正面にはロゼットがあしらわれている。

写真244　1894 - 96年
提供：***The Wilmette Historical Museum*（471）**, p. 498

年下の少女よりシンプルで、衿はセーラーカラーでウエストの処理も簡素であるが、袖は右の少女と同じものが付いている。……首には金の鎖に小さな金のハートを下げたネックレスをしていて、ペチコート（petticoat）の端は幅のある白いレースで飾られている。袖口には細かいフリルが見える（Joan Severa, p. 511より引用）。

写真244（1894 - 96年）（p. 498）は、*Wilmette Historical Museum*（*471*）の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の背景情報と被写体ひとりひとりの服装について解説している。

イリノイ州ウィルメット（Wilmette）の小学校のクラス写真。かなり裕福な家庭の子どもたちだと思われる。というのも、当時のウィルメットはシカゴ郊外の富裕層の住む地域だったからである。しかし、現代の視線で見ると、他の写真に写っているそれほど生活が豊かではない少年少女のドレスとこの子たちのドレスの間に、さほどの違いはない。……この写真の生徒たちのドレスには、大人のドレスで流行っていた大きく膨らんだ袖の幅広いヴァリエーションが反映されている。

前列中央、明るい色のスカートとチュニック（tunic）を着て両手を腰にあてて立っている少女の袖は最も大仰で、袖山にびっしりプリーツを取って高いアームホールに縫い付けるという1890年代中頃のファッションである。この袖の大きさに匹敵するのは、最後列左寄りの帽子をかぶった少女の明るい色のドレスの袖だけである。……そのヴァリエーションは、パフが立ち上がったシンプルな形や、上腕部分がほんの少し膨らんだものから、小ぶりなジゴ袖（gigot）までいろいろである。……

写真 250　ガラス・プレート・ネガティヴ
1895 - 1900 年
提供：***The State Historical Society of Wisconsin***
（Whi［X3］41553）, p. 508

身頃の形も多様で、ブレテル（bretelles）を付けて仕立てたもの（前列の背の高い少女）もあれば、ヨークを使ったもの、パフを付けたもの、ギャザーを寄せたもの、さらには飾り気のないプレーンなものまでが見られる。後列左から２番目の少女の服だけは、ウエストラインが少し長いように見え、ヒップの周りに柔らかい襞が見えるが、これは広いリボンサッシュを巻いているためである。どのドレスも衿は高いバンドカラーで、ウエストラインはすべて自然なウエストの高さに取られている（Joan Severa, p. 498 より引用）。

セヴラ女史も述べているように、この写真の生徒たちのドレスには、大人のドレスで流行っていた大きく膨らんだ袖の幅広いヴァリエーションが反映されている。

ガラス・プレート・ネガティヴの写真 250　（1895 - 1900 年）（p. 508）は、*The State Historical Society of Wisconsin（Whi　［X3］　41553）*の所蔵品である。

セヴラ女史は、この写真の背景情報と被写体ひとりひとりの服装について解説している。

ウィスコンシン州アルマ（Alma）の写真家ガーハート・ゲセル（Gerhart Gesel）は、町で見かける「絵になる」ものにはなんでも引き付けられるたちだった。だから、古風な服を着たこの少女たちに自分の狙いどおりのポーズを取ってもらったことは、間違いなく彼にとって喜びだったろう。少女たちのドレスにはとても大きく膨らんだビショップ・スリーブが付いている。この形の袖は 1895 年以前には見られず、その後は 1890 年代を通じて子ども服に用いられ続けた。……ふたりのピナフォーは形が

ほぼ同じで、生地と、ギャザーの入ったスリーブキャップ（sleeve caps）［袖の付け根の上に付けられたキャップ］（別名ジョッキーjockey）のフレアーのかさだけが異なっている。この種のピナフォーは背中で上から下まで留めて着るもので、丈はドレスの裾くらいまであった。…… 日よけのボンネット（bonnet）［婦人用帽子の１タイプ］もやはり似た形で、違いといえば色の濃い方がネックカーテン（neck curtain, 別名「バボレ（bavolet）」）が長く、そこに結び紐を回して後ろで結んでいることくらいである。姉妹なのか友達なのかはわからないが、小さな女の子ふたりの普段着の仕上げは、黒いストッキングと、踵が平らで側面をボタン留めした足首丈の靴である。

バタリック（Butterick）社の1899年夏の型紙カタログには、この子たちの服とよく似たデザインの型紙がたくさん載っている。やはり膨らんだ袖のデザインに婦人服の影響が見られる。母親は、バタリック（Butterick）社の型紙を通信販売で購入して、子ども服を手作りしていたのであろう（Joan Severa, p. 508より引用）。

第3-5章〔注〕

洋書

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*, The Kent State University, Press （October 27, 1995）

第6章　まとめ

1890年代は、1880年代に流行したバッスル衣裳から現代衣裳に近いものへと変わっていき、衣服の歴史を語る上で重要な過渡期である。この時代に既製服に対する需要が一般化し始め、女性の衣服に大きな変化をもたらし、衣服の価値観も変わった。装飾の凝った衣服からよりシンプルな形へ移行していくのである。ライフスタイルの変化が確実におこり、1人がたくさんの衣服とその種類を持つことが経済面からも可能になった。ファッションの発信源としてパリはいまだ強い影響を与えるものではあったが、腰を細く締める傾向は、アメリカではこの時代においてはあまり見られなかった。

しかしながら、家庭は依然として生産の場であり、消費の場へと移行してしまったわけではない。大量生産により、安価な既製服が市場に出回っていたが、多くの主婦はパターンとミシンを駆使して、家庭裁縫によって、より最新の衣服を手に入れ、節約して暮らした。

女性が社会に出て、仕事に従事したり、スポーツを楽しんだり、自転車に乗ったりするようになると、簡素で、機能的な衣服に対する大きな要求が出てきたのである。そこで、登場したのが、新しいアイテムのシャツブラウスである。このブラウスはあまりフィットしなくてもよかったため、家庭で容易に作ることができ、既製服を買う必要はなかったようである。

セパレートのスカートも家庭で容易に縫うことができ、綿の家庭着や化粧着やマザーハバードも家庭で、一日で、作ることができたようである。こうして、19世紀末のアメリカの主婦は、一方で節約して、他方で、既製服を買い求める、という合理的な暮らしをしていた。女性用のオーダー・メイドのスーツは紳士服の仕立て師によって作られた。

労働に携わる女性は、写真 247（看護婦）、写真 242（工場の女子労働者）、写真 262（黒人の看護婦）に見られる。写真 248 には、自転車に乗ろうとする女性が見られる。これらの写真についてのセヴラ女史の解説は、衣服と労働、衣服とスポーツという視点から、実に明快で、含蓄がある。

本章では、大量生産・大量消費社会に向かう、1890 年代の過渡期の様相が、中流階級から下層階級の人々が写った 52 枚の写真に実にリアルに、興味深く映し出されている。やがて訪れる 20 世紀を予測しながら、一枚一枚の貴重な写真から、アメリカ服飾社会史を読み解いて行くのは、限りなく奥深く、楽しいものである。

用語解説

アームホール（armscye）—　セット・イン・スリーブを縫い付ける部分の、身頃の丸い袖ぐり。

アメリカン・コスチューム（American Costume）—　1850年代に全米ドレス改革協会によって採用された女性の服装を指す言葉のひとつ。その時々の流行のスタイルのドレスのスカート丈を短くし、その下にズボンを着用した。「アメリカン・ドレス」「ブルーマー（bloomer）」「改革派ドレス（reform dress）」、「トルコ風衣裳（Turkish costume）」とも呼ばれた。

アルパカ（alpaca）—　コットンとアルパカの毛で作られた、薄いが丈夫な生地。布の表面は硬くて、光沢がある。

アンガージャント（engageant）—　（仏）字義通りには「人をひきつける」あるいは「魅力的な」という意味だが、1840年代末から1850年代にかけては、特にドレスの袖の下に取り付けて袖から出ている部分の腕を覆うための白いコットンのアンダースリーブを指した。

イギリス刺繍（brodérie d'Anglaise）—　（仏）フランス語の直訳は「イギリスの刺繍」で、白地に白糸で刺繍する技術。ボタンホール・スティッチでかがられた小さな穴があるデザインが特徴。白糸刺繍（whitework）とも。

エプロン（tablier）—　（仏）「エプロン」を意味するフランス語だが、ファッションにおいてはスカート前部のエプロンの形をした装飾的な部分を指す。

エポーレット、肩章（epaulettes）—　（仏）〈女性〉1840年代から1850年代にかけてアームホールに取り付けられたオーバースリーブのキャップをこう呼んだ。これを付けると、たいていの場合見た目の肩幅が広く見えた。〈男性〉士官の軍服の肩に付けられた、ブレードやフリンジで飾ったタブ。

カサック（casaque）—　（仏）身頃の上から下までがひと続きに裁断され、ウエストに継ぎ目がなく、オーバースカートのフロント部分が開いており、縦の縫目だけで作られた、丈が長く身体にフィットした上衣。

カートリッジ・プリーツ（cartridge pleats）—　寸法を測って作られた、同じ大きさの小さい襞が並ぶプリーツ。カートリッジ・プリーツし部分の上端近くに、直接、平行に２本以上のぐし縫いをした後、その糸を引いて小さな丸いプリーツを作る。縫い針の根元（尖っていない方）でプリーツとプリーツの間を整えて

折り目を真っ直ぐにすると、特徴的な「弾薬帯（カートリッジ・ベルト）」のような見た目が作り出される。「ゲージング（gauging）［同じ寸法にしたプリーツ］」や「ストロークト・ギャザー（stroked gathers）［整えられたギャザー］」とも呼ばれる。

ガセット、マチ（gusset）— 三角形、菱形、先細り形、あるいはその他の特殊な形をした布片で、衣服の縫目の力のかかる部位に挿入して、その部分を丈夫にしたり、ゆとりを持たせたりする。

ガリバルディ（Garibaldi）— イタリアの愛国者、ジュゼッペ・ガリバルディにちなんで名付けられたシャツ。1850 年代にガリバルディの部下の義勇兵たちが、制服の一部として赤いウール製で長くたっぷりした袖が付いたシャツを着ていたことから。1860 年代に女性や子どもが着たガリバルディ・シャツは、赤または黒のウールや白いコットンで作られていた。

キャラコ（calico）— プリント柄の平織のコットン地。キャラコの名はインドのカルカッタ（Calcutta、現コルカタ）に由来し、この種の布地がインド東部に起源をもつことを示す。

ギンガム（gingham）— 先染め糸を用いた洗濯できるコットン生地。無地、チェック、ストライプ、または格子縞に織られているが、チェックのものが最も有名。

クイラス（cuirasse）—（仏）もともとは胴鎧の意で、鎧のうち胴と臀部の上をぴったりと覆う部分を指す。ファッションにおいては、胴鎧と同じようにフィットした 1870 年代のドレススタイルを指す。

クエーカー（quaker）— 鍔が非常に深い、麦藁製または布製の丈夫なボンネット。既製品として売られたものは、暗い色と明るい色の麦藁を混ぜて、美しく編み上げてあった。

クリノリン（crinoline）—（仏）大きく広がった硬いペチコート（後のフープ）を指す総称。1850 年代初めのペチコートが馬の毛（クリン）を用いてハリを出したことに由来する。1850 年代中頃までに、スカートの膨らみを支えるための鯨髭や籐や鋼鉄を用いたフープ形状のあらゆる腰枠をクリノリンと呼ぶようになった。

クレープ（crape / crèpe）—（仏）表面が縮緬状、またはさざ波状になった平織の布地。

ゲイター（gaiter）— ①女性と少女向けのくるぶし丈のブーツ。通常は布製で、爪先とヒールには光沢のある革が使われる。②1890 年代には、靴やブーツの上に巻きつけて足とくるぶしを覆う布を指した［日本語で「ゲートル」というのはこちらの意味］。

皇后（impératrice）—（仏）1850年代と1860年代に、当時のフランス皇后ウジェニーとそのスタイルをこう呼んだ（例えば、「皇后風（a l'impératrice）の髪型」など）。

コートスリーブ（coatsleeve）— 男性用のコートに由来する袖のスタイル。1860年代から1870年代にかけて、女性のドレスに付けられた。2枚の布を縫い合わせて作られた袖で、どちらのピースも肘の部分がカーブしており、腕の内側にくるピースの方が、幅が狭い。

コルセット（corset）— 身体の上半身を支えて、形を整え、締め付けるための下着。「ステイ（stay）」とも呼ばれた。

コルサージュ（corsage）—（仏）ドレスの身頃の前部、とくにネックラインを指す。

コルセットカバー（corset cover）— 身頃のラインをやわらかくする目的で、コルセットの上から着用するようにデザインされた、コットンまたはシルク製の、丈の短い身体にフィットした下着。

コンデ（condé）—（仏）1860年代に、「コンデ公風の袖（sleeves a la condé）」という袖の形状を指して使われた用語。長袖で、腕に添い、肘付き。コートスリーブが変形してできた袖で、腕の内側と外側の2枚のピースから成っている。

コンビネーション（combination）— シュミーズまたはコルセットカバーとドロワーズをウエストでつなげたような、上下つなぎの下着。「ユニオンスーツ（union suit）」とも呼ばれた。

サック（sack / sacque）—（仏）比較的ゆったりした長袖の裏なしジャケット。通例、女性のファッションの記述にはフランス語 sacque が用いられ、男性用には sack の綴りの方が好まれた。

シミー（shimmy）— シュミーズ（chemise）を参照。

シャーリング（shirring）— 布にパフ（puff）を作る方法のひとつ。布地にシャーリングを入れるには、平行に何列かランニング・ステッチをして、その糸を引っ張る。

シャリ織（challis）—（仏）シルクや梳毛ウールのソフトな平織で、無地またはプリント柄の織物。1832年にイングランドのノリッジで織り始められた。

シュミゼット（chemisette）—（仏）白の袖なしの上半身用下着で、簡素なものも装飾的なものもある。首まわりと肩と胸部を覆い、ドレスのネックラインの上にのぞかせるために着用される。他に、「バーサ（bertha / berthe）」、「ギンプ（gimp / guimpe）」、「スペンサー（spencer）」、「アンダーハンカチーフ（underhandkerchief）」といった名でも呼ばれた。

シュミーズ（chemise）— （仏）コットンまたはリンネルで作られた、膝くらいまでの丈のゆったりした下着で、短い袖が付いている。コルセットの下に着用された。

ショール（shawl）— 形は問わず、平らなラップ（外衣）を指した。たたんで身体に巻いたり、はおったりした。

ショールカラー（shawl collar）— 刻みのないへちま衿。

しろ白糸刺繍（whitework）— イギリス刺繍（broderie d'Anglaise）参照。

ジゴ袖、羊脚袖（gigot sleeve）— （仏）羊の脚のような形をした袖。

地の色が残っている部分（reserves）— 染めた布のなかで、防染剤を塗ったことで染料に染まらずに地の色が残った部分。

ジュプ（jupe）— （仏）スカート。

ジュポン（jupon）— （仏）アンダー・スカート

スイス・ウエスト（Swiss waist）— 幅の広いベルトで、ウエストの正面部分が上と下に向かって山形に尖っており、色はたいてい黒。時にはウエストの正面で編み上げ式に紐で結ぶものもあった。1860年代に、スカートとブラウスを着る際に締めるベルトとして人気があり、1890年代にもリバイバルした。スイス・ベルト（Swiss belt）と呼ぶこともあった。

スモック（smock）— 〈男性〉コットンやリンネルやウール製の、洗濯ができるゆったりとした衣服。見た目は丈の長い長袖シャツのようであり、労働着として他の衣服の上に着るために作られた。1860年代以降は、あまり一般的には見られなくなる。

スライド（slide）— 装身具の鎖（特に懐中時計の鎖など）の付属金具で、鎖の両端をこの金具に通してスライドさせることで、鎖のループを好みの長さに調節できる。

ズアーブ・ジャケット（zouave jacket）— （仏）丈の短い、ゆったりした、背中の縫い目がないジャケット。袖は長袖あるいは肘の下までの丈で、前身頃の裾は円くカットされ、前のあきは一番上だけに留め具（フロッグ（frog））があって、それで留めた。通常は軍服と同様のブレードで縁取りされた。フランスのエリートの騎兵隊が着ていた軍服を1850年代にアメリカの騎兵隊が採り入れ、1860年代には女性や幼い男の子によって着用されるに至った。

ズボン（trousers, trowsers）— 長ズボン。trowsersという綴りは「English（イングリッシュ）」と呼ばれ、通例、男の子のズボンや幼い女の子のパンタレッツ（pantalettes）を指す時に使われた［このEnglishが「英語風」の意味なのか「イギリス風」の意味なのかは不明］。

タッキング（tacking）― ２枚重ねた布地を縫い合わせる際に用いる、ゆるいステッチの一種。ふつう、布の裏側には長い縫い目、布の表には目にみえないほどのごく短い縫い目が作られる。

タッチング（tatting）― 小さな杼を用いて手編みされたレースの一種。最もよく見られるのは、大小の円形で構成されたデザインのものである。

トゥルニュール（tournure）― （仏）バッスル（bustle）、パニエ（pannier）参照。

ドルマン（dolman）― 1870 年代末から 1880 年代にかけて流行した外衣（ラップ）。スカート後部のバッスルの上にぴったりフィットし、バッスルにうまくかぶさるように作られていた。肩から肘にかけては狭い幅に裁断されたこの外衣には、あまり袖らしくない袖が付いているか、またはケープの腕の部分にウエストの高さ程度のスリットが入っているだけであった。

ドロワーズ（drawers）―〈女性〉19 世紀後半に、白いコットンのパンタレッツ（pantalettes）を指して最も一般的に用いられた用語。〈男性〉長いズボン下。

錦織（brochè）― （仏）文様が織り込まれた紋織物。文様部分のみに絵緯を用いる。19 世紀のファッション・ライターは、ショールについて述べる場合に、間違って刺繍も錦織に含めることがあった。

ネット（net）― さまざまな大きさの網目を持つ、透かし細工の素材。当初はネットを作る道具を用いて手作業で作られたが、後に機械で作られるようになった。レゾ（reseau）も参照。

ハビットフロント（habit front）― 女性のドレスのスタイルのひとつ。ネックラインがとても低くて大きく開いている。下に白いシュミゼット（chemisette）を着用した。

バーサ（bertha / berthe）― （仏）①レースまたはシルクの長い垂れ布で、通例、ギャザーが寄せられていた。長さはどこも等しく、上の端をショルダーラインに取り付けた。②1840 年代には、しばしばペルリーヌ（pelerine）かシュミゼット（chemisette）のいずれかを指して使われた。

バスキーヌ（basquine）― （仏）1850 年代に流行した、バスク（basque）型の外衣。

バスク（basque）― （仏）身体にフィットした上着ないしジャケットで、ヒップまでの短い丈の裾がフレアー状に広がっている。バスク兵の制服を連想させることから。

バスク（busk）― 幅が１～３インチ（2. 54～7. 62 センチ）の平たい木の板または鯨髭で、1840 年代にコルセットの前側にある長いポケットに挿入された。これにより、着用者は身体を前に自然にかがめることができなかった。

バッスル（bustle）— スカートのお尻の後ろ上部を支えるための腰当て。後方に大きく膨らんでおり、ウエストに紐で縛りつけて着用するか、スカートの後部の裏側に取り付けられた。

バボレ（bavolet）—（仏）ボンネット帽の後ろに付いている、ギャザーが寄せられたネックカーテン。

バレージュ（barège）—（仏）ドレスやベールに用いられる透けたガーゼのような平織の織物。経糸に上質のシルク、緯糸にウールの梳毛を用いて粗く綴る。経糸はコットンやその他の繊維の場合もある。

パイピング（piping）— 縫い目に嵌め込まれた、布でくるんだコード。

パニエ（pannier）— 1860 年代末からファッション雑誌で使われた懐古趣味の用語で、大きく持ち上げられてドレープになったスカートを下から支えるための鋼鉄製または籐製の腰枠を指す。エリザベス 1 世女王時代のヒップ・パニエ［腰の両側のスカートを水平に張り出させるために使われた支持具］に由来する。パニエはもともと、ロバの背の両側に付けて荷運びに使う籠を指し、18 世紀におどけた表現としてスカート支持具の呼び名になった。バッスル（bustle）も参照。

パフ、膨らみ（puffing）— 布の長辺に沿って入れたランニング・ステッチの糸を引っぱって膨らみを作った、バンド状の挿入物。

パメラ袖（Pamela sleeve）— 1860 年代の袖のスタイルのひとつで、薄地のビショップ・スリーブの数ヶ所をリボンで縛ってパフを作ったもの。

パメラ帽（Pamela hat）— 少女と若い女性向けの、クラウンが低くて鍔がまっすぐな麦藁帽子。1850 年代末から 1860 年代にかけて流行した。通例、ギャザーを寄せた短いベールが鍔から垂れていた。

パラソル（parasol）—（仏）日傘。

パルトー（paletôt）—（仏）1860 年代に女性や少年によって着用された、丈の短い、ゆったりしたコート。男性のヨット用のジャケットに由来する。

ペルリーヌ（pelerine）—（仏）衿のスタイルで、フランス語で「巡礼者」を意味する pèlerine に由来する。一種のケープカラーで、たいていは肘あたりまでの丈。前の端が長く垂れている場合もあれば、そうでない場合もある。ドレスと同じ生地で作られたり、薄地の白い生地やレースで作られたりした。1840 年代には、時に「バーサ（bertha）」とも呼ばれた。

パンタレッツ（pantalettes）—（仏）丈が長く、脚を入れる部分が細めに作られたズボン下を指す。時に「ドロワーズ（drawers）」や「トラウザーズ（trowsers）」と

も呼ばれた。ただし、コットンのドロワーズの場合は、タックがとられたり、ラッフル（襞）が付いたり、刺繍がほどこされたり、あるいはレースで縁飾りが付けられたりした。

ビショップ・スリーブ（bishop sleeve）— たっぷりした膨らみを持つ袖で、袖口はギャザーを寄せてカフスが付けられている。肩の袖付け部分はギャザーを入れて膨らませている場合もあれば、ギャザーなしでシンプルに縫い付けられている場合もある。

フィシュー（fichu）—（仏）〈女性〉①18 世紀の女性たちが身につけ、19 世紀には主に奴隷と召使いが使っていたネッカチーフを指す伝統的な用語。上質の白いリンネルやコットンの四角い布を対角線で折って三角形にして首の周りにかけ、三角形の尖った先をウエストの前でベルトに挟み込んで着用した。②19 世紀末の、透ける素材で作られたショルダー・ラップを指す。このラップは身頃の前で交差させ、端を背中に回してそこで結ぶか、さらにひと巻きしてウエストの前で結ぶかされた。③1890 年代の、長い端を持つ透ける素材のショルダー・ケープレットを指す。このケープレットの端はウエストの前で交差させて背中で結んだ。

フープ（hoops）— 1853 年頃から 1869 年頃にかけて、大きく膨らんだスカートの下にはかれたドーム型の枠組みの一般的な名称。

プリーツ（pleat / plait）— 縫い目に襞どりするという布の処理のしかたを指す、言い替え可能な用語。

プリンセス（princess / princesse）— 1875 年頃、英国皇太子妃アレキサンドラのためにワース［イギリス人デザイナー］のメゾン［オートクチュール店］が生み出したドレスのスタイル。ウエストに縫い目がなく、肩から裾まで縦に縫うことで構成されていた。

フロック（frock）—〈女性〉ワンピースドレス。〈男性〉作業用のスモックとして使われた長いオーバーシャツ。また、子ども用のゆったりしたドレスも指す。

フロックコート（frock coat）—〈男性〉ウエストに縫い目があり、裾の前の角が四角く裁断されているコート。

フロッグ（frog）— 衣服の開きを閉じるための、ブレード（飾り紐）や笹縁糸で作られた装飾的な留め具。一方にはループが、もう一方には飾り結びが取り付けられる。［飾り紐製のチャイナボタンはその一種］。

ブルーマー（bloomer）— ①短いスカートとその下にはいたズボンから構成される衣服の呼び名として最も一般的に用いられた用語。ドレス改革運動の表現のひとつ

としてこの衣服を数年間着用したアメリア・ブルーマーにちなんで、誤ってこの名前が付けられた。②19世紀末近くになると、ブルーマーという言葉はギャザーを寄せた膝丈のアンダードロワーズ（下着用のズボン）または体操服のことを指すようになった。

ブロンド（blonde）— 上質のシルクのレース。通例、自然なクリーム色であるが、黒の場合もある。

ヘアネット（snood）— かぎ針編みまたはネットで作られた袋。長い後ろ髪をひとつにまとめておくために使う。1860年代に人気があった。

ヘムセーバー（hem saver）— スカートの裾が擦り切れないように、裾端に取り付けられたもの。当初はウールや馬の毛やその両方から作られた丈夫なブレードで、時には端がブラシ状になっていた。後には、ベルベットを巻いた単なるバンドになった。特に1840年代と1890年代によく用いられた。

ボザム（bosom）— 〈女性〉衣服の前身頃の、胸部を覆う部分。〈男性〉シャツとは別の、衿付きで糊の効いたシャツ・フロント。シャーティー（shirtee）参照。

ボレロ（bolero）— 「スペイン風ジャケット」、すなわち丈の短い、袖なしのジャケット。通例、前開きで前身頃の裾が丸みをおびたカットになった形状で、ブレードその他で装飾がほどこされている。

ポイントレース（point lace）— 針を用いて編んだレース。

マザー・ハバード（mother hubbard）— ゆったりした、床丈のコットン製のドレス。ヨークがあり、その下にギャザーを寄せた身頃の布が付けられて垂れ下がっている。1880年代に初めて登場した。

身頃（bodice）— 衣服の上半身。通例、身体にフィットするように作られる。

ミット／ミトン（mitt / mitten）— 暗色の糸を用い、かぎ針、棒針、機械編みやネットで作られた、指出し手袋。ドレスに合わせて着用された。

モスリン（muslin）— 比較的目の粗い平織の、ソフトなコットン生地。19世紀のものはふつう薄地であった。

ユニオン・スーツ（union suit）— コンビネーション（combination）参照。

羊脚袖（leg-o'-mutton sleeve）— 上腕部がとても大きく膨らみ、前腕部がぴったりした袖。ジゴ袖（gigot sleeve）参照。

ヨーク（yoke）— 身頃の肩の部分。身体にフィットしている。ヨークは胸の上までになるよう短く裁断され、ヨークの下に付ける身頃やドレスの布にはギャザーを入れたりプリーツを取ったりして、ヨークの下端に入れ込んだ。

装い（toilet / toilette）— （仏）身づくろい全体を指すのに用いられる用語。

ラウンド・ウエスト（round waist）— ウエストの縫い目がどこも床と平行になっているウエストライン。

ラウンドアバウト（roundabout）— 1840 年代から 1860 年代にかけて男の子が着た、身体にフィットしたジャケット。前のあきはボタンで留められ、ウエスト丈、またはウエストよりやや下までの丈があった。

リフォーム・ドレス（reform dress）— 胴を締めつけるコルセットや、動きを制限するスカート丈や、その他流行に起因するもろもろの不都合さから着用者を解放することを意図して考案された服装。実際のデザインは着用者個人に任されたが、共通していた構成は、それなりに流行に合った普通のドレスのスカートを膝下丈にカットし、その下にズボンをはくというものであった。1890 年代まで、全米ドレス改革協会の特徴として存続した。

ルーシュ（ruche）—（仏）レースやクレープなどに引き紐でプリーツやギャザーを施した飾り紐。特に細い布の中央にステッチやコードを入れて引き絞ったもの。

レゾ、網目（reseau）—（仏）手編みのネット。通常はレースの模様部分の地をなす網目状の地を指す。

ワープ・プリント（warp print）— 経糸捺染。多色でプリントされた経糸と無地の緯糸で平織に織り、柄の縁がぼやけた魅力的な効果を出した生地。

参考文献

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*, The Kent State University, Press （October 27, 1995）, pp.541-548.

あとがき

Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*, The Kent State University Press （October 27, 1995）

序文で述べたように、19 世紀アメリカ合衆国の 1840 年から 1900 年の 60 年間を考察対象とした本書は、6 章から構成され、各章の前半では、時代背景とファッション傾向（女性服、男性服、子ども服）、および、各アイテムの特徴がまとめられている。後半では、10 年間隔で、J. セヴラ女史が全米から収集された写真が掲載され、服飾の専門家の視点から、目を見張るような克明な解説が付けられている。登場する人物の社会階級については、Ordinary Americans という表現がなされている。上流階級を対象とした服飾研究書は、欧米において、多数見られるが、「19 世紀の普通のアメリカ人」の衣服研究を行った研究書は、本書だけである。濱田は「ミドルクラスと下層階級」あるいは「庶民」「民衆」という表現を行なった。

筆者による本ガイドブック執筆に当たっての方法については、序文で述べたとおりである。すなわち、セヴラ女史の著作に掲載された写真に写った被写体がまとった衣服のシルエット、および、部位別特徴の 10 年間における動的な分析を行い、筆者の見解を述べた。本ガイドブックを通じて、これらの情報がお役に立てば、それほど嬉しいことはない。

筆者が代表を務めるアメリカ服飾社会史研究会では、2010 年 1 月から 2011 年 4 月に至る 1 年半の期間に 6 回の研究発表を行なってきた。毎回、活発な質疑・応答を通じて、多くの問題指摘がなされ、収穫が多い時間をいただけたことを大変ありがたく思う次第である。

本書の序文でお断りしたように、セヴラ女史は、全米から収集された277枚の写真に見られる服装について、詳細に渡って分析を行われている。服飾の実物に詳しいウィスコンシン歴史協会の学芸員であり、服飾研究者ならではの解説である。上流階級のみならず、多くの庶民服を収蔵されているウィスコンシン歴史協会の学芸員として、30年という長きにおいて、歴史衣装の実物に触れて来られたセヴラ女史でなければ不可能ともいえる貴重な解説である。

そのすばらしさは、原書の序文において、クローディア・キドウェル女史とナンシー・レクスフォードが非常に的確に評価されている。このあとがきにおいて、もっとも力説したいのは、以下にご紹介させていただくキドウェル女史の序言である。

> ジョーン・セヴラが人物写真の研究にもたらしたものは、まさに、概して歴史家には欠けている「衣服に関する深い知識」――それなしでは無名のポートレートで終わる運命にあった多くの写真が意味を獲得し始めるための、背景となる文脈を提供してくれる知識――である。著者のジョーン・セヴラは、ウィスコンシン州歴史協会で服飾分野の学芸員として働くとともに、他のさまざまなコレクションを訪ね歩くコンサルタント兼研究者として活躍した。その活動のなかで、彼女は現存する衣装や、写真はもちろんファッション・プレートや印刷物や絵画までを含む図像を、文字通り何千点も実際に見てきた。そうした資料に関する長年にわたる研究のおかげで、彼女は大半の歴史家に可能な域をはるかに超える精度で、本書に掲載された写真の年代を特定することができたのである。
>
> そのうえ、大量の衣服を目にしてきたセヴラは、どの時代にどのような範囲の衣類が入手可能だったかを判断する力を身につけていた。彼女が学芸員を務めていたウィスコンシン博物館のコレクションは、特別な場で着る衣服の収集に力を入れがちな他の多くの博物館とは異なっている。ウィスコンシン博物館の所蔵品は、大半の人のワードローブの大部分を占めている、実用的で有用な衣服の割合が非常に高いのである。その結果として彼女は、最高級ファッションを代表する衣服と、裁断こそ最高級品に似ているが生地はそれほど高価ではない衣服との違いや、中級の普通の衣服と、昔流行したモデルの名残をわずかに残しているその他の衣服との違いを見分けることができる。19世紀の写真を見る人のほとんどが持っていないこの経験は、彼女に豊かな服飾史の文脈の知識を与え、彼女はそれにもとづいて本書の人物写真にアプローチしている。もしもセヴラがある被写体のドレスを『中流階級』の衣服であると判断したなら、その理由は、彼女がその写真に写った衣服と本質的に同じ服を見たり扱ったり

したことがあり、写真の衣服が、もっと上質な素材や仕立てで丹念に作られた衣服のレベルよりも明らかに下だと知っているからである（Joan Severa, pp. x-xi）。

セヴラ女史が収集されて、解説された素晴らしい、目を見張るような材料が、本書を通じて、服飾研究者や学生や衣装デザイナーの皆様や映画監督の皆様や写真のアーキヴィストの皆様のお手元にお届けできれば幸いである。さらに詳しくお識りになりたい方は、セヴラ女史の原著をお読みいただきたい。19 世紀アメリカの民衆の衣服を通してみた生活文化史として、多くの読者の皆様に愛読されることを願ってやまない。

武庫川女子大学の濱田研究室の皆さん、アメリカ服飾社会史研究会の皆さん、児嶋きよみ主宰のOffice Com Junto の皆さんに厚く御礼申し上げる。最後に、生活面で応援してくれた家族に、「ありがとう」の言葉と本書を贈りたい。

2022 年 3 月

濱田　雅子

事項索引

こ

さ

し

す

せ

た

ち

て

と

な

に

ね

の

は

ひ

ふ

へ

ほ

ま

み

め

も

ゆ

よ

ら

り

る

れ

ろ

わ

〖著者プロフィール〗

濱田雅子（はまだ・まさこ）
神戸大学文学部史学科（西洋史学専攻）卒業。武庫川女子大学大学院家政学研究科修士課程（被服学専攻）修了。（一財）京都大学名誉教授森下正明研究記念財団主席研究員。元武庫川女子大学教授。博士（家政学）。西洋服飾文化史専攻。アメリカ服飾社会史研究者。アメリカ服飾社会史研究会会長。大学退職後は京都と神戸で服飾講座を開催、今日に至る。近年2020年以降は、コロナ禍のため、オンライン講座を開催。
著書に、『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996年）、『黒人奴隷の着装の研究』（東京堂出版、2002年）、『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009年）、『パリ・モードからアメリカン・ルックへ アメリカ服飾社会史 近現代編』（POD出版、アマゾンKinde 、2019年1月）（ネクパブPODアワード2022審査員特別賞受賞受賞）、丹野郁編『西洋服飾史 増訂版』（共著、東京堂出版 、1999年）、丹野郁監修『世界の民族衣装の事典』（共著、東京堂出版、2006年）、『衣装が語るアメリカ文学』（共著、金星堂、2017年）（濱田 雅子担当、初期アメリカの奴隷の職種と仕事着 —トマス・ジェファソンのプランテーションの場合）。『アメリカ服飾社会史の未来像—衣服産業史の視点から—』（POD出版 、アマゾンKinde 、2020年4月）、『20世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実—アメリカ服飾社会史 続編－』（POD出版 、アマゾンKinde 、2021年4月）。翻訳書に、P. F. コープランド著『アメリカ史にみる職業着』せせらぎ出版、1998年）（第16回　日本風俗史学会研究奨励賞受賞）、Ｊ・ギロウ＆Ｂ・センテンス著『世界織物文化図鑑』（共訳、東洋書林 、2001年）、アルベール・ラシネ原著『世界服飾文化史図鑑』（共訳、原書房、1992）、P.F.コープランド著『図説 初期アメリカの職業と仕事着 —植民地時代-独立革命期』（悠書館、2016）など。他に論文、研究報告、講演など多数。

写真が語る近代アメリカの民衆の装い

2022年 4月 10日 初版発行

濱田雅子 著
https://www.american-mode.com
hamadakobe7@gmail.com

株式会社PUBFUN
ネクパブ・オーサーズプレス
https://nextpubishing.jp/author/

ISBN　978-4-8020-8271-6

装丁/編集　　濱田雅子
表紙デザイン　濱田雅子
表紙の写真
左　ダゲレオタイプ　1839 - 40 年
提供：Matt *Isenburg*
Joan Severa, *Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900,* The Kent State University Press　(October 27, 199 , p. 28
中　カルト・ド・ヴィジット　　1862 - 67 年
提供：*Deborah Fontana Cooney*
Joan Severa, *ibd.*, p. 238
右　スタジオ・ポートレート 1886 年頃
提供：*The Valentine Museum (C68. 89. F)*，
Joan Severa,　*ibd.*, p. 413
裏表紙の写真　1866 年 2 月
提供：*The Southern Historical Collection (P3615-819)*，
Joan Severa, *ibd.*,p. 266